

9502 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第365号 1995年2月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

Baroque Architecture in Sicily and Lecce

南イタリアのバロック建築

シチリア・バロックとレッチェ・バロックの魅力



特集

新発売



人集う空間に、自然のやさしさと、 自然を超えたたくましさ。

「ナチュラルな感覚は大切にしたい。しかし、強くなければ、機能を満たすことができない」。こうした、公共の建物やビジネス空間、商業・サービス空間に求められる高い要求を、すべて備えた床材、それがロンクレオです。木とコルクという自然の素材をモチーフにしなが、自然素材にはない耐久性・寸法安定性を実現して重歩行のニーズにも対応。自然のやさしさと、自然を超えたたくましが、人の集う空間にふさわしいスペース・クリエーションを可能にします。

特長

- 透明なトップ層に保護された、完成度の高い自然の質感。
- 冬期の施工性にも優れ、スーパーシームシーラー工法により、接合部が目立たず、美しく確かな仕上がり。
- ガラスクロスを積層したことにより寸法安定性に優れています。
- 重歩行に耐える優れた耐久性。いつまでも美しさを保ちます。

ファッションビニル床シート(重歩行用)

ロンクレオ

コルク&木



■ 規格: 2.0^m (2.5^m*) 厚さ × 1,820^m × 9m 長さ
*受注生産品

■ 柄・色数: 3柄・6色

■ 用途:

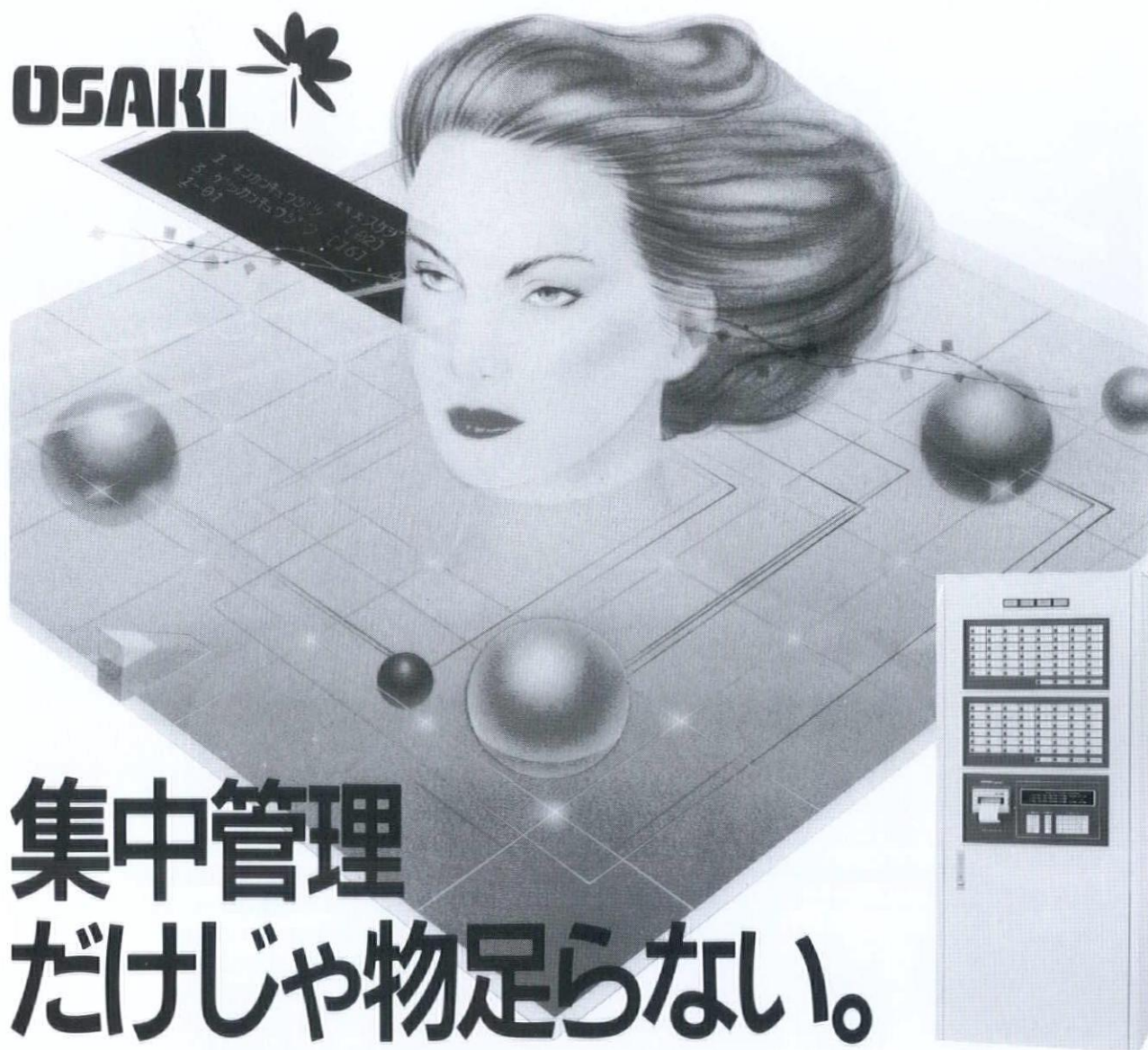
公共空間…学校、幼稚園、図書館、病院、福祉施設など。
ビジネス空間…オフィス、ロビー、エレベーターホールなど。
商業・サービス空間…レストラン、デパート、ショッピングセンターなど。

ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシル工業株式会社

● 本社 / 〒130 東京都墨田区緑4-15-3 TEL.03(5600)1821
● 大阪支店 / 〒532 大阪市淀川区西中島3-9-13 大北ビル TEL.06(304)2700

● 営業所
札幌 TEL.011(531)2602 大宮 TEL.048(664)1511 岡山 TEL.086926-4321
青森 TEL.0177(77)1155 千葉 TEL.043(246)5851 高松 TEL.0878(31)4177
仙台 TEL.022(265)4771 横浜 TEL.045(662)7370 広島 TEL.082(211)2700
新潟 TEL.025(243)3791 静岡 TEL.054(251)3712 福岡 TEL.092(472)5857
金沢 TEL.0762(92)1161 名古屋 TEL.052(935)7063 鹿児島 TEL.0992(58)6571

OSAKI



集中管理 だけじゃ物足りない。

かゆいところに手が届く、ビル管理システム **OSMAC-mini** 中央監視装置オスマック・ミニ

いまやビルは集中管理の時代。照明や空調も定時にON、OFF。無駄な手間も経費もかけず、ビルを一括して制御できるようになりました。しかしビルの機能は様々。テナントや企業、そこで働く人の事情も多様化しています。OSAKIは、ビル設備の制御を画一的ではなく、ビルの利用者一人ひとりのニーズに対応できるものであるべきだと考えています。中央監視装置OSMAC-miniは従来の設備機器のスケジュール運転に加え、各テナントからのコントロールで、スケジュール時間外の運転を可能にし、各テナントごとに料金算出のためのデータを集計できるシステム。ビルをもっと生き生きと活動させるための、隔々にまで神経が行き届いた管理を実現します。

特 長

- 基本スケジュール運転の他に各テナントから時間外操作が可能。
- 時間外運転時間は各テナント単位に積算され、1ヶ月毎に料金管理データとして印字。
- 登録された機器の運転時間を積算し、表示・記録。
- 全全停点数に対してスケジュールを任意に設定、年間の休日指定も可能。
- 全停点数最大48点、負荷監視点最大96点と豊富な管理点数。
- 故障および警報信号を外部に取り出せるので、無人管理が可能。
- 設定操作は画面との対話設定メニュー方式で、使い易いシステム。
- 盤内のケーブルレス化により小形・軽量・低価格。

主な仕様

- 定格電圧/100V±10% ●定格周波数/50Hz、60Hz共用 ●管理点数/運転監視入力…48点(増設タイプ96点)、故障・警報監視入力…48点(増設タイプ96点)、テナント操作入力…20点、発停制御出力…48点、警報移報出力(電力)…4点、警報移報出力(一般)…8点 ●表示/5×7ドット モノグリーン蛍光表示管 40字×4行、運転時間表示、時間外運転時間表示、カレンダー表示、当日プログラム表示、システムテーブル内容表示 ●設定操作部/シートフラットキー、蛍光表示管との対話方式 ●記録/停電記録、状態変化記録、故障・警報記録、日変わり記録、時間外運転記録(日報、月報)、個別発停操作記録、運転時間記録、カレンダー設定変更記録 ●停電補償/240時間 ●外形寸法/壁掛形48点タイプ…600(W)×1100(H)×230(D)mm、壁掛形96点タイプ…600(W)×1350(H)×230(D)mm、自立形…600(W)×2000(H)×400(D)mm

大崎電気工業株式会社

本社/〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
システム機器営業部第2課 ☎03(3443)7176

大阪支店 ☎06(373)2556 札幌営業所 ☎011(251)6622 仙台営業所 ☎022(223)3747
千葉営業所 ☎043(241)7447 横浜営業所 ☎045(664)5561 広島営業所 ☎082(243)1611
沖縄営業所 ☎098(832)7406

National/Panasonic

AV&C ET AP S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業(株)システム営業本部
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

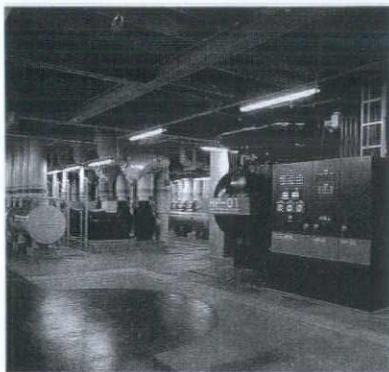
沖縄支店 ☎0988-53-2826

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

スポーツ、イベント、コンベンションなど、多様な用途に対応するドーム空間は
地域の活性化、新しい街づくりの中核をなす施設として全国各地で注目を集めています。

しかし、さまざまなイベントを成功させるためには、

高度な機能はもちろん、ひとびとを包む快適かつ創造性に満ちた空間が求められます。

これらの要求に応え、カジマは数多くの大空間建設で培った実績と先進技術を結集し、各種ドームを開発。

それぞれの地域、用途、目的にもっともふさわしいドームを提案、実現してきました。

すでに、これらのドームでは、野球やサッカーなどのスポーツやコンサート、文化・産業イベントなどが開催され、
ひとびとにダイナミックな空間体験と大きな感動を与えています。

熱中大空間





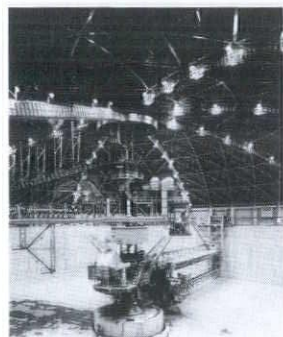
出雲ドーム(木造ドーム)
大空間に日本の伝統美を生かした木造とスチールによるハイブリッド構建造。



あきたスカイドーム(スーパーパラソル・ドーム)
自然光を透過する膜屋根とスチール造のスーパー・スペースアーチによるハイブリッド構建造。

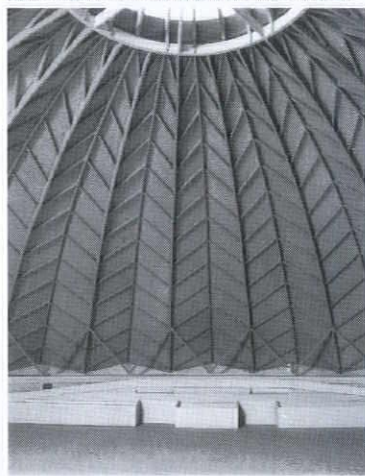


クリエイティブ・テニスガーデン千葉(エアドーム)
膜屋根を空気です支えるため超大スパンにも対応が可能、戸外のような明るい大空間。



竹原火力発電所貯炭場内部(ラメラドーム)
安全性・経済性にすぐれ、あらゆる用途に対応できる鉄骨ドーム。

信州博覧会グローバルドーム(木造ドーム)
国産から松材による大断面集成材をはじめて採用。



新国技館(スチールトラス)
多様な設計条件にフレキシブルに対応できる豊富なトラス技術ラインナップと建設実績。

大空間の安全を支える 確かな技術。

強風や地震、火災、温度変化などに対して総合的な観点から最良のものを採用。コンピュータを駆使した構造解析や各種シミュレーションなどにより究極の安全性確保に努めています。

大空間をドラマチックに演出する 照明・音響技術。

スタジオ・コンサートホールなどの豊富な設計・施工実績をもとに最新の実験設備による実験・研究を重ね、それぞれの用途に応じたクオリティの高い照明・音響システムを提供しています。

より快適な室内環境をつくる 空調技術。

大型模型による温度分布シミュレーションや観客席における気流の実測を重ね、これらのデータを基に、最も快適な室内環境実現のための空調設備をトータルシステムで組み込みます。

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは——

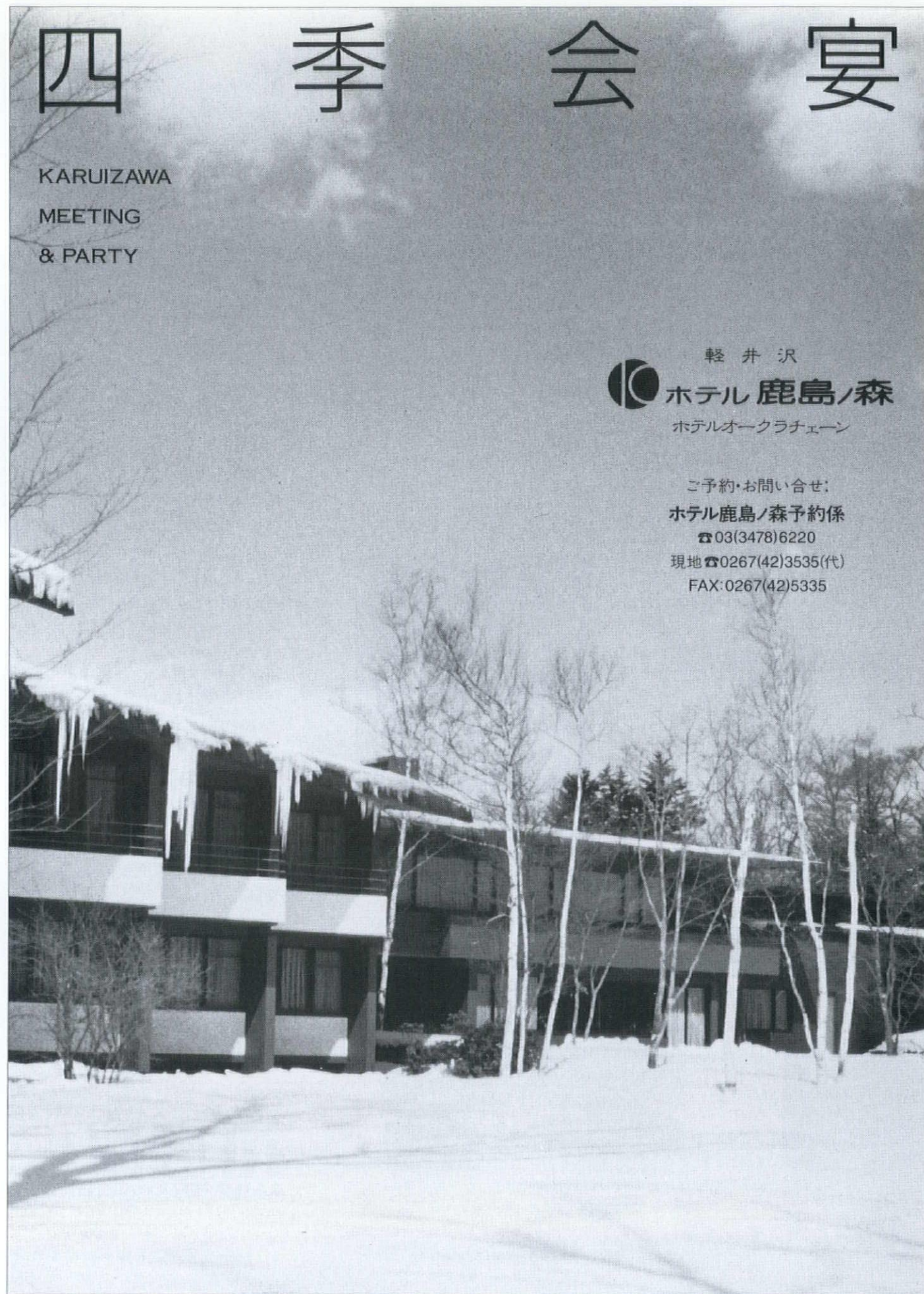
建築技術本部 (03)3404-3311(代)

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

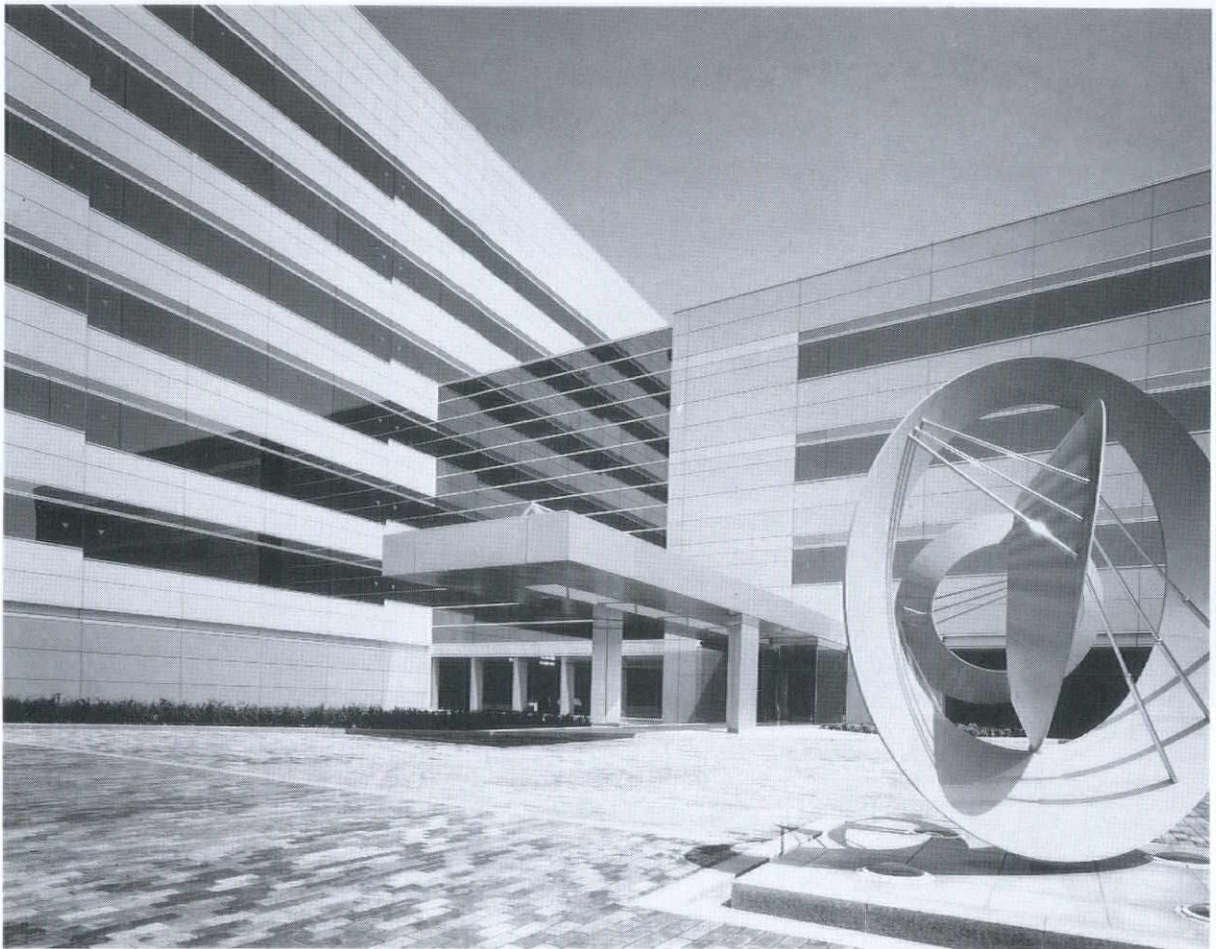
軽井沢
 **ホテル 鹿島ノ森**
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(048)668-0861 FAX(048)668-0863
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
(東京事務所)

北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270
四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール支店 ☎65-3440590 FAX65-3446714



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775





カスタムEE防水工法は、Ecology(環境)とEconomy(経済性)を最も大切と考え、大幅な省力化と経済性を兼ねた、防水材料です。
製造時も施工時も、また廃棄時にも害を出さず、地球にやさしいルーフィング。



総合防水メーカー

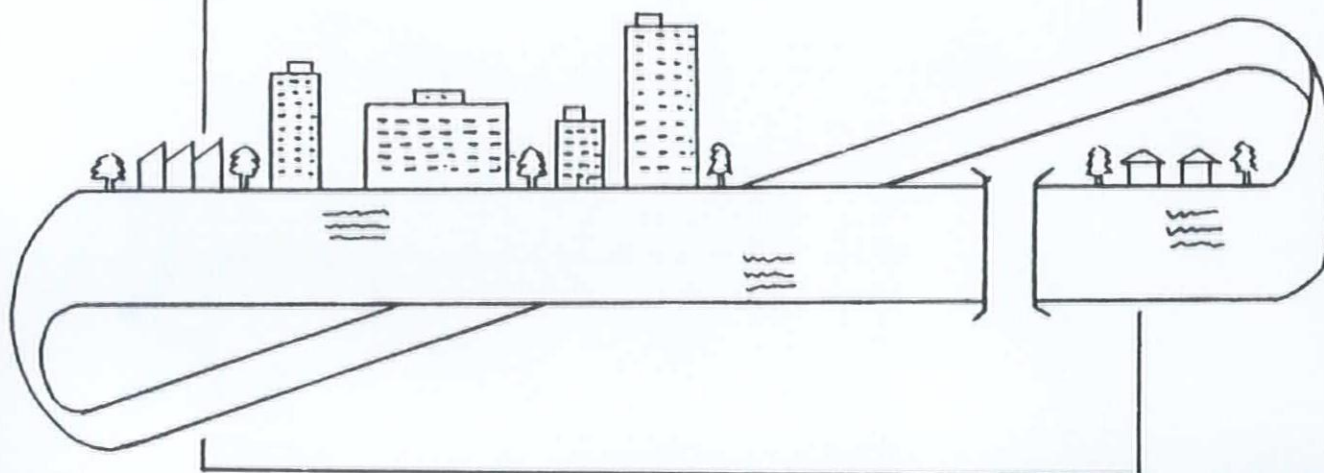
日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京 ☎03(5644)7221 (代表)	福岡 ☎092(451)1095 (代表)
千葉 ☎043(245)0201 (代表)	札幌 ☎011(281)6328 (代表)
横浜 ☎045(316)7885 (代表)	仙台 ☎022(263)0315 (代表)
大阪 ☎048(642)5811 (代表)	広島 ☎082(294)6006 (代表)
名古屋 ☎06 (533)3191 (代表)	高松 ☎0878(34)0336 (代表)
	金沢 ☎0762(22)3321 (代表)

水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

VALUEとQUALITYを追求するバルカー

鉄骨耐火被覆材

バルカウエット.....湿式吹付けロックウール

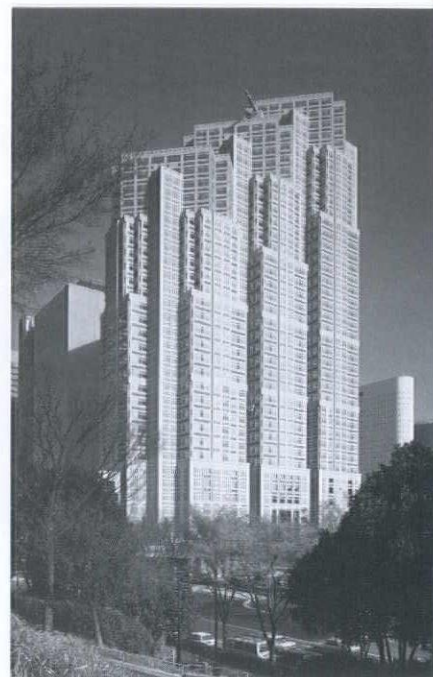
バルカロック.....乾式吹付けロックウール

バルカロック-W.....乾式吹付けロックウール(スラリー工法)

リコボード.....繊維混入けい酸カルシウム板

耐火遮音間仕切壁

バルカウエットウォール 湿式吹付けロックウール
耐火間仕切壁



日本バルカー工業株式会社

本社 〒100 東京都千代田区丸の内3-3-1(新東京ビル) ☎03(3212)8571

工事業部 〒105 東京都港区芝3-39-8(コンチエルト三田ビル)

☎03(3769)1721

札幌事業所 〒060 札幌市中央区北三条西2-1(カミヤマビル)

☎011(222)7038



確かな歩み未来まで....



総合設備の設計施工

電気・水・空気・光・情報の各施設

心のふれあい大切に

株式会社 中電工

本店/広島市西区上天満町1番15号

TEL(082)291-7411

支店/広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

オーナーの言い分に、 個別で応えます。



言い分①

テナントの残業にも、個別で対応できるようにしてほしい。

ハイ... 室内から個別運転ができるので、残業時の延長運転はもちろん、テナントごとの営業時間にあわせて自由な運転ができます。

言い分②

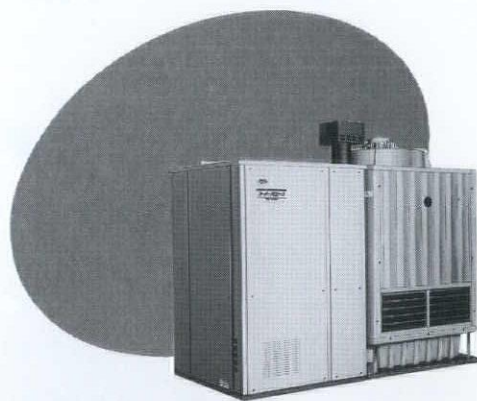
運転コストや、施工などの費用を抑えてほしい。

ハイ... 室内機の使用状況に応じて、熱源機の最適運転台数を制御する省エネ運転ができます。また、冷却塔一体型なので、配管等の施工費の軽減や、工事期間の短縮も可能です。

言い分③

テナントが納得する料金配分にしたい。

ハイ... 個別計量カウンターで、テナントごとの使用量を計量しますので、正確な料金計算ができます。



——テナント・オフィスビルの冷暖房に——
スーパーアロエース
ビル空調システム

矢崎総業株式会社

本 社：〒108 東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F ☎03(3455)8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 ☎053(461)5112

札幌支社 ☎(011)852-2914
仙台支社 ☎(022)284-9115
東京支社 ☎(03)3298-3140

※電話はすべてダイヤルインです。

名古屋支社 ☎(052)833-8415
大阪支社 ☎(06)458-4825
北陸支社 ☎(0764)41-6516

中国支社 ☎(0829)23-2115
四国支社 ☎(0878)33-3336
九州支社 ☎(092)411-4835

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：(03) 5561-2111 (代)
振替：00160-2-180883

年間定期購読料
25,000円 (特別送金号+送料込み)

SDバックナンバー常備店
〔東京〕
八重洲ブックセンター 03 (3281) 6203
三省堂書店 (神田) 03 (3233) 3314
書局ブックマート 03 (3294) 0011
紀伊国屋書店 03 (3354) 0131
大塚書店 03 (3463) 0511
〔大阪〕
旭屋書店本店 06 (313) 1191
柳屋堂 06 (443) 0167

〔札幌〕
旭屋書店 011 (241) 3007
〔横浜〕
有隣堂本店 045 (261) 1231
〔京都〕
大徳堂書店 075 (231) 3036
〔大学生協内書店〕
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理工学部
関東学院大学

9302 東欧の広場 1950円

西洋世界の延長上に位置する東欧。その歴史と文化の焦点でもある「広場」を解析。6ヶ国、22の広場全域のアクソノメトリックを描きながら、その形態と構成を探る。ワルシャワ、プラハ、他。

9303 エンリック・ミラーレス 1950円

バルセロナを本拠に活躍するスペインの建築家。富山県「まちのかおづくり事業」に参加。彼の過去5年以内のプロジェクトと実作を紹介。高岡駅前広場計画、バレンシア大学計画、他。

9304 ロシア・ペーパー・アーキテクチャ 1950円

若手建築家のコンセプチュアル作品を紹介。A.プロツキ、I.ウトキン、M.ペロフ、他。〔海の博物館〕漁労用具收藏、展示博物館。設計=内藤廣。〔火と氷の島〕アイスランドの保存民家と風土。

9305 建築・都市への7つのベクトル 1950円

セゾン「迷宮都市：新しいイズムの建築家たち」展より。大江匡、藤研吾、鎌島和世、竹山聖、園紀彦、内藤廣、若林広幸。〔世界の駅舎建築〕ミラノ中央駅、パリ北駅。〔木造の家構と空間〕。

9306 家具のオデッセイ：大橋晃朗 2400円

日本の家具デザイナーを代表する大橋晃朗の全作品を、図面、写真、をまじえて紹介。箱シリーズ、金属パイプ、ボード・ファニチュア、ハンナ・チェア、八代市立博物館の家具、他。

9307 トルコの現代建築とアート 1950円

機能的デザインに伝統的モチーフを引用したポスト・モダンが見えかくれる。トルコの現代建築（住宅、ホテル、モスク等）とアートを紹介。〔形態と構造：サマン・アンド・パートナーズの近作〕

9308 ラテンアメリカのバロック建築 1950円

スペインを中心としたヨーロッパ、イスラム、東洋、インディオの文化が融合した、随所に過剰なほどの装飾で埋め尽くすラテン・アメリカ固有のバロック建築を紹介。写真+文：小野一郎

9309 ソットサス・アソシエイツの建築 1950円

カザ・チェ、カザ・メレウ、コロラドの家、ERGガソリンスタンド、キング・オブ・アフリカ展会場構成、ラヴェンナ現代家具博物館、他。〔ニーム現代美術館・図書館〕ノーマン・フォスター。

9310 リカルド・ボフィール 3000円

スペインやバリエに建てられた新作を中心に、テクノロジーと古典主義スタイルの融合した新しい建築空間を紹介する。バルセロナ空港ターミナルビル、マドリッド・コングレス・パレス、他。

9311 アンソニー・ラムズデン/DMJMの新作 1950円

アメリカの大組織事務所DMJMの新作を紹介。細江勉夫の新作。ブルーノ・タウト再発見。ウォトゲンシュタインのストンボロ一邸。田窪義治/サン・ヴィゴール・ソ・ミュー・礼拝堂プロジェクト

9312 SDレビュー1993 2400円

第12回SDレビュー誌上発表。クライン・ダイサム・アーキテクト、和田克明、計画意匠研究所/片木眞十有馬立郎、吉本剛/吉本剛建築研究室、他。関西国際空港旅客ターミナルビル

9401 原広司 3500円

地球外建築、空中都市、梅田スカイビル、JR京東駅、原邸、グラーツ・影のロボット、ヤマトインターナショナル、他。〔論文〕原広司、日ボグナー、三宅理一、他。〔写真〕宮本隆司、大野繁

9402 台湾現今設計観察 1,950円

建築と都市を中心とした台湾現代デザインを紹介。台湾建築：李祖原、呉増榮、潘冀、陳耀基、他。グラフィック：劉開、陳耀基。写真：陳春輝、取材・監修：村松伸、小嶋一浩

9403 バイオクライマティック・タワー：ハムズ&ヤングの新作 1,950円

自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家。〔都市を考える——The Cell Cityの提案〕大都市を複数の細胞に区分する新提案。

9404 空夢の時差／半過去から半未来へ：木島安史の世界 3,000円

上無田松尾神社、孤風院、YAS邸、球泉洞森林館、熊本県立東稜高等学校、小国町立西里小学校、埼玉県立長瀬青年の家、東陽村石工の里歴史資料館、設計競技作品、他。

9405 東ドイツの近代建築 1950円

旧東ドイツの近代を原巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ベルツィヒ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真：長谷川章

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円

「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文＝南條史生、D.F.ハンセン。アーティスト：アンドレア・ブラム、他。企業等：IBM、ドイツ銀行、ブリティッシュ・カウンスル、他。

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円

アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク・パーネット・パーク、ロングエーカー公園、他。

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円

フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所、他。文：D.マンドレリ、堀池利人、他。〔異界の僧院——モルドバのルーミアニア正教会堂〕写真：平剛、文：山崎揚史

9409 思考と建築・都市：アメリカ東海岸の新たな動向 1950円

B.シャーデル&J.キブニス、マイケル・ソーキン、他。文：松原強、他。〔「手法」から「縁起」へ〕吉川油脂宿舎 TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真：堀内広治

9410 トロバの遺した構造と空間 1950円

鉄筋コンクリートを自在に使い、表現の素材として追求した、エドアルド・トロバの遺作を紹介。〔芸術都市への蘇生：イタリア・ジベリーナの試み〕地震で全壊した同市の復興プロジェクト。

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円

世界22の空港を挙げ、現代ターミナル・ビルの技術的、デザインの可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際、他。文＝ディヤン・スジック、他。

9412 SDレビュー1994 1950円

第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、ユストル・ビザル+ペーター・ルゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田嶋繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇太、他。国際競作プロジェクト/オンヴィエンチム協賛院

9501 山本理顕 3000円

緑園都市、岩出山町立統合中学校、病室性老人デイケアセンター、鎌倉の住宅、保田庫田地、他。〔写真〕北島俊治、大野繁。〔論文〕山本理顕、宇野求、トム・ヘネガン。〔間談〕堀文彦+植田実+山本理顕。

9409 思考と建築・都市：アメリカ東海岸の新たな動向 1950円

B.シャーデル&J.キブニス、マイケル・ソーキン、他。文：松原強、他。〔「手法」から「縁起」へ〕吉川油脂宿舎 TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真：堀内広治

9410 トロバの遺した構造と空間 1950円

鉄筋コンクリートを自在に使い、表現の素材として追求した、エドアルド・トロバの遺作を紹介。〔芸術都市への蘇生：イタリア・ジベリーナの試み〕地震で全壊した同市の復興プロジェクト。

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円

世界22の空港を挙げ、現代ターミナル・ビルの技術的、デザインの可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際、他。文＝ディヤン・スジック、他。

9412 SDレビュー1994 1950円

第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、ユストル・ビザル+ペーター・ルゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田嶋繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇太、他。国際競作プロジェクト/オンヴィエンチム協賛院

9501 山本理顕 3000円

緑園都市、岩出山町立統合中学校、病室性老人デイケアセンター、鎌倉の住宅、保田庫田地、他。〔写真〕北島俊治、大野繁。〔論文〕山本理顕、宇野求、トム・ヘネガン。〔間談〕堀文彦+植田実+山本理顕。

9501 山本理顕 3000円

緑園都市、岩出山町立統合中学校、病室性老人デイケアセンター、鎌倉の住宅、保田庫田地、他。〔写真〕北島俊治、大野繁。〔論文〕山本理顕、宇野求、トム・ヘネガン。〔間談〕堀文彦+植田実+山本理顕。

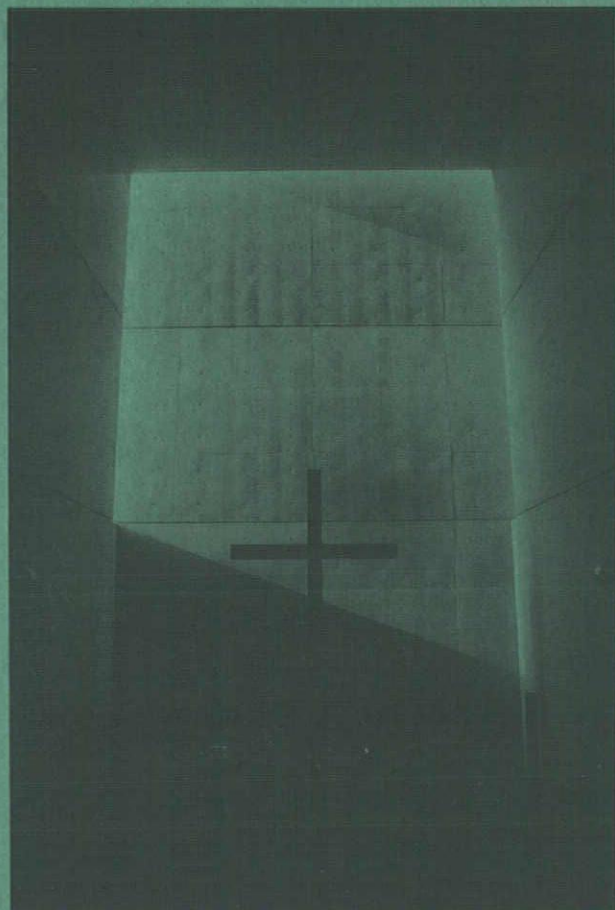
【安藤忠雄との対話から生まれた刺激に満ちた建築論】

壁の探求

安藤忠雄論

著者：古山正雄（京都工芸繊維大学教授）

ついに刊行された、
単行本としては本邦初の安藤忠雄論



さまざまなメディアで、現在もっとも活発に建築論、都市論を展開している気鋭の評論家古山正雄が、長年にわたる安藤との対話とその空間体験に触発されて、全編を書き下ろしたフレッシュな評論集。

それは、「壁」を手がかりにして安藤忠雄の建築の本質に肉薄しようとする試みであるとともに、より普遍的に、現代において建築を作ること、建築を経験することの魅力と楽しみを描き出そうとする試みである。

目次

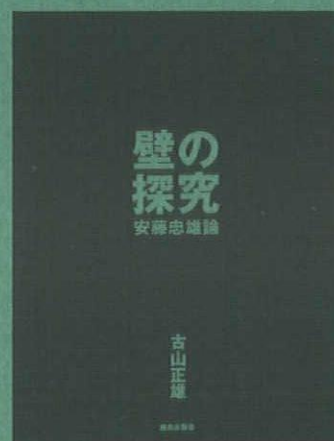
- | | |
|-----------|----------------|
| 第1章：壁の詩学 | または壁をめぐる冒険 |
| 第2章：壁の数学 | または壁と柱の戦いの歴史 |
| 第3章：壁の現象学 | または形の還元と空間の発生 |
| 第4章：壁の論理学 | または秩序と感動のメカニズム |
| 第5章：壁の倫理学 | または否定の形象 |
| 第6章：壁の美学 | または空間の精神分析 |
| 第7章：辞書 | または思いつくままに |
- 写真構成 宮本隆司

B5判変形

160頁

定価：3000円

好評発売中！



特集

南イタリアのバロック建築

シチリア・バロックとレッチェ・バロックの魅力
写真=小野一郎

編集長：相川幸二
副編集長：浜地三千世
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
原田裕夫 高木秀之
アトバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

5	シチリア	
	バラッツォ・ベネヴェンターノ	サンティ・アヌンツィアータ聖堂
	サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂(キエーザ・マードレ)	サン・バオロ聖堂
	サンタ・ツィータ聖堂	シラクーサのドウオーモ
	サンタ・キアラ聖堂	コレージョ・デイ・ジェズイーティ(イエス会神学校)
	サント・スピリト聖堂	旧ベネディクト会修道院
	モーディカのサン・ジョルジョ聖堂	サン・ニコロ聖堂
	ノートのドウオーモ	サン・ベネデット聖堂
	バラッツォ・スバダーロ	ジェズイーティ教会堂(サン・フランチェスコ・ボールジャ聖堂)
	ラグーサ・イブラのサン・ジョルジョ聖堂	サン・ジュリアーノ聖堂
	バラッツォ・イウーディカ	カターニアのドウオーモ
17	バロックの誘惑	竹山博英
41	辺境の二重性	長谷川正允
47	レッチェ(サレント半島)	
	サンタ・クロチェ聖堂	
	サン・マッテオ聖堂	
	バラッツォ・マッレーゼ	
	レッチェのドウオーモ	
	サンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂	
	サンタンジェロ聖堂	
	キエーザ・マードレ(聖母教会堂)	
	クローチフィッソ聖堂	
	サン・ドメニコ聖堂	
	サン・マルティーノ聖堂	
74	南イタリアのバロック[都市+建築]	岡田哲史+長谷川正允
94	シリーズ：現代建築の新世代 8 (最終回) 小林克弘	写真=浅川 敏 文=飯島洋一
	東京都臨海副都心清掃工場基本デザイン、新潟港トンネル立坑基本デザイン	
118	書評	
120	新刊紹介	
122	お知らせ	
123	ニュース： フランク・ロイド・ライト復刻照明コレクション	
124	ニュース： 技術を生かす「現代家具のつくり手たち。職人+デザイナー展」より	
127	海外建築情報リミックス：ディテール研究 その1「表面」	

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大坂屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：1,950円
[本体1,893円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み

表紙：サンタ・ツィータ聖堂
表紙写真：小野一郎
表紙デザイン：小泉均

Special Feature:

photographs: Ichiro Ono

Baroque Architecture in Sicily and Lecce

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Michiyo Hamaji
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yasuo Harada
Hidayuki Takagi
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 (Management)
03.5561.2555 (Editing)
FAX:
03.5561.2561 (Management)
03.5561.2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 140

Cover: S. Zita
Cover Photograph: Ichiro Ono
Cover Design: Hitoshi Kozumi/Ni

5	Sicilia	
	Palazzo Beneventano	SS. Annunziata
	S. Maria Maddalena (Chiesa Madre)	S. Paolo
	S. Zita	Duomo, Siracusa
	S. Chiara	Collegio dei gesuiti
	S. Spirito	Ex convento benedettino
	S. Giorgio, Modica	S. Nicolò
	Duomo, Noto	S. Benedetto
	Palazzo Spadaro	Chiesa dei gesuiti (S. Francesco Borgia)
	S. Giorgio, Ragusa Ibla	S. Giuliano
	Palazzo Iudica	Duomo, Catania
17	Baroque Temptations	Hirohide Takeyama
41	The Duality of Periphery: Baroque Architecture in Southern Italy	Masanobu Hasegawa
47	Lecce (Salento)	
	S. Croce	
	S. Matteo	
	Palazzo Marrese	
	Duomo, Lecce	
	SS. Nicolò e Cataldo	
	Chiesa di S. Angelo	
	Chiesa Madre	
	Santuário del Crocifisso	
	S. Domenico	
	S. Martino	
74	Southern Italian Baroque: The City and Architecture	Satoshi Okada+Masanobu Hasegawa
93	Series: (end of series) The New Generation in Contemporary Architecture 8 Katsuhiko Kobayashi Tokyo Water Front Incineration Plant, Niigata Port Corridor Towers	photographs: Satoshi Asakawa text: Yoichi Iijima
118	Book Review	
120	Book Information	
122	Announcements	
123	News: We production collection of Frank Lloyd Wright Lighting Fixtures	
124	News: The makers of contemporary furnishings, Craftsmen and Designers	
127	Eminent Works Abroad: The Study of Detail 1 Exterior	

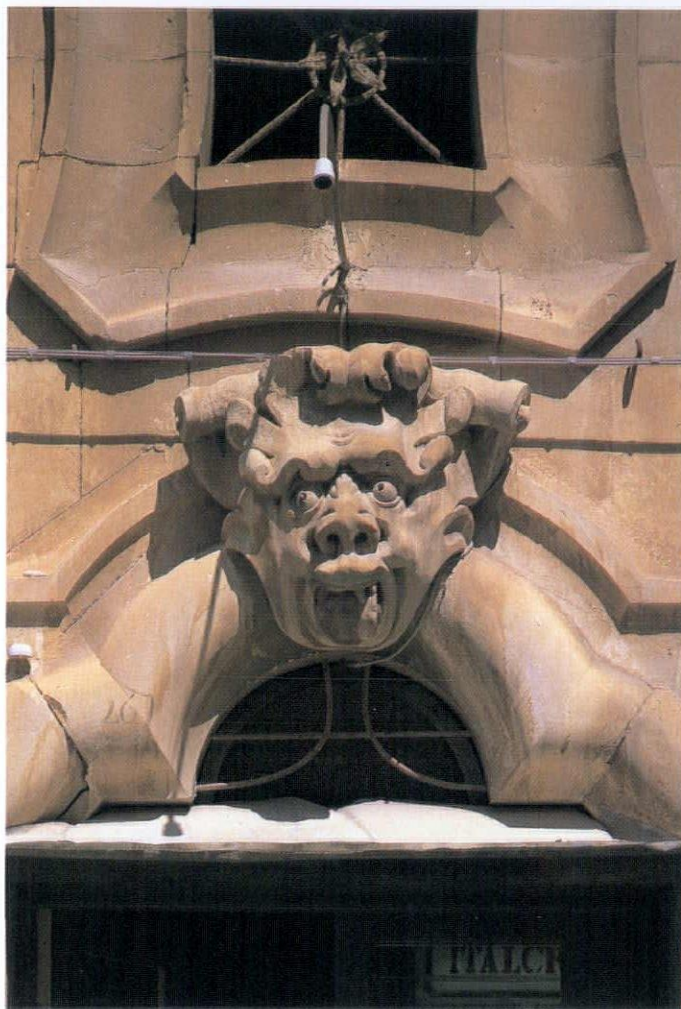
特集

南イタリアのバロック建築

シチリア・バロックとレッツェ・バロックの魅力

SPECIAL FEATURE

Baroque Architecture in Sicily and Lecce



パラッツォ・ベネヴェンターノ、シクリ、シチリア島 18世紀
Palazzo Beneventano, Scicli, Sicilia, 18C

写真＝小野一郎

Photographs by Ichiro Ono



サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂(キエーザ・マードレ)

チミンナ、シチリア島 彫刻・リ・ヴォルジ兄弟

S. Maria Maddalena (Chiesa Madre)

Ciminna, Sicilia Scultori: Scipione e Francesco Li Volsi



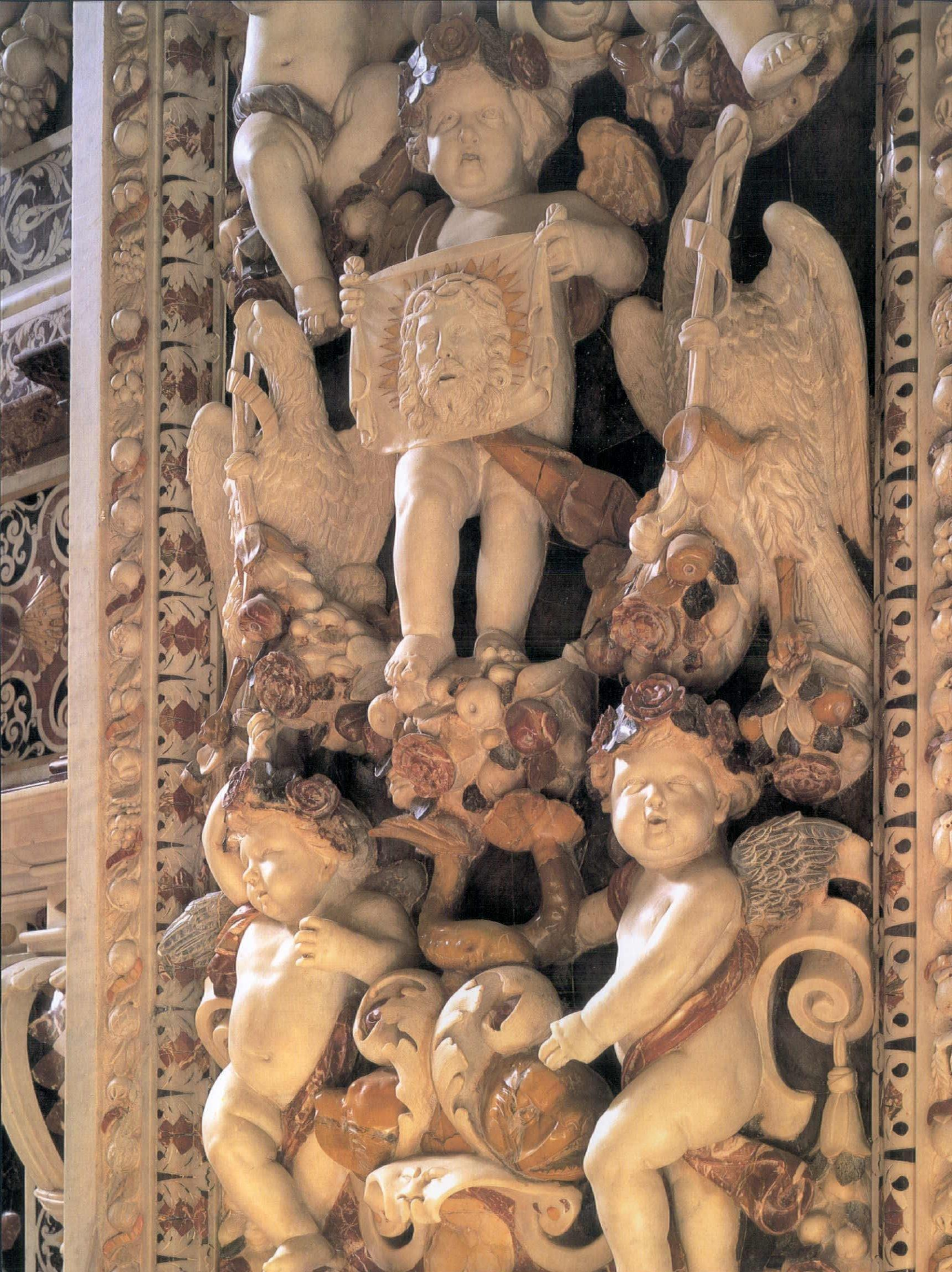


サンタ・ツィータ聖堂

パレルモ、シチリア島 17-18世紀 彫刻：G.セルボッタ

S. Zita

Palermo, Sicilia, 17-18C Sculptor: Giacomo Serpotta







サンタ・キアラ聖堂 [上]

ノート、シチリア島 18世紀 インテリア：R.ガリアルディ
 S. Chiara (top)
 Noto, Sicilia, 18C Interior: Rosario Gagliardi

サント・スピリト聖堂 [下、次頁]

アグリジェント、シチリア島 17-18世紀 彫刻：G.セルボッタ
 S. Spirito (bottom and next page)
 Agrigento, Sicilia, 17-18C Sculptor: Giacomo Serpotta





サン・ジョルジョ聖堂

モーディカ、シチリア島 18世紀 建築：R.ガリアルディ
S. Giorgio
Modica, Sicilia, 18C Architect: Rosario Gagliardi



ドゥオーモ

ノート、シチリア島 18世紀

Duomo
Noto, Sicilia, 18C





パレルモ市街

パレルモ、シチリア島
Palermo, Sicilia

バロックの誘惑

竹山博英

パレルモのいかめしいバロック

シチリア島を訪れる観光客で、バロックの文化遺産を見て歩こうとする人は数が少ないだろう。シチリア島は全島に点在する古代ギリシアの遺跡で名高い。例えばエトナ山を遠望できるタオルミーナのギリシア劇場、古代で最大級の規模を誇ったシラクサのギリシア劇場、あるいは2500年の歳月を耐えて、ほぼ完璧な形で保存されているアグリジェントのコンコルディア神殿、さらには深い谷のかたわらの丘の上に、一つぼつんと立っているセジェスタのドーリス式神殿。これらの遺跡を目にするものは不思議な感動にとらわれ、知らず知らずのうちに、古代文明のとりこになってしまう。シチリア島の古代文明の遺跡には、見るものの心に深く食い入る独特の魅力がある。

だがシチリア島の魅力は古代の遺跡だけにとどまらない。パレルモを訪れ、13世紀にノルマン人の君主が作った教会や宮殿を見ると、シチリア島には、また別の魅力あふれる文化遺産があることが分かる。例えばノルマン王宮の内部にあるバラティーナ礼拝堂である。この礼拝堂の内部は華麗なモザイクで飾られていて、金色の壮麗な光に満ちている。また天井には、スタラクタイトと呼ばれる、イスラムの影響を受けた装飾がほどこされ、極彩色の絵が細かく描かれている。この建物はアラブ人、ビザンツ人、ノルマン人が協力して作ったものである。それを証拠だてるかのように、中庭に面した壁に、ギリシア語、アラビア語、ラテン語の3か国語で、建物の起源を書いた石板がはめ込まれている。バラティーナ礼拝堂は、文明の十字路と呼ばれるシチリア島の複雑な文化を、目の当たりにできる、格好の建物なのだ。

古代の遺跡を見て、パレルモ周辺にあるノルマン時代の建物を巡り歩くと、何となくシチリア島の魅力を満喫したような気分になる。その後でバロック時代の建物を見ても、あまり心ははずまない。例えばパレルモの町の真ん中に位置するクアットロ・カンティである。クアットロ・カンティとは、パレルモの中心部分で南北に交わる四つ辻のことで、四つ辻の壁面を四つ利用して、巨大なモニュメントが作られている。その壁面は凹型にへこみ、太い円柱が装飾的に用いられていて、バロックに特有の陰影がたっぷりつけられている。全体は三層に分かれ、一層に四季を表す女性像が置かれ、最上層の三層にはパレルモの守護聖人の像が四体はめ込まれているのだが、中層の二層にはシチリアを支配した歴代のスペイン国王の像が置かれている。それらは豪華な服をまとっているのだが、華やかさよりも、むしろいかめしさを感じさせる。

パレルモのバロック様式の建物を見てまわると、いかめしいのはクアットロ・カンティだけではないことが分かる。特に教会はイエズス会の影響下で建てられたものが多いため、自由な想像力を発揮するよりも、権威を強調することに重きを置いている、という印象を受ける。建物の外壁が排気ガスで真っ黒に汚れていると、特にこうした印象は強まる。またパレルモでは別の要素も加わる。バロック様式の建物がスラム街の中に多くあるため、おちおちと建物だけを見物しているわけにいかないのだ。ひったくりなどの犯罪を警戒して、いつも周囲に気を配らなければならないからである。

これはパレルモの町がいびつな発展のしかたをしてきたためである。

普通イタリアでは、古い建物の集中する地域は歴史的保存地区に指定され、修理修復によって、町並みも建物もいねいに保存される。ところがパレルモでは、悪名高き犯罪組織、マフィアのために、本来なら古い建物の保存に割かれるべき資金が、郊外に安価な建物を建てる資金として使われてしまった。マフィアはこうした不正な操作によって、莫大な利益を得た。中心街の建物は、そのために放置され、スラム化が進み、今では普通の観光客には足を踏み入れるのが恐ろしいような地域も出て来たのである。

多民族に支配された地中海の島

パレルモにバロック様式の建物が建てられた時代、シチリア島はスペイン人によって支配されていた。だからシチリア島はイタリアの一部であるにもかかわらず、ルネサンス様式の建物は少ない。そもそもイタリアが統一されて、近代国家として生まれ変わったのは、いまから130年ほど前の1861年であった。従って統一国家としての歴史はさほど長くなく、地域ごとの差異はいまでも顕著に見える。シチリア島にルネサンス様式の建物が少ないのも、この地域的差異の一例だろう。そしてシチリア島のバロック様式は、バロックが発生したローマだけではなく、スペインのバロックの影響も受けている。

シチリア島のバロックの時代には、スペイン人が苛酷な支配を行っていた。その一例が異端審問である。異端審問はローマの教皇庁が始めたものだが、スペインでは非常に厳しい形で実施された。スペイン人の植民地的支配が行われていたシチリア島もその例外ではなく、異端審問は宗教裁判の名のもとに、政敵を追いつぶす手段としても使われた。また金持ちのユダヤ人の財産を取り上げるためにも利用された。スペイン人の支配の時代に一抹の暗さがつきまとっているのは、この異端審問のせいでもある。

スペイン人の支配下で、シチリア島の農民は土地問題で苦しんだ。スペイン人は封建的色彩の強い土地所有制度をシチリア島に持ち込んだ。それはラティフォンディズモ（大土地所有制）と呼ばれるもので、広大な土地を封土として与えられたスペイン系の土地貴族が村落を支配し、農民は自前の土地を持たず、小作農として、不利な条件で働かされた。土地貴族は封建領主として自分の領地を支配したが、シチリア島全体はスペイン国王が送り込んだ総督によって支配されていた。

シチリア島の歴史は植民地化の歴史でもある。シチリア島は地中海の中央に位置し、交通の要地として重要であったが、土地が肥沃であることでも知られていた。そのため地中海で活躍した様々な民族がシチリア島の占領を企て、侵略を行い、そのたびにシチリア島は外国人の支配下に置かれることになった。古代では、前8世紀にギリシア人とフェニキア人がそれぞれシチリア島の東部と西部を支配し、地中海の覇権をかけて何度も戦った。その後ローマ人がやってきて、前3世



クアットロ・カンティ、パレルモ／G. ラッソ、17世紀

紀にシチリア島を占領し、植民地的状態に置いて、特産品の小麦をローマに持ち出した。ローマ帝国の崩壊後は、ビザンツ人がシチリア島を支配したが、9世紀にイスラムの勢力が強まり、シチリア島は10世紀にアラブ人の占領下に置かれた。

アラブ人はオレンジ、レモン、桑、サトウキビなどの栽培植物を持ち込み、画期的な灌漑法をもたらして、シチリア島の農業を発展させた。また農民に土地を分け与え、土地の細分化を進めた。しかし11世紀末に北ヨーロッパからノルマン人がやって来て、シチリア島を占領すると、封建的な土地制度が持ち込まれ、土地細分化の動きは止まった。ノルマン人の後にシチリア島を占領したのはスペイン人だった。スペインのアラゴン家が13世紀末にシチリア島を支配すると、19世紀半ばのイタリア統一まで、シチリア島はスペイン人の支配下に置かれることになった。

明るいバロックの建ち並ぶモーディカ伯爵領

スペイン人は封建制を強化し、貴族に広大な土地を分け与え、大土地所有制を広めた。特にシチリア島の西半分はこの制度は広まり、千ヘクタール以上の土地を所有する地主も珍しくなかった。そこでは「二圃制」による粗放的性格の小麦栽培が行われ、小麦は本国のスペインに送られた。土地の細分化は行われず、農民は「折半小作」という制度のもとで、小作農として苦しい生活を強いられた。この制度では、農民は収穫物の半分を地代として収めなければならない、契約は1年ごとに更新されるため、次の年に借りられる保証もなく、土地の改良は行いにくかった。

大土地所有制は特にシチリア島の西半分で見られたが、東南部にこうした土地制度とは違う制度を持つ地域があった。それはモーディカを中心とする地域で、モーディカ伯爵領と呼ばれていた。この地域は13世紀末からキアラモンテ家、カブレラ家、エンリケツ=カブレラ家に支配されてきた。これらはシチリア島の名家で、総督も一目置くような力を持っていた。

彼らはシチリア島の西半分とは違ったやり方で、領地を支配した。「折半小作制」ではなく、「永代小作制」に近い制度を取り入れたのである。この制度では、農民は長期間農地を借りられるので、土地の改良を行い、収量を増やす工夫ができる。また農地の借地権の相続も可能となる。この制度のためと、土地の細分化が他の地域より進んでいたことから、この地域はシチリア島の西半分より豊かであり、抑圧的な要素も少なかった。このため、モーディカ伯爵領には独特の雰囲気が生まれることとなった。

モーディカ伯爵領とは、現在の行政区分に当てはめると、ラグーサ県にはほぼ重なる地域で、12の町から成り立っていた。モーディカ、モンテロッソ・アルモ、ジャッラターナ、キアラモンテ・グルフィ、アカーテ（ビスカリ）、ヴィットリア、コミソ、ラグーサ、サンタ・クロッチェ・カメリーナ、シクリ、イスピカ、ポツツァッロの町々である。これらの町々を歩いてみると、いくつかの特徴に気づく。人口に比べると、町が大きく、教会も建物も立派で、どこか全体的に明るい気配があるのだ。

モーディカ伯爵領は17世紀から18世紀にかけて大きく発展した。独特の土地制度のため、住民が豊かで、富が蓄積されていたのである。そのため、1693年にこの地方を襲った大地震にも十分に対応できた。町々は大打撃を受けたが、人々はめげずに再建案を練り、前よりも美しい町を作りあげた。この時はバロック様式の時代だった。そのためこの地域は、バロック様式の教会や建物が多く、町に独特の雰囲気が漂っている。

例えばラグーサの町である。この町はラグーサとイブラという二つ

の地区に分けられているが、もともとはイブラが中心だった。イブラは1693年の地震で町が破壊され、守護聖人の聖ジョルジョに捧げられた教会も壊れてしまった。その時人々は、町の中央に新たな教会を築くことにして、建築家にロザリオ・ガリアルディを起用した。現在ラグーサを訪れれば、イブラ地区のシンボルとして、崖の斜面をびっしりと埋めている家々を圧倒するかのよう、聖ジョルジョ教会がそびえ立っているのが目に入ることだろう。ガリアルディはラグーサの守護聖人に、美しいバロック様式の教会を新たに捧げたのである。

ラグーサは一部分をバロック様式で再建したのだが、全体を一つの都市計画のもとで再建した町もある。モーディカ伯爵領に隣接するノートである。この町は地震で完璧に破壊されたため、住民は元の場所での再建をあきらめ、10キロほど南にある場所に新たな町を建設したのだった。

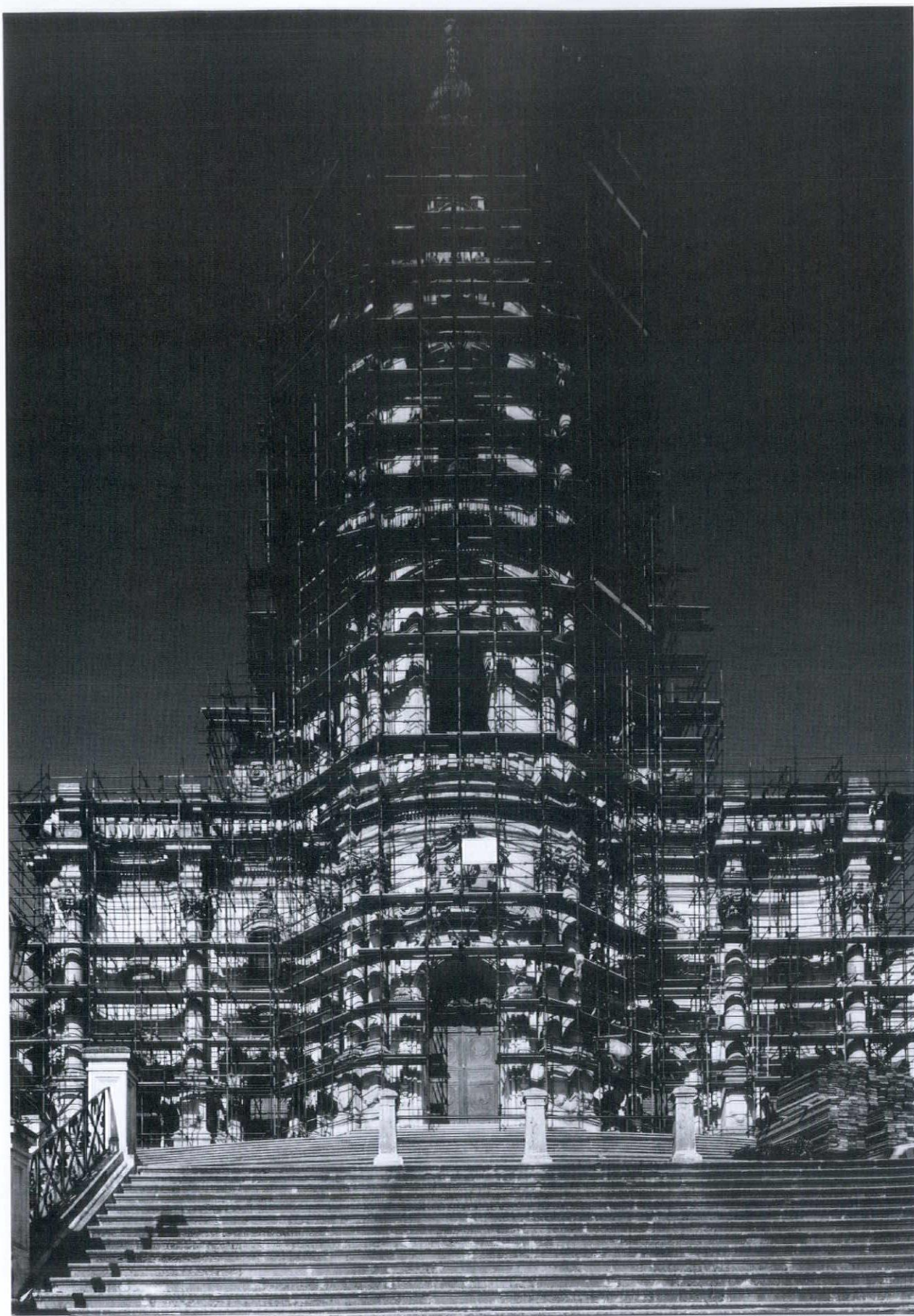
かつてのノートは、古来、人の住むところであったが、アラブ人が9世紀に町を占領し、城塞を築いて、この地域の防御の中心にすると、町として栄え始めた。ノートは、ノルマン人、スペイン人の時代になると、防御の中心である以外に、農業生産の拠点となり、経済的に繁栄し、数多くの文化人を輩出した。かつてのノートを今日訪れてみると、往時をしのばせる巨大な要塞の跡が町の入口に残っている。だが町の中に入ると、町は瓦礫の山で、原型を留めている家はほとんどない。ノートの遺跡はかつての地震のすさまじさを、今なお雄弁に語っている。

人々は地震の後、町の放棄を余儀なくされ、新しい町を100年以上かけて作った。その町が現在のノートだ。この町はきちんとした都市計画のもとに作られているので、とても合理的にできている。町は丘の上に作られ、東西に太い道が一本走っている。その道の両脇に、町を代表する教会とパラッツォが、交互に向かい合うように建てられて、ずらりと並んでいる。町の顔とも言える建物が一本の道の両側に集中しているのである。それがみなバロック様式の建物で、しかも石材がややクリーム色がかかった色で統一されているため、町全体に明るい統一感が醸し出されている。

シチリア島の東南部の魅力として、一つ一つの町で、この地方特有のバロック建築が見られることがあげられるだろう。個々の町にそれぞれ個性的な建物があり、しかも地域全体で見れば、ある種の統一感がある。しかもこの地域は、パレルモのスラムに比べれば、安全度は比べ物にならないほど高い。だから一つ一つの町を巡り歩く楽しみが味わえるのだ。

1994年の11月に、何年かぶりでラグーサ・イブラを訪れた。もう夕方陽が落ちかけていた。聖ジョルジョ教会の前の広場にたどりつくと、ゆるやかな坂道の頂上に、教会の正面が塔のようにそびえているのが目に入ってきた。教会は夕焼け空を背景に、黒々としたシルエットを浮かび上がらせていた。すると教会の脇の階段から、黒い僧服を着た聖職者たちが一団となって降りて来た。彼らは小さな声でなにごとかを話しながら、教会の前の広場をゆっくりと横切り、宵闇迫る町の中に、どこともなく消えて行った。時が昔に戻って、バロック時代の光景を見ているようだった。当時は聖職者たちは同じような服を着て、道を横切っていたに違いないのだ。バロック建築の劇場的効果を目の当たりにしたような気分になった。イタリアの映画監督タヴィアーニ兄弟はこの広場で『カオス・シチリア物語』を撮影した。そして今、『ニューシネマ・パラダイス』をヒットさせたトルナトーレ監督が、やはりラグーサ・イブラを舞台に映画を撮っている。バロックとは映像作家を刺激する何かを持っている建築様式なのである。

●たけやま・ひろひで／イタリア文学



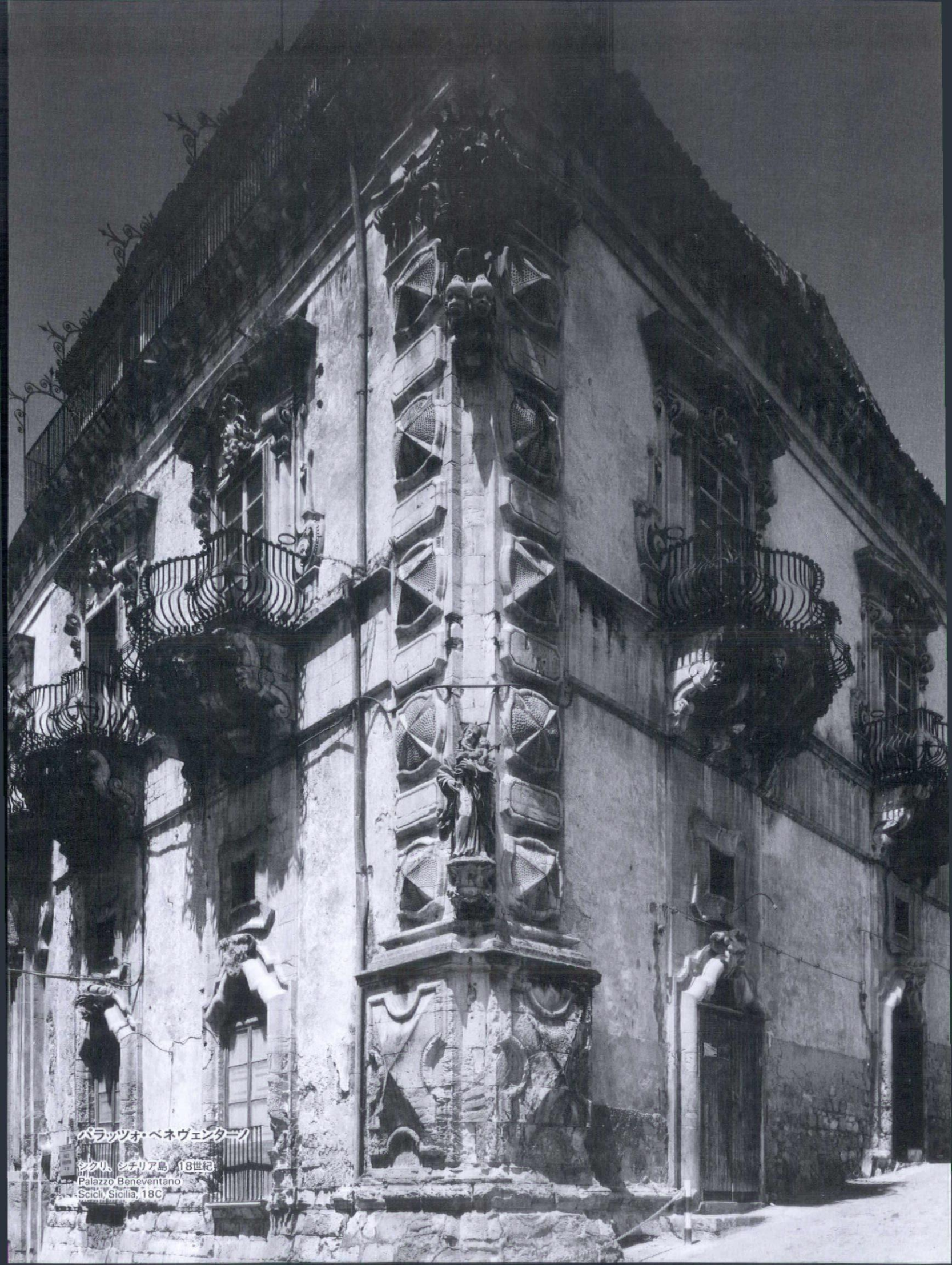
サン・ジョルジョ聖堂

モーディカ、シチリア島 18世紀 建築：R.ガリアルディ
S. Giorgio
Modica, Sicilia, 18C Architect: Rosario Gagliardi



パラッツォ・スバダーロ

シクリ、シチリア島
Palazzo Spadaro
Scicli, Sicilia



パラッツォ・ベネヴェンターノ

シクリ、シチリア島、18世紀

Palazzo Beneventano

Scicli, Sicilia, 18C



シクリ市

シクリ・メルチリア島
Scioli, Sicilia



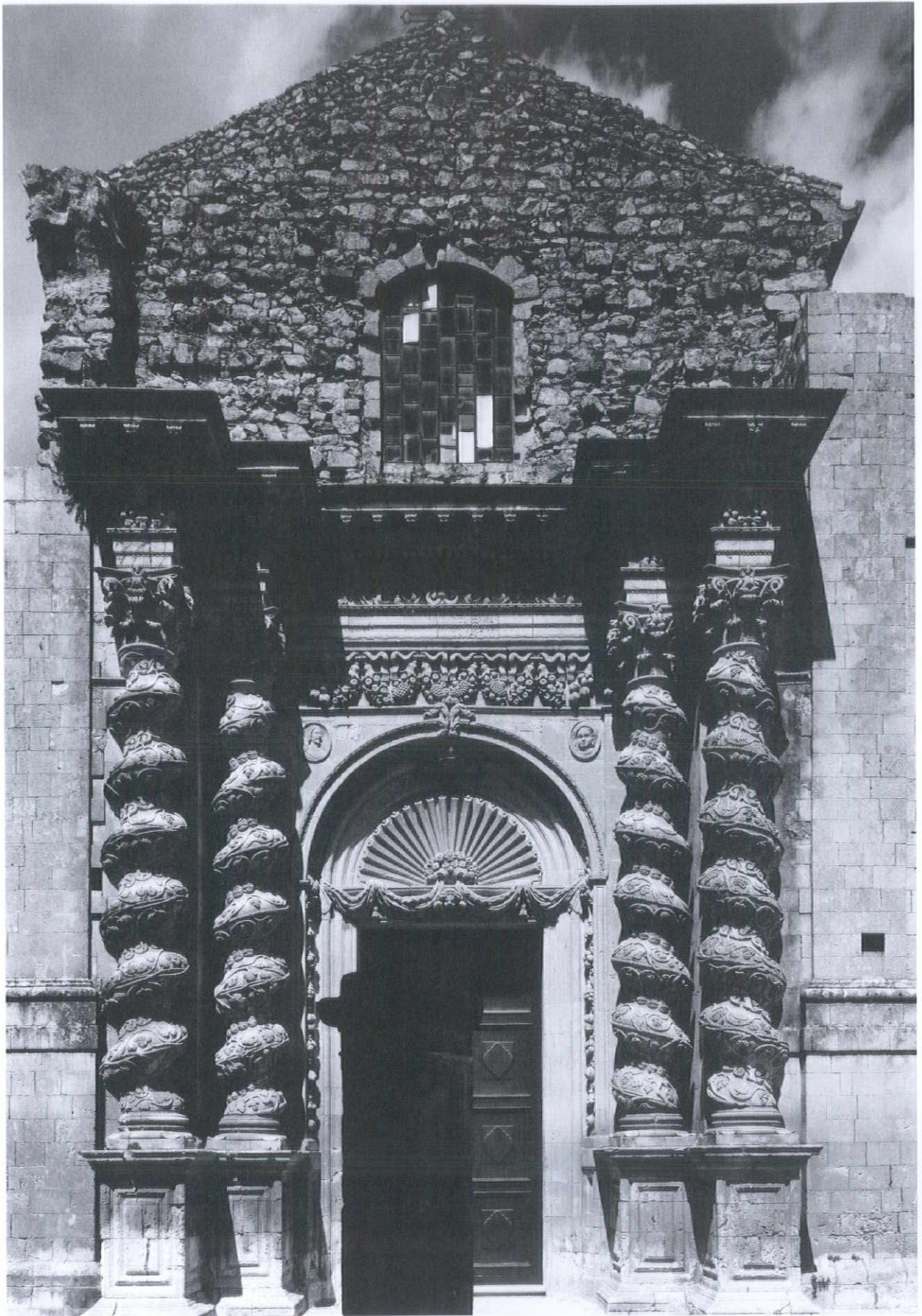


サン・ジョルジョ聖堂

ラグーサ・イブラ、シチリア島 18世紀 建築：R.ガリアルディ
S. Giorgio
Ragusa Ibla, Sicilia, 18C Architect: Rosario Gagliardi







サント・アヌンツィータ聖堂

パッツォーロ・アクレイデ、シチリア島 18世紀
SS. Annunziata
Palazzolo Acreide, Sicilia, 18C



サン・パオロ聖堂

バラッツォーロ・アクレイデ、シチリア島 18世紀
S. Paolo
Palazzolo Acreide, Sicilia, 18C





ドウオーモ

シラクーサ、シチリア島 18世紀 建築：A.パルマ
Duomo
Siracusa, Sicilia, 18C Architect: Andrea Palma





MEMORIE OF THOMAS MARIN ET FRAT
THOMAE PRIMUS TEM
QUOD EXCITAM
HUCUSQUE ET C
PERFECERIT. ET C
AN.



STITUTUM
SCI TESTAE
FRONTEM
T. ALTER
AVERIT



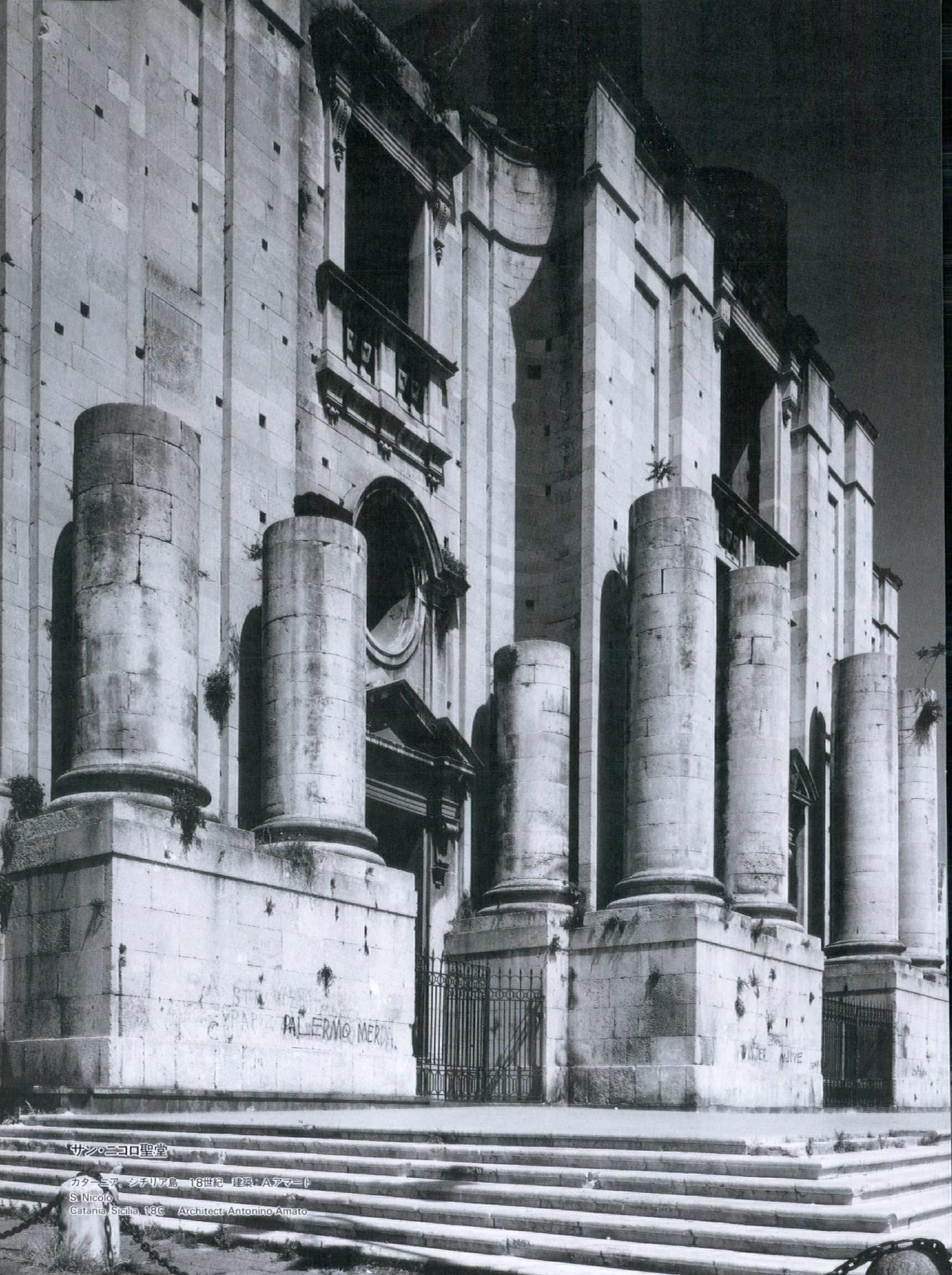
コレージョ・デイ・ジェズイーティ(イエズス会神学校)

カターニア、シチリア島 18世紀 建築：G.B.ヴァッカリーニ
 Collegio dei gesuiti
 Catania, Sicilia, 18C Architect: Giovanni Battista Vaccarini

旧ベネディクト会修道院

カターニア、シチリア島 18世紀 建築：A.アマート
 Ex convento benedettino
 Catania, Sicilia, 18C Architect: Antonino Amato





サン・ニコロ聖堂

カタニア、シチリア島 18世紀 建築・Aアマート
S. Nicolò
Catania, Sicilia 18C Architect: Antonino Amato



サン・ベネデット聖堂 左

カタニア、シチリア島 18世紀
S. Benedetto (left)
Catania, Sicily, 18C

ジェズイーティ教会堂(サン・フランチェスコ・ボールジァ聖堂) 右

カタニア、シチリア島 18世紀 建築: A.イタリヤ
Chiesa dei gesuiti (St. Francesco Borgia)
Catania, Sicily, 18C Architect: Angelo Italia



サン・ジュリアーノ聖堂

カターニア、シチリア島 18世紀 建築：G.B.ヴァッカリーニ

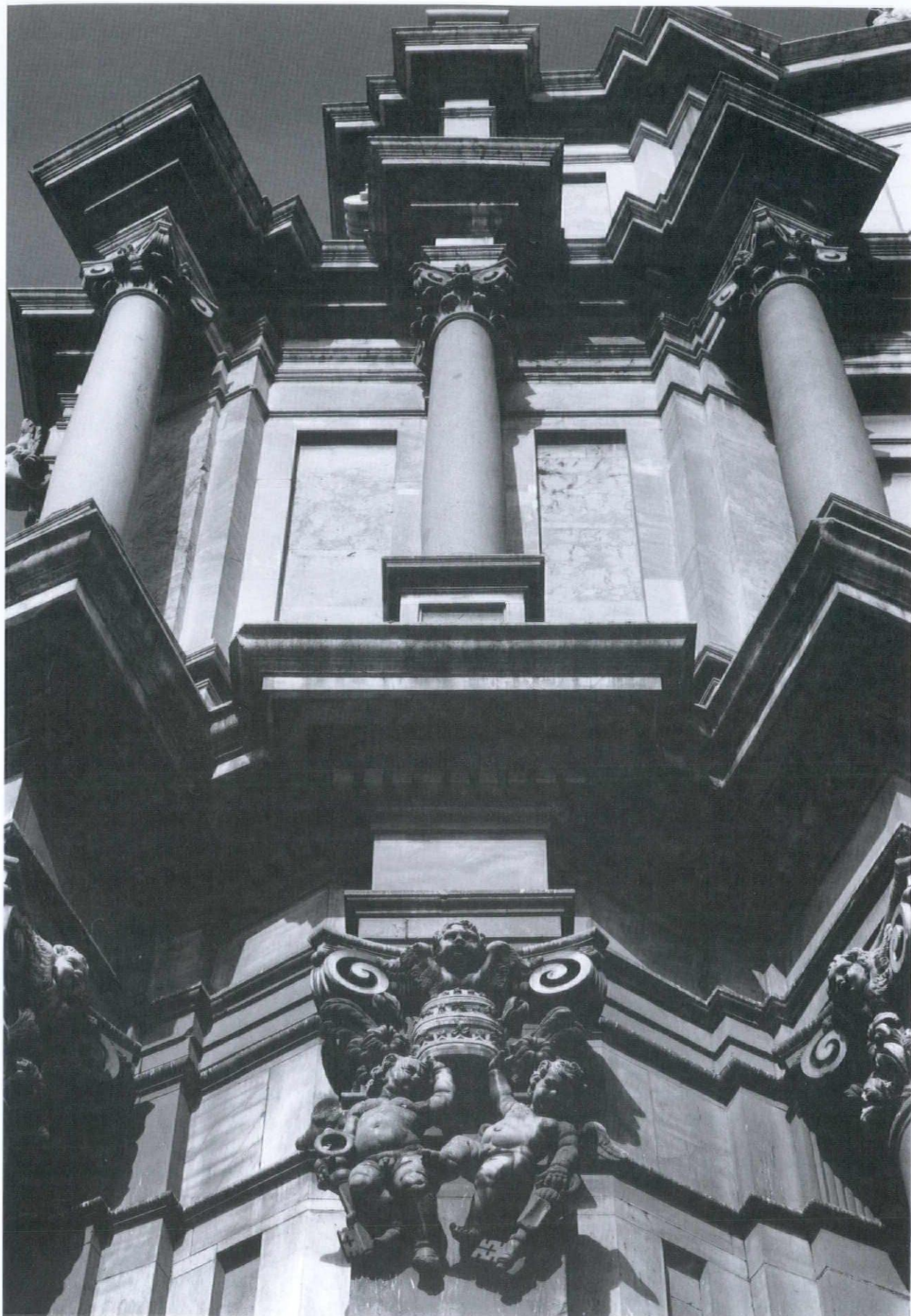
S. Giuliano

Catania, Sicilia, 18C Architect: Giovanni Battista Vaccarini



サン・ベネデット聖堂 [奥]、ジュズイーティ教会堂 [手前]

S. Benedetto and Chiesa dei gesuiti (foreground)



ドウオーモ

カターニア、シチリア島 18-19世紀 建築：G.B.ヴァッカリーニ他
Duomo
Catania, Sicilia, 18-19C Architects: Giovanni Battista Vaccarini, etc.

辺境の二重性

イタリア南部地方のバロック建築

長谷川正允

地誌的背景

シチリア島や南部プーリア地方（サレント半島）の諸都市を探访すると、今日なお、教会建築やパラッツォをはじめとして、歴史地区を特徴づける独特な、それでいて多様な傾向のバロックの建築・都市空間が印象に残る。いわゆるバロックの正当派とも言い得るイエズス会の古典主義スタイルを代表とするローマやナポリのバロック建築、あるいはイタリア北部地方やスペインのそれを思い起こさせる「普遍的」な特質が、一見してそれらには見出される。だが同時に、あたかもそうではないと反駁するかのような、南部地方固有の特質も溢れていることに気づく。その最も顕著なものは、多様で豊饒な、過剰な、土着的だがしばしば繊細な、魔術的な、そして何よりも祝祭的な、建築装飾であると言っていいだろう。

これらの地域のバロック期以前の歴史背景を遡れば、何よりもまず、プーリア南部ではターラント、メタポントゥム、ヘラクレア、シチリアではメッシーナ、カタニア、シラクサ、アグリジェント、セリヌンテ、トラパニなど、いずれの地域にも共通して、古代ギリシアの都市・建築遺跡が点在する古代地中海世界の構図が思い浮かべられる。古代ローマ期になると、サレント半島では後にバロックの代表となる商業都市レッツェが、アッピア街道終点の港湾都市プリンディシとともに形成され、シチリアではタオルミーナ、ローマ帝国期のヴィッラが著名なピアッツァ・アルメリーナ等、数多くの都市が隆盛した。

やがて中世期になって、シチリア島ではビザンチン帝国による支配後、イスラムの支配（9世紀）、ノルマン公国領（11世紀）そしてシチリア王国（12世紀）と変遷する間に、古代カルタゴ起源のパレルモがイスラムやノルマンとの交易によって中心都市に発展し、それを象徴するように郊外の丘陵モンレアーレには、イスラム、ノルマン、ビザンチンの建築様式が混然一体となったドゥオーモ（12世紀、写真1）が姿を現した。

同じ頃のプーリア地方は、ビザンチン帝国に支配された後、11世紀にノルマン公国領となり、アドリア海沿いの丘陵都市オストゥーニ（→p62-63）などが形成されていったが、中世前期の北部プーリア地域は、ヨーロッパ全域の中でも非常に高度なオリジナリティを示すロマネスク建築の宝庫（写真2）だった。既に検証されているが、この地域のロマネスク文化がノルマン人の征服とそれによる「西洋化」に由来するとみなすことは誤りで、宗教改革期以降の文化発展の基礎になる、中世の教会を核とした都市文明の再生は、実際、ノルマン人の到来より遥かに早く、ビザンチン支配下で行われていたのである。

これらの地域には、中世後期以降もビザンチン、イスラム、ノルマン、といった東部地中海文化、西部地中海文化、フェデリコ（フリードリヒ）2世に導かれたアルプス以北の神聖ローマ帝国文化が次々と到来した。そして引き続きそこへ、北部・中部イタリアに開花したルネサンスの統合術ももたらされたが、輝かしいルネサンス文化がこれらの地域にお

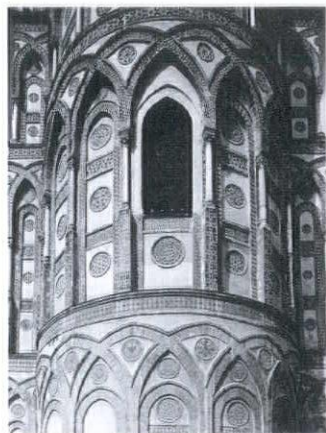


いて隆盛することはなかった。むしろ、重層する多民族支配の歴史の中で、古代・後期古代期のギリシア・ヘレニズム・ローマ文化、その後の多様な地中海文化のうえに、これらの地域の土着文化の基礎がはぐくまれ、やがてルネサンス以後の大都市からのバロック・スタイルを受け入れながら、独特の風土の中で、それぞれの都市固有の様相を浮かび上がらせてきたと言えるだろう。

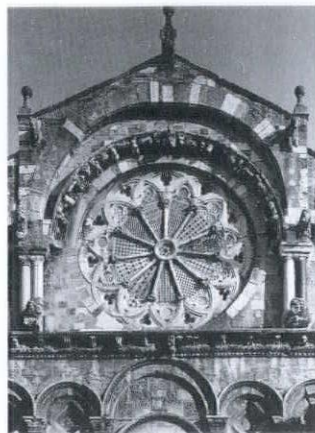
外来文化と土着性

シチリアは15世紀から1713年までスペインの統治下にあり、その200年程前から政治とともに芸術の分野でも影響を受けていた。パレルモ、シラクサの後期ゴシック建築が、純粋なカタルーニャ地方の特質を示しているといった指摘、あるいは、詳細な例証として、カステルヴェトラノのドゥオーモやサン・ドメニコ聖堂（1557-91、写真3）が、1544年のメディーナ・ディ・リオセコのサンタ・マリア聖堂内のベナヴェント礼拝堂におけるジェロニモ・コッラル（Jeronimo Corral）の作品から直接的な影響を受けているといった指摘もある。しかし、スペインのハプスブルク王朝がシチリア王だった政治状況においてすら、シチリア人達は絶えることのない強靱さによって、古代からの島固有の文化的独自性、高貴さを常にまもり続け、展開してきたのであった。

同時代のサレント半島についても、何らかのイベリア半島やシチリア島の文化的影響を受けながら形成されたと考えがちだが、プー



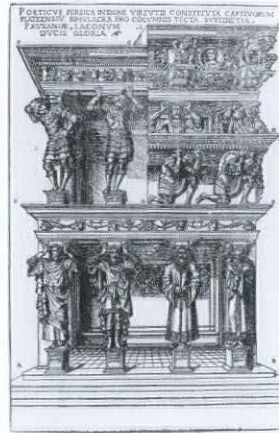
1：モンレアーレのドゥオーモ、シチリア島、12世紀



2：トロイアのカテドラル、プーリア地方



3：サン・ドメニコ聖堂、カステルヴェトラノ、16世紀



4：チェザリアーノ版ヴィトルヴィウス建築書、1521

リアのバロック建築に主要な影響を与えたものは、実はスペインやシチリア島のバロック建築に影響を与えたものと同じもの、すなわち、16世紀初期の建築書（特にチェザリアーノの著書）や、ルネサンス以降の建築言語手法の伝播と普及であった。特にチェザリアーノ版のヴィトルヴィウス建築書（1521、図4）、あるいは同じ図版を用いたカボラーリ版（ペルーシア、1536）は、バロックの基盤となる共通言語の普及に重要な役割をはたしたと考えられている。チェザリアーノ版はイタリア語でしかも豊富な図版を示し、ルネサンス以降、最初に普及したヴィトルヴィウス建築書と言われるが、古代期のアウグストゥス版と比べてしばしばファンタスティックな図像解釈を伴い、この時代のロンバルディア地方の伝統を反映していたとも言われる。この書物がサレント半島で普及したかどうかは確証がないが、ケレスティニス派修道会のような宗教団体がこの著作を持ち込んだり、科学的で思慮深い建築家、例えばレッツェではガブリエレ・リッカルディ（Gabriele Riccardi）やジャン・ジャコモ・デッラカイア（Gian Giacomo dell'Acaja）、コベルティエーノにおいては福音書伝道者メンガ（Evangelista Menga）といった人物が用意したといった可能性は高い。16世紀前半からのスペイン統治による合理主義的な政策との関連、すなわち、カルロス5世の領地政策の主要課題だった城塞の問題、あるいはより具体的な議論として、レッツェのサンタ・クロッチェ聖堂の大コーニスの人物像・獣像の持ち出しのモチーフ（→p47、

50-51）、そして幾つかの建築物に見られる燭台風に縁取りと装飾を施した付け柱、人物像を施したキャピタル、月桂樹の円形コーニスのレリーフ装飾等の連続モチーフといったものは、チェザリアーノの著作との直接関係を暗示している。この時代の「西洋化」「ローマ化」勢力とも言い得るルネサンスの成果、すなわちロンバルディアおよびヴェネト地方、フィレンツェやローマの中部地域の装飾様式や建築術は、ナポリをはじめとするカンパニア地方へ伝播し、さらに南部地域のサレント半島やシチリア島へと到達したが、一方でこれら南部地域においては、カタルーニャ地方の建築文化やアラゴン・スタイルの影響も作用した。こうした影響関係は、中世期からの土着の伝統を中絶することなく、むしろ南部の地誌的基盤の上に展開したと言える。

辺境の二重性

17世紀にバロックの中心地となったローマの都市・建築状況は、ルネサンス期、マニエリスム期を経て非常に実験主義的にかつ弁証法的に形成されながら、それ自身終わりのない自律した建築術の展開を示し続けた。それに対して、「辺境」に位置するこれら南部地域のバロックは、古代以来の土着の地中海文化を背景にして、多様な外来文化に影響されながら、イタリア・ルネサンスの系譜に由来する「普遍的」な建築術や図像学的モデルを、地方色豊かな固有の感受性と応答性にしながらとり込んでいった。すなわち、これらの地方ではそれらを再構成・再シンボル化したり、

多く見られる例としては、技法を地方色豊かな別のものに置き換えたり、スケール変換したり、といった過程が認められるのである。それはベルニーニやボッロミーニが実現した複合的な構造体やダイナミックな空間性に乏しいだけでなく、ピエモンテ地方やボヘミア地方で展開した盛期バロック建築が示す構築性にも乏しいといった特質故に、「本流」でない「傍流」とみなされるものである。それは「本流」に由来する建築的秩序の幾何学的基本構造が生み出す原理を尊重しながら、言い換えれば「ビューロクラティックなもの」として位置付けられた建築術を背景にして、民衆に訴えかける歓喜の表現としての装飾主題を、独特にやがて過剰なまでに、しかし固有の調和ある秩序とともに集積していく特質を示している。すなわち小天使、螺旋形、獅子の頭部、花の株、葉の付いた小枝、木の葉、果実、花冠、花房、丸花窓、ロゼッタ（薔薇の花）、槍や炎の造形、鱗模様や魚、貝殻、さらには土着的な菓子といったおびただしい装飾造形（写真5）が建築を覆うのである。シチリア島では多彩色の大理石象眼細工やスタッコ、サレント半島では柔らかい半面、風化に強い黄金色の石彫りに代表されるそれらの表情豊かな装飾は、両地域にしばしば見られるファサードから持ち出した装飾豊かなバルコニーや隅部に配置した列柱と同様に、視覚性や演劇性に裏付けられた「都市的」な価値を持つ建築装置でもあった。これらの装飾造形の複合性や含蓄は、「ローマ化」「西洋化」といった外部地域から作用した影響の痕跡をやがて凌駕



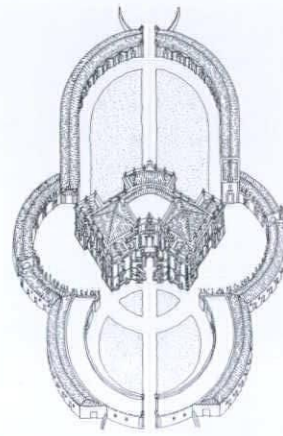
5：レッツェのセミナリオ、装飾モチーフ、17世紀



6：装飾に用いられている彫像の衣服のひだ



7：サン・サルヴァトーレ聖堂、バレルモ／A.バルマ



8：ヴィッラ・パラゴニア、バゲーリア／T.ナポリ

してしまうのだが、こうした「傍流」の建築文化こそ、南部地域のバロック建築の本質と言っていだろう。それはバロックの「本流」に対する「傍流」であるが故に「マイナー」でありながら、一方でこれらの「辺境」地域において独自の文化領域、アイデンティティを獲得したという意味で「メジャー」でもある、という二重性を表明している。

プーリア地方では、当時、前衛だった大都会からのバロックの均質な伝播を「遅延」させ、その影響に「抵抗」した文化的中心性が形成されたのだが、「ローマ化」への抵抗姿勢や、より個別的な視覚言語の使用状況におけるヘレニズム文化的特質の恒久的な存在、すなわち、装飾に多用される彫像の衣服のひだの表現に代表される「ギリシア的なもの」(写真6)や、リッカルディ以来のファサード等の「オーダー」の構成や彫塑的特質、あるいは「西洋化」と言い得るルネサンスに由来する「透視図法的」特質に従った空間構造的な統合術への関心の欠乏といった特質が見出される。この地域の土着文化が示す「ローマ化」「西洋化」への対立関係は、中世盛期から古代後期へと遡る通史的な特質であり、ビザンチンの影響によっても強化された「東洋化」傾向として、近代社会の成立まで持続した。古代後期には既に古代ローマ帝国やビザンチン帝国が、遠隔地であるプーリア地方におけるラテン文化や初期キリスト教の伝統の継承や、この地域の教会の再編成に支配的な要因となる都市文明の再生を熱望し推進したが、15世紀に至るまでの史料は、この地域でラテ

ン語系とギリシア語系の2カ国語の使用を記録しており、後にバロックを推進した反宗教改革宗教団体の布教活動においても、ギリシア神話の放棄を促すよう注意していた。

シチリア島のバロック

シチリア島やサレント半島のバロック建築は、反宗教改革を推進したキリスト教カトリック文化を背景にして、おおむね17世紀から18世紀にかけて隆盛した。シチリアに関しては、17世紀末以前の第1期、震災復興をめざすカタニーヤ再建を手掛けたジョヴァンニ・バッティスタ・ヴァッカリーニ(Giovanni Battista Vaccarini, 1702—68、→p34, 38, 40)を代表とする第2期、アンドレア・パルマ(Andrea Palma, 1664—1730、→p30-33、写真7)、ロザリオ・ガリアルディ(Rosario Gagliardi, 1726—70、→p11, 13, 19, 24)、トマーズ・ナポリ(Tommaso Napoli, 図8)らが活躍したシチリア・バロック最盛期である第3期、そして工芸的、装飾的なスタッコの彫刻家ジャコモ・セルポッタ(Giacomo Serpotta, 1656—1732、→p8-10, 11, 12)らが活躍した第4期に発展段階を分節できる。

第1期は、15世紀にフィレンツェからパレルモに移り住んだガジーニ(Gagini, 写真9)一族を代表とする彫刻家達存在が重要である。デッラ・ロbbiea(Della Robbia)をも想起させる造形的、彫像的な装飾性を特徴とする彼らの系譜は、シチリア各地に拡がり、やがて第4期のセルポッタ(→p8-12)をひとつの頂点とする固有の装飾造形の伝統を形成

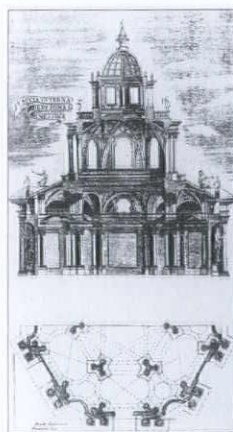
した。また、イタリア本土に近いメッシーナには16世紀にローマ、フィレンツェから建築家達に移り住み、後の世代に影響を及ぼす活動を続けた。最初の人物、16世紀半ばに訪れたフィレンツェの建築家ジョヴァンニ=アンジェロ・モントルソーリ(Giovanni Angelo Montorsoli)は、同時代のフィレンツェの建築、彫刻の手法をメッシーナにもたらし、16世紀末には二人の建築家、アンドレア・カラメック(Andrea Calamech [Calamecca カラメッカ])、カミッロ・カミリアーニ(Camillo Camilliani)が登場した。メッシーナ出身のカミリアーニは晩年のミケランジェロのもと、ローマで修業し、サン・ピエトロ大聖堂内部、ボルタ・ピア、スフォルツァ礼拝堂等で協同した後、ジャコモ・デル・ドゥーカ(Giacomo [Jacopo] del Duca)とともに帰郷し、ローマの建築術を自由に解釈した「大都会風」のサン・ジョヴァンニ・ディ・マルタ聖堂を手掛けた。こうした「大都会風」の伝統は、17世紀に引き継がれ、ローマで修業した後、メッシーナに移り住んだシモーネ・グッリ(Simone Gulli)、ナターレ・マスッチョ(Natale Masuccio)らが継承していった。18世紀前半に建設された地方色豊かなサン・グレゴリオ聖堂(作者不詳、写真10)をはじめ、メッシーナの多くのバロック建築は、1783年と1908年の大地震、第二次世界大戦の空爆によって倒壊し現存しないが、こうした中で盛期バロックを代表する建築家の一人グアリーノ・グアリーニ(Guarino Guarini)は、数学、哲学を教授しながら長期間にわたって各地を旅行し、1660



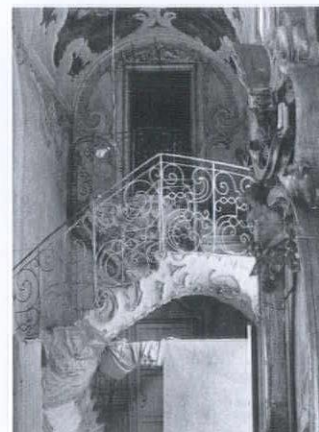
9: アメンツィアータ聖堂聖母礼拝堂入口
/A.ガジーニ、16世紀



10: サン・グレゴリオ聖堂、メッシーナ、
18世紀



11: 聖ジェロラモ・エミリアーニ教団教会堂
計画面、メッシーナ/G.グアリーニ



12: パラッツォ・ビスカリー
/F.バッターリア、18世紀

年にメッシーナを訪れてサンティッシマ・ア
ヌンツィアータ聖堂、テアチノ会修道院、サ
ン・フィリッポ聖堂を建設している（いずれ
も現存せず）が、「バロックのメルクリウス（伝
達者）」としての彼の存在（図11）も非常に興味
深い。

17世紀末以降の第2期は、同時代のローマ
で研究した後、シチリアに戻った建築家達が、
ローマ・バロックの作品、ドメニコ・デ・ロ
ッシ（Domenico De Rossi）の版画建築書な
どのイメージソースに基づいて、ローマ風の
建築作品を建設した。それらはディテールの
精密さや意味において洗練されてはいたが、
「熱情」や「過剰」といった土着的な特質は見
られない。この時期、1693年にシチリア南東
部を襲った大地震によって、カタニア、ノ
ート、ラグーサ、モーディカ等の諸都市は壊
滅的な被害を受けたが、カタニアの震災復
興、都市再建に着手したアロンゾ・ディ・
ベネデット（Alonzo di Benedetto）、引き続
き市庁舎を含むドゥオーモ広場の都市計画的
再構成等、数多くの建築を手掛けたジョヴァ
ンニ・パッティスタ・ヴァッカリーニ（→p34、
38、40）は第2期を代表する建築家である。カ
タニアでは後に、ロココの内部装飾が著名
なバラッツォ・ビスカーリ（写真12、13）を手
掛けたフランチェスコ・バッターリア（Francesco
Battaglia）、その娘婿でローマ出身のステー
ファノ・イッター（Stefano Ittar）が活躍し、
次第に新古典主義へと向かっていった。

一方、1693年の地震で被害を受けたノート、
ラグーサ、モーディカは、ロザリオ・ガリア

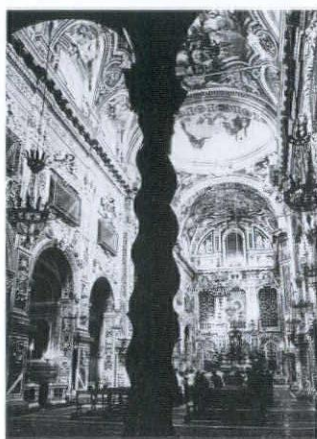
ルディの多くの作品とともに第3期を代表す
る独特なバロック都市となった。震災後のノ
ートでは、指導者G.B.ランドリーナが旧市街
地を放棄し、南東約16kmの位置に「新都市」
すなわち現在のノートを建設したが、東西に
平行に走る3本の主要道路による厳格な都市
計画（p77）はバロック文化のもうひとつの「近
代都市的」側面でもある。その中央でダイナ
ミックな階段を介して南北に対峙する二つ
の代表的建築、すなわち18世紀後半のドゥオ
ーモ（または聖母教会、→p14）とバラッツォ・
ドゥチェツィオ（現市庁舎、設計ヴィンチェ
ンツォ・シナトラ Vincenzo Sinatra）、そし
てこの地域一帯の主任建築家だったガリアル
ディが手掛けたイル・ジェズ教会（またはサ
ン・カルロ聖堂、18世紀半ば）など、ノート
の建築には、近郊で採掘された淡い黄金色の
石材が用いられて都市景観の美しい特質を形
成している。互いに近接して位置する二都市
ラグーサ、モーディカは、当時のモーディカ
伯爵領に属し、ラグーサは丘陵地域とラグー
サ・イブラと呼ばれる低地地域とからなる。
ラグーサ・イブラ、モーディカにはそれぞれ
ガリアルディの代表作サン・ジョルジョ聖堂
（→p19、24）があり、小さい方のラグーサ・
イブラのサン・ジョルジョ聖堂（→p24）がより
調和ある構成を示すが、いずれも単一鐘楼と
一体化して中央が迫り出したファサードがラ
ンドマークとしてそびえ、その前に広がるダ
イナミックな階段とともにバロック建築の都
市計画的特質を示している。パレルモの建築
家アンドレア・パルマも第3期を代表するが、

18世紀半ばに彼が手掛けたシラクサのドゥ
オーモ（→p30-33）は、紀元前5世紀の古代ギ
リシア期のドリス式神殿を起源とし、キリス
ト教教会に転用した後に付加されたノルマン
様式の立面を改修したものであった。ヴァッ
カリーニ作のカタニアのドゥオーモ（→p40）
が緻密な褐色の石材の丹念なメゾンリーで
あるのに対し、シラクサのドゥオーモは光
沢のある白色トラヴァーチンを荒々しく組積
しており、それぞれ街固有の景観として対照
的な特質を示している。

シチリア・バロックの芸術家達は、ローマ、
トスカナ、そして少なからずナポリと繋が
りがあった。前述したように16世紀にはフィ
レンツェやローマの建築家達がシチリア島の
文化に影響を及ぼし、17世紀後半から18世紀
初頭には、シチリアの建築家達が定期的にロ
ーマに通うことが長期間に渡って幾度も続き、
その中でもフィリッポ・ユヴァッラ（Filippo
Juvarra）とピエトロ・パッサラクア（Pietro
Passalacqua）の二人は、そのまま本土で活躍
した。一方、ジャコモ・アマートのように故
郷に戻った建築家達は、著名な建築家の工房
で得た個人的な経験に基づいて、大都市の建
築スタイルの知識を身に付けて帰郷した。パ
レルモで活躍したアマートはカルロ・フォン
ターナ（Carlo Fontana）に強く影響され、
ピエタ教会、サンタ・カテリーナ聖堂（弟子
アンドレア・パルマと協同、写真14）を手掛
けたが、フォンターナの影響は他にもシチリ
アでしばしば見られる。また、ナポリからの
影響は、サレント半島への影響関係と類似し、



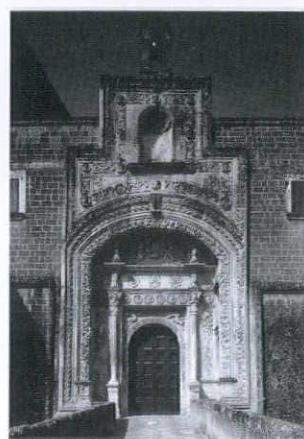
13：バラッツォ・ビスカーリ



14：サンタ・カテリーナ聖堂
／G.アマート



15：カステル・ヌオーヴォのアラゴン家アル
フォンソ1世凱旋門、ナポリ／F.ラウラーナ



16：コペルディーノのカステッロ

17世紀にコジモ・ファンツァーゴ (Cosimo Fanzago, 1591—1678) が、18世紀にはフェルディナンド・サンフェリーチェ (Ferdinando Sanfelice, 1675—1748)、フェルディナンド・フーガ (Ferdinando Fuga, 1699—1781)、ルイジ・ヴァンヴィテリ (Luigi Vanvitelli, 1700—73) 等の建築家が、シチリアの建築に重要な影響を与えた。他の国との関係に関しては、1728年から34年にかけて帝国皇帝直轄地だったシチリア島は、フィッシャー・フォン・エルラッハ (Fischer von Erlach) の作品を模倣する形で、オーストリア建築の影響を受けた。シチリアの建築家トマゾ・ナポリは二度に渡ってウィーンを訪れ、宗教建築、市民建築を描いた版画や、設計図書を持ち帰ったと言われる。また、18世紀半ばには、総督 (副王) 宮廷に属する少数の貴族や実力者がフランスで隆盛していた政治理念や哲学に関する知識を身に付け、おそらくその派生効果として、パレルモをはじめ、シチリア島各地の建築にフランスの影響が見出される。そして18世紀最後の25年間の潮流は新古典主義へと向かっていったが、その間もシチリアの芸術家達がローマへ頻繁に通い、アルバーニ枢機卿とヴィンケルマン (Winckelmann) を中心に形成されたローマの古典主義に強く触発されていたものの、全体としてはフランス建築からの影響を色濃く示している。

サレント半島のバロック

サレント半島においては、バロック直前の状況として、ジャン=ジャコモ・デッラカイア、

ジョヴァンニ・マリア・タランティーノ (Giovanni Maria Tarantino)、ガブリエーレ・リッカルディ、フランチェスコ・アントニオ・ツインパーロ (Francesco Antonio Zimbalo, 1567—?)、といった建築家達の作品が先行して存在する。この時期の特徴的なファサード構成のひとつに「二重ファサード」のモチーフがあるが、それはカタルーニャ地方に由来するナポリのカステル・ヌオーヴォのアラゴン家アルフォンソ1世の凱旋門 (15世紀、設計フランチェスコ・ラウラーナ Francesco Laurana、写真15) からの系譜と言われ、ナポリのサン・セバスティアーノ聖堂 (1610、設計フラ・ヌーヴォロ Fra Nuvolo)、サン・ジュゼッペ・デッレ・スカルツェ聖堂 (設計ファンツァーゴ) を経て、レッチェのパラッツォ・ジュスティニアニのエンタランス、コペルティエーノのカステッロのエンタランス (写真16) をはじめ、いくつかの建築に伝播した。バロック建築のファサード意匠は都市的コンテクストの中で閉鎖性と通過性という二重性をダイナミックに演出し続けるのであるが、「二重ファサード」はスタティックで中間的な「透過性」を示す独特なモチーフである。

この地域のバロックの発展段階は、17世紀のジュゼッペ・ツインパーロ (Giuseppe Zimbalo 通称ツインガレロ Zingarello, 1620?—1710、→p47-51, 54, 55, 60) や彫刻家チェザーレ・ペンナ (Cesare Penna) が活躍した第1期 (「ブレバロック」期)、18世紀初頭のジュゼッペ・チーノ (Giuseppe Cino, 1644—1722、→p61, 84、写真17) を代表とする第2期 (「初期バロ

ック」期)、ナルドーの司教だった兄のアントニオ・サンフェリーチェのために活躍したナポリの建築家フェルディナンド・サンフェリーチェ (1675—1748、図18)、サンフェリーチェの影響を受けたマウロ・マニエリ・ダ・ナルドー (Mauro Manieri da Nardò, 1687—?)、写真19) と子息のエマヌエーレ・マニエリ (Emanuele Manieri, 1736—?) を代表とし、ガラートネのクローチフィッソ (→p66-71) が建設された第3期 (「後期バロック」期) に大別できる。

バロックに先行する時代の建築の中で、タランティーノがジョヴァンニ・トマゾ・リッチョ (Giovanni Tommaso Riccio) とともに手掛けたナルドーのサン・ドメニコ聖堂 (1580—、写真20) は、建築様式だけでなく、建設事業形態についても、中世からバロックすなわち「近代」へと向かう変曲点を示すと言われる。特に意匠に関して、そのファサード構成は、下部が地上の生活、豊饒、知性、肉体の死といったシンボルが現世の寓意を表現するのに対して、ファサード上部が聖人、救世主を配置した天上の世界を象徴すると言われている。それはキリスト教中世的な世界観を表す一方で、植物モチーフやヒューマンな裸体像といったディオニソス的な、劇的な造形表現を用いるという、南部地域特有の二重性を示している。そしてもうひとつの二重性とも言える上下二層のファサード構成は、レッチェ・バロック時代の始まりを告げるサンタ・クローチ聖堂のファサード構成を暗示する。サンタ・クローチ聖堂は、リッカルディに



17: サンタ・キアラ聖堂
/G.チーノ



18: ナルドーのドゥオーモ
/F.サンフェリーチェ



19: ブリンディシのカテドラーレ修復
/M.マニエリ・ダ・ナルドー



20: サン・ドメニコ聖堂、ナルドー
/タランティーノ+リッチョ

よるファサード下部(→p47)がスタティックな数学的比例に基づいた比較的簡素な意匠であるのに対し、フランチェスコ・アントニオ・ツィンバーロによる玄関部分、祭壇部分(→p54-55)、そしてその後ツィンガレッコとベンナによって1646年に完成したファサード上部(→p47, 48)は、溢れるほどの装飾によって、神の恵み、自然と太陽のメタファでもある農業の豊饒、社会的繁栄といったこの地域の熱烈なヴァイタリズムを、淡褐色の石材で身振りいっぱい表現するものであった。

サンタ・クローチェ聖堂以降、17、8世紀に隆盛へと向かったサレント半島のバロック建築は、祝祭的かつ演劇的な、過剰なまでの装飾造形を示すが、その背景にはマザニエッコの反乱(1647年夏)に象徴される重大な社会経済上の不況があり、当時レッチェの司教だったナポリ人パッパコーダが民衆暴動の鎮圧後の心理的な償いとして、建築と宗教の見直しをこの地域で遂行したという特殊な文化状況と関連して形成されたと言われている。それは、古代から途絶えることなかった土着のアニミズム的異教的な風土と、遅れて到達した「都会」の文化とが絶妙のバランスで組み合わせられた、多義的な「二重性」のスタイルであった。

こうした祝祭的、演劇的な装飾造形を通時的に見れば、前述したように、土着のギリシア的ヘレニズム的特質を継承したものともみなし得るが、共時的にはバロック期の大都市で頻繁に造営された、祝祭や葬儀のための「仮設装置(アッパラート)」の意匠からも影響を

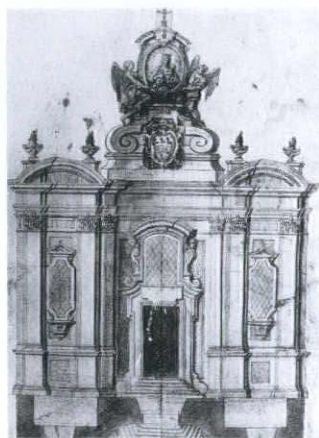
受けて形成されたという二重性を示している。「バロック意匠の祝祭性」の源泉と言えるこうした「仮設装置」のデザインでは、ローマでは巨匠ベルニーニ等が「舞台美術家」として、ナポリではファンツァーゴが「木彫りやスタッコの彫刻家」として活躍した。ファンツァーゴはフランチェスコ・アントニオ・ツィンバーロに直接的影響を与えた建築家だが、レッチェの装飾性豊かなバロック建築術を総論的に述べるならば、ファンツァーゴの仮設装置の構成手法に触発されながら、その後それらの本質とも言い得る「瞬間性」「仮設性」を失い、建築軀体とは別に製作された彫刻作品を意匠構成エレメントとして取り込むという複合的なプログラムに従って、驚異的な即興性で組み合わせ集合させていく手法を確立したといっていだろう(写真21)。18世紀になり、より博学で成熟した第3期を迎えた後も、こうした「民衆的な」装飾的な特質は、建設現場での実務形態も含めて、主に都市建築の領域においておおらかで生命力溢れる伝統的なメンタリティとともに継承された。1743年にナルドーを中心に大地震が起り、タランティーノ設計の市庁舎など多くの建築物が失われたが、サンフェリーチェ(彼もまた「仮設装置」の達人であった)がその復興事業の多くを手掛け、大都市的な階段の意匠(サン・キアラ修道院、サン・ドメニコ聖堂の修復)など、新時代のナポリの影響を持ち込んだ(図22)。また、他のナポリの影響として、ナルドーのインマコラータ(聖母マリア)の塔(写真23)、オストゥーニのサントロンツォの塔など、

都市を「多焦点化」するモニュメントが宗教行事、祝祭と関連して建設された。豊かさを増したこの地域のバロック建築術は、教会建築だけでなく都市建築の「共通言語」として定着していった。マウロの子エマヌエーレ・マニエリは、カゼルタの王宮(写真24)を手掛けた新古典主義建築家レイジ・ヴァンヴィテッリ(1700—73)、プリンディシ出身で反バロックを唱え続けた新古典主義理論家、フランチェスコ・ミリツィア(Francesco Milizia, 1725—98)より若い世代に属した。ミリツィアは18世紀中頃に研究、設計活動のために南イタリアのガリポリに滞在していたと言われるが、エマヌエーレの作品の多くにはこれらの進歩的な新古典主義の影響が「穏やかな形」で認められ、サンフェリーチェや父マウロから継承したバロックの造形主題と「渾然一体」化したスタイルを示している。この時期には大都市の文化は新しい秩序を求めてダイナミックに近代市民社会へと向かいつつあったわけだが、そうしたアポロ的な特質とも言い得る先駆的な「古典主義」の浸透を拒絶し、当時の終わりのない封建社会の状況をあたかも持続させようとするかのように、「辺境」の甘美な風土と社会性を表明しながら、ディオニソス的な「渾然一体」傾向の優位性を保持し続けようとしたと言えるのではないだろうか。

●はせがわ・まさのぶ/建築家



21: ロザリオ聖堂、ファサード上部
/G.ツィンバーロ



22: ナルドーの清教教会堂のファサード
/F.サンフェリーチェ



23: ナルドーのインマコラータの塔

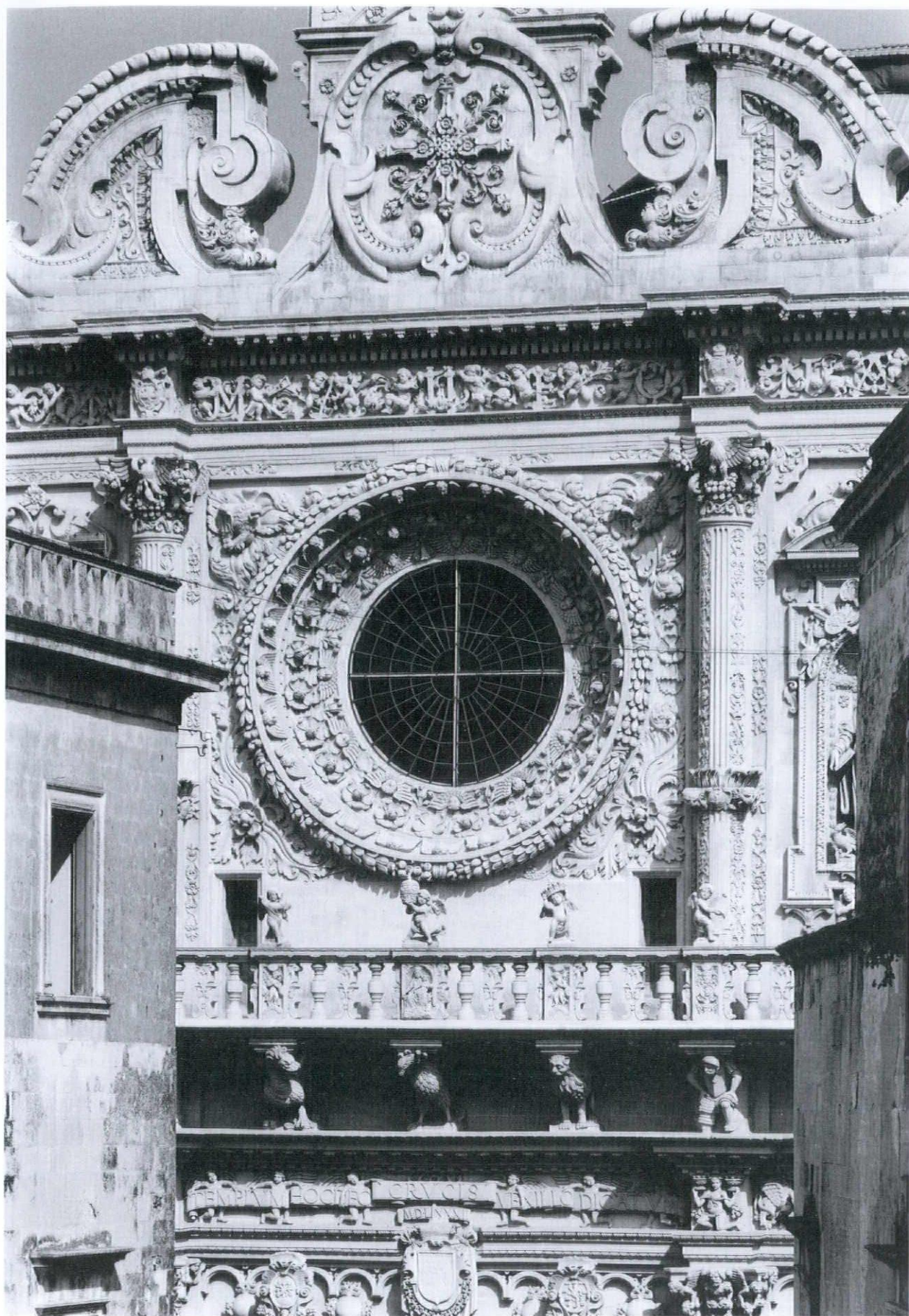


24: カゼルタ宮、ナポリ近郊
/L.ヴァンヴィテッリ、18世紀



サンタ・クローチェ聖堂

レッツェ、サレント半島 16-17世紀 建築：G.ツインバーロ他
S. Croce
Lecce, Salento, 16-17C Architects: Giuseppe Zimbalo, etc.



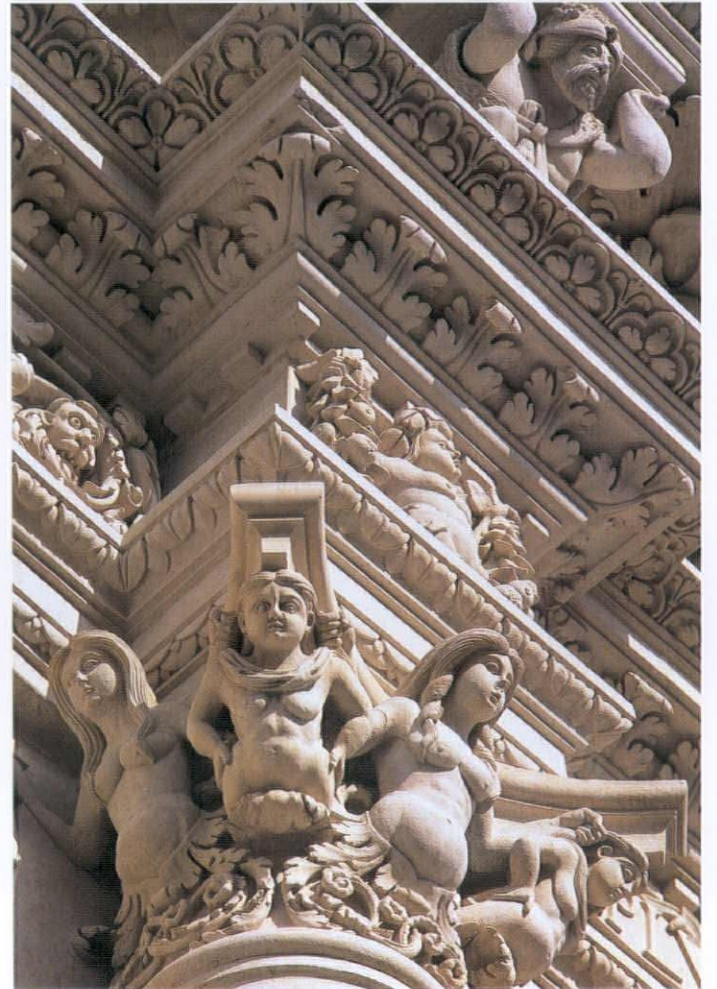
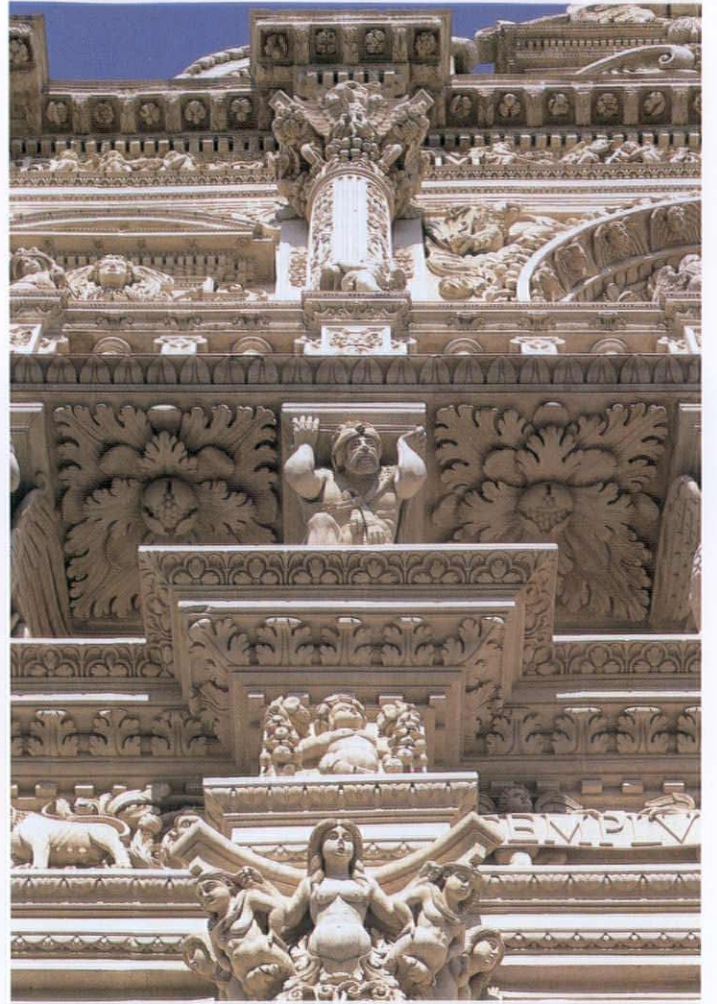
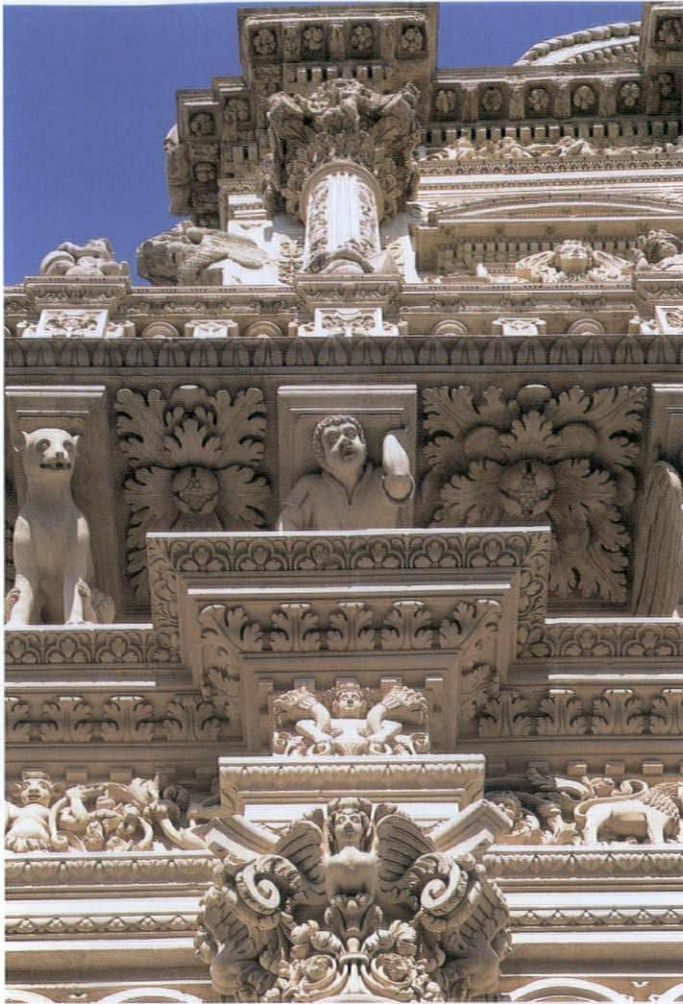
サンタ・クロチェ聖堂

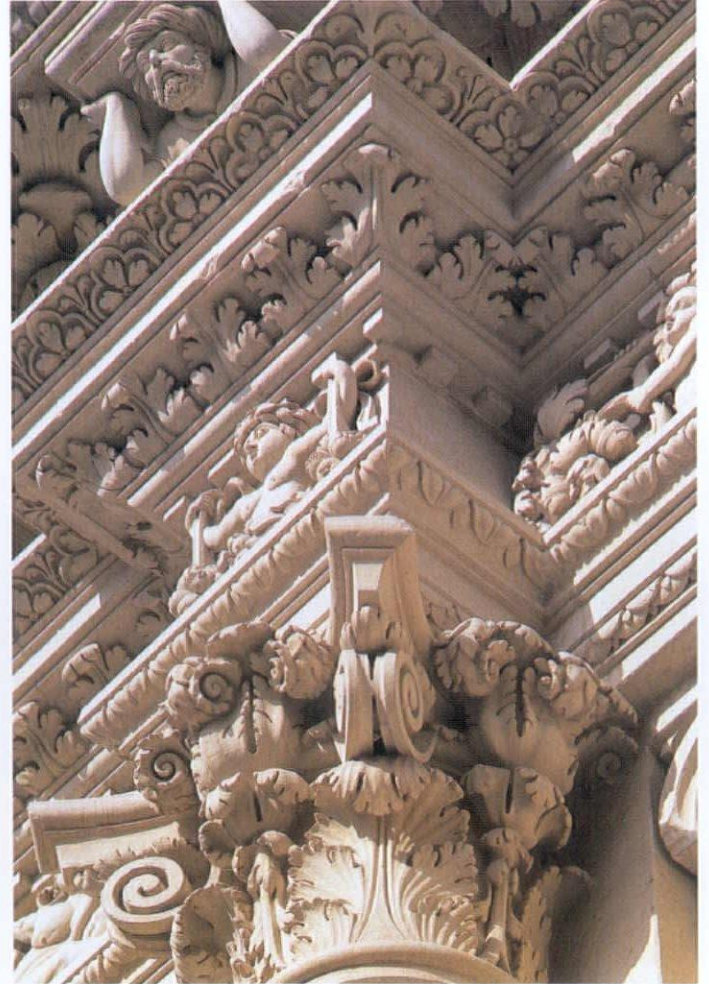
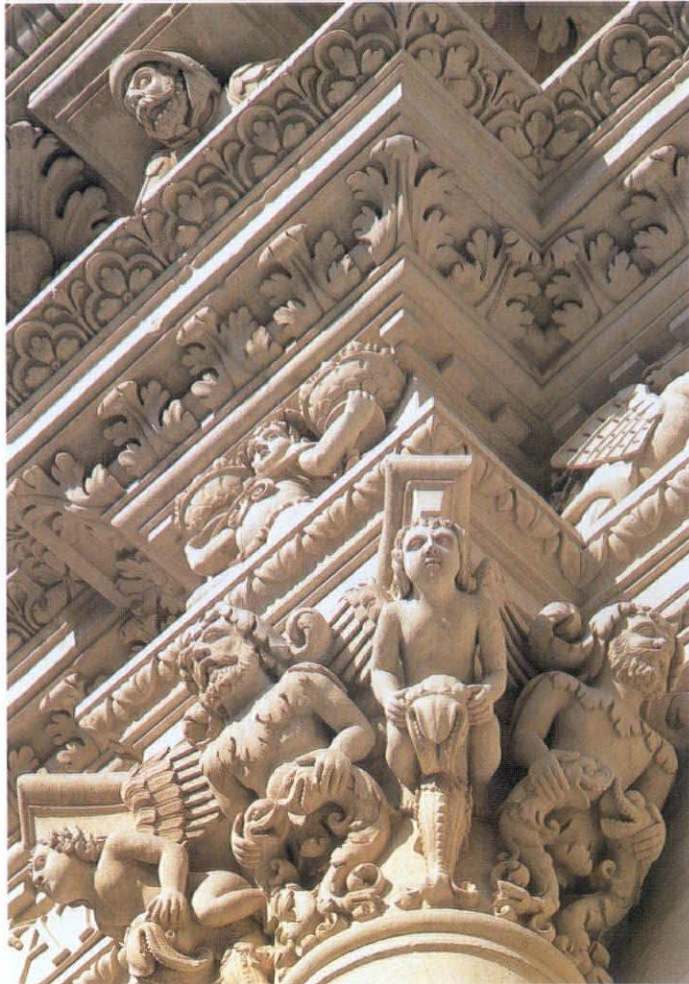
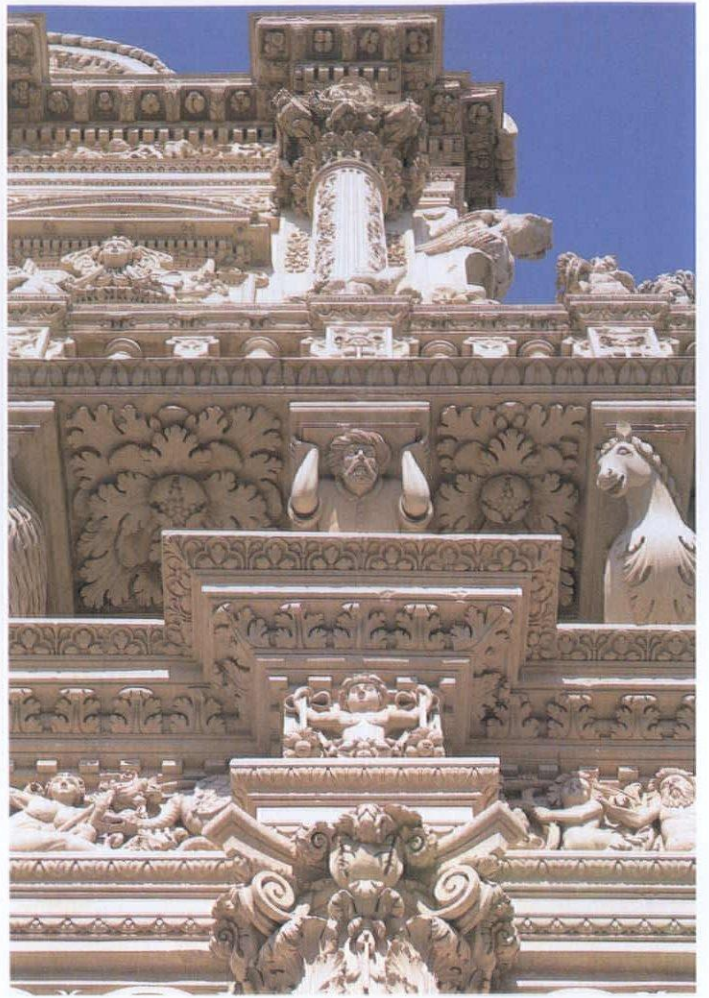
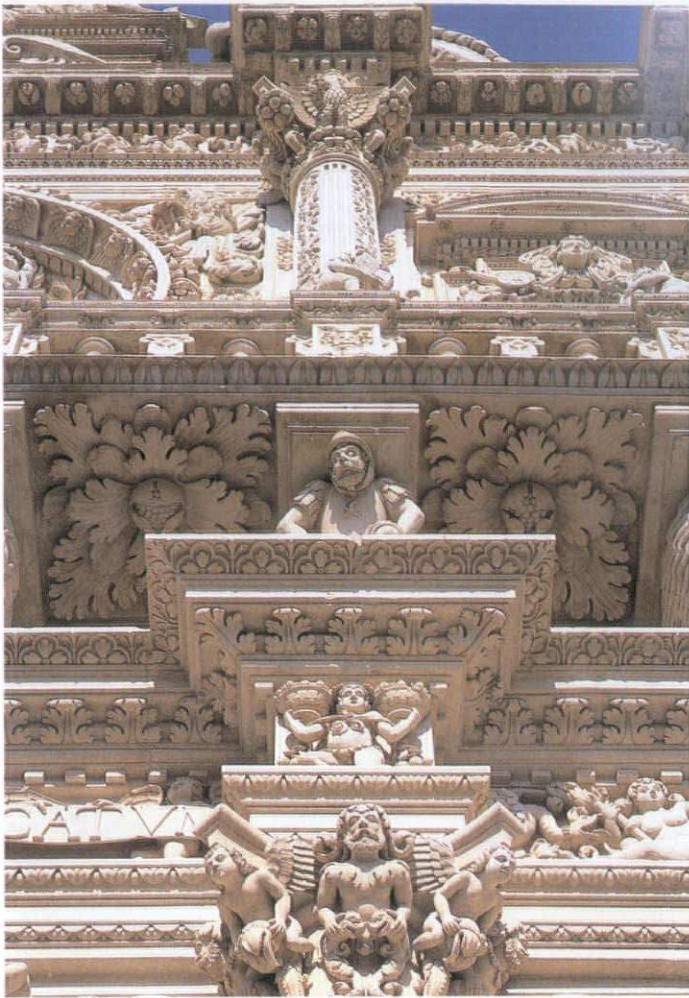
建築：G.ツィンバーロ+C.ペンナ（ファサード上部）

S. Croce

Architects: Giuseppe Zimbardo and Cesare Penna (top of the facade)









サンタ・クローチェ聖堂

インテリア：G.リッカルディ

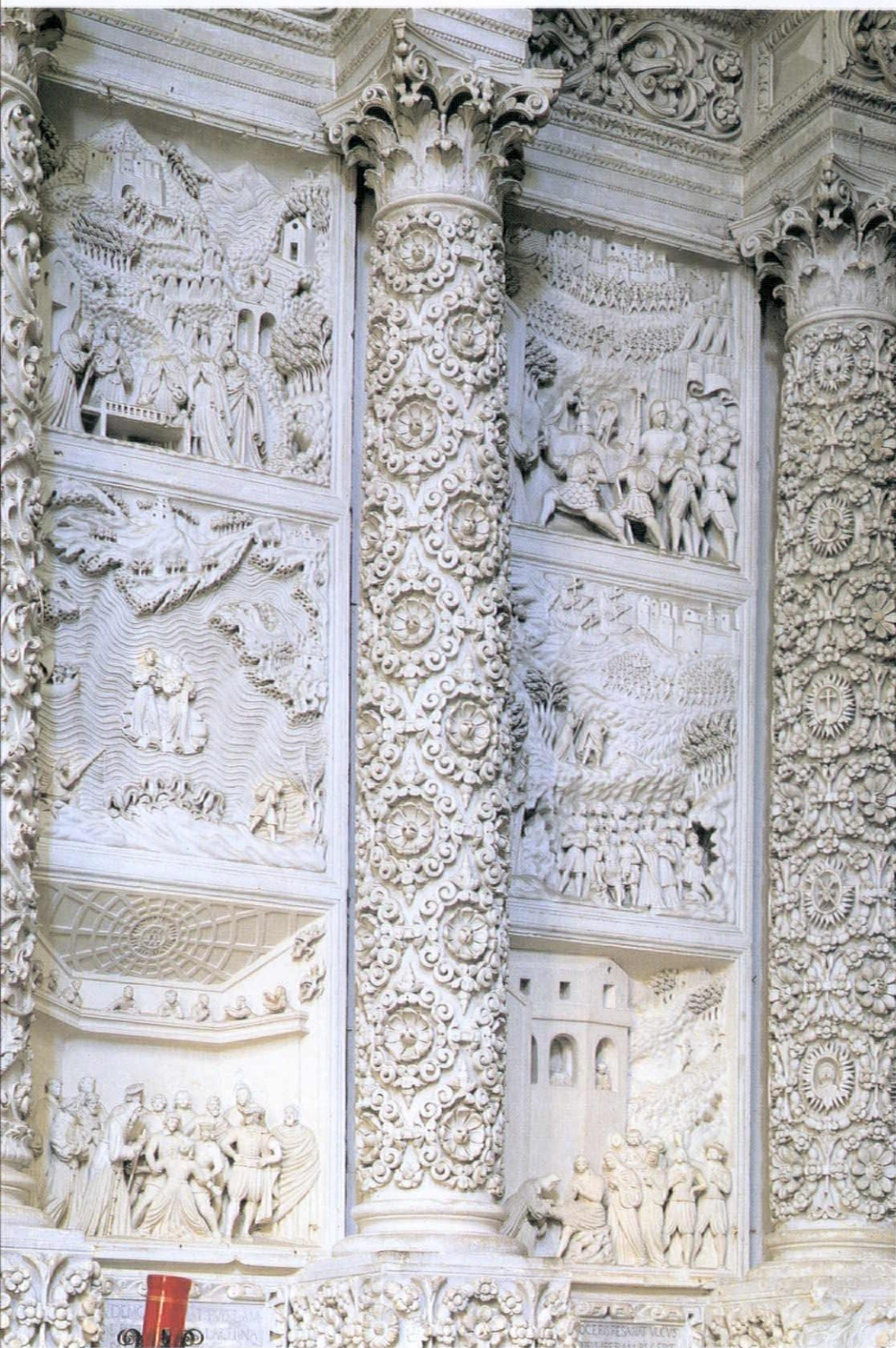
S. Croce

Architects: Gabriele Riccardi (interior)

SD9502

52





サンタ・クローチェ聖堂

インテリア：F.A.ツインバーロ

S. Croce

Architects: Francesco Antonio Zimbalo (interior)

SD9502

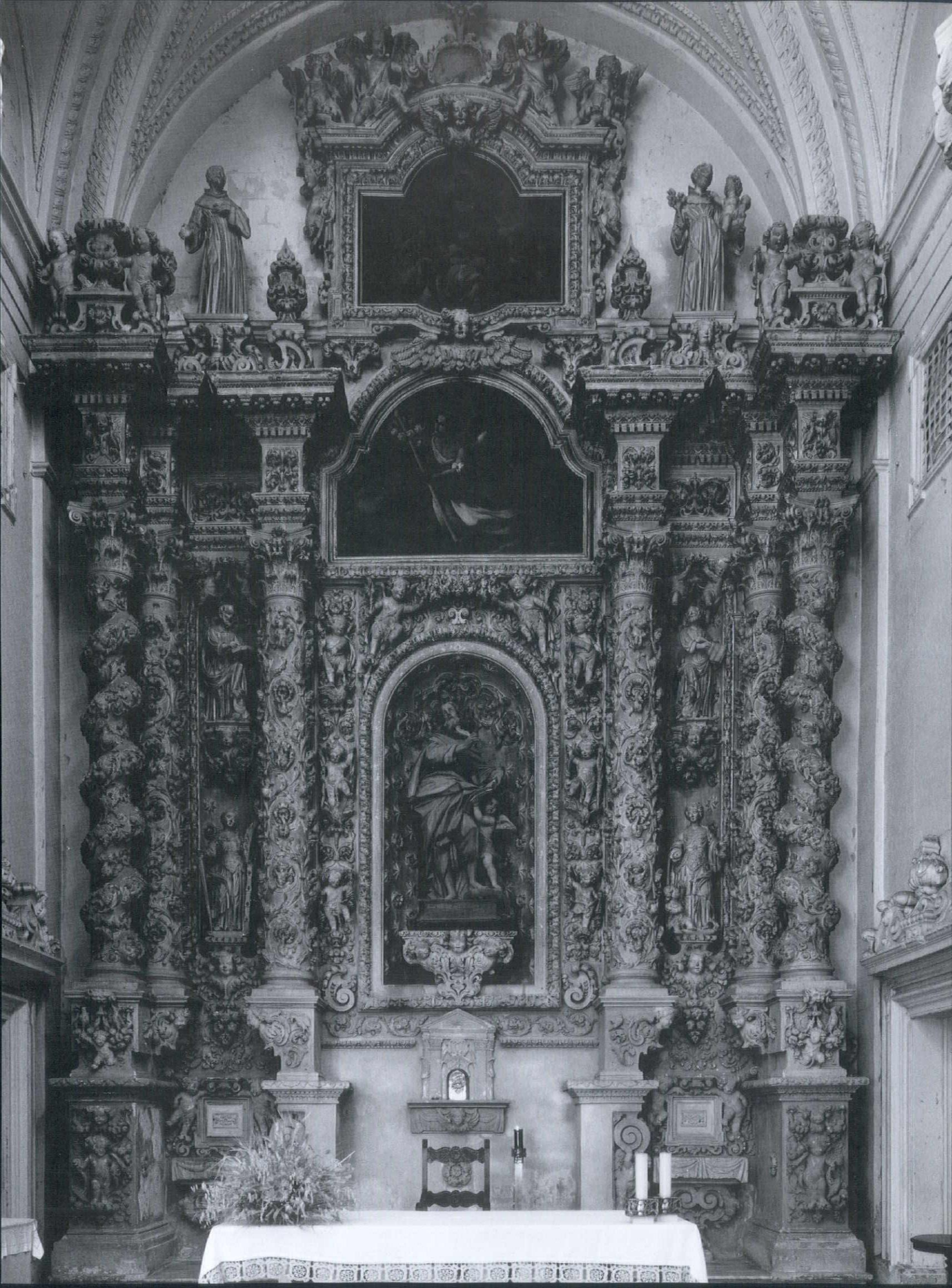
54





サン・マッテオ聖堂

レッツェ、サレント半島 17世紀 建築：A.カルドゥッチ
S. Matteo
Lecce, Salento, 17C Architect: Achille Carducci





パラッツォ・マッレーゼ

レッチェ、サレント半島 18世紀
Palazzo Marrese
Lecce, Salento, 18C





ドウオーモ

レッチェ、サレント半島 17世紀 建築：G.ツインバーロ
Duomo
Lecce, Salento, 17C Architect: Giuseppe Zimbardo



サンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂

レッチェ、サレント半島 18世紀 建築：G.チーノ
 SS. Nicolò e Cataldo
 Lecce, Salento, 18C Architect: Guiseppe Cino



オストゥーニ市街

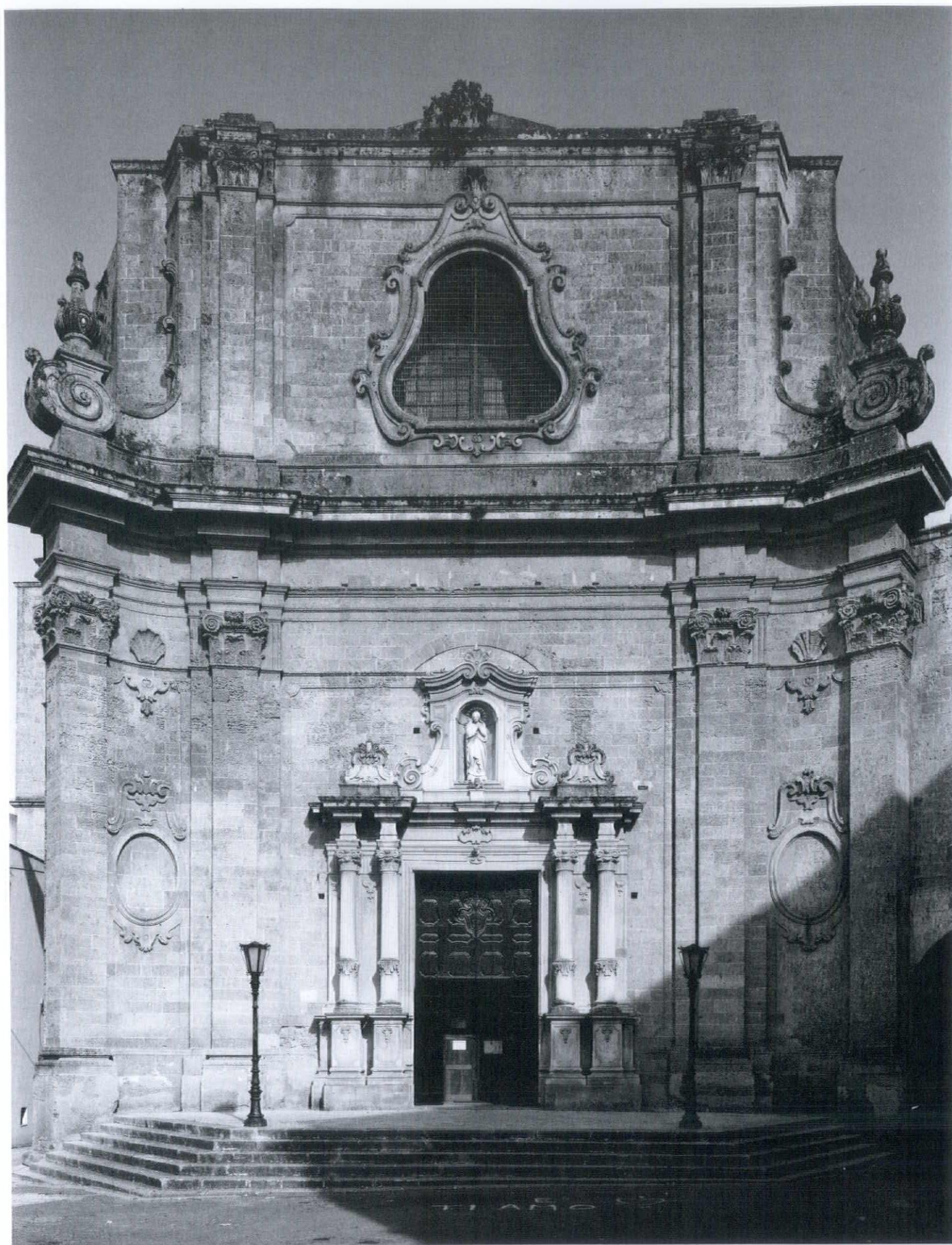
オストゥーニ、サレント半島
Ostuni, Salento





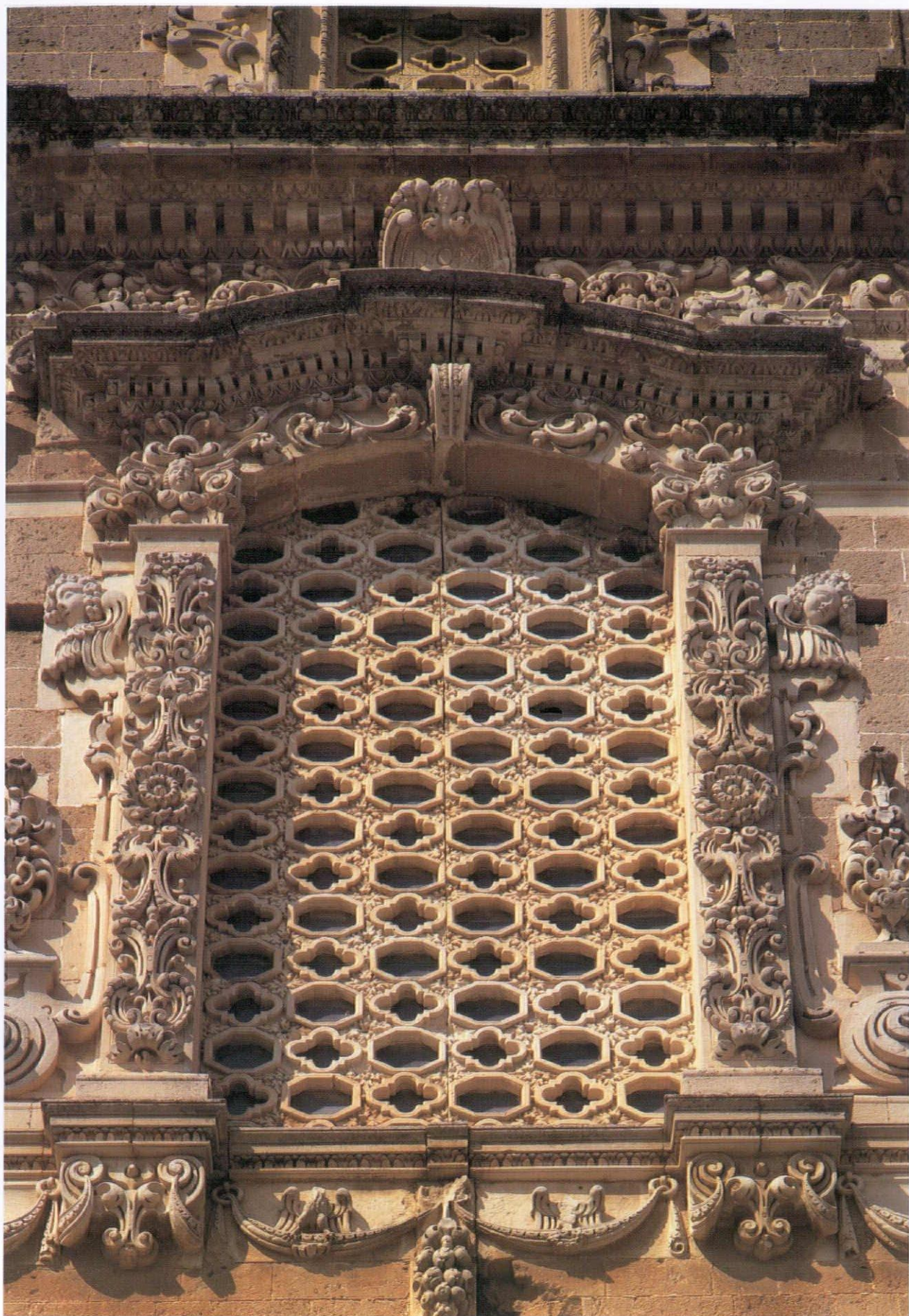
サントンジェロ聖堂

トリカーゼ、サレント半島 17世紀
Chiesa di S. Angelo
Tricase, Salento, 17C



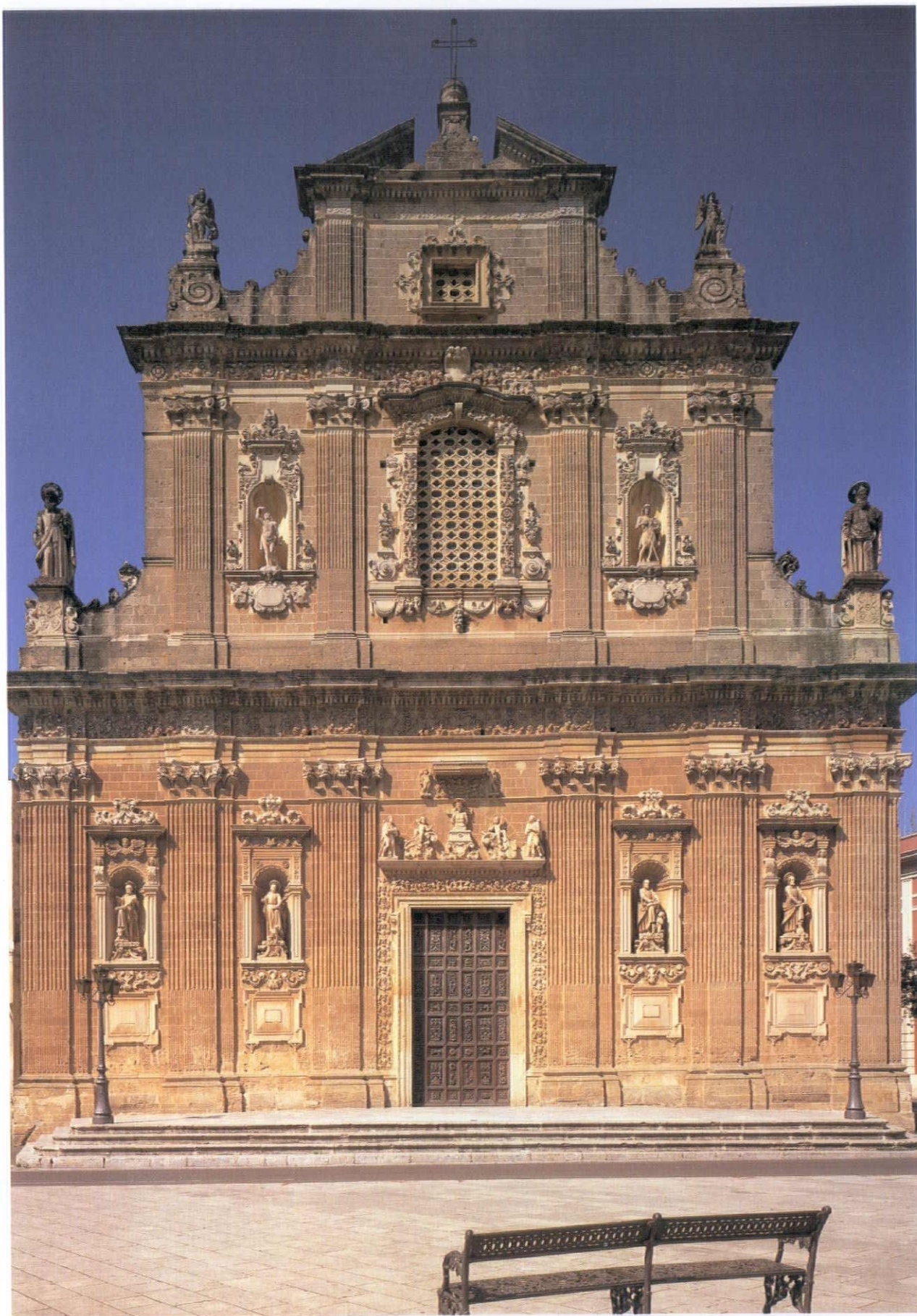
キエーザ・マードレ(聖母教会堂)

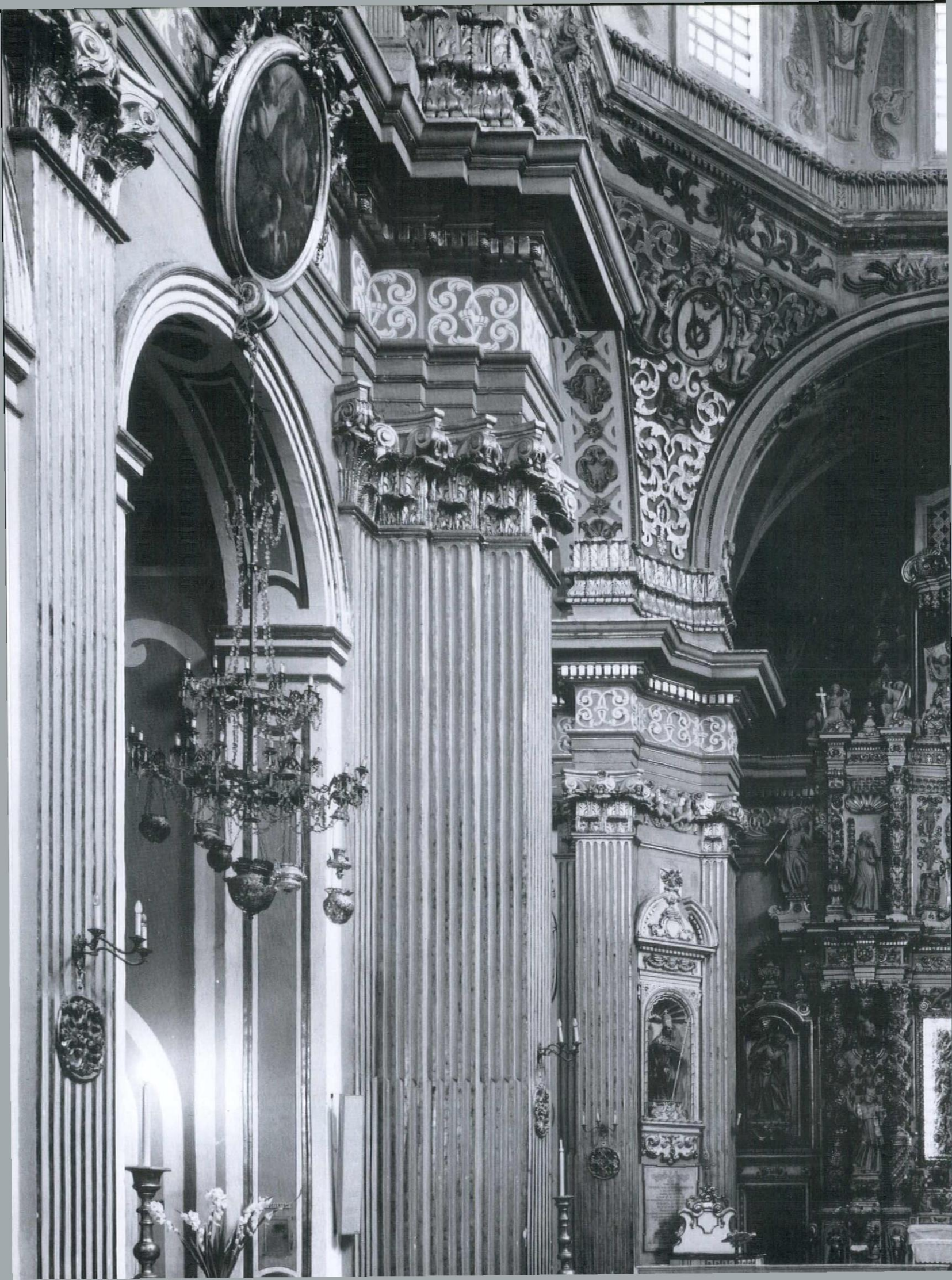
トリカーゼ、サレント半島 18世紀
Chiesa Madre
Tricase, Salento, 18C



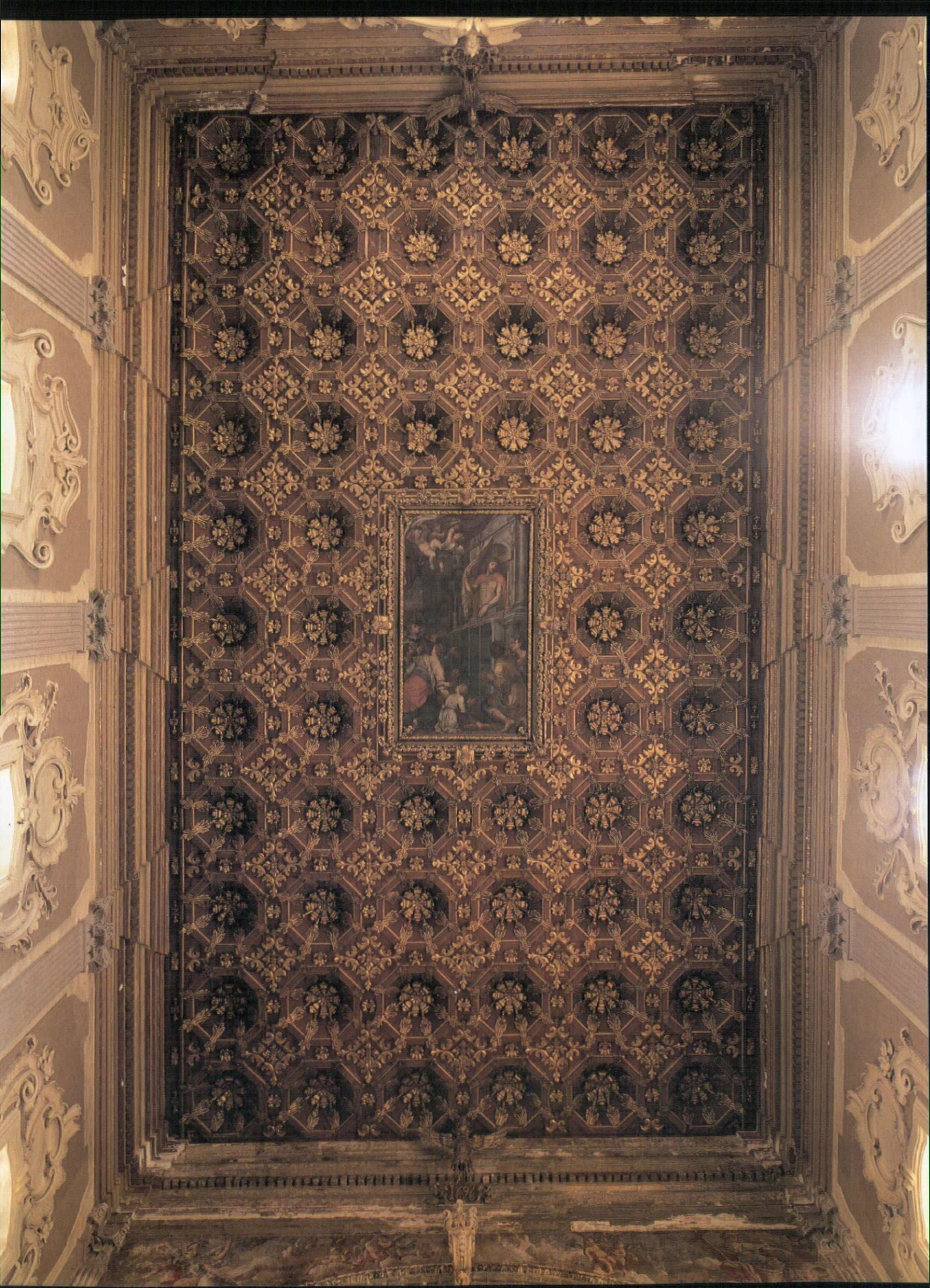
クローチフィッソ聖堂

ガラートネ、サレント半島 17-18世紀 建築：フラ・ニコロ
Santuario del Crocifisso
Galatone, Salento, 17-18C Architect: Fra Nicolò da Lequile

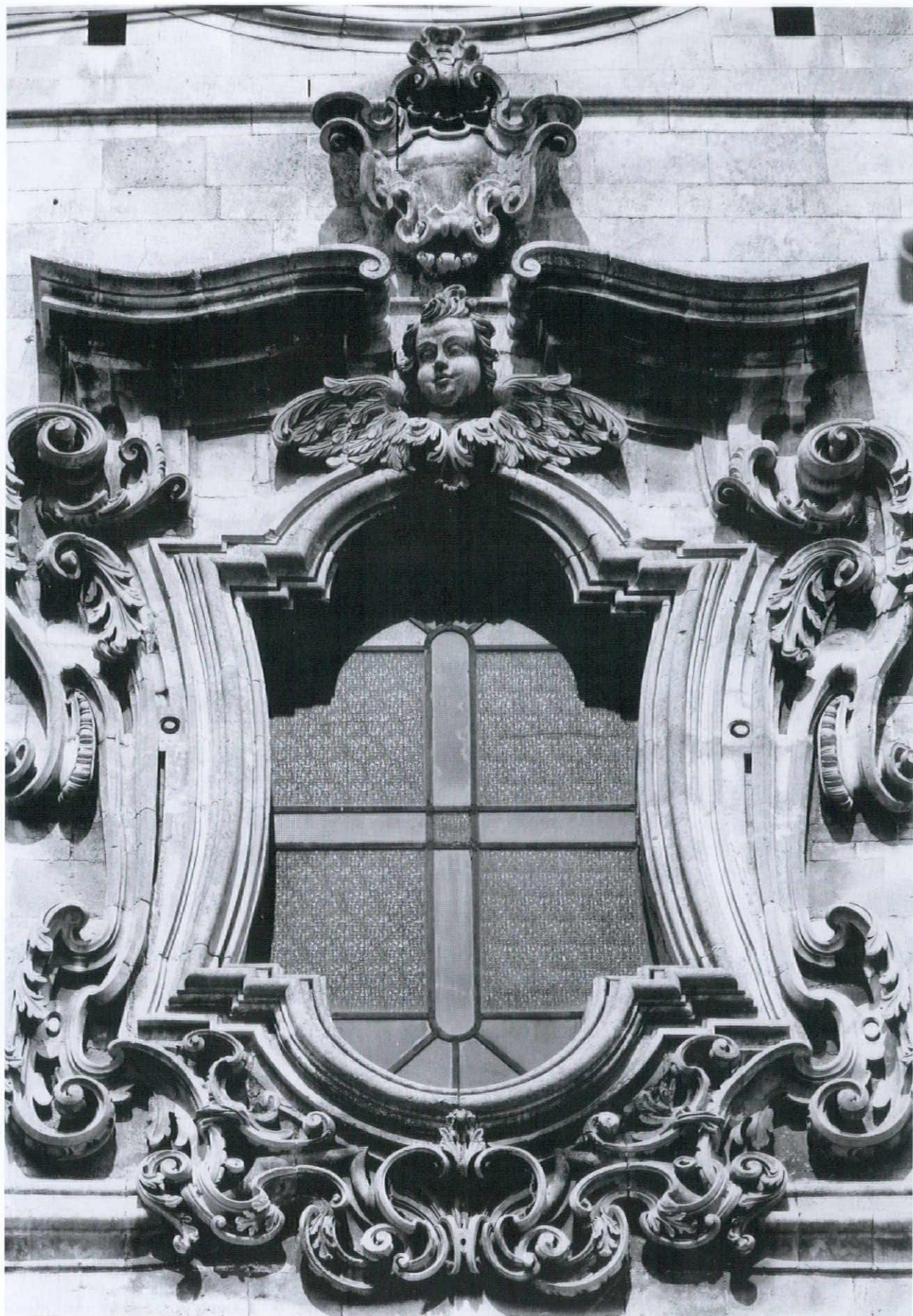












サン・ドメニコ聖堂

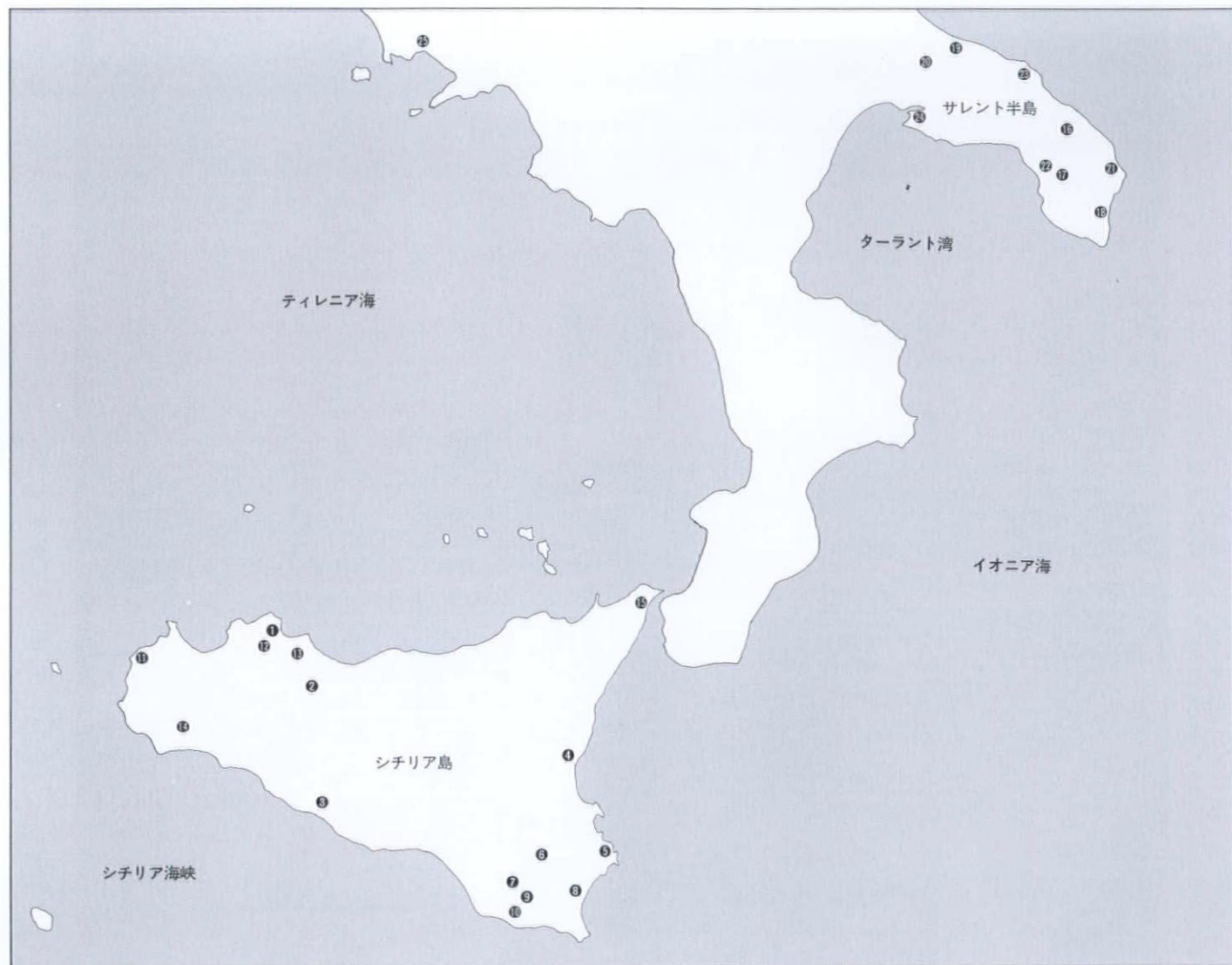
マルティーナ・フランカ、サレント半島 18世紀
S. Domenico
Martina Franca, Salento, 18C



サン・マルティーノ聖堂

マルティーナ・フランカ、サレント半島 18世紀
S. Martino
Martina Franca, Salento, 18C

岡田哲史+長谷川正允



南イタリア地図 (シチリア島とサレント半島)



イタリア周辺地図

シチリア島 Sicilia

- ①パレルモ Palermo
- ②チミンナ Ciminna
- ③アグリジェント Agrigento
- ④カタニア Catania
- ⑤シラクサ Siracusa
- ⑥パラッツォーロ・アクレイデ Palazzolo Acreide
- ⑦ラグーサ・イブラ Ragusa Ibla
- ⑧ノート Noto
- ⑨モーディカ Modica
- ⑩シクリ Scicli
- ⑪トラーパニ Trapani
- ⑫モンレアレ Monreale
- ⑬バゲーリア Bagheria
- ⑭カステルヴェトラノ Castelvetro
- ⑮メッシーナ Messina

プーリア地方 [サレント半島]

- Puglia, Salento
- ⑯レッチェ Lecce
- ⑰ガラートネ Galatone
- ⑱トリカーゼ Tricase
- ⑲オストゥーニ Ostuni
- ⑳マルティーナ・フランカ Martina Franca
- ㉑オトランド Otranto
- ㉒ナルドー Nardò
- ㉓ブリンディシ Brindisi
- ㉔ターラント Taranto
- ㉕ナポリ Napoli

Scicli

シクリ

シクリは、サン・マッテオ、ロザリオ、そしてクローチェと呼ばれる三つの険しい丘陵に抱かれて発展してきた街である。9世紀頃にサラセン帝国の植民地として成長した町は、11世紀のノルマン公領の時代に都市へと発展してゆく。この都市に要塞が築かれたのは14世紀の半ばであった。このときサン・マッテオの丘上に城が築かれ、それとともに都市は丘陵から平地へ向けて拡大する。シクリはそれから16世紀にかけて、中世の都市基盤の上に成長を続けた。しかし1693年の大地震で街は大きな打撃を受ける。震災に喘ぐ街に本格的な再建事業が進められたのは、18世紀のバロック時代に入ってからのものであった。新しい街は、合理的な都市構造に裏づけられながらも、バロック都市に相応しいスペクタクルな劇場さながらの都市へと生まれ変わっていったのである。

シクリは、一般の建築史や美術史には登場しない、いわば無名の芸術家を作らせたバロック芸術で華やいている。そのバロックは、大胆さと優雅さが混然一体となつて不可思議な和音を奏でており、それがこの街の固有性を感じさせるものとなっているのだ。このような印象を強烈に与える建築の代表として、パラッツォ・スパダロ (Palazzo Spadaro, →p20) パラッツォ・ベネヴェンターノ (Palazzo Beneventano, →p5, 21) を挙げるができるだろう。とりわけ後者は、シクリの核ともいえるブザッカ広場 (Piazza Busacca) から、中心街を形成するナツィオナーレ通りに入り、アオスタ通りとの交差点を左に折れたところに悠然と立っている。建物に関する情報としては、18世紀に建設されたこと以外は建築家の名も彫刻家の名も知られてはいない。しかし交差点に屹立する隅柱は、シクリのバロックを世に轟かせた立役者的存在なのである。この隅柱の特徴は、何よりもスケールが巨大であることである。柱の幅は人の背丈ほどもあり、表面に施された装飾は近くからではその全体の輪郭を見失うほどに大柄である。柱身には、薔薇の刺、あるいは甲冑や桶を想わせるような突起状の装飾が彫刻されているため、見方によってはそれをグロテスクと表現する人もいるだろう。この隅柱は、その存在が醸し出す異様な雰囲気からパラッツォに威厳をもたらしているのである。パラッツォ・ベネヴェンターノの隅柱に看取される一種のメトロポリスは、

後期バロックから新古典主義へと移行する過渡期に流行していた。そのもとを辿れば、18世紀半ばのローマでピラネージを中心に集っていたアヴァンギャルドの芸術家たちが、デザインを自由を希求して空想的な建築を創造していた時期にまで遡る。古典主義建築理論を尊重するお決まりのデザインゲームに飽き足らなくなったいわゆる時代の反逆者たちが、空洞化した古典主義の権威をまるで嘲笑するかのよう様々な建築要素を自由なコンポジションで構成し、グロテスクともいえる奇異な建築を考え出していたのである。このシクリアの辺境の地に、どう鼻屑目に見ても、そのアヴァンギャルドの精神が芽生えていたとは思えないが、しかしデザインを自由を享受するというレヴェルでは地方として変わりはない。むしろシクリアの場合、ローマのようなオーセンティックな環境から離れていたことがかえって幸いし、自由な発想が何のためらいもなく現実の建築として形象化されていたにちがいないのだ。シクリの街は、丘から見下ろす風景にもその美しさを堪能することができる。なかでもサン・マルティーノの丘を見渡す遠望は、かつて映画の舞台に使われたこともあるほどの絶景で、粋な雰囲気を感じさせている (→p22, 23)。この丘の急な岩壁には、古代住居のグロッタ (洞窟) が今もなお顔を覗かせており、それを横目に見ながらのぼる狭い坂は、幾度となく曲りながら頂上近くにそびえるサン・マッテオ聖堂へと続いてゆく。11世紀にはすでに建立されていたと伝えられるこの教会堂も、17世紀の震災を機にバロック建築へと変貌していった。ただ残念なことにそのファサードは、完成を見る前の1762年に工事が打ち切られたままの状態まで今日を迎えている。しかし見方を変えれば、そのみすばらしい姿がシクリをいっそう魅惑的な街にしているとも考えられる。未完の美は廃墟の美にも通じるところがあり、サン・マッテオ聖堂の寂しげな風貌は、その上に横たわる中世の城跡の風景に溶け込んでゆくようにも見えてくる。この哀愁を誘う静謐なドラマが、感傷に咽ぶ人々をまるで映画の主人公のようにシクリへと引き入れているのだろう。[SO]



パラッツォ・スパダロ

Ciminna

チミンナ

チミンナは、サンタ・アナニア山の麓にある標高530mの盆地に形成された小さな町である。この辺境の地にも古代のロマンを想わせる片鱗がいくつも顔を覗かせている。紀元前264年、シクリア周辺の海を舞台に名将ハンニバルで有名な海上帝国カルタゴとイタリア最強の帝国ローマとの間でポエニ戦争が始まったが、その戦争で勝利をおさめシクリアに進入したローマ軍の営みの跡が今なお残存しているのである。チミンナの村がドラマティックに変貌したのは11世紀に入ってからのものであった。ノルマン帝国のシクリア制覇をきっかけに、中世都市の骨格が形成されたのである。

チミンナの建築は、中世の面影を残すものが圧倒的に多い。そんななかで16世紀の彫刻家アントネッロ・ガジニ (Antonello Gagini, 1478-1536) とその後継者たちの残した芸術が美しい輝きを放っている。ガジニ家は、そもそもイタリア北部ロンバルディア地方の出身であったため、北方の芸術文化をシクリアに移植したことになるが、これを機にこの島の彫刻芸術は飛躍的に向上したといわれている。ガジニ本人が手掛けた作品としては、サン・ドメニコ聖堂の聖体用祭壇 (1521) とマドンナの彫像 (1532) が見応えあるものとして挙げられるほか、サン・フランチェスコ聖堂の祭壇背後に置かれた大理石製のポリプティク (屏風状の衝立) もまたガジニ派の彫刻家によって創り出された秀作である。ところでこのように16世紀の芸術が著名な町にも、18世紀にはバロックの異彩を放つ建築が誕生した。それが次に紹介するサンタ・マリア・マッダレーナ聖堂である。[SO]



サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂

サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂

S. Maria Maddalena……………p6-7
通称「キエーザ・マードレ」つまり聖母教会堂 (Chiesa Madre) の名で親しまれているこの聖堂は、正式にはサンタ・マリア・マッダレーナ聖堂という。建立されたのは16世紀以前であるが、その正確な年数は定かではなく、当初はゴシック様式の様相を呈していたとされる。このゴシックの名残は、ファサードの上部中央に見られる薔薇窓や玄関上部の尖頭型のベディメントに、他方内部では内陣上部に形成された尖頭型のアーチやドームを支持する構造体であるリブに見てとれる (→p6-7)。しかし17世紀に入ると改修が始められ、これらのゴシック建築を象徴する要素が保存されるかたちで建築全体がバロック様式へと変貌してゆく。ファサードでは、頂部のブロンズ・ベディメントやコーニスの両脇に形成されたコンソール、内部では身廊の壁面から内陣にかけて、天井を除くほとんどすべての面にバロック特有の装飾が施されていったのである。

古来、永久的存在ではあり得ない建築物は、老朽化が激しくなると、あるものは放置され崩壊の運命を辿り、あるいは改修を重ね、その都度新装されて生き長らえる。神や聖人を祭る聖堂の類は後者の場合が圧倒的に多く、余程の事情がないかぎり旧建物を解体してその場に新築計画を施すことはない。さらにこの改修の場合でも (増築の場合は別にして)、聖物を残して建物全部を改修することもあれば、老朽化の激しい部分だけを修復し、新しい部分を既存の部分に連続させることもある。結局のところ、古い建築物は様々な時代の様式 (= デザインの流行) の洗練を受け、時代博物館といった様相を呈する可能性が大きいわけである。この教会堂には、中世ゴシックの要素もあれば、身廊における木造の天井に見られるようにルネサンス・チンクエチエント (15世紀ルネサンス期) の構造を露呈するところもある。しかし何はともあれこの聖堂で眼を見張るのは、身廊から内陣にかけて展開されるバロックであり、これこそが芸術の愛好家をチミンナという辺境へと誘わせる希有な宝物なのだ。

内陣では、壁面から天井のドームにかけて、建築の内皮から溢れ出んばかりの彫像が立ち並ぶ。これらの彫像は、1621年から30年にかけて、シビオーネとフランチェスコのリ・ヴォルジ彫刻家兄弟 (Scipione e Francesco Li Volsi) が手掛けたものと伝えられる。ドームの正面上部中央には、キリストが雲の上から下界を見守る存在として位置し、その真下で聖母マリアが内陣の中央を占めている。アポロ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネなど聖母を取り囲む聖人たちは、今にも歩み出しそうなマドンナの動きに追従して動き始めようとしている。コリント式オーダーの合間に

配列された聖人たちの上には、環状に
 枠取られたメダリオンのなかから天使
 が純真の笑みを浮かべ身を乗り出して
 いる。彫刻はどれひとつとして同じ形
 態のものではなく、同じ表情をもつも
 のない。その視線は聖堂を訪れた人々
 へと満遍なく向けられている。純白の
 スタッコに降り積もる塵は、陰影の刻
 みをよりいっそう際立たせ、350年もの
 長い時間を忘れさせるかのように見る
 者を穏やかな動きのなかへと誘い込む。
 偉大なるキリスト、聖母マリア、そし
 て聖人たちが、天上の一点から下界へ
 と広がりゆくスペクタクル。それらが
 明快なヒエラルキーをもって、一瞬の
 凍らんとばかりの空気の中に見事に表
 現されている。

これらの彫刻に、ローマのベルニーニ
 (Gianlorenzo Bernini, 1598-1680) を
 思い浮かべる人もいるだろう。ところが
 ベルニーニが実際にその影響力を及
 ぼし始めるのは、これらの彫刻が完成
 してからしばらく後のことである。し
 かしながらそのバロックの巨匠がこの
 辺境の地に生まれた見事な彫刻との間
 に何ひとつ脈絡がなかったわけではない。
 ベルニーニの父親であるピエトロ・
 ベルニーニが、1584年からおよそ20年
 もの間、南イタリアのナポリに活動の
 舞台を移していたのである。そのアト
 リエで育った彫刻家が海を渡ってシチ
 リアの大都市パレルモで活躍していた
 可能性を考えれば、そのなかのリ・ヴ
 ォルジ兄弟がパレルモやその周辺の町
 でピエトロ譲りの秀逸な彫刻を制作し
 ていたとしても何の不思議もないだろ
 う。ジャンロレンツォ・ベルニーニは
 1598年、ナポリに生を受け1605年にロ
 マへ移住する。チミンナに産まれた
 バロックの至宝は、バロックの天才が
 ローマで活躍し始める1620年代に、シ
 チリアという辺境の地で、その全貌を
 見せつつあったのである。[SO]

Palermo

パレルモ

シチリア島の北西部に位置するパレル
 モは、シチリア最大の港湾都市(→p16)
 である。この街は、緩やかな弓なりの
 カーブを描くシチリア湾(北のペレ
 グリーノ山から南のザッフェラーノ岬
 まで)と、背後に控える山々の麓に形
 成された後背地との間に形成されてき
 た。パレルモはいつの頃からか「コン
 カ・ドーロ (Conca d'Oro 「黄金の盆
 地」) の名で親しまれるようになるが、
 それは地中海の温暖な気候のもとでた
 わねに実るオレンジやレモンが、この
 後背地を黄金の輝きに染めるからには
 かならない。

パレルモの歴史は、北東アフリカの海
 上帝国カルタゴがシチリアを侵略した
 時代に始まる。紀元前480年のヒメラ
 の海戦で勝利をおさめたカルタゴは、シ
 チリア島の拠点としてこのパレルモの
 地に植民都市を建設したのである。し
 かし紀元前3世紀にローマ帝国の支配
 下になると街は次第に衰退し、結果と
 して主座をイタリア本土により近いシ
 ラクーサへと譲ることになる。紀元5
 世紀から6世紀にかけては、ヴァンダ
 ル王国、東ゴート王国、ビザンチン帝
 国の侵略を立て続けに受けた。ビザン
 ツの支配は3世紀の間続き、街は成長
 の一途を辿ったが、9世紀のはじめに
 地中海制覇を成し遂げたサラセン帝国
 の占領下となる。パレルモが地中海世
 界のメトロポリスへと変貌したのはこ
 の時代であった。10世紀の半ばにはシ

チリアがサラセン帝国の一首長国とな
 り、このときパレルモがこの島の首都
 として君臨することになるのである。
 この時代、進歩的なイスラム文化の洗
 礼のもとパレルモの都市開発は飛躍的
 に進展し、都市構造が有機的に整備さ
 れただけでなく、モスクをはじめ宮殿
 や市場が形成され、市民の社会経済活
 動を助長した。11世紀のノルマン帝国
 の支配下では、今日における旧市街地
 の骨格が策定され、13世紀スペインの
 アラゴン王領となつてからは、聖堂、
 修道院、宮殿の建設とともに都市が再
 整備され、近代都市の構造基盤が形成
 された。

この都市がさらなる変革を迫られたの
 はスペイン王国領となった16世紀のこ
 とである。街に城壁が巡らされたのは
 この時代であった。1571年のレバン
 トの海戦が物語るように、パレルモはサ
 ラセン帝国の勢力を撃退するための一
 大拠点として位置づけられていたため、
 街を防御する要塞の建設を余儀なくさ
 れていたのである。そしてそのなかで
 は17世紀にかけて、街の中心を直交す
 る大通り(今日のヴィットリオ・エマ
 ヌエーレ通りとマクエーダ通り)やピ
 アッツァの建設をはじめとするインフ
 ラストラクチャーの整備拡充計画が実
 現されていった。パレルモにバロック
 建築が出現し始めたのは、この頃であ
 った。16世紀の後半から、マリアーノ・
 スミリーリオ、アンドレーア・ジガン
 ティ、パオロ・アマート、ジャコモ・
 アマートが主要な建築家として活躍し、
 その流行の走りを形成していた。この
 流れを受けた17世紀には、シチリア・
 バロック屈指の彫刻家セルボッタが登
 場し、それとともにパレルモ・バロッ
 クは絶頂期を迎えたのである。[SO]

サンタ・ヰータ聖堂……………p8-10 S. Zita, 17-18C

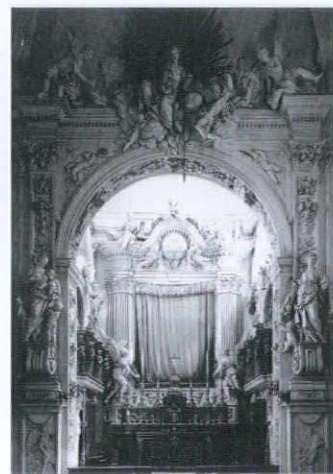
サンタ・ヰータ聖堂は、ラ・カーラ
 と呼ばれる入江から内陸に向けて路地
 を抜けると、ほど遠くない位置にひっ
 そり佇んでいる。この聖堂は元来サン・
 マミリアーノ聖堂の名で呼ばれていた
 が、いつの頃からかサンタ・ヰータ
 (Santa Zita) あるいはサンタ・チータ
 (Santa Cita) 教会堂の名で親しまれる
 ようになり、今日ではこの名前と呼ば
 れることの方が慣例となっている。建
 立は1369年に遡る。しかし1586年から
 1603年にかけて全体に改修工事が施さ
 れ、最後にファサードの修復が完了し
 たのは1781年のことであった。改修計
 画は工事が始まってからおよそ2世紀
 もの時間をかけてゆっくりと行われて
 いたが、その後爆弾の犠牲となり、修
 復作業は今日にも及んでいる。

ラテン十字型の平面構成をもつ聖堂の
 内部は、彫刻の宝庫といっても過言で
 はなく、古いものでは14世紀建立当時
 の木彫りから観賞することができる。
 なかでも16世紀の彫刻家ガジーニが大
 理石で造形した三つの彫刻はこの聖堂
 の絶品に数えられている。そのうちの
 一つは後陣にあり、左側の第二礼拝堂
 に納められたアントーニオ・スクリッ
 タの墓棺。二つめは内陣に形成された
 祭壇部にあり、キリストの降誕や聖ヰ
 ィータの生涯の物語が刻まれた祭壇用
 の衛立と、それを包み込むようにデザ
 インされた拱門。そして最後にプラタ
 モーネの礼拝堂に架かる拱門の彫刻で
 ある。これらはすべて、大理石の表面
 に一点の余白も残さないほどの密度で
 有機的かつ優美な構成を見せているが、
 技術的に見ても大理石をこれほどまで
 に複雑な形態に操る技術は、16世紀初
 期の当時としては最高水準のものであ
 った。

ガジーニの彫刻は、やがて盛りを迎え
 る「バロック」を占う先駆的存在であ
 った。ガジーニに続いて17世紀にこの
 聖堂で彫刻を担当したピエトロ・デッ
 ラクィラ (Pietro dell'Aquila) は、後
 陣のロザリオ礼拝堂に色大理石とスタ



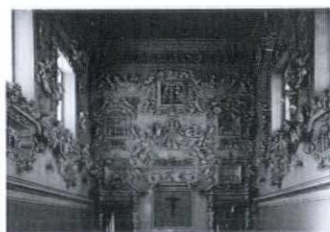
多くの様式の建築が並ぶパレルモの街



サン・ロレンツォ聖堂のオラトリオ
 /G.セルボッタ

ッコを使用し、壁面から天井面にかけて余すところなく色彩豊かな彫刻を完成させた(→p8, 9)。ロザリオの三奥義(Misteri)をものに見事に表現したこの芸術を目の当たりにすれば、カトリックの信者ならずとも震撼せずにはいられないだろう。それほどまでに迫力を感じさせる芸術なのだ。プット(子供の天使)たちの優雅な戯れ。しかもそれは意味や役割を弁えた有機的な戯れである。ヴォールト天井を埋め尽くす巨大な装飾の轟きと壁面を彩る緻密な、しかしそれでいて要所を捉えた装飾による物語の表現力。そんなにも豊かな戯れが、様々なスケールをもって一つの世界を創りあげている。

ところで、サンタ・ツィータ聖堂がシチリア・バロックの名所としてその名を知られるようになったのにはもう一つの理由がある。この聖堂に付属するオラトリオ、すなわち小礼拝堂にこの地方を代表する天才彫刻家の粋を見ることができからなのである。この彫刻家は、その名をジャコモ・セルポッタ(Giacomo Serpotta, 1656-1732)といい、シチリア・バロックの彫刻にローマ・バロック譲りの新風を与えたことで知られている。セルポッタはもっぱらスタッコを使用して、聖堂やその付属施設の壁面に優美な彫刻を施した。それはあたかも縫目のない純白の布が、その位置をあらかじめ知らされていたかのように生命をもって膨れ浮き上がり、かたちをもって踊り始めたかのような軽やかな動きと華やかな雰囲気漂わせる(→p10)。この作風は18世紀の後期に栄えるロココを予見するものであったといえるだろう。セルポッタがパレルモで活躍したのは1710年代から20年代にかけてのことであり、この聖堂のオラトリオの他にも、サン・ドメニコ聖堂やサンタ・カテリーナ・アッロヴェッラ聖堂のロザリオ礼拝堂、サン・ロレンツォ聖堂のオラトリオ、サン・フランチェスコ・ダッシー聖堂、サン・アグスティーノ聖堂、ステインマーテ教会堂などに数々の名作を残している。[SO]



サンタ・ツィータ聖堂、内部



ノート市街

Noto

ノート

イオニア海を一望できる街ノートは、今日、バロックに彩られる美しい小都市として知られているが、この平穏に思える街も過去には暗い歴史があった。1693年1月11日にシチリアを襲った大地震で街は壊滅的な打撃を受け、伝染病が流行し、民衆の多数が街を離れてゆくといった悲劇に見舞われたのである。震災で失われた街は、一度はジュゼッペ・ランツァ公爵の指揮下で再建が試みられた。しかしスペインからの示唆によりランツァ公爵はその事業を諦め、まったく新しい土地に新都市の建設を決断する。1702年、アルヴェリーアの丘にあった旧来のノートは放棄され、南東約16kmの海寄りにあるメティの丘上が新しい敷地として選ばれた。イオニア海を見下ろすノートは、こうして実現された18世紀の都市だったのである。

新都市ノートの建設事業には、軍事技術者カルロス・デ・グルネンベルグの監督のもと、イエズス会士のフラ・アンジェリ・イタリアと数学者のジョヴァンニ・パッティスタ・ランドリーナ・サローニアが選出された。この都市計画で興味深いのは、参考資料として建築家ヴィンチェンツォ・スカモッツィ(Vincenzo Scamozzi, 1522-1616)の著書『普遍的建築の理念 *L'idea della architettura universale*』(1615年出版)が使用されていたことである。つまりノートは、ルネサンスの理想都市論を反映する街なのだ。丘上に広がるわずか1キロ四方の小さな街は、格子状の秩序ある街区で構成された都市へと変身した。この街がバロック様式を受け入れたのは、計画の進められた時代が18世紀の初頭であり、図らずもそれを受け入れる宗教的社会的背景と街の財力、そしてロザリオ・ガリアルディやヴィンチェンツォ・シナトラといった力量をもった建築家がシチリアの地で育っていたからにはかならない。イタリアを都市計画家と呼ぶならば、その計画実現に向けて尽力した建築家はガリアルディであった。ガリアルディは、ノートを建設した英雄的建築家だったのである。[SO]



ノート市街図

サンタ・キアラ聖堂……………p11
S. Chiara, 18C
街の中心からヴィットリオ・エマヌエーレ通りを東寄りに歩いてゆくと、カッポーニ通りとの交差点で小さな聖堂に出会う。外見は、ばやばやしていると見過ごしてしまいそうなどこにでもある風貌であるが、これこそノートで最高級のバロック建築と名高いサンタ・キアラ聖堂である。この聖堂のバロックの旨みは、内部を経験しないかぎり味わえない。扉を開けた直後の最初の印象は、目の醒めるようなどこかしら甘美な白の世界で、一瞬のうちに膨張してしまったかのような不思議な空気を感じさせる。そのうち次第に眼が慣れてくると、膨らんでいた空気が刻一刻と縮み始める。装飾の隅々にまで眼を遣る余裕ができるのは、しばらく立ちすくんでからのことである。

聖堂の内部をデザインしたのはシラクサ出身の建築家ロザリオ・ガリアルディ(Rosario Gagliardi, 1726-1770)である。その空間の雰囲気は、ローマ・バロック期の巨匠フランチェスコ・ボッロミーニの建築を思わせる。ガリアルディは、この聖堂の平面形態に長楕円形を採用したが、そのヒントもボッロミーニにあったにちがいない。なかでもその影響を如実に語る部分はクロス・ヴォールト天井の構造形式である。ボッロミーニは1630年代にこの形式を意識し始め、ローマのサン・フィリッポ・ネーリ教会堂のオラトリオで装飾的に応用した。そしてそれを1662年に完成を見たコレッジ・ディ・プロバンガ・フィーデの教会堂でさらに発展させ、構造的にも機能するかたちで実現させたのである。ガリアルディはその構造システムを熟知していたであろう。サンタ・キアラ聖堂内部の四隅の柱の納まりと、上部で楕円窓を介して展開してゆくクロス・リブの豪快さは、まさにボッロミニスクそのものである。

しかしその一方で、ガリアルディの建築にも幾ばくかの進化が認められる。それは柱を壁から遊離させ、聖堂の内側に独立させるデザインを実現させている点である。この柱はもちろん単なる装飾ではなく、構造体として重要な役割を果たしている。この構造要素は、天井や壁面の荷重を壁面に一体化された柱に集中させるのではなく、その荷重を分担する役割を担っているのである。ボッロミーニの建築にひたすら凍れる空間を感じ、このガリアルディの建築にホッと息をつかせる何かを感じるのは、遊離する柱によって生起する空間の裏が原因なのかもしれない。ボッロミーニはベルニーニと同時代にバロックの盛期を生きたため、いつの頃から不幸にもバロック建築の巨匠と謳われるようになってしまったが、彼の建築はいわゆる「バロック」という一言では括り切れない魅力を秘めている。ボッロミーニの建築は波打つ曲線

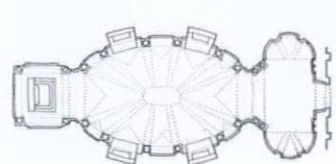
を忘れさせるほどに端正なのだ。その根柢は決して容易に語り切れるものではないが、おそらくはゴシック譲りの厳格な幾何学に裏づけられた建築理念が、彼のデザインの根柢を支配していたからにちがいない。ガリアルディのように聖堂内部で柱を壁面から遊離させる手法は、ローマのサンタ・マリア・イン・カンピテリ聖堂(17世紀後半にローマで活躍した建築家カルロ・ライナルディの作品)に先例がないわけではないが、ボッロミーニの建築を踏まえた上で、そのなかに秘められているゴシック性をポジティブに顕在化させたという意味で、一つの進化を認めることができるように思われる。

ガリアルディがシチリアで活躍したのは1720年代から70年代にかけてであったが、この時期のローマでは、アカデミーの建築教育においてもボッロミーニの建築が再評価され、その動きが賛沢を極めたバロック様式を時代から遠ざける契機となっていた。現実にはその変遷過程では、権威的な古典主義理論に再認識を促しながら合理主義的な建築を標榜する理論的背景が育まれつつあり、やがて新古典主義という名で括られる建築を輩出する基盤を形成していた。新古典主義理論家の騎士フランチェスコ・ミルツィアが活躍する18世紀後半には、ボッロミーニの建築はすでに過去の建築として忌避される環境にあった(もちろん、ミルツィアの芸術に対する個人的趣向も手伝っていたにちがいない)が、ガリアルディはちょうどこの流れに至る過渡期に、ボッロミーニ譲りのロココ建築を実現させていた。サンタ・キアラ聖堂が落成を終えたのは1748年のことであった。[SO]

ドゥオーモ……………p14-15 Duomo, 18C

通称ドゥオーモと呼ばれるこの聖堂は、正式にはキエーザ・マードレという。ノートのドゥオーモとの出会いはことのほかドラマティックである。ヴィットリオ・エマヌエーレ通りに沿って歩を進めてゆくと、市民広場(Piazza del Municipio)のところで急に視界が開けるが、その次の瞬間に悠然と屹立するファサードと巨大な階段が眼に飛び込んでくる。これがこの街の大聖堂であり、パラッツォ・ドゥチェツィオ(Palazzo Ducezio, 今日では市庁舎として使われている)に対峙する構図で大階段の上に鎮座している。

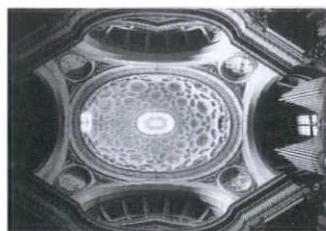
バロックとテアトロが不可分の関係に



サンタ・キアラ聖堂、平面図

あることは改めていうまでもないが、この聖堂を眼の前になると、そのあまりに当てはまりすぎる光景に思わずため息をついてしまう。聖堂が生活の舞台となっているイタリアでは、当然のことながら市民社会を物語るオペラにもしばしば背景として聖堂を使用するようであるが（一昨年ローマのカラカラ浴場で催されたマスカーニのオペラ『田舎騎士道』でもまさにそうだった）、このドゥオーモの前に立つと、今にも演者が扉を開けて流れ出てきそうな、そんな幻想にかられてしまうのだ。ノートという名のテアトロにあって、市民広場に作られた幅広の巨大な階段は紛れもなくステージであり、ドゥオーモのファサードは確固たる背景としてその役割を果たしている。この場合、バラツツォ・ドゥチェツィオは、ロイヤルボックスなみの観客席ということになるだろうか。ドゥオーモは宗教上この街の最も重要な存在、つまり主役であるが、街全体を劇場と見立てる場合、途端にその主役は背景という名の脇役に転じてしまう。街というステージで役廻りを演じる建築と、建築というステージで役廻りを演じる人間。「バロック」には、そういったコスモロジカルな世界観がスケールを超越して存在しているのだ。

ドゥオーモは1690年代の後半に計画が始まり、1770年頃に完成されたといわれているが、建設に関わった建築家は知られていない。しかしいずれにせよファサードのデザインを見るにつけ、ローマ・バロックの伝統を継承するものであることにはちがいない。たとえば、ヴィニョーラが考案していたイル・ジェズ聖堂のファサード（現実にはヴィニョーラを引き継いだジャコモ・デッラ・ポルタが実現させた）に始まり、カルロ・マデルノ（サン・ピエトロ大聖堂のファサードを担当した建築家）のサンタ・スザンナ聖堂のファサードに代表されるバロック初期の偉業は、アカデミズムを通してカルロ・フォンターナにまで継承され18世紀を迎えていた。ノートのドゥオーモのファサードを眼にして最初に想い浮べたのは、18世紀の巨匠フィリッポ・ユヴァッタ（Filippo Juvarra）が残した膨大なスケッチに眠る、聖堂のファサードのデザインであった。しかしこれも、メッシーナ出身のユヴァッタがはるばるローマへと修業に出かけ、フォンターナの門下に迎え入れられていたことを考えれば当然のことなのかもしれない。[SO]



サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ教会堂／F.ポッロミニ

SD9502
78

Agrigento

アグリジェント

アグリジェントの名は、ギリシア語のアクラガス（Akragas）に由来する。つまりアグリジェントはギリシアの植民地として誕生した街なのである。ギリシア人は紀元前6世紀頃までにロードス島などからシチリア島へ移り定住していたが、そのうちシチリア島南端の街ゲラを支配していたギリシア移民が、紀元前580年に建設した都市がアクラガスであった。ヴァッレ・ディ・テンプリと呼ばれる谷に、十にも及ぶギリシア神殿を建設していたことは（今日ではそのうちの九つを見ることが出来る）、当時のポリスの繁栄ぶりを物語っている。しかしこの都市も紀元前3世紀を迎えてからはローマ人の手に落ちる。ローマ人はアクラガスをラテン語でアグリゲントゥム（Agrigentum）と呼んでいたため、直接的にはそれが変化して今日の地名に変化したのである。

アグリジェントの都市が今日の骨格に成長するきっかけは、14世紀にこの街の二大有力貴族として台頭したキアラモンテ家とモンタペルト家の力によるところが大きい。とりわけキアラモンテ家は、要塞建設のほかサン・フランチェスコ聖堂をはじめとするいくつもの聖堂建立に投資していた。この時代に形成された都市基盤は、次世紀以降の都市発展に拍車をかけることになるが、しかし街が潤いに満ちるには、18世紀の司教ロレンツォ・ジョエニ（Lorenzo Gioeni）の経済政策（1730-54）を待つしかなかった。ジョエニ司教の社会改革はアグリジェントの財政を充実させ、それによってもたらされた余裕が新しい芸術の発展に寄与していたのである。芸術に造詣の深い人物としても知られる司教はその保護に乗り出すと同時に、街の芸術発展を標榜してジョエニノ芸術工芸協会を設立し、職人の育成にも尽力した。アグリジェントにおけるバロック芸術の発展は、この司教の存在抜きには語れないものだったのである。[SO]



ギリシア神殿

サント・スピリト聖堂……p11、12 S. Spirito, 17-18C

サント・スピリト聖堂は、13世紀のフェデリコ・キアラモンテ公爵の妻マルケジーア・ブレフォーリオが巨額の寄付を投じて建立されたと伝えられる。凝灰石で作られたファサードは、ゴシック様式の尖頭型ペディメントをもつ玄関とその上部に穿たれた薔薇窓を保存したまま17世紀から18世紀にかけて改修され、今ではゴシックとバロックが混在するものとなっている。シチリアに数あるバロック建築のなかで、この街のサント・スピリト聖堂が名所中の名所に数えられる理由は、聖堂の建築そのものが特異な存在であるからではない。結論を先に述べてしまえば、シチリア・バロックを代表する彫刻家ジャコモ・セルボッタが内装を手掛けているからである。

聖堂の内部へと歩を進めると、すぐさま主祭壇の装飾が眼に飛び込んでくる。セルボッタの彫刻である。最初の瞬間、それはまるで純白の綿が天井から降り注いでいるような印象を受ける。建築という枠組みを超越して彫刻という装飾がたった今空気を舞い始めたといった光景なのだ。内陣の正面上部に半円形状に形成されたアルコ・サント（＝聖なるアーチ）は、頂点に両手を広げて立ち上がるイエス・キリストを戴いている。キリストのまわりには天使が集い、その背景に雲が漂う。アルコ・サントは天界と下界の結界を意味する存在である。天上のキリストは鳩という精霊となって下界へと現れる。キリストの足元からアルコ・サントを横断して垂れ下がる雲のリング、そしてリングの下端ではばたく鳩がそれを象徴している。鳩から拡散する光を背景に、キリストの降誕、公現、神殿への奉獻、そしてエジプトへの避難の物語が刻まれる。この舞うように流れ、流れるように優美な光景が、主祭壇の背景に一つの世界を与えているのである。

セルボッタは多くの場合、スタッコを材料として壁面に彫刻を施していたが、そのスタッコ・ワークの技術はシチリア・バロックの最高峰を極めたといわれている。この彫刻家がローマ・バロックの影響下にあったことは疑いの余地もないが、しかし彫像に見られる表情の豊かさには、ローマの逸品に優るとも劣らないほどの力量が窺える。筋肉に連動する皮膚の微妙な動きが同じ顔のなかに幾通りもの笑みを作り出すように、セルボッタの彫刻には人間味溢れるある種の機微が感じられ、見る者を楽しませてくれるのだ。[SO]



サント・スピリト聖堂

Modica

モーディカ

モーディカは、ラグーサとシクリの中間に位置し、東西南北に控える400m級の四つの山に囲まれた盆地の街である。標高の最も低いところにはX字状のかたちで幅広の通りが形成されており、場所によってはピアッツァとして街中に溜りの空間を提供しているところもある。モーディカの名の由来は、この土地を支配していたギリシア移民の町がモティカ（Motyka）と呼ばれていたことにある。しかし紀元前3世紀以降は、シチリアを支配したローマ帝国の植民地となり、やがてキリスト教が浸透する。モーディカの街が繁栄を見たのは9世紀半ばのサラセン帝国の植民地時代であった。このアラブの民族文明のもとで導入された進歩的な灌漑農業は商業の発展を促し、街は飛躍的に拡充していった。その後は、封建体制に染まった11世紀のノルマン公領時代を経て、15世紀のアルゴン王国の統治下に入る。この時代のモーディカは、キアラモンテ家やカブレラ家をはじめとするシチリア屈指の貴族を輩出するほどの有力な街として、その揺るぎない地位を確立した。

モーディカの街がバロック建築で華やぐきっかけは、やはり1693年の大地震にあった。18世紀に入ってから本格的に進められた都市の再建事業は、富裕貴族の投資のもとで、過去の歴史に美しい上塗りを施していたのである。たとえばバロックの聖堂一つをとってみても、シチリア・バロックの彫刻の父アントネッロ・ガジーニの大理石彫刻を納めたキエーザ・デル・カルミネ（カルミネ教会堂）、サクラメント礼拝堂（実際はカブレラ家の礼拝堂）や主祭壇の「アッスンタ（＝昇天する聖母マリア）」（彫刻家ジョヴァンニ・パッティスタ・ラグッツィ作、1776年）で有名なサンタ・マリア・ディ・ベトレム聖堂、舞台セットのような前階段をもつサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂、そしてカタルーニャ・ゴシックの玄関装飾が特徴的なサンタ・マリア・デル・ジェズ聖堂などを挙げるができる。しかし全体的に見てモーディカのバロック芸術は、シチリアの他の都市に比べれば、どちらかといえば地味な印象を拭えない。そんななかで次に紹介するサン・ジョルジョ聖堂は、輝かしく異彩を放つ逸材といえるだろう。[SO]

モーディカのサン・ジョルジョ聖堂の歴史は古く、その建立は12世紀にまで遡る。しかし1613年と1693年の二度にわたる地震により倒壊と修復を繰り返し、実際に華々しい聖堂として知られるようになったのは18世紀の改修を終えてからであった。スペインのフィリッポ5世が多額の資金援助を行ったことが契機となり、当時、シチリアの南部地方を中心に活躍していた建築家ロザリオ・ガリアルディが聖堂の再建に乗り出したのである。

少なくともシチリアの場合、山間の盆地に形成されている都市では、その街を代表する大きな聖堂は前面に巨大な階段を従えていることが多い。都市と建築との間に見られるこうした関係が、都市をテアトロとみなすバロック期に確立されたことは疑いの余地もないが、そこに地震などの天災が大きなモメントとして働いていたことは興味深い。一般的に中世までに形成されていた街や村落は、自然発生的な路地が迷路のように幅狭する都市構造をもつことで知られている。ところが建築物そのものが物理的に堅固であることも手伝って、余程の天変地異でもないかぎり、その都市構造が後の時代に激変することはない。ノートの街はそれが完全なカタチで劇的に変貌した好例といえるが、モーディカの街はそこまでは至らなかった。しかし18世紀、つまりバロックの時代に相応しい演出が、街中のいくつかの拠点で実施されていたのであり、このサン・ジョルジョ聖堂の階段はそれを代表する計画の一つだったのである。

聖堂のファサードは、ガリアルディ様式といっても過言ではないほどに、この建築家特有の形式を示している。最大の特徴は、構造が三層の構成となっている点である。この普通ではない仕

掛け、建築そのものに屹然とした垂直性を与えている。ここでいう普通とは、それまで古典主義のなかで培われてきた教義（理論とはいっても慣習に基づくものがほとんどであった）に基づくものという意味であるが、そのなかで聖堂のファサードは二層の構造で構成されるのが慣例とされ、その範疇における美しさが考えられ競われてきた。それにもかかわらずガリアルディはファサードを三層構造とし、頂部にはさらに小さなドーム（通称オニオン・ドームと呼ばれている）をつけ足そうとしていたのである。

過去に地震が多発したシチリアでこれほどまで高い建築物を提案するためには、それなりの構造的根拠が必要になってくる。ガリアルディはまず建物を前後に揺さぶる応力に対処するため、ファサードの表側の壁面全体を凸凹面状に膨らませ、建物そのものに厚みをもたせている。次に塔状の三層分を、隅に配置した通し柱の群柱で固めている。そして最後に第二層の付け根部分を堅固に繋ぐため、構造補強材として機能する渦巻状のスクロールを形成しているのである。ローマ・バロックの洗礼を受けていたガリアルディは、おそらくその群柱のモチーフをマルティノ・ロンギ(Martino Longhi, 1602-60)の手法に求めているにちがいない。ロンギの代表作で今日我々に馴染み深いのはサンティ・ヴィンチェンツォ・エド・アナタージョ聖堂で、ローマのトレヴィの泉を訪れば、少し入り込んだコーナーにその姿を見ることができる。他方、壁面を凸凹線状に膨らませる手法は、ビエトロ・ダ・コルトーナのサンティ・マルティーナ・エ・ルーカ聖堂やサンタ・マリア・デッラ・バーチェ聖堂にデザインの源流を辿ることができる。しかしロンギおよびダ・コルトーナのいずれの場合もファサードは二層の構成でできているため、テクトニッ

ク・クオリティを追求したデザインというよりは、明らかに姿見を重視したデザインであったといつてよいだろう。それにひきかえ、ガリアルディの場合は三層の構成をとるため、それらのデザイン要素が直に構造へと跳ね返ってくる。この意味でガリアルディの方が、従来の古典主義建築のモチーフを踏襲しながらも斬新さに満ち溢れ、新しい建築デザインの実現に向けてスリリングな冒険を享受していたかのように感じられる。ガリアルディが試みたこの種の建築は、同時期のローマでは見ることができなかつたばかりか、その他のイタリア主要都市でも例を見ることはなかった。こういったガリアルディの斬新な試行を単なる奇想に帰着させるのはいとも容易なことであるが、それを実現させ、それが今日までに発生した地震にも倒壊することなく存在し続けてきたことを考えれば、その実力は賞賛に値するものといえる。あるいは少し観点をえてみると、ガリアルディが試みた型破りな建築デザインは、ローマという中央ではなくシチリアという地方であったからこそ実現され得たのではなからうかといった推察も浮上する。18世紀の当時、ローマにおける古典主義建築という権威主義的な伝統の重圧はアカデミズムをも硬化させ、創造力豊かな建築は姿を見せなかつた。他方には、ローマを首都とする教皇国家の社会経済状況が劣悪化していた一方で、スペインの統治下にあったシチリアは経済状況も比較的安定しており、芸術文化を育むゆとりがあったことも大きな要因として挙げられるだろう。いずれにせよこの時代、オーセンティックなバロックで賑わったローマのバロック時代は終焉を告げていた。海を隔て遠く離れたシチリアは、その直接的な余波を受けないまま、甘く香しいバロック文化の余韻に酔いしれていたわけである。[SO]

Ragusa Ibla

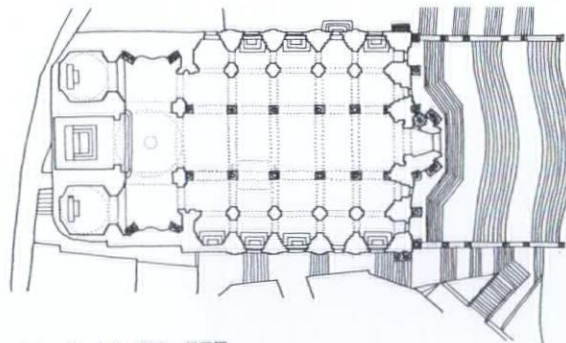
ラグーサ・イブラ

ラグーサは、北にサン・レオナルド、南にサン・ドメニコの断崖をもつ丘上に形成された街で、二つの中心をもつ東西に長い丘陵都市である（→p25）。そのうち「イブラ」と呼ばれる地区は東側にあり、「下のラグーサ」(Ragusa Inferiore)という異名で呼ばれることもある。ラグーサ・イブラは旧市街地であり、ラグーサの悠久の歴史はこのエリアに凝縮されている。

イブラの歴史は紀元前3千年の昔に遡る。その当時から古代人が居住していた洞窟は、今日でも岸壁のいたるところで眼にすることができる。紀元前5世紀頃にギリシアの植民地となり、その支配下で村落は街へと変貌を遂げていった。イブラという名前は、当時この街がヒブラ・ヘライア(Hibla Heraia)と呼ばれていたことに由来する。ヘライア(Heraia)はラテン語のヘラエア(Heraea)から判断して「要塞化されたヒブラ=イブラ」を意味するものと考えられ、この古代都市がすでに城壁で囲まれていたことを想像することができる。その後もカルタゴやローマの支配下に置かれたが、要塞都市として本格的に機能し始めたのは紀元4世紀のビザンチンによる植民地時代であった。中世に入ると都市の領域が拡張される。14世紀には、ノルマン帝国の統治下にあつてモーディカ出身の貴族キアラモンテ家が実権を握り、16世紀にかけて聖堂をはじめとするいくつもの都市施設が建設された。ゴシック建築に代表される中世の都市がバロックに塗り替わられたのは、1693年の大地震後のことである。ラグーサの街はこの震災を境に、今日見られるような二層構造をもち始める。この頃には、イブラを支配してきた旧来の貴族のほか、農業で莫大な富を築いた新しい貴族が台頭しており、両者が都市の再建をかけて論争を始めたのである。前者はイブラの再建が最も重要であると主張したのに対して、後者は新開地をイブラの隣の丘陵に求めた。結局のところ、この両方が同時進行することになり、今日いうところの「下のラグーサ」すなわちラグーサ・イブラと「上のラグーサ」の二つの市街地が現れることになった。地図を一瞥すればわかるとおり、この歴史の差異は都市の構造に如実に現れている。古代以来、積層してきた複雑な都市の歴史を背負うイブラがランダムな街区を示しているのとは対照的に、新しい街はルネサンスの理想都市きながらに厳格な幾何学的秩序に基づいた



サン・ジョルジョ聖堂



サン・ジョルジョ聖堂、平面図



サンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂
/P.ダ・コルトーナ

格子状街区を示している。いずれにせよ18世紀に再建された両者は、バロック都市ラグーサという名のもとに今日を迎えているのである。[SO]

サン・ジョルジョ聖堂……………p24 S. Giorgio, 18C

ラグーサのサン・ジョルジョ聖堂は、地元ではドゥオーモの通称で呼ばれている。この大聖堂もやはり、1693年にシチリア南部を襲った大地震がきっかけで生まれ変わった建物である。しかしその変遷には、少しばかり奇妙なプロセスがあった。聖堂を建て替えるときには、以前あった聖物を尊重し、過去の遺産をその同じ場所に留めて奉納し直すことが多いが、この場合、聖堂のすり替えが行われていた。元来その場所に立っていたサン・ニコロ聖堂が、地震による倒壊とともに立ち退かされ、代わってサン・ジョルジョ聖堂が新築されたのである。

この新しい聖堂の布陣には、もちろんバロック的な都市計画理念が強く働いていた。都市を劇場空間にしつらえるアイデアは、かつてのサン・ニコロ聖堂の位置にドゥオーモの存在を必要としていたのである。地震で打撃を受けるまでのラグーサ・イブラの街は、今日のソラーノ広場(Piazza Solarino)がある場所が中心的役割を担っていた。中世に建設された城がその場所街の核を形成していたからである。しかし地震後に始まった18世紀の都市計画では、その中心が建築から広場へと移行した。今日、ドゥオーモ広場(Piazza Duomo)と呼ばれる東西に細長い広場がそれであり、これを中心にいくつかの主要建築物を有機的に配置することがテーマとなったのである。ところが有機的に繋げるとはいうものの、ラグーサ・イブラの街そのものが起伏の激しい丘陵地にあるため(→p25)、段地をいかに克服するかが最大の問題となった。かつてのサン・ニコロ聖堂が隣接する細長いピアッツァと分断されていたのは、その段差が障害となっていたためである。しかし新しい都市づくりに建築家ガリアルディが登用され、サン・ニコロ聖堂に代わってドゥオーモを建設したとき、段差は見事に克服された。ガリアルディは段地の特性を逆に利用して、そこにモニュメンタルな階段を提案したのである。しかも階段に面する西側にファサードが計画されたため、ピアッツァが活性化されて街に有益な効果を与えただけでなく、聖堂の主祭壇の位置さえも理想とされている東側に計画することができるようになった。結局この階段一つの敷設

が、街とドゥオーモに一石二鳥の効果をもたらしたのである。

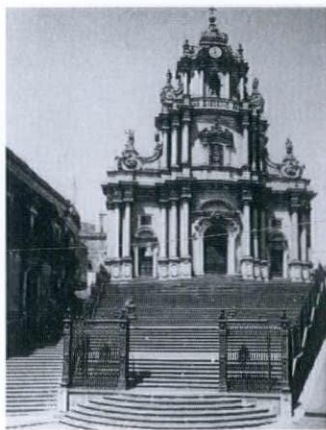
ところでガリアルディが提案した階段は、普通の階段にはない面白味がある。土地の制約がかなり大きな要因となっていることは確かであるが、この階段は下にゆくほど先細りになっているのである。ここで注目したいのはパースペクティブ(遠近法)の効果である。パースペクティブは使い方によっては人間の視覚心理を幻惑させる。ルネサンス期に発案されたこの手段は、バロックの時代に入ってから汎用されるようになり、聖堂の内部に存在しないはずのドームを描くことで、あたかも存在するかのように見せたり、天井に大空を描くことで、建築に無限の広がりをおぼせるような仕掛けが当然のように行われていた。ガリアルディの階段の場合、ドゥオーモとピアッツァとの間の心理的距離が、見る方向によって遠退いたり近づいたりするよう計算されている。ピアッツァからドゥオーモを見上げる場合、逆遠近法効果が働いて、見かけの階段の距離は現実の階段の距離よりもはるかに短く見える。これはピアッツァに向けてドゥオーモが身近な存在であることを強調することでもあり、つまりはキリスト教が民衆(=ピアッツァのメタファ)のそばに在ることをほのめかすという演出なのだ。一方、反対にドゥオーモからピアッツァを見下ろす場合、先細りする階段から受けるその心理的距離は長くなり、ピアッツァは現実よりも遠くに伸びてゆくように見えるはずである。ところが現実には、階段の軸とピアッツァの軸が約30度ズレているため、ドゥオーモからはピアッツァの全貌を見渡すことはできない。これはガリアルディの巧妙な計画に基づくもので、見る者にピアッツァの全貌を取って見せないことによりその広がりを感じさせているのである。

ガリアルディがドゥオーモで行ったデザインは、ファサードからも一瞥してわかるとおり、モーディカのサン・ジョルジョ聖堂(→p19)とほぼ同じといつてよい。これらは同じ地震をきっかけに計画が進められていたわけであるから、建築家はほとんど仕事掛け持ちの状況で震災復興にあわただしい街々を忙しく走り回っていたはずであり、そんななかで同じようなデザインの建物が提案されていたとしても不思議ではない。ガリアルディに特徴的な三層構造のファサードは、両脇に群立する柱が垂直性を強調し、空へ向かって屹立するその強烈なモニュメントがラグーサ・イブラのスカイラインにアクセントを与えている。ガリアルディが計画に関与し始めたのは1738年で、それから1775年にかけて工事が進められた。今日、交差部の上部に見られるクーボラは、ガリアルディの計画を継承した建築家カルメーロ・クトラーノが1820年に完成させたものである。[SO]

Palazzolo Acreide

パラッツォーロ・アクレイデ

標高670mの丘上に位置する街パラッツォーロ・アクレイデは、12世紀に建設された中世都市である。ノルマン公領の時代には、堅固な城壁によって囲われた都市であったといわれるが、今日それは見る影もない。パラッツォーロ・アクレイデの名の由来は、この街の西西北に位置する丘上都市のアクライ(Akraï)にある。アクライは紀元前664年にシラクサの植民都市として建設された経緯があり、シラクサとシチリア島南端の沿岸諸都市との間における内陸の中継地点として発展してきた街であった(現実にはアクライの建設以前から町が存在していたことが知られており、その起源は有史以前にまで遡る。その後、初期キリスト教時代には古代ローマ帝国の支配下であり、当時造られた、奴隷の罪人を罰として働かせた地下の石切場や数々のカタコンベの廃墟は今日でも眼にすることができ)。街の中心がアクライから今日のパラッツォーロ・アクレイデに移ったのは、前者が回教徒の侵略で滅亡に追いやられたからである。もちろんその当時、すでにアクライの人口が増加していたため、旧来の小さな都市では賄いきれなくなっていたことも事実であろう。いずれにせよ新しい都市はアクライに隣接する丘陵地に建設され、その後城郭が張り巡らされた新都市をパラッツォーロと呼ぶようになったのである。パラッツォーロの呼称はパラッツォに由来するものであり、さらにその起源を遡ればラテン語のパラティウム(palatium)へと辿り着く。パラティウムはローマのパラティヌス丘に建設された宮殿を意味していたから、旧都市アクライから見たパラッツォーロの眺望が、あたかもパラティヌスにそびえる宮殿のように見えていたのであろう。確かにイタリアの丘上都市は、遠望したときに巨大な宮殿にも似た一塊の建造物に見えることがしばしばある。新都市パラッツォーロ・アクレイデにキリスト教の聖堂らしき建物が登場したのは1215年のことであった。最初の教会堂はサン・ニコロを献納するキエーザ・マードレ(聖母教会堂)である。今日の地理でいえば、ローマ街道に面するアルド・モーロ広場(Piazza Aldo Moro)の一角にその位置を占めている。パラッツォーロ・アクレイデの建築の風貌が、このキエーザ・マードレを含め、華やかなバロック色に染められたのには理由がある。中世の都市構造に裏づけられたこの街もやはり、1693年



サン・ジョルジョ聖堂



ラグーサ・イブラ市街図

にシチリア南部を襲った大地震によって変貌を余儀なくされたのだ。建物のなかには、バロックへと変貌する途中に息絶えたものもある。ちょうど蛹から変身する途中に息絶えてしまった蝶のように、その全貌を見せることなく化石化した建築がこの街にはいくつか残存している。その代表的な建築が、アルド・モーロ広場からアヌンツィアータ通りを下った途中にある教会堂サンティ・アヌンツィアータである(→p27)。この聖堂はパラッツォ・ロ・アクレイデのなかでも最も古い建築の一つであり、18世紀に改修されたが、そのデザインに携わった建築家は不明である。未完成のファサードはとりわけ有名で、入口に捻れ柱を使用した大胆なデザインと、随所に刻まれた華美な装飾は、陽光の当たり具合によって、過剰さがグロテスクに映ることもあれば、時としてその繊細さが優美に映ることもある。この聖堂の内部は、建立当時の構造がほぼ原型を残したまま今日に至っている。また大理石の象眼細工で作られた主祭壇は、17世紀の逸品の一つに数えられる芸術品である。アルド・モーロ広場に面して側面を見せるサン・パオロ聖堂もまた未完成のファサードをもつ聖堂である(→p28、29)。この聖堂の改修を担当した建築家も不明であるが、しかしファサードの構成(→p29)を見るかぎり、ガリアルディの流れを汲むデザインであることは明らかである。なかでも最も特徴的なのはファサードが三層の構造で構成

されているところであり、左右に群立する柱(左右2本ずつである理由は、聖堂そのものの規模が小さいからである)が屹立する建築の垂直性を強調している。一方、ガリアルディらしくないところといえば、中央の壁面が凸曲面状に膨らまず、セルリアーナ(セルリオが多用した窓形式)を基本とする開口部が形成されている点である。ローマの建築でいえば、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂のファサードに代表されるように、このデザインは1730年代に流行したクラシズム寄りのバロック様式に共鳴している。ガリアルディの手法を踏襲したファサードも、最後の詰めの段階で経済問題をはじめとする何らかの障害が生じたため、頂部にドームを戴かないまま放置されてしまったのであろう。パラッツォ・ロ・アクレイデの街中にある名の知れたパラッツォは、たいていの場合バロックの装飾を身に纏っている。震災で崩れた建物を改修すべく18世紀に施されたデザインは、まさにバロックの流行を反映するものであり、なかでも、パラッツォ・イウーディカ(Palazzo Iudica、→p26)とパラッツォ・フェルラ(Palazzo Ferla)がよく知られている。とりわけ前者の場合、ファサードのピアノ・ノビレ(主階)に特徴が見られ、バルコニーを支持するメンソーレ(持ち送り)のひとつひとつに彫刻された顔が強烈な印象を与えるものとなっている。[SO]

Siracusa

シラクサー

シラクサーは、シチリア島東端のほぼ中央でイオニア海に向けて突き出した街である。街の起源は紀元前8世紀に遡り、アルキア(Archia)に率いられた港湾都市コリントのドーリス系ギリシア人が、オルティージャ島(Ortigia)に植民都市を建設したことに始まる。シラクサーの名は、この街の近くにあったシラカ(Syraka)と呼ばれる湿原に由来があるといわれている。ギリシア移民は新天地にポリス文化をもたらし、都市国家繁栄のもとで街は紀元前4世紀には約3万もの人口を数えるまでに成長していた。当時のイタリア半島では、ローマがサムニテス戦争に勝利をおさめイタリアの覇権を獲得していたが、続いて宿敵である海上帝国カルタゴと戦ったポエニ戦争にも勝利をおさめ、シチリアからカルタゴ勢力を追い出していた。その結果シラクサーはローマの統治下となったが、その後も入れ替わり立ち替わり数々の侵略にあり、6世紀のビザンチン、9世紀のサラセン、11世紀のノルマンの文化を経験することになる。

ところで、シラクサーの街にバロックが流行する基盤は、16世紀後半にイエズス会とカルメル会がこの街をその宗教色に染め始めたことにあった。そしてスペインの支配下に置かれた17世紀には、その宗教思想が貴族をも巻き込むかたちで都市そのものの改装計画にまで及んだ。バロック都市建設への最初の布石はパラッツォ・デル・セナート、すなわち政治を行う議事堂の建築で実現された。この記念すべきバロック建築は、当時の教会の繁栄が街の政治をも支配していたことを物語っている。教会の象徴である聖堂が、オルティージャ島にまとめて建立されたのも当然この時代であった。ところが、このように街の拠点を占め始めたバロック建築の数々も、1693年の大地震でかなりの傷を負うことになる。しかしその悲劇にもかかわらず、街に根づいたバロック志向は18世紀以降も陰りを見せることなく、街に浸透した修復再建の気運に支えられながらロココ風味の薫る18世紀流バロック(*barocco settecentismo*)が展開していったのである。[SO]

ドゥオーモ……………p30-33

Duomo, 18C

オルティージャ島に渡ってカヴール通りを南下してゆくと中程で街のヘソともいえるような空隙に出会う。これがドゥオーモ広場(Piazza Duomo)である。ドゥオーモはこの広場に面して西向きに立っているから、ドゥオーモとの最初の出会いは、ドリス式オーダーが重厚な印象を与える北側の側面となる。それは奇形の建築がどっしり横たわっているといったまったく奇妙な風景である。いぶかしい気持ちを抱えたままピアッツァの中央に足を運ぶと、正面から見るドゥオーモの風体にも驚かされる。まさに取ってつけたような完璧なバロックがそこに鎮座しているのだ。ドゥオーモは古代からバロック期に至るまで、シチリアの歴史を物語る生き化石といえるだろう。ドゥオーモの歴史は紀元前7世紀に遡る。ドーリス人が形成した都市に、ギリシア神話の女神アテナ(あるいはアテネ)を奉納するギリシア神殿が建立されたのがこののはじまりであった。ところがそのギリシアの遺産も、やがてローマ人が侵略し、キリスト教が流入したのを契機にバジリカへと変貌してゆく。ドリス式オーダーのオープンな回廊は壁に取り込まれ、矩形の中柱に八つのアーチが形成された。キリスト教バジリカがカテドラーレ、つまり大聖堂として献堂されたのはこのときであった。ちなみにゾジモという名の司教がその指揮を執ったと伝えられるが、いずれにせよこのときすでに、今日のドゥオーモに見られる内部構造がほぼ完成していたのである。その後11世紀になって身廊の天井が増改築され、内陣にモザイク装飾が施された。しかし1542年の地震で倒壊の危機に瀕することになる。それを機にさらに重厚な側壁が形成され、構造の強度が高められた。側壁に穿たれた窓は16世紀、入口は17世紀に修復されたものである。聖堂が今日の姿になったのは、1693年の悪夢、つまりもうひとつの大地震の洗礼を受けた後のことである。この地震は内装ばかりか、それまで堅固と思われていたファサードをも倒壊させた。ドゥオーモの修復はそれから19世紀にかけて実施された。ドゥオーモはこうしてバロック様式で彩られることになったのである。

今日見られるファサード(→p30)は、トラバーニ生まれの建築家アンドレア・バルマ(Andrea Palma, 1664-1730)が1725年から手掛けたものである。彼が他界した後はその後継者が携わり、1753年に完成を見た。このデザインは、壁から遊離した柱とその構成から、ローマ・バロックの建築家カルロ・ライナルディ(Carlo Rainaldi, 1611-91)が設計したサンタ・マリア・イン・カンピテリ聖堂をモチーフにしたものと考えられる。バルマ自身がローマを訪れていた否かは不明であるが、17世紀の後半



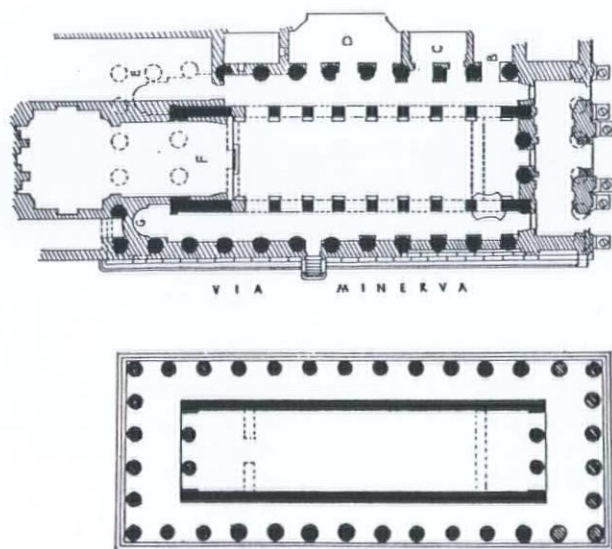
パラッツォ・イウーディカのバルコニーのメンソーレ

にはローマ・バロックの聖堂ばかりを収録した図面集（代表的な図面集としては、Giovanni Giacomo de Rossi, *Insignium Romae templorum*...., Roma, 1684が挙げられる）が出版されていたから、それが地方で活躍する建築家の貴重な設計資料となっていたことは容易に想像することができる。ちなみにライナルディはローマ芸術の殿堂サン・ルカ・アカデミーの学長を務めていたほどの権威者であったから、その建築が図面集に掲載されないはずはなかった。バルマは、ライナルディの手法を踏襲しながら、ブローケン・ペディメントを採用することでデザインに差異をもたらしている。またスクロールや彫像の配置方法などを含めた全貌は、17世紀から18世紀初頭にかけてローマで活躍したカルロ・フォンターナのデザイン（例えば代表作サン・マルチェロ・アル・コロソ聖堂のファサード）がモチーフになっていたものと考えられる。フォンターナもまたアカデミーの主導的な建築家であったから、その影響はジャコモ・アマートなどローマを経験した建築家を通してシチリアにも十分に及んでいた。バルマはアマートの弟子であったため、そのアカデミックな教養を伝授されていたのであろう。

ドゥオーモの内部（→p31）は、素朴で重厚なドリス式オーダーに代表される古代から、華やかな装飾で彩るバロックまで様々な様式が混在し、まさに建築史博物館さながらの様相を呈している。身廊はバジリカの構造がそのままのかたちで残り、中央の主身廊とその両側の側廊で三分割されている。ここ

に立ち並ぶ巨石の柱はこれまでほとんど化粧されてこなかったため、その風化によって荒れ果てた石の表面が悠久の時間を物語るものとなっている。中央の主身廊では、1518年に改修された際の天井が力強い木造のトラスを露呈している。バロック芸術へのアプローチは、この巨石の林立する空間から垣間見ることに始まり、次第に側廊の礼拝堂へと惹きつけられてゆく。礼拝堂のなかで最も規模の大きいものは、左側側廊のほぼ中央に位置するサクラメント礼拝堂である。この祭壇ではまず祭壇手前の装飾品に眼を奪われる。これは彫刻家フィリッポ・デッレ・ヴァッレによる1762年の作品で、「最後の晩餐」が大理石の浮き彫りで表現されている。次に見のがせないのは、祭壇上部の聖体用祭壇である。これは18世紀のイタリヤ建築界に新古典主義の新風を吹き込んだ建築家、ルイジ・ヴァンヴィテリ（Luigi Vanvitelli, 1700-73）が1752年に完成させた装飾で、彼にとってはシチリアに数少ない遺作の一つである。このほか、サクラメント礼拝堂の右横にあるボンベオ・ビキエラーリが手掛けたサンタ・ルチア礼拝堂や1659年の修復計画で変貌した内陣は、すべてバロックの華やかな色彩に染められている。

ところで内陣の右隅奥の祭壇には、バロック期の芸術ではないが、シチリア・バロックの発展に多大な影響を及ぼした彫刻家アントネッロ・ガジエーニの彫像が見られる。ガジエーニは1512年、ビザンチンの面影を残すこの内陣に純白のマドンナを祭壇の象徴として掲げていたのである。[SO]



ドゥオーモとギリシア神殿、修復平面図

Catania

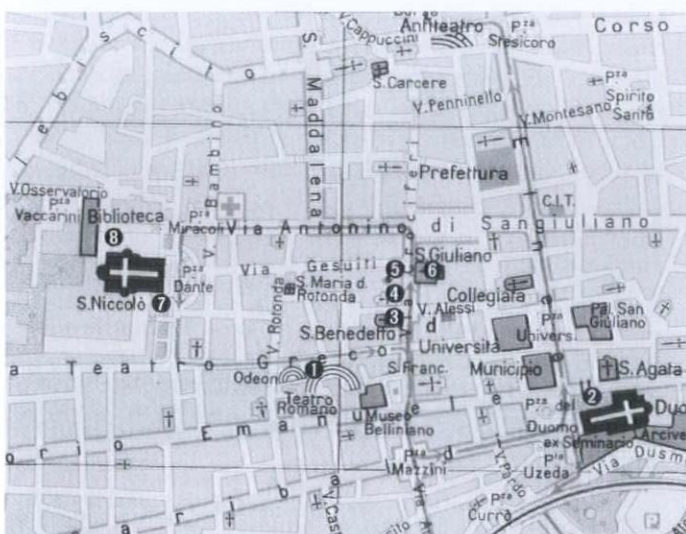
カタニーア

シチリア第二の都市カタニーアは、イオニア海に面するシチリア東端中央に位置し、活火山で有名なエトナ山の南側の麓に位置するため（山頂から街の中心までの距離は僅か28kmしかない）、しばしばその天災を被ってきた。この街を最初に統治したのは、紀元前5世紀の終わりにシラクサへ移住していたギリシア人であった。カタニーアの名前は、彼らがこの地をカタネ（*Katane*）と呼んでいたことに由来する。このギリシアの植民都市も、紀元前3世紀のポエニ戦争でカルタゴ軍に勝利したローマ帝国が侵略し、その高度な建設技術をもって新たな都市の開発が進められた。当時の繁栄ぶりは、今でも市街地に横たわる大小二つのアンフィテアトロ（半円形劇場）の遺跡に偲ばれる（大きい方で1万5千人、小さい方で7千人を収容することができたといわれている）。カタニーアはその後6世紀にビザンチン、9世紀にサラセン、11世紀にノルマンをはじめ数々の侵略にあう。サラセン帝国によって統治された時代には灌漑技術がとり入れられ、農業の進歩に伴って経済基盤が確立されたほか、灌漑路の敷設は都市構造にも大きな骨格を提供した。ノルマン帝国の占領下時代には都市の拠点として機能するカテドラーレ（＝ドゥオーモ）が建立された。この街に要塞が張り巡らされたのは13世紀のことであり、神聖ローマ帝国の皇帝フリードリヒ2世（在位1215-50）がシチリア王を兼任した時代であった。これによってカタニーアの街は、カテドラーレを核とする中世の城壁都市として生まれ変わり、その後13世紀のアラゴ

ン王国に続き、16世紀にはスペインの植民地として組み込まれてゆく。

カタニーアの街がバロック都市に変貌してゆくきっかけは、やはり1693年の大地震がかなりの数の建造物に損壊を与えたことにあった。街の復興が本格的に軌道に乗り始めたのは1730年頃のこと、地元出身のアロンゾ・ディ・ベネデット（Alonzo di Benedetto, 1694-1720）、メッシーナ出身のジローラモ・パラッツォット（Girolamo Palazzotto, 1686-1754）、そしてパレルモ出身のジョヴァンニ・バッティスタ・ヴァッカリーニ（Giovanni Battista Vaccarini, 1702-68）といった建築家の面々が起用された。なかでも主要建築物の計画に携わったヴァッカリーニは、カタニーアの再建に貢献した英雄的建築家であった。

カタニーアで18世紀のバロック建築をまとめて見なければ、街のほぼ中央を南北に走るクローチフェリ通りを散策するとよい。この通りは、まるでバロック通りといわんばかりに、通りに面する聖堂や修道院が華やかなショーを繰り広げている。散策の起点は、テアトロ・グレコ通り（＝ギリシア劇場通り）との交差点に架かるサン・ベネデット門（l'Arco di S. Benedetto）である。1704年に建設されたこの門は、その左右にすでに存在していた修道院を接続するかたちで建設されたもので、クローチフェリ通りの聖なる空間領域を囲い込む役割を果たしているようにも見える。左右の修道院は通称、左側を大修道院、右側を小修道院と呼び、前者はバットーリアが1777年に完成させた玄関部分の装飾と凸曲面状に突き出す格子窓、後者はヴァッカリーニがデザインした玄関部分の装飾が、この聖域を占める高密度なバロックを予感させるものとなっている。門を抜けると左側に聖堂が二つ並んで見えてくる。手前の教会堂がサン・ベネデット聖堂（1704-13、→p37, 39）で、奥にある教会堂がジェズイーティ教会堂（サン・フランチェスコ・ボールジャ聖堂）である。前者のファサード

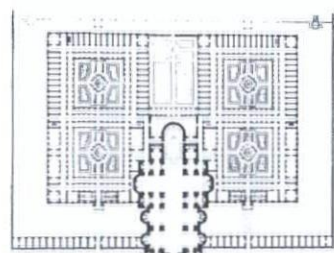


カタニーア市街地図

は、その支離滅裂感がまさに地方色豊かなバロックを象徴している。他方、後者のそれは、イエズス会士のフラ・アンジェロ・イタリヤが設計したもので、おそらくシラクサのドゥオーモで真似た建築家アンドレア・バルマのファサードを参考にしていたものと思われる。

サン・フランチェスコ・ポールジェ聖堂のさらに奥には、コレージョ・ディ・ジェズイーティ（今日では芸術学校として使用されている。→p34）が並んでいる。このイエズス会士のための神学校は、当時シチリアで最も権威あるキリスト教大学の一つだったこともあり、建築に注がれた芸術への熱意は、比較的質素な印象を与える外観からは想像もつかないほどに内部で華開いている。ラールモ・ストゥーディオ（L'Almo Studio）とも呼ばれるこの建物は、建築家アルフォンゾ・ダラゴナーの設計で1434年に計画が始まり1684年に一度は完成を見たが、1693年の大地震で地上階部分のルネサンス様式の回廊を残して倒壊したため、ヴァッカリーニが1730年に2階部分の回廊を増築したもので、ロココ調の快活な曲線に縁取られた面的なデザインは、ルネサンスの厳格な幾何学に裏づけられた線的なデザインとのあいだで好対照を示している。この聖堂の向かいには、ヴァッカリーニが設計し1751年に完成を見たサン・ジュリアーノ聖堂（→p38）がある。この聖堂は、都市計画的に見れば、クローチフェリ通りに直交するジェズイーティ通りを挟んでサン・ニコロ聖堂（→p36）と対峙するかたちで配置されている。ヴァッカリーニは、凸曲面状に迫り出すファサードにピエトロ・ダ・コルトーナの手法を応用し、窓周辺のデザインにミケランジェロやボッロミーニの装飾要素をモチーフとして引用している。その研ぎ澄まされたプロポーションの感覚は、ローマで数々の秀作を眼にしながら建築を学んでいた建築家の経歴を偲ばせるものといえるだろう。[SO]

- ①テアトロ・ロマーノ
- ②ドゥオーモ
- ③サン・ベネデット聖堂
- ④ジェズイーティ教会堂
- ⑤コレージョ・ディ・ジェズイーティ
- ⑥サン・ジュリアーノ聖堂
- ⑦サン・ニコロ聖堂
- ⑧旧ベネディクト会修道院



サン・ニコロ聖堂と修道院、平面図

サン・ニコロ聖堂……………p36

S. Nicolò, 18C

カタニアのサン・ニコロ聖堂は、ジェズイーティ通りの西端のダンテ広場（Piazza Dante）に面して立つ廃墟にも似た奇怪な建物である。その姿は傷を負った巨人とでもいえるだろう。サン・ニコロはその余りの巨体ゆえに悲哀な歴史を被った未完の雄者なのだ。ベネディクト会修道院に付属する、この聖堂の建設が着手されたのは1687年で、ローマのアカデミックな建築家ジョヴァンニ・バッティスタ・コンティーニ（Giovanni Battista Contini, 1641-1723）の計画に基づいて工事が進められていた。しかし無念にも建設事業は1693年の大地震で中止を余儀なくされる。その後、工事再開が告げられたのは20年後のことであった。このとき震災の惨事に絶望を隠し切れなかったコンティーニはすでにシチリアを離れていたため、後継者としてアントニーノ・アマート（Antonino Amato, 1697-1717）が主任建築家として計画をとり仕切っていた。規模があまりに大きいため、計画の続行にはその後もフランチェスコ・バッターリアをはじめとする幾人かの建築家が起用され、少しずつではあるが完成に向けて前進していたのである。ところがカルメーロ・バッターリア・サンタンジェロの新規計画案が発表され、ファサード中央の窓の工事が進行しているさなかに、突然、建設工事中止の判断が下される。その理由は図らずも、「建設は（その規模があまりに巨大であるがゆえ）技術上実現困難」というものであった。

こうして結局、サン・ニコロ聖堂のファサードは未完のまま現在に至っているわけであるが、そのデザインの片鱗には、シチリアのバロックとしては珍しい正統派のデザインセンスが感じられる。全体的に見て、開口部にはミケランジェロをも彷彿とさせる端正なディテールが施され、楕円窓はフィリッポ・ユヴァッラ（Filippo Juvarra, 1678-1736）やフェルディナンド・フーガが汎用したデザイン要素を想起させる。これらの建築家は、ボッロミーニの流れを汲むデザインを18世紀に展開していたが、サン・ニコロ聖堂の計画に着手したコンティーニもまたそのうちのひとりであったから、そのデザインの源泉をボッロミーニ、ひいてはボッロミーニが慕ったミケランジェロへと遡れるのも不思議ではない。積み置きされたままのオーダーがもし完成されていたら、おそらくは中央の四本柱に三角形のペディメントが架かり、バッラーディオ風のファサードがお目見えしていたにちがいない（ウィットコウワーが命名した Late Baroque Classicism に属するデザイン）。いずれにせよこの聖堂が完全なかたちで竣工を迎えていたら、シチリア・バロックのなかで最もローマ譲りのオーセンシビリティを誇っていたにちがいない。未

完の大作は、そんな空想の余白を残したまま、今なお傷を負った英雄であり続けている。[SO]

旧ベネディクト会修道院……………p35

Ex convento benedettino, 18C

サン・ニコロ聖堂の左手に隣接する建物。ファサードは1693年の震災後、18世紀のはじめに建築家アントニーノ・アマートがデザインしたもので、ルスティカ仕上げの柱表面が大胆な印象を与える反面、窓周辺の装飾はロココ的な繊細な雰囲気漂わせている。[SO]

ドゥオーモ……………p40

Duomo, 18-19C

カタニアのカテドラーレ、すなわちドゥオーモは、聖女アガタを奉納すべく献堂された聖堂で、11世紀のノルマン公領時代に建立されたこの街最古の宗教建築である。かつてローマ帝国の支配下にあった都市では巨大な都市施設が建設されていたが、後の時代にはその建造物の廃墟が利用され、聖堂などの建築物が建設されることがしばしばであった。カタニアの場合もその例外ではなく、古代ローマ人たちが無数の奴隷を従えて建設していたアクリアーネ浴場の跡地を再利用するかたちでドゥオーモの建設が進められたのである。現在のドゥオーモは、ラテン十字型の平面形態で構成されているが、ノルマン公領時代に誕生したばかりの頃は、現状でいうところの身廊部分がなく、中央奥の内陣とその両隣にある後陣、および左右に突起した矩形の室からなる扁平な形状をしていた。このドゥオーモに今日見られる骨格が形成されたのは、18世紀に入ってからである。この増改築計画には、ヴァッカリーニが主任建築家として迎えられた。ヴァッカリーニは1733年からドゥオーモの設計に献身し、28年もの歳月をかけて巨大な聖堂へと造り替えたのである。交叉部の上部に戴かれたクーポラと北側翼廊上部のカンパニーレは、ヴァッカリーニの他界後に増設された部分であり、前者は18世紀末にアントニーノ・バッターリア、後者は19世紀の半ば過ぎにカルメーロ・シュート・バ

ッティが携わり完成されたものである。ところで、ドゥオーモがバロック建築といわれる由縁は、その内部もさることながら、やはりファサードにその強烈な特徴が見てとれるからである。ヴァッカリーニはパレルモの出身ではあるが、ローマの巨匠カルロ・フォンターナのもとで建築を学んだ由緒正しい建築家であり、ローマのアカデミズムに依拠する伝統的な建築デザインに精通していた。ローマから帰郷したのは1730年のことで、故郷のパレルモには帰らず、カタニアを拠点に活動を始めていたのである。ドゥオーモの計画に関するコミッションを受けたのは帰郷後数年のことであるから、ヴァッカリーニがローマで習得した、いわば都会の最新デザインをシチリア、とりわけこのカタニアのドゥオーモで試みようとしていたことは想像するにたかなくない。三層からなるファサードの構成は、なるほどガリアルディ譲りのシチリア風ではあるが、しかし随所に見られる建築のディテールはやはりローマの建築、とりわけ18世紀初期にローマで活躍したユヴァッラのデザインを彷彿とさせるのである。ユヴァッラは、ボッロミーニの系譜を引く18世紀初期の巨匠として尊敬された建築家であったが、不幸なことに低迷するローマ経済のなかでは実現に至る建設事業がなく、オットーボニ枢機卿のもとでテアトロの舞台デザインに従事するかたわら、膨大な建築デザインをスケッチのかたちで残していた。ヴァッカリーニのデザインは、そのなかの幾枚かに見出すことができるのであり、つまりはスケッチのかたちでしか残すことのできたユヴァッラのデザインが、シチリアで現実のものとなっているのである。スケッチのなかに描かれた建築が、ヴァッカリーニの手によってシチリアに実現されたということは、それだけで奇妙な因縁を物語っている。それというのもユヴァッラがメッシーナの生まれだったからである。シチリアの建築家がスケッチに託していた夢が、図らずも同郷の建築家によって実現された、それがカタニアのドゥオーモなのである。[SO]



ドゥオーモ

Lecce

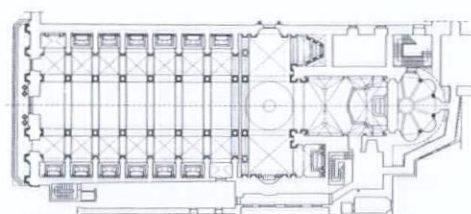
レッツェ

レッツェは古代ローマ期に起源をもち、首都ローマからのアッピア街道の終点だった港湾都市ブリンディシ(Brindisi)とともに形成され、トライアーナ街道がこれら二都市を繋いだ。街の中心サントロンツォ広場(Piazza S. Oronzo)に現存する円形劇場、ドゥオーモ広場(Piazza del Duomo)東側に現存する劇場などの古代ローマ期の遺構や、出土した彫刻・碑文などから、紀元2世紀に繁栄を迎えたといわれ、5世紀にはハドリアヌス帝が近郊のサン・カタルド(S. Cataldo)に港を建設した。その後ギリシア人等の侵略を受けたが、6世紀中頃から11世紀中頃までビザンチン帝国の支配下にあり、この間にギリシア・ヘレニズムによる多くの文化基盤が形成された。1040年にノルマン人に征服された後は、4世紀にわたってタンクレーディ支配下のゴッフレード・ダルタヴィッラの伯爵領の中心都市として、後にはシチリア王国の一部となりサレント半島の中心都市として繁栄した。15世紀のレッツェは、オトランド領の首都として司法機関も設置され、ヴェネチア、フィレンツェ、ジェノヴァ、ギリシア、アルバニア等との交易によって経済的な繁栄を迎え、16世紀にはカルロス5世のスペイン支配下に入り、都市城壁とカステッロがこの時期に建設された。その後、1647年に、スペインの封建支配に抵抗したマザニエッロの反乱が起

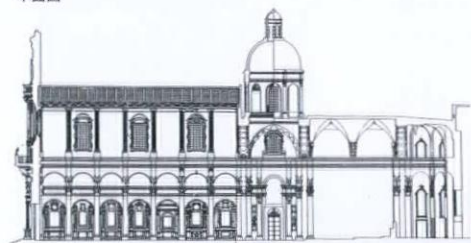
きるが、レッツェはこの頃から200年余りにわたってバロック建築の隆盛へと向かった。この時代には、ドゥオーモ(→p60)、サンタ・クローチェ聖堂(→p47-55)、イエズス会のイル・ジェズ教会(ジョヴァンニ・デ・ロシ設計、1575-79)、古代期の都市の守護女神サントイレネに捧げられた、ケレスティニス派修道会のサントイレネ聖堂(フランチェスコ・グリマルディ設計、1591-1639)、カルミネ教会(ジュゼッペ・チーノ設計、Carmine, 1711-17)、サンタ・キアラ聖堂(ジュゼッペ・チーノ設計、1694-18世紀前半)などの聖堂や教会堂をはじめ、旧ケレスティニス派修道院(ツィンガレロ設計、1659-95)、カルメリターニ・スカルツィ派(跣足派)修道院およびサンタ・テレーザ聖堂(ツィンガレロ設計、1620-30)など、数多くの宗教建築が建設され、それと同時に、玄関の意匠の主題としてカリアティッド(人像柱)を用いたパラッツォ・マッレーゼ(Palazzo Marrese, →p58-59)など、多数の邸宅建築も建設されて、今日に至る地方色豊かなバロック都市としての環境の特質を形成していった。それらに施された膨大な彫像や建築装飾には、緻密な彫刻を施しやすいが風化しにくいといわれる、地元産の淡黄褐色の石灰岩が多用され、その質感が、造形の特質とともに独特の都市景観を醸し出している。街の中心、サントロンツォ広場には、ジュゼッペ・ツィンバロ(Giuseppe Zimbalo)設計のサントロンツォの記念柱(1666)と彼の遺作となった装飾豊かなロザリオ教会(Chiesa del Rosario, 1691-1728)が建ち、古代ローマ期の円形劇場跡(紀元1-2世紀)、旧市庁舎(セディーレ、15世紀末)とともにこの街の歴史の集積を物語っている。[MH]

サンタ・クローチェ聖堂……p47-55
S. Croce, 16-17C
サンタ・クローチェ聖堂(1548-1646)はサレント半島のバロック建築のうちで最も重要な、多義的特質をもった建築作品である。現在のカステッロのあたりにそびえていたという14世紀半ばの旧聖堂が取り壊された後、16世紀半ばにガブリエーレ・リッカルディ(Gabriele Riccardi)の手で着工した新聖堂は完成までに約百年を要した。リッカルディはファサード下部、ラテン十字平面3廊形式の身廊部分(→p52-53)を手掛け、引続きフランチェスコ・アントニオ・ツィンバロ(Francesco Antonio Zimbalo)がファサード下部の三つの玄関部分(1606、→p47)、内部の「サン・フランチェスコ・ディ・パオラ」の祭壇部分(1614、→p54-55)を、そしてジュゼッペ・ツィンバロ(Giuseppe Zimbalo、通称ツィンガレロ)と彫刻家チェーザレ・ペンナ(Cesare Penna)がこの聖堂の外観の最大の特徴である、ファサードの持ち出しバルコニーより上部(→p47, 48)をそれぞれ手掛けた。それら三つの建設段階の相互関係に注目すれば、一方では意匠的な「不連続性」や「多義性」を、他方ではそれぞれにレッツェ・バロックを代表する建築的成果の断片が集積した総体として、約百年にわたる「歴史的重層性」を、雄弁にかつ「熱狂」的に表明している。リッカルディの手によるファサード下部、身廊部分は他の部分と比較すると装飾が簡素であり、内部外部とも端正

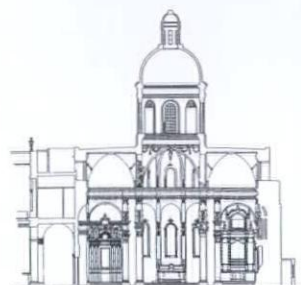
な比例に基づくオーダーの配置や構成、あるいは幾何学的な造形といった建築的特質が見られ、数学的な、いい換えればスタティックな合理主義的空間を構築している。とはいえ詳細に見れば、コンポジット様式のキャピタル等の誇張した造形、ファサード隅部オーダーの楕円表現など、地中海的な「二重性」ともいえる非合理主義的な特質も合わせもっている。フランチェスコ・アントニオ・ツィンバロによる造形は、リッカルディの「クラシック」な意匠に相反する装飾的な特質を示す。ファサードの三つの玄関部分においては、台座を45度回転した側柱の意匠が特徴的であり、内部の「サン・フランチェスコ・ディ・パオラ」の祭壇部分では、この聖人の12の物語のレリーフ、全面に植物模様をあしらったオーダーの意匠など、緻密で繊細な彫刻装飾を展開しているが、サントイレネ聖堂内の同じくフランチェスコ・アントニオによるサント・ステファノ礼拝堂の螺旋オーダーのモチーフと比較すると、16世紀的な、バロック以前の静的な印象がある。ツィンガレロとペンナが手掛けたファサード上部は、カリアティッド・モチーフの彫刻とともに持ち出したバルコニー、中央の薔薇窓、聖人像を収めた二つのニッチ、フリーズ、付け柱など、シンプルな建築要素の構成を背景にして、溢れるばかりの濃密な彫刻装飾が展開し、成熟へと向かうレッツェ・バロック・スタイルの典型的な造形を示している。[MH]



平面図



立・断面図



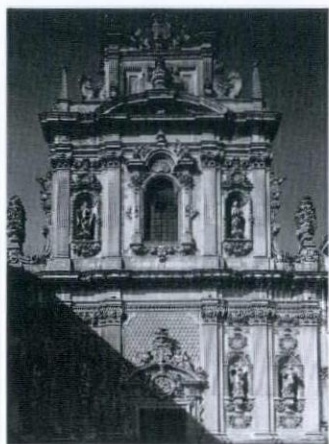
サンタ・クローチェ聖堂正面、立・断面図



サント・ステファノ礼拝堂



古代ローマ遺跡と旧市庁舎(セディーレ)

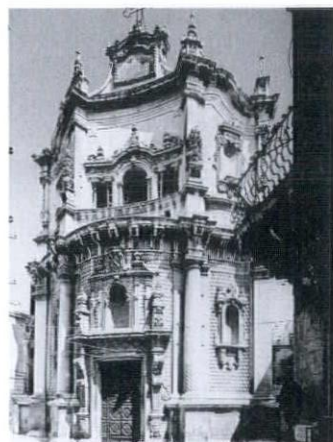


カルミネ教会/G.チーノ



パラッツォ・マッレーゼ

サン・マッテオ聖堂……p56-57
S. Matteo, 17-18C
アキッレ・カルドゥッチ(Achille Car-
ducci)設計といわれるサン・マッテオ
聖堂(1667-1700)は、何よりも凹曲
面と凸曲面をダイナミックに組み合わ
せたファサードがポロミニエーの手法
を想起させ、舞台美術的な外観の特質
になっている。こうした曲面の複合的
構成は同時に内部空間において、楕円
形平面の周囲に配置した小礼拝堂を分
節するピラスターと、列柱廊上部のマ
トロネオ(教会内壁から持ち出した婦
人用貴賓席)とともに、構造的解決の
結果でもあり、同時代のローマなど大
都市のバロック建築を最も想起させる
意匠であるが、サレント半島特有の、
シンプルな建築エレメントの構成と過
剰なまでの建築装飾との組み合わせと
いった地域色豊かな意匠の特質からは
比較的隔たった「独特な」ものである。
内部空間は楕円形平面でありながら12
の聖人の彫像以外には彫刻装飾が少な
く、端正で静的な構成であるが、装飾
オーダーと螺旋オーダーとを組み合わ
せた祭壇(1694、→p57)部分が、レッ
チェ・バロックの典型的な装飾造形を
示している。[MH]



サン・マッテオ聖堂



サンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂

ドゥオーモとドゥオーモ広場……p60
Duomo, 17C
レッチェの中心というべきサントロン
ツォ広場から西へV.エマヌエーレ通り
を進むとG.バルミエーリ通りと交差す
る地点にドゥオーモ広場(Piazza del
Duomo)のエントランスがある。広場
に面しては、12世紀に創建された後、
ジュゼッペ・ツィンバーロが改修(1659
-70)したドゥオーモ、鐘楼(1661-82)、
15世紀に創建された後、1632年に再建
された司教館、そしてジュゼッペ・チ
ーノによるセミナリオ(1694-1709)が
一体となって連なって、18世紀の宗教
社会を象徴する、成熟した「教会都市」
の理想的景観を形成している。そうし
た都市の舞台装置の景観を最終的に完
成したのが、エマヌエーレ・マニエリ
(Emanuele Manieri)設計のドゥオー
モ広場エントランスである。それはあ
たかも劇場の舞台装置を的確にトリミ
ングするプロセニウムのように、上部
へ向かって徐々にセットバックする都
市的なランドマークとしての鐘楼(高
さ68mあまり)、ドゥオーモの平面軸線
上の主ファサードと、広場エントラン
スに面する凱旋門の主題としてサント
ロンツォの彫像を戴く装飾豊かな側面
ファサード、そして隣接する司教館フ
ァサードが構成する広場の景観を規定
している。[MH]



ドゥオーモとドゥオーモ広場



広場、平面図

サンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂
SS. Nicolò e Cataldo, 18C……p61
レッチェ北西部の都市城壁のすぐ外部
に位置する墓地に隣接するサンティ・
ニコロ・エ・カタルド聖堂は、12世紀
末に当時のレッチェを支配していたタ
ンクレディ伯爵(後のノルマン王)
によって創建されたノルマン様式の建
築を起源とする。ファサードは1716年
にジュゼッペ・チーノが手掛けたと考
えられ、ナポリ由来の二重ファサード・
モチーフに通じる壁面の建築エレメン
トのシンプルな意匠と、モンテ・オリ
ヴェト派修道会の聖人達の彫像が組み
合わされて、地方色豊かな「レッチェ・
バロック・スタイル」の一つとして最
も端正な比例構成を示している。[MH]

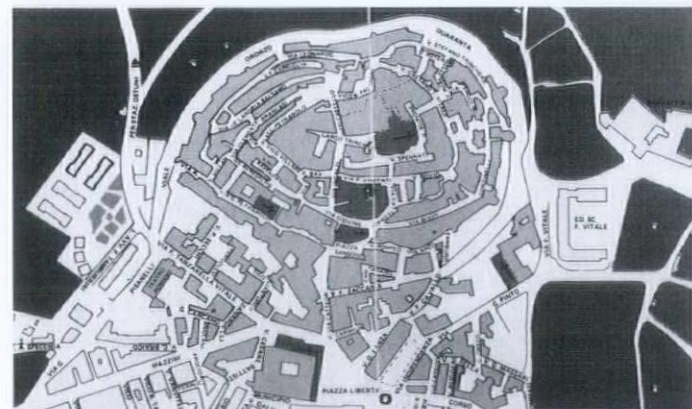
Ostuni

オストゥーニ

ムルジェ地方の東端に位置するオスト
ゥーニは、アドリア海から7kmほど内
陸に入ったところにある標高218mの丘
上都市である(→p62-63)。この都市の
起源は、博物学者プリニウス(古代ロ
ーマ時代)とギリシアの地理学者プト
レマイオス(紀元2世紀)の示唆によ
れば、ストゥルニウム(Stunium)と
呼ばれる古代都市であったとされる。
一方、中世の地誌によれば、アストウ
ニウム(Astunium)に由来すると伝えら
れ、「都市」を意味するアストゥ(astu)
と「新しい」を意味するネオン(neon)
の合成語から派生したアストゥネウム
は、文字どおり「新しい都市」を意味
する。つまり古代から存在していた都
市は、中世の時代に新都市として再建
され、オストゥーニと呼ばれるに至っ
たのである。10世紀の世紀末には、ビ
ザンチン帝国の占領下で司教座が置か
れ、1071年にノルマン帝国の侵略を受
けたのち、レッチェ(1194-1218)、タ
ーラント(1294-1463)、バーリ(1507-
57)の属領となったほか、15世紀には
スペインのアラゴン王国領になるなど
して17世紀を迎えていた。
オストゥーニが丘上の要塞都市へと発
展してきた背景には、こうした度重なる
侵略に対する抵抗の歴史があった。
敵から街を防衛するためには、低地より
高台に街を建設する方がよいとはい
うまでもない。城が造営されたのは12
世紀のことであるが、最後の砦となる
領主の館は丘の頂き付近に位置し、そ
の周りを道路がオニオン・リングさな
がらに敷設されている。この道路には、
城壁を破って侵入した敵を幻惑させ、
城に近づかせないための仕組みが施さ
れているのであり、今でもこの街を訪
れる客が、散策しているうちにぐるぐ
る巡って迷子になってしまうのも無理
のないことなのだ。

今日、オストゥーニは白一色のメルヘ
ンチックな街として観光客をおおいに
魅了している。事実、街中のほとんどの
建物が純白に塗り廻され、ホワイト
クリームで彫刻したデコレーションケ
ーキさながらの甘い世界が街を支配し
ているのだ。しかし一歩引いてこの街
の歴史に想いを馳せれば、その純白の
世界が暗い世界と裏腹の存在であった
ことに気づかされる。つまりは侵入し
てきた敵を幻惑するための作戦として、
この世界が演出されていたという事実。
太陽が高くのぼる南イタリアでは、た
だでさえ強烈な陽差しが目に染みる。
この太陽が目に染みる環境だからこそ、
純白は有効な防衛手段であったという
わけだ。真っ青な空の下で繰り広げら
れたオストゥーニの戦略は、街ぐるみ
で実践された純白塗布の目潰し戦法で
あった。メルヘンの街の純白は、かつ
ては自治体の生死を賭けた色彩だった
のである。

要塞都市オストゥーニの建築は、概して
中世ゴシックの面影を偲ぼせるもの
が多いが、そんななかにもバロックの
片鱗はところどころに散りばめられて
いる。中世以来建設されてきた建物は、
修復や増築を要する部分について上塗
りを施すような要領で、バロック時代
のエレメントが付加されていた。した
がって極端な例でいえば、ルネサンス
の玄関の上にゴシックの薔薇窓が残さ
れ、さらに上にバロックのベディメン
トが形成されるといったことも十分に
起こり得たのである。この街のバロッ
クで名の知れたものといえば、宗教建
築ではサンタ・マリア・マッダレーナ
聖堂やカルメリターネ修道院がある。
とりわけ生粋のバロックを誇る前者は、
豪勢な装飾に身を任せた内部もさること
ながら、外部の湾曲したファサードに
彩りを添えるブローケン・ベディメン
トや窓周辺の華美な装飾性が、偉容
なる教会を讃えるものとなっている。
またバラッツォでは、17世紀に改修さ
れたゼヴァッロス公爵宮殿を挙げるこ
とができる。ただ残念なことにオスト
ゥーニのバロック芸術は地味なものが
多く、一般の建築史の上では建築家と
もども忘れ去られているものが多いの
が実情である。[SO]



オストゥーニ市街地図

Tricase

トリカーゼ

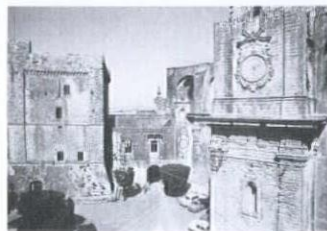
イタリア半島を長靴にたとえる場合、そのかかとの先端付近に位置するトリカーゼは、アドリア海に面した小さな港町トリカーゼ・ポルトから4kmほど内陸に入ったところにある。この都市は、肥沃な土壌を背景に13世紀末から農業の街として発展してきた。トリカーゼの建築の中心的存在は、ちょうど1300年に建設されたカステッロである。隅部に二つの塔を従えるこの城は、まさに13世紀の中世を想わせる建築であるが、16世紀の後期ルネサンスの時代には改修され、それを機にガッローネ宮殿(Palazzo Gallone)と称されるようになった。トリカーゼには、建築愛好家の好奇心をそそる建物が二つある。一つはルネサンス様式のファサードをもつサンタンジェロ聖堂であり、もう一つがバロック建築のキエーザ・マードレ(聖母教会堂)である。

サンタンジェロ聖堂(→p64)は、1624年に建設されたにもかかわらず、ルネサンス建築に特有の端正な幾何学性を示している。1620年代といえば、ローマではすでにバロック建築が登場していた時代であるから、同時代性という観点から見ればかなり遅れていることになる。しかしそれが地方の特徴でもあり、見方によっては、イタリア半島でバロックが流行していった伝播速度を見きわめる一つの材料とみなすこともできるだろう。この聖堂のファサードにおける最大の特徴はアーキトレイヴであり、頂部中央で矩形に立ち上がる形態が見られる点である。この枠組みのなかには、土地の領主の家紋と思われるカルトゥーシュが王冠を戴くかたちで刻み込まれており、それを飾り立てるように巨大な薔薇の花片が立ち上がっている。ちなみにアーキトレイヴの形態は、レッツェのサンティ・ニコロ・エ・カタルド聖堂のファサード(→p61)にも見られるが、それをデザインした建築家のジュゼッペ・チーノは1644年生まれであったから、サンタンジェロ聖堂の方が先駆的であり、チーノがこのデザインを参照していたとも考えられる。

それにしてもこのファサードは、まったく無名の建築家によってデザインされたものであるにもかかわらず、明快なコンポジションには目を見張るものがある。余分な装飾を極力排除して計画された平坦なカンヴァスのなかで、入口とその上部に穿たれた窓は、頂点を形成するアーキトレイヴと同調するように中心性を誇示する要素となって

いる。しかしなによりも空白のまま残された、いわば地の部分の面性の方が、見る者に圧倒的な新鮮味を与えてくれるのである。この聖堂は、装飾過剰な南イタリアのバロック旋風に窒息しそうな旅人にとっては、喜ばしい一服の清涼剤といえるだろう。

トリカーゼで必見のバロック建築といえばキエーザ・マードレ(→p65)である。この聖堂は、キエーザ・マトリーチェの異名をもち、むしろ地元ではこの名前で親しまれている。マトリーチェとは「母型の」という意味の形容詞であるから、キエーザ・マトリーチェは文字どおり「母のかたちをした聖堂」という意味になる。この聖堂は1770年に建立された真正正銘のバロック建築であるが、しかしやはりローマ・バロックの形式からは想像もつかないくらい不思議なタブローを身に纏っている。そのデザインには、ルネサンスの様式から脱皮できない不慣れた建築家が、大胆な装飾操作に踏み切れないまま手放してしまったような印象すら感じてしまう。申し訳なさそうに付けられた装飾は支離滅裂感を拭い切れず、最上部にもあってしかるべきベディメントが取り付けられないまま、ファサードは虚ろな空に溶け込んでいるのである。ところがこのファサードには、そんな装飾の不協和音を払拭する大窓がある。ファサードの中央上部に見られる窓は、不思議な形態で穿たれている。下部にゆくほど広がりをもつ柔らかな曲線で縁取られた窓枠は、女性的な優しい印象を直感に訴えるかたちを描いているのである。この聖堂がキエーザ・マトリーチェと呼ばれる理由は、おそらくそこにあるのだろう。つまり母性をほのめかす象徴なのだ。この窓の疑問をめぐっては、地元で路行く人に尋ねてみるのが一番よい。「あれは女性の象徴だよ！」と何の屈託もなくにこやかに答える当たりまえの人々を、この聖堂は日々温かく迎え入れているのである。聖堂が神聖なる器であることにはちがいないが、設計した建築家は所詮生身の人間(当時のことであるから男性の建築家であったことにはちがいない)であり、聖堂に毎日通いつめる住人たちもやはり罪多き人間にすぎない。聖なる精神とエロティシズムは一見矛盾しつつも、いつも隣り合わせの関係なのだ。[SO]



トリカーゼ市街、広場

Galatone

ガラートネ

葡萄畑やオリーブ畑に囲まれた農業地域の都市ガラートネは、中世期まではギリシア人の街であり、14世紀まではギリシア神話を信仰していたといわれている。15世紀になって、医者であり、人文学者であったアントニオ・デ・フェッラリス(Antonio De Ferraris)、通称ガラテオ(1444-1517)の登場によって文芸の中心地になったが、1480年にトルコに強奪され、84年以降はヴェネチアの支配下に属した。マトリーチェ教会(1574)、ドメニコ派修道会のサン・セバスティアノ聖堂(S. Sebastiano, 1612、改築1712)をはじめ、いくつかのバロック期の宗教建築が都市景観のアクセントになっている。[MH]



サン・セバスティアノ聖堂



サン・セバスティアノ聖堂、内部

クロチフィッソ聖堂……p66-71

Santuàrio del Crocifisso, 17-18C

サレント半島において、バロック直前期を象徴するナルドーのサン・ドメニコ聖堂、バロックの開花を告げるレッツェのサンタ・クロチエ聖堂と並んで、このクロチフィッソ聖堂(1683-1711)は、建築的密度や言語・手法だけでなく、建設までの経緯、建設の経過なども含めて、この地域固有の盛期バロックの本質を象徴する建築であるといっている。この地域のバロック芸術の歴史的発展に注目してこれら3聖堂を比較してみると、最も重要な特質である「装飾の熱狂」という普遍的主題の軌跡と変遷が浮かび上がってくる。クロチフィッソ聖堂建設の発端は1621年7月2日に起こった奇跡から始まった。その夜、司教ジローラモ・デ・フランキスはガラティーナへの路上で、ある星の周囲にキリストが現れるのを見た。キリストは彼に教えを説き、奇跡を記念して星を背に小礼拝堂を建てるように命じた。この奇跡譚は当時の民衆を熱狂させ、翌年、デ・フランキスは「奇跡の場所」に大規模な聖堂の建設を開始した。聖堂は24年に完成し、やがて人々の熱心な巡礼地となったが、82年の冬の夜明けに崩壊した。歴史的に見ても当時、封建的搾取に苦しんでいた民衆は他のいかなる時代にもまして経済的窮乏にあり、彼らの「熱狂」は喜びよりは悲しみに向けられやすく、まさに「熱狂的信仰」の対象であった「奇跡」に捧げられた聖堂の突然の崩壊



クロチフィッソ聖堂、扉詳細

は「奇跡」の神秘性を増幅し、社会の「熱狂」をさらに駆り立て、緊急の再建へと向かわせた。83年には教会・大学関係者や地域有力者らが審査員となり、建築家ツィンガレロ、アンジェロ・ディ・ジュリアーノらを顧問に新聖堂のための設計競技が行われ、フランチェスコ会修道士フラ・ニコロ（Fra Nicolò da Lequile、本名レオナルド・ミレリ・ダ・レクイーレ）の案が当選した。新聖堂の建設はこの当選案に基づいて開始されたが、芸術家や職人は全員サレント半島出身者であり、工事は文字どおり関係者全員の「熱狂的」な共同作業として進行し、資金・工期の不足を次々に克服しながら、94年には装飾部分を残して完成し、教会関係者に公開された。そして引き続き聖堂には装飾が施されていたが、ファンツァーゴやツィンガレロの伝統的な流れを汲む彫刻や装飾が工事現場外で数多く制作され、外部においては2段のフリーズとともに組み合わせながら、この地域のバロックの特質であるシンプルな構成手法に基づいて、建築の内外部に過剰なまでに付加されていた。内部空間は重厚な装飾を施した木製の格子天井（→p70）、フレスコ画が描かれたクーボラ、装飾性豊かなオルガン（1699、→p71）が特徴的である。こうしてついに1711年、高密度な装飾に満たされた現在の新聖堂が完成し、時の有能な司教サンフェリーチェによって献堂された。[MH]



Martina Franca

マルティーナ・フランカ

標高431mの小高い丘にあるマルティーナ・フランカは、南イタリアのムルジェ地方で最も高いところに建設された丘上都市である。この都市の起源は10世紀に遡る。当時南イタリアはサラセン帝国の占領下にあったが、そのなかでターラントから避難してきた人々が、サン・マルティーノ山に住み着き、集落を形成していたのである。しかしやがてこの村落も13世紀の初頭には、ターラントの領主であったフィリップ・ダーンジュ（アンジュ家のフィリップ1世）が整備拡張し、その結果自治都市として存立する。サン・マルティーノ山のマルティーナという愛称で呼ばれた町にフランカという名が付け加えられたのは当時のことであった。その後、14世紀には24もの塔をもつ城壁都市として発展し、1338年にはやはりターラントの領主であったライモンデッロ・オルシーニが見事な城を建設した。16世紀に入ると、カラッチョーロ公爵を頂点とする公国として成長する（この公国は一時フランスの侵略をもはねつけるほど強大な勢力を有していたが、1558年にはファブリツィオ・マラマールド率いる軍隊に攻め入れ陥落の憂き目を見た）。17世紀の半ばには、カラッチョーロ家に対し街の鍛冶屋が主導者となった民衆の反乱も起こりはしたが、しかしその封建的支配は1827年に家系が崩壊するまで続いたのである。この街の歴史を俯瞰するにつけ、マルティーナ・フランカが18世紀にバロック都市として発展した背景に、カラッチョーロ家の揺るぎない権力を認めないわけにはいかない。良かれあしかれ、都市は強大な権力のもとで一つのハーモニーを獲得するものなのだ。マルティーナ・フランカのチッタ・ヴェッキア（旧市街）へは、まず1763年に建造されたサン・ステファノ門をくぐることから始めるとよい。この門には、騎兵隊率いるサン・マルティーノの雄姿



マルティーナ・フランカ市街地図

が彫刻として刻まれているが、この人物はファブリツィオ・マラマールドによって侵略された街を解放したマルティーナ・フランカの英雄であった。つまりこの門は、自治権の回復に貢献した英雄を讃える記念碑なのである。サン・ステファノ門を抜けるとすぐに三角形の平面形をしたローマ広場が迎えてくれる。ここにこの街最初のバロック建築といわれるパラッツォ・ドゥカーレ（Palazzo Ducale）がある。元来この場所には14世紀の城が存在していたが、カラッチョーロ家のベトラコーネ5世の指揮でそれを取り壊し、1668年に新しい街の顔となる豪勢な宮殿を建設したのである。今日このパラッツォは、市庁舎および図書館として使用されているが、とりわけ「アルカディアの部屋」を飾る画家ドメニコ・カレラのフレスコ画は、格調高い芸術として高く評価されている。マルティーナ・フランカのバロック建築の特徴は、パラッツォに囲まれたバロックの香り漂う街路空間にあるといってもよいだろう。街中のほとんどすべてのパラッツォは、どこかしらバロックの装飾で彩られており、快いハーモニーとなって訪問者を包み込んでく

れるのだ。純白というよりはむしろ黄味を帯びた乳白色が印象的な空間で、パラッツォは要所となる窓の周辺にバロックの小粋なアクセサリを従えている。バルコニーには繊細な曲線を描く鉄の手摺りが取り付けられているが、その素朴な美は17世紀に民衆のリーダー的存在であった鍛冶屋の自信を偲ばせている。なかでもパラッツォが立て続けに並ぶカヴェール通りは、白い壁面に彫刻を埋め込んだ装飾博物館さながらの様相を呈している。地となる壁が白いため、図である装飾はいつそう引き立って見えるのだ。

この街の宗教建築もまたバロックのモードで染められていたことはいまでもない。代表的なものとしては、1730年に改修されたカルミネ聖堂、1747年から75年にかけて改修されたサン・マルティーノ聖堂（コッレジャータ、→p73）、サンタ・マリア・デッラ・ミゼリコルディア女子修道院、1760年に改修されたサン・ドメニコ聖堂（→p72）が挙げられる。これらはすべて一部に中世の名残を見せつつも、見事なまでにバロックで塗り変えられた建築なのである。[SO]



パラッツォ・ドゥカーレ



サン・ドメニコ聖堂



サン・マルティーノ聖堂

【撮影後記】

ずいぶん旅をした。いったい人類は何をつくったのだからと、とりあえず人間の創造の限界をすべて見ておきたいというような気持ちからだった。

ここ数年、そのひとつの限界ともいえるべき「スペインのバロック帝国」に熱中している。

バロックという時代、人間の宇宙観は天動説から地動説へと変わり、宇宙は無限に開かれていった。無限の発見によって、科学が人間の精神を解放し「近代」の基礎を構築する。この時代、この無限の感覚を追求していった建築を正統なバロック建築と呼ぶならば、それらは「近代」へと繋がる普遍的な回答への模索だったともいえる。ポッロミーニに始まるローマから北で活躍した人たちの仕事があるだろう。

それに対して、この時代に世界を席巻していたスペイン帝国とその植民地におけるバロックはずいぶん違った方向性をもっている。スペインの7世紀におよぶイスラムの支配の影響や、新大陸における古代文明の影響などが地域の伝統として強く作用したためと思われる。

私がすごいと思ったのは、これらに見られる「近

代の正義」と「地域の伝統」とのせめぎあいだ。それは異なる文化の出会いというようなロマンチックなものではない。人類全体に普遍的な価値基準をもたらしていく「近代」というものの始まりが、早くもこの時代にそれぞれの地域や民族の伝統がもつ「地域性」にぶつかっている。そこから生じたおさまりのつかないさまざまな矛盾や断絶を取り込んで、感動に変えて見せたエネルギーをすごいと思ったのだ。

そのなかではシチリアとレッチェにおけるバロックは比較的端正で優雅なものだ。スペイン帝国の植民地でありながらも、地理的に本国スペイン以上にローマ以北の先進的な情報が入りやすかったことや、古代ギリシア、ローマなどの文明が古くからこの地方に影響を及ぼしていたことなどからくるのだろう。

スペインのバロックは新大陸へ渡り、あのウルトラバロックとなって激しく大輪の花を咲かせる。その一方で、スペインのヨーロッパ内の領地で美しく優雅に花開いたシチリアとレッチェのバロック。当時のスペイン帝国が各地に残したバロックは多彩かつ膨大で、いつになったら撮り終わるだろうと途

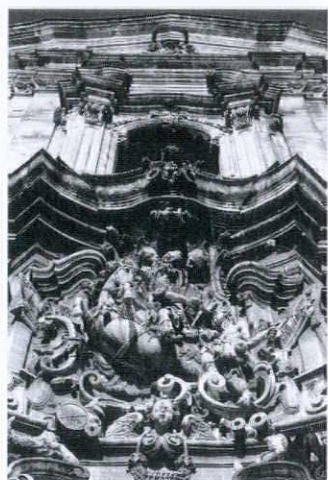
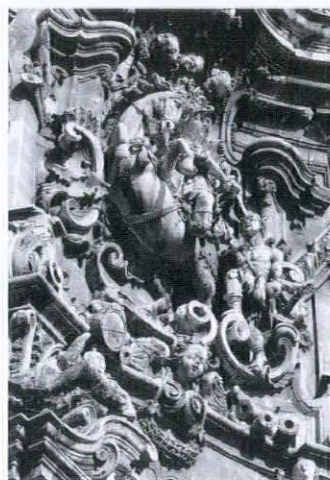
方にくれてしまう。よくもこんなにつくったものだ。

今回の南イタリアのシリーズは、1991年の3月から9月にかけて撮影されたものである。もともと建築設計が本業だったので写真は独学ということもあり、とにかく撮ることへの情熱だけがたよりの無謀な撮影旅行だった。

三次元の建築そのものもつ力を損なうことなく、二次元のフィルムに静かにうつしかえることに試行錯誤した。自分が出すぎると建築そのものの魅力が見えにくくなる危険があるので、図面を引いているような色気のない作業に徹したつもりだ。もともと写真というのはいわゆる「文書＝もんじょ」だと思っている。特に建築写真は記録性が一番大切で、その追求の先に芸術性にまで到達できる写真があると信じている。

これからは歴史と現代との接点を見出すために、膨大な記録写真を集積させ構築する「写真の建築的組み立て」というようなことをやっていきたいと思っている。

●小野一郎



サン・マルティノ聖堂、マルティナ・フランカ

【参考文献および図版出典リスト】

- Wolfgang Krönig, *Monumenti d'arte in Sicilia*, S.F. Flaccovio Editore, Palermo, 1989
- Salvatore Boscarino, *Sicilia barocca: Architettura e città 1610-1760*, Officina Edizioni Roma, 1981
- Anthony Blunt, *Barocco siciliano*, Il Polifilo, Milano, 1968
- Mario Manieri Elia, *Barocco leccese*, Electa, Milano, 1989
- Guida d'Italia del Touring Club Italiano—Sicilia*, Milano, 1989
- Guida d'Italia del Touring Club Italiano—Puglia*, Milano, 1978
- Rossella Barletta, *La civiltà del Salento*, Schena editore, Fasano (Brindisi), 1990
- De Vergori Lecce ed., *Lecce—Città barocca*, Kina Italia, Milano
- C. Norberg-Schulz, *Architettura Barocca*, Electa Editrice, Milano, 1979
- Guida rapida d'Italia—Campania, Puglia, Basilicata, Calabria, Sicilia*, Touring Club Italiano, Milano, 1983
- Guide de Agostini—Sicilia*, Istituto Geografico de Agostini, Novara, 1989
- Francesco Carofiglio, *A Tourist's Guide to the Culture of Apulia*, Mario Adda Editore, Bari, 1988
- V. Zacchino - F. Potenza, *Guida di Galatone*, Galatone, 1991

Ostunitour—Guida di Informazione, Ostuni Villaggio in Martina Franca—Pianta topografica J.サマーソン『18世紀の建築——バロックと新古典主義』(堀内正昭訳) 鹿島出版会、1993

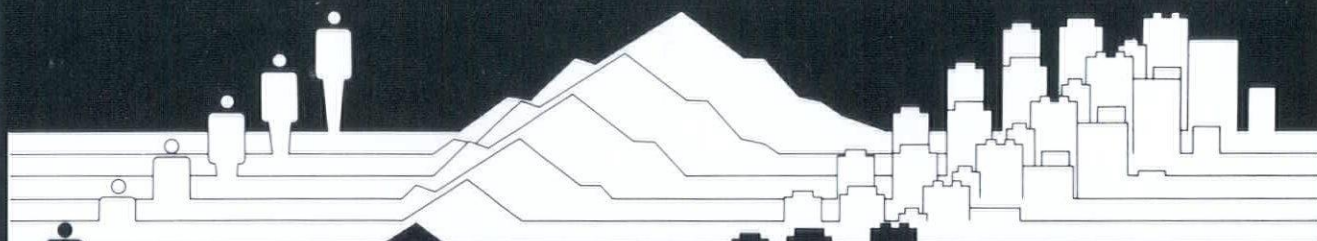
【略歴】

- 小野一郎 (おの・いちろう)
- 1960年 京都生まれ
- 1983年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
- 1985年 同大学院修士課程修了
- 1985～88年 日建設計勤務
- 1988～90年 ユニテ設計・計画勤務
- 1990～92年 イタリア南部、メキシコ撮影
- 1992年 一級建築士事務所 設計機構、設立
写真展「バロックのラテンアメリカ」開催
- 1994年 メキシコ、キューバ撮影
- 竹山博英 (たけやま・ひろひで)
- 1948年 東京生まれ
- 1972年 東京外国語大学イタリア語学科卒業
- 1976年 同大学院ロマンス語系言語専攻科修了
イタリア文学、民俗学専攻
- 著書：『シチリア・神々とマフィアの島』『マフィア
シチリアの名誉ある社会』『シチリアの春——世紀末
の文化と社会』(いずれも朝日選書)ほか
訳書：C.ギンズブルク『ベナンダンティ』同『闇の
歴史』(せりか書房)、P.レーヴィ『周期律』(工作舎)同
『今でなければ いつ』(朝日新聞社)ほか

- 長谷川正允 (はせがわ・まさのぶ)
- 1954年 静岡生まれ
- 1977年 早稲田大学建築学科卒業
- 1979年 同大学院修士課程修了
- 1982～84年 イタリア政府給費生としてローマ大学
建築学部に留学、C.デルティに師事
- 1985年～ 長谷川正允建築事務所主宰
- 1993年～ 早稲田大学非常勤講師
- 訳書：G.C.アルガン『ポッロミーニ』(鹿島出版会)、
L.ゴッビ、F.モラーチェ他『ブーム——イタリアの企
業・デザイン・社会』(共訳、鹿島出版会)
- 岡田哲史 (おかだ・さとし)
- 1962年 兵庫生まれ
- 1988年 早稲田大学理工学部建築学科修士課程修了
- 1989年 コロンビア大学建築学部大学院修了
ローマのアメリカ・アカデミーに学ぶ
- 1990～92年 早稲田大学理工学部建築学科助手
博士課程修了、工学博士
- 1993～94年 日本学術振興会特別研究員
atelier a+aにて設計活動再開
- 1994年～ 早稲田大学、東京電機大学非常勤講師
(92年～)
- 著書：『ピラネージの世界』(丸善出版事業部)、『ピ
ラネージと「カンパス・マルティウス」』(共著、本の
友社)、訳書：『ヴァイオレイテッド・パーフェクシ
ョン』(共訳、a+u)ほか

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それを取りまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。

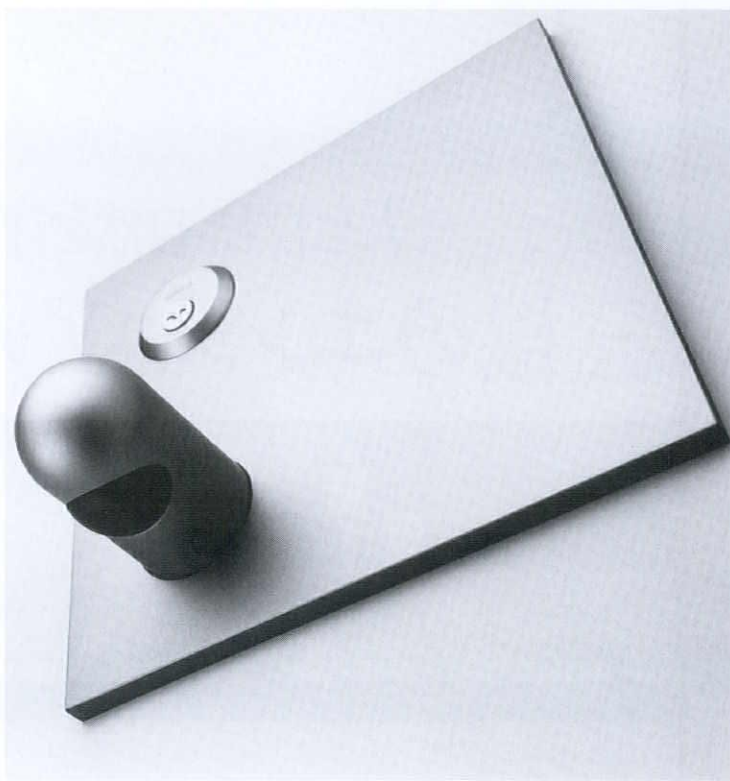
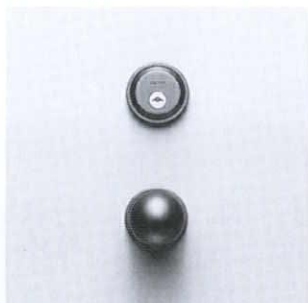


三機工業株式会社

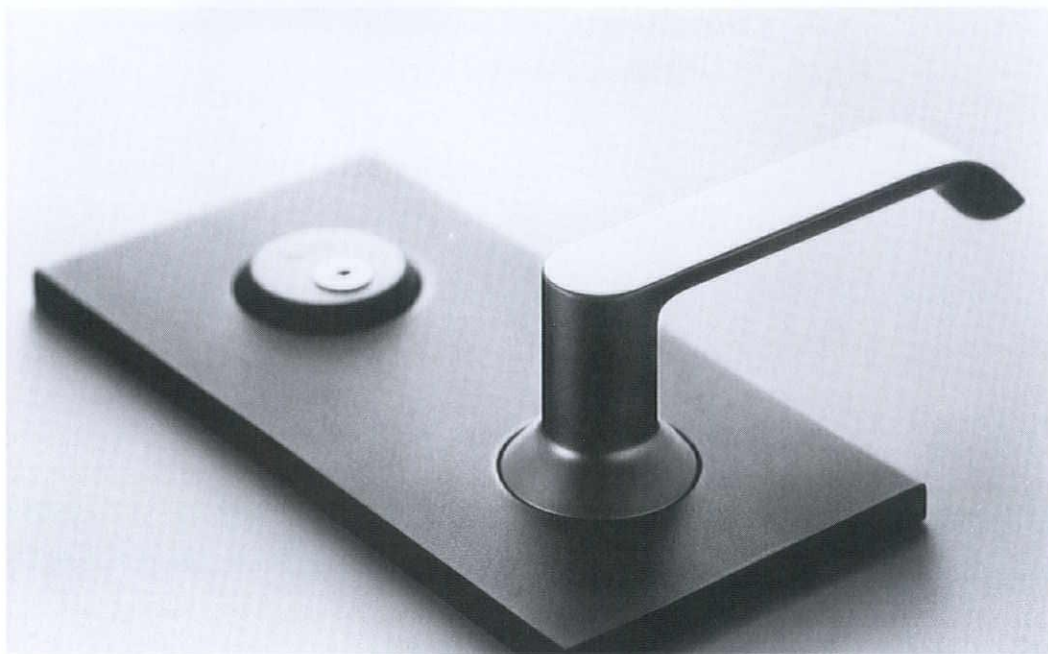
本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

●世界のロックメーカー

なぜINTERFAC



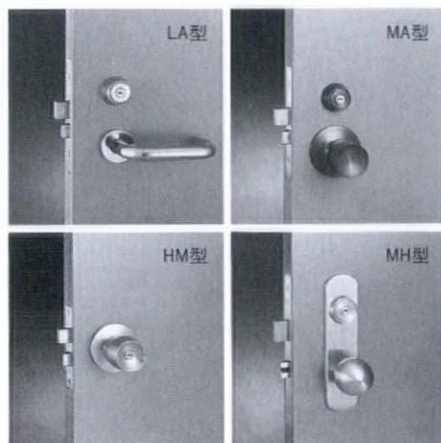
INTERFACE



Eは生まれたのか。

いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する耐破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用いただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせません。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。



時代を先取りしたロックINTERFACE。

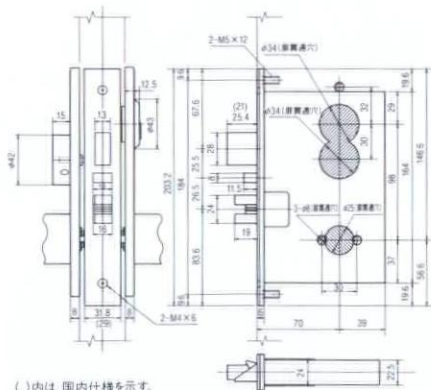
ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。



()内は、国内仕様を示す。

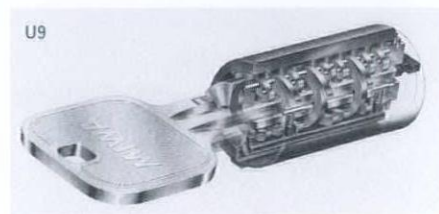
●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとはほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少もありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エスカチオンは自由な組み合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることで、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます

記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side / 室内側 Interior side	常時、内外のハンドルでラ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンド ルターン、外からは非常開錠 レバーを操作すると、外ノ ブを操作すると、外ノ
F21	一般居家用		ラッチボルトは内外のハンド ルターン、内からはサムターンで開
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンド ルターンの操作で施錠され、サ ムのハンドル操作によりハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

ありがとうございます。おかげさまで50周年。

美和ロック株式会社 〒105 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551代

50
創立50周年

いいものだけを世界から

セラミック、即 強靱。

インダストリアルエリアの問題解決。



アルゲリートはドイツで開発された高品質のセラミック系タイル。“セラミック”というだけに、もちろん“強靱”が第一の特性です。荷重や衝撃に抜群の強度を発揮しますから、他とは違って、まずおすすめしたいのが重量物を扱う各種生産工場、自動車整備工場など。そして水が浸透しにくく、油、アルカリや有機酸にも強いことから食品加工工場にも最適。メンテナンスもとても楽です。タイルといっても滑りにくく、安全性の高いのもアルゲリートならではの特性です。色はおしゃれなレンガ色の落ち着いた色調がベース。これまで味気なかった生産環境を、快適なスペースとして演出できます。

アルゲリートのハードな特性

- 強い衝撃に耐える抜群の強度と優れた耐摩耗性。各種の工場床に最適です。
- 水の浸透をおさえ、酸・アルカリなどに強いので食品の工場にも最適です。
- 滑りにくく安全です。あらゆるウエットスペースに最適です。
- 傷がつきにくく、酸・アルカリや油にも侵されない堅牢性、保守・維持管理が容易です。
- 新技術のバイブレーション工法により、平滑でしかも目地が目立たないうえ、下地と一体化した床となります。
- 基本色は豊かに8色。それぞれ平滑仕上げとノンスリップ仕上げがあります。

セラミック フロアタイル
argelith アルゲリート

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部
東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105
TEL. (03)3452-4311

資料請求券
SD

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

シリーズ：現代建築の新世代8（最終回）
——カオスのヴェールの隙間から

Series: The New Generation in
Contemporary Architecture 8(end of series):
Through the Cracks in the Veil of Chaos



小李克弘

Katsuhiro Kobayashi

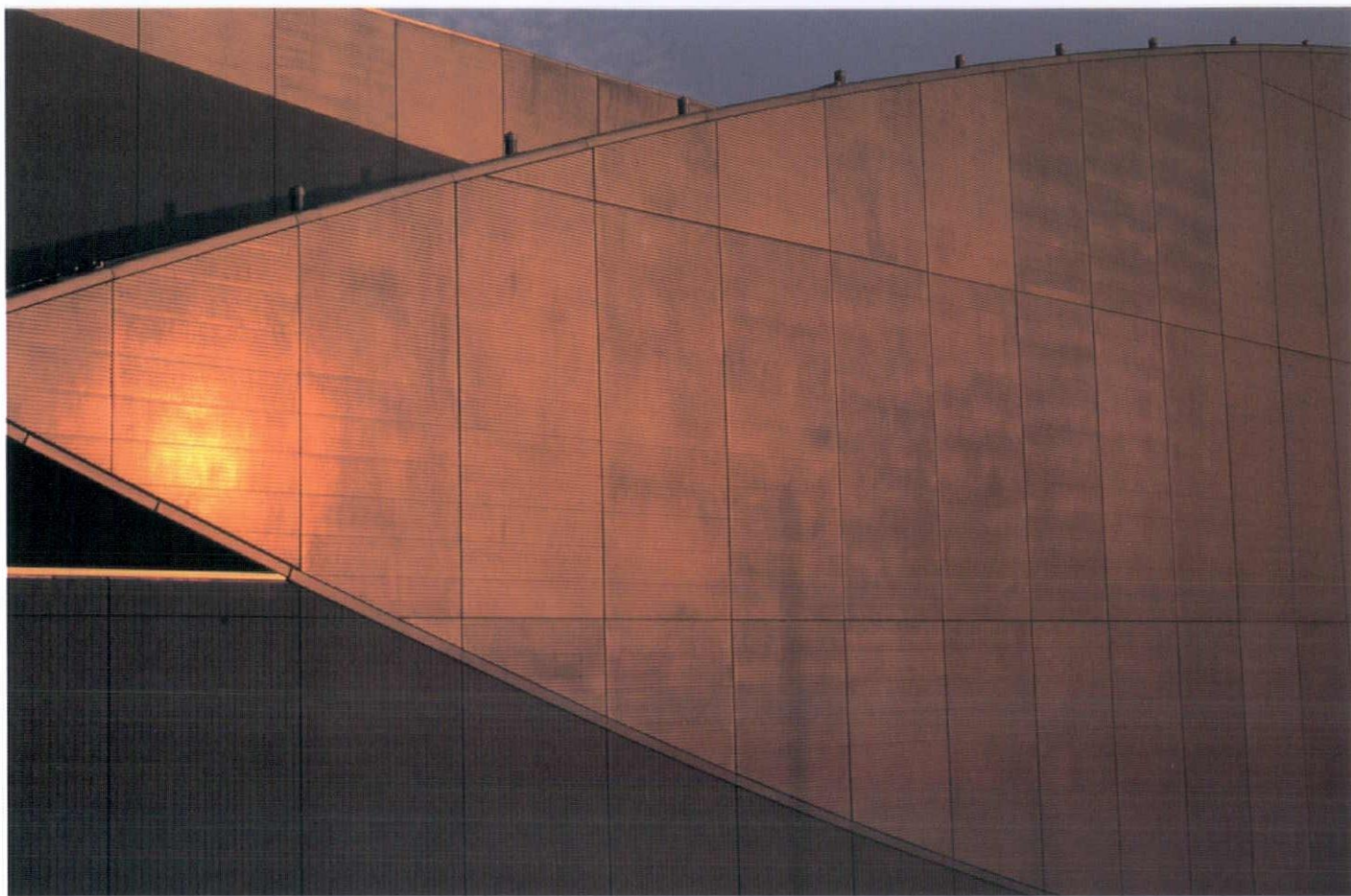
写真＝浅川 敏

文＝飯島洋一

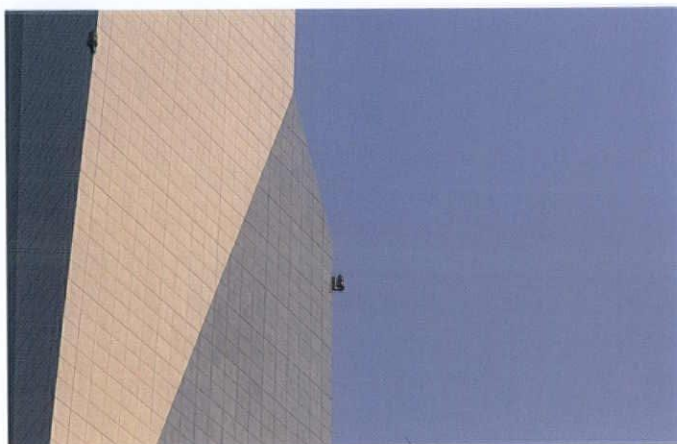
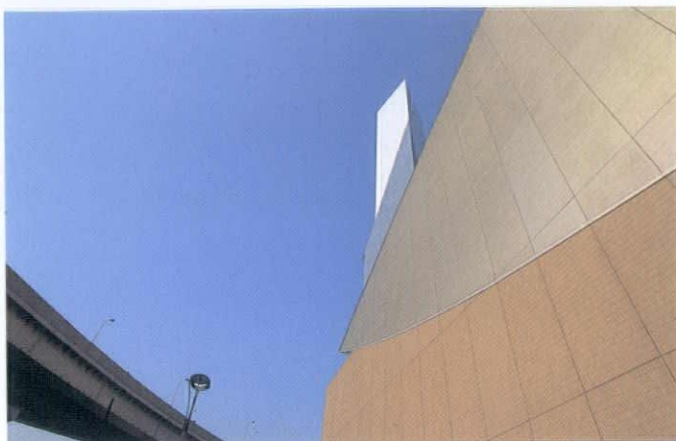
Photographs by Satoshi Asakawa

Text by Yoichi Iijima

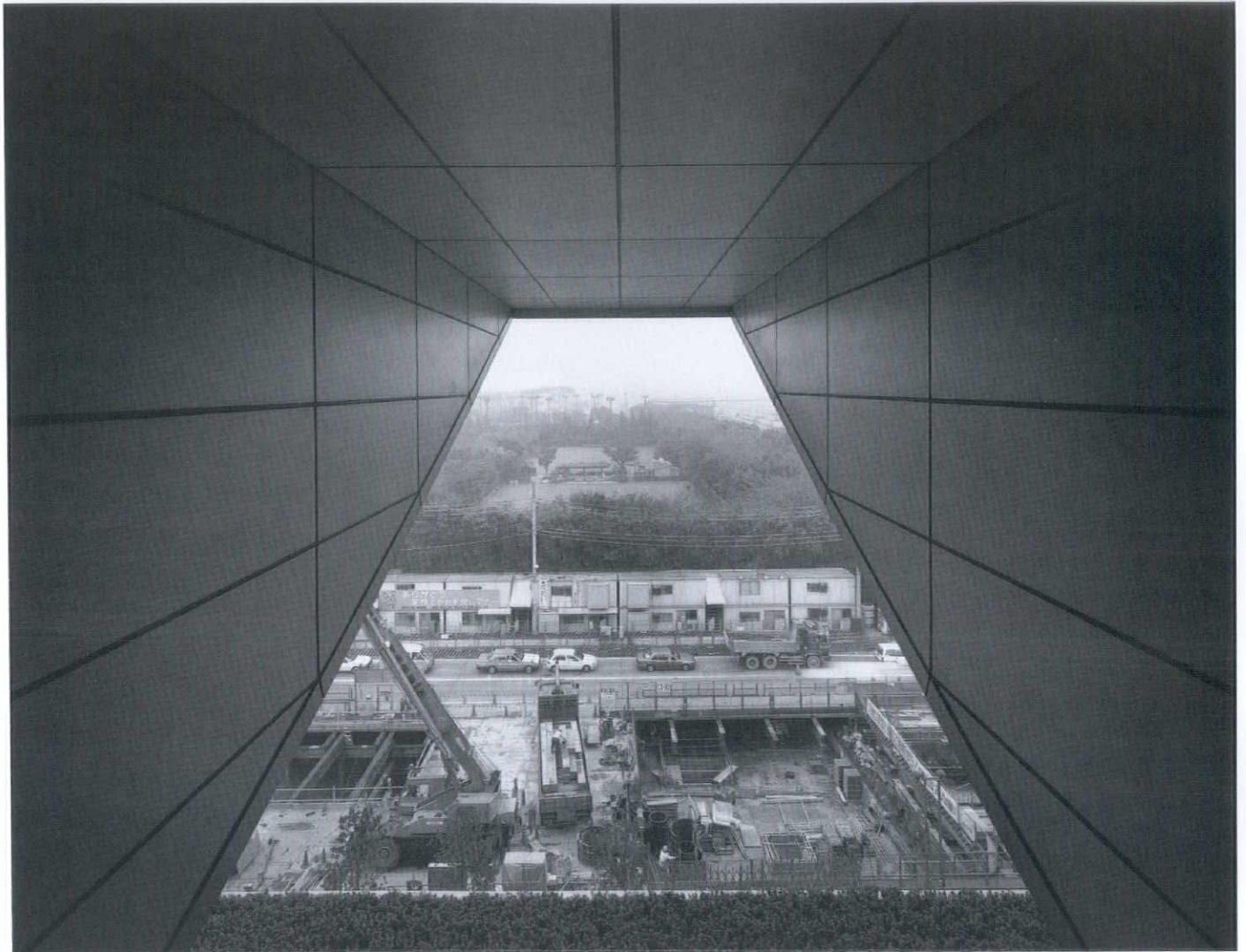






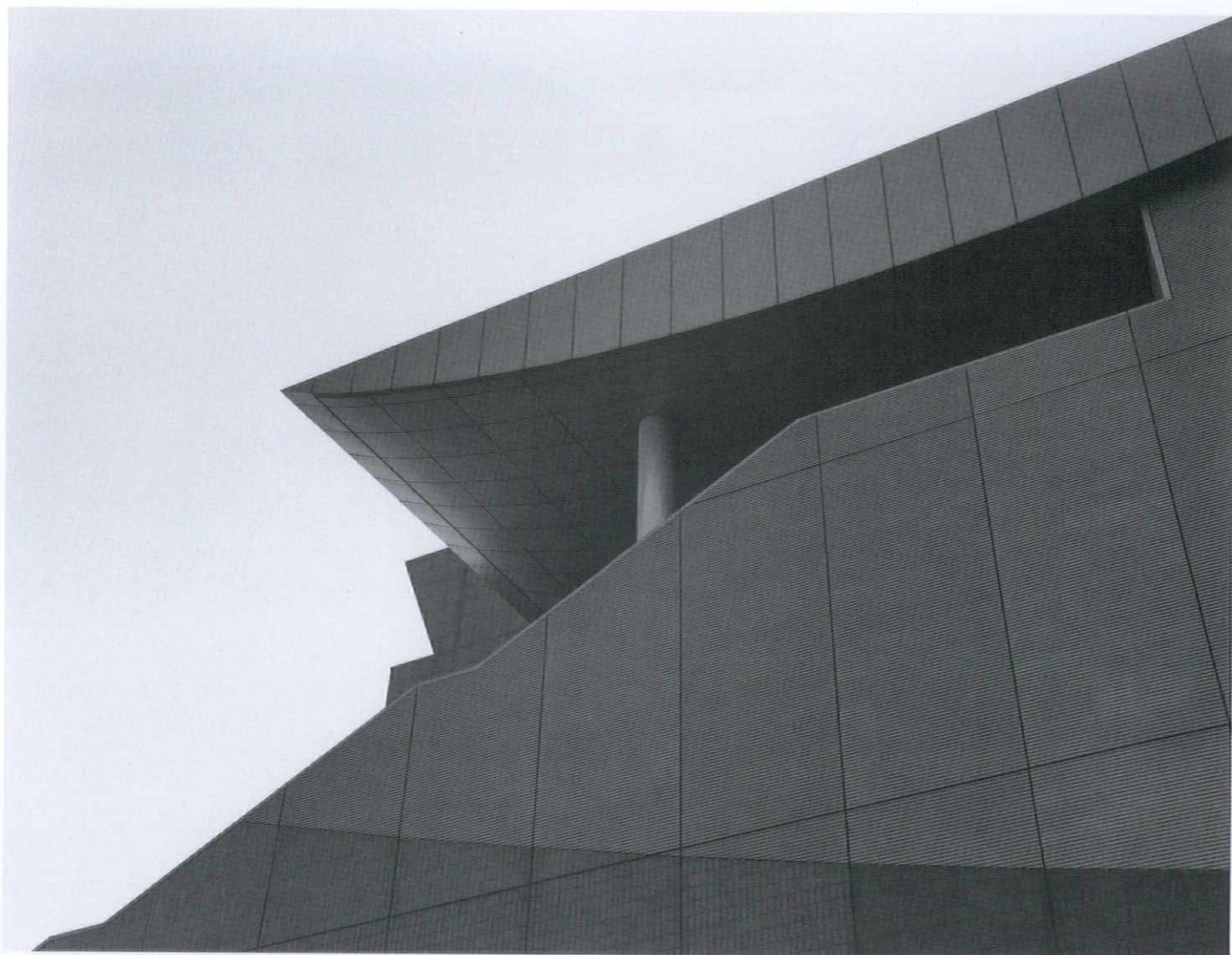


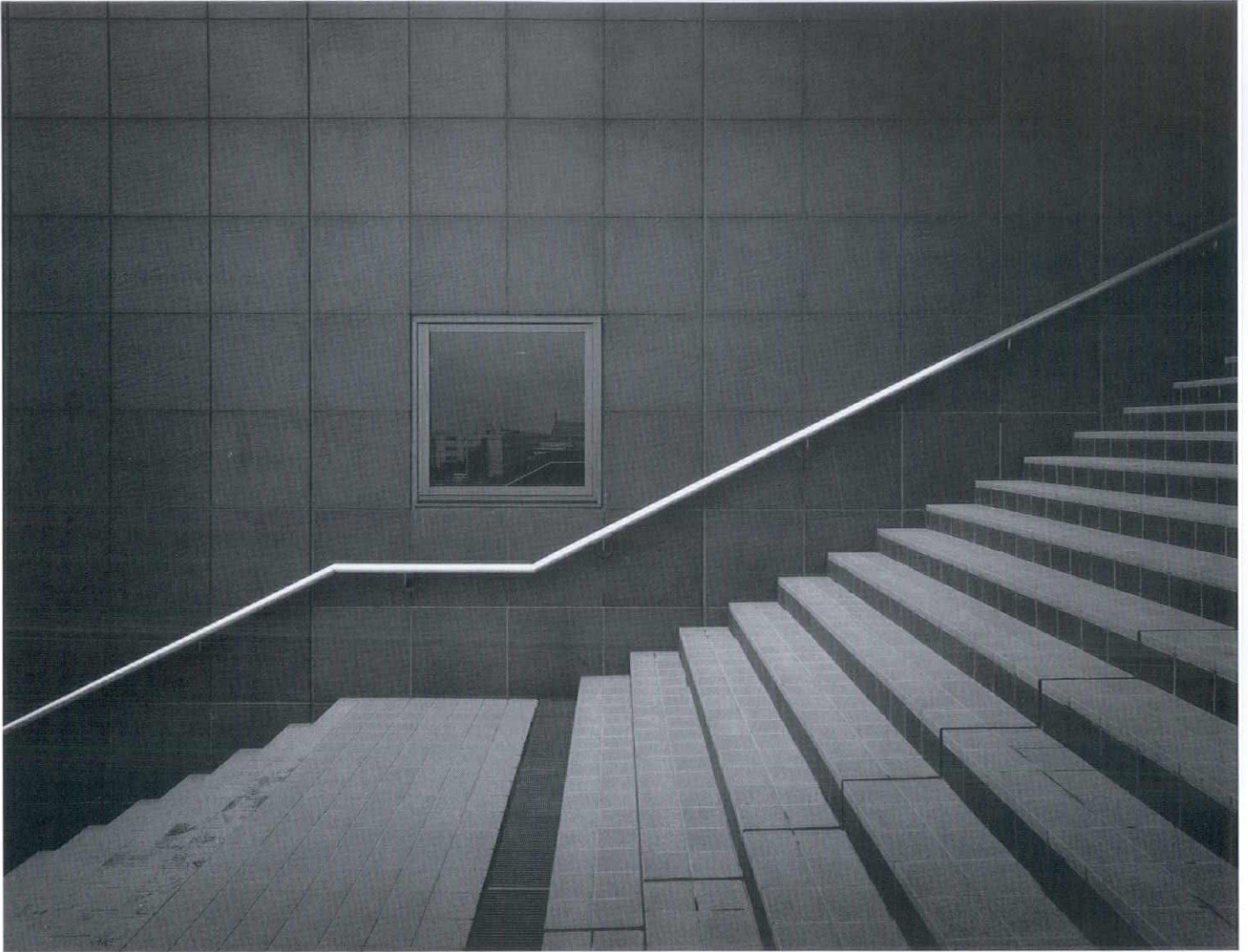




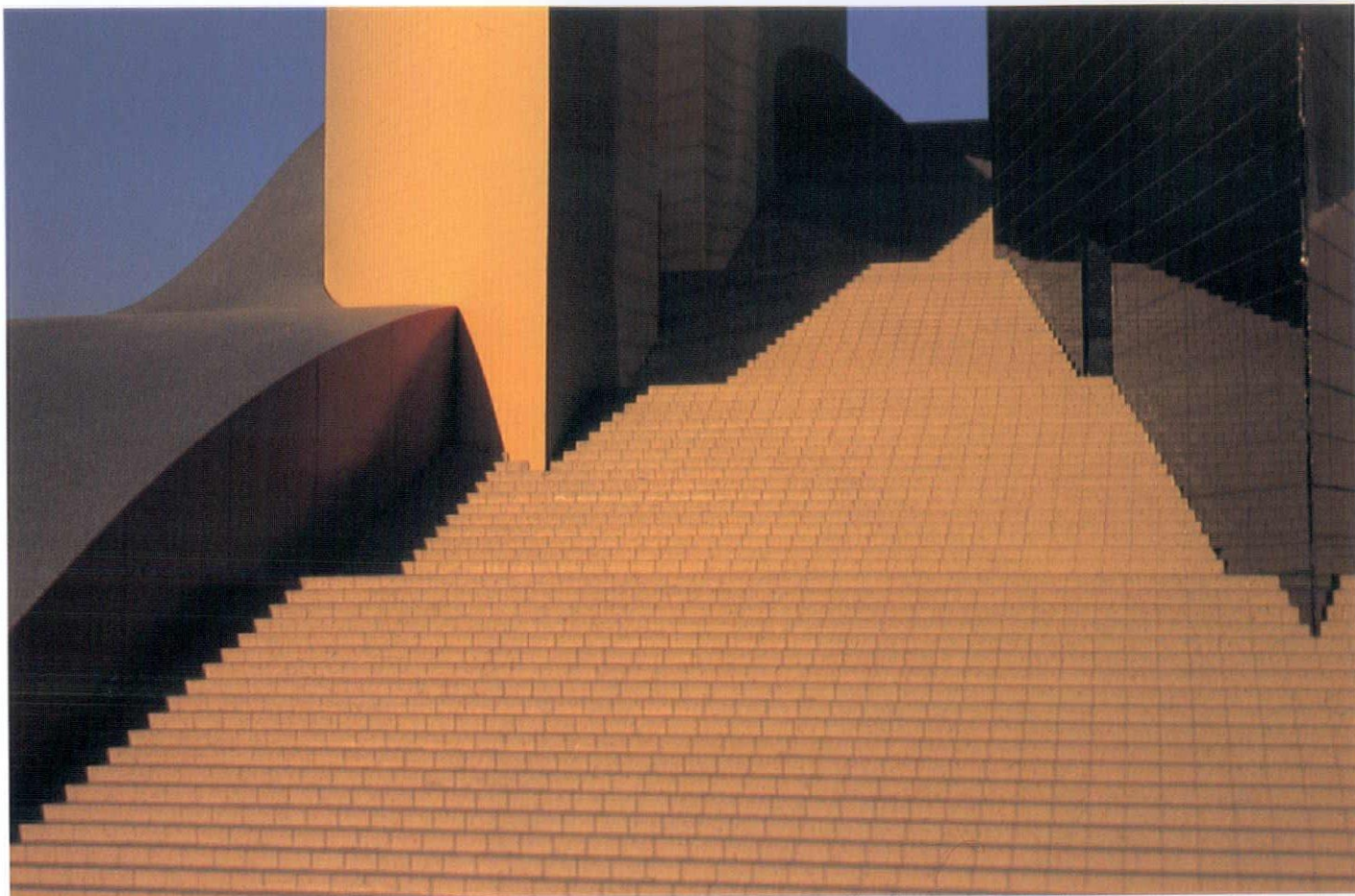


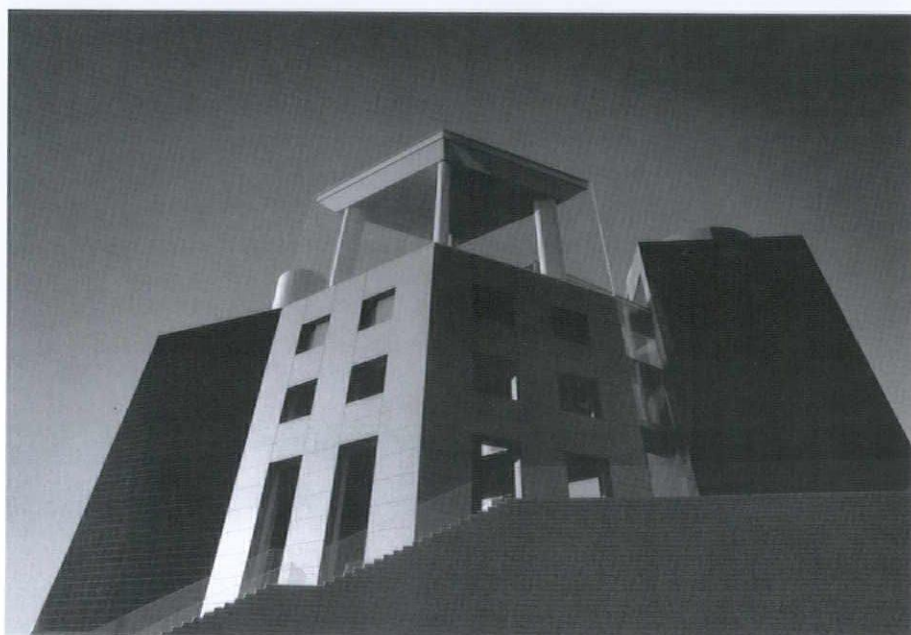
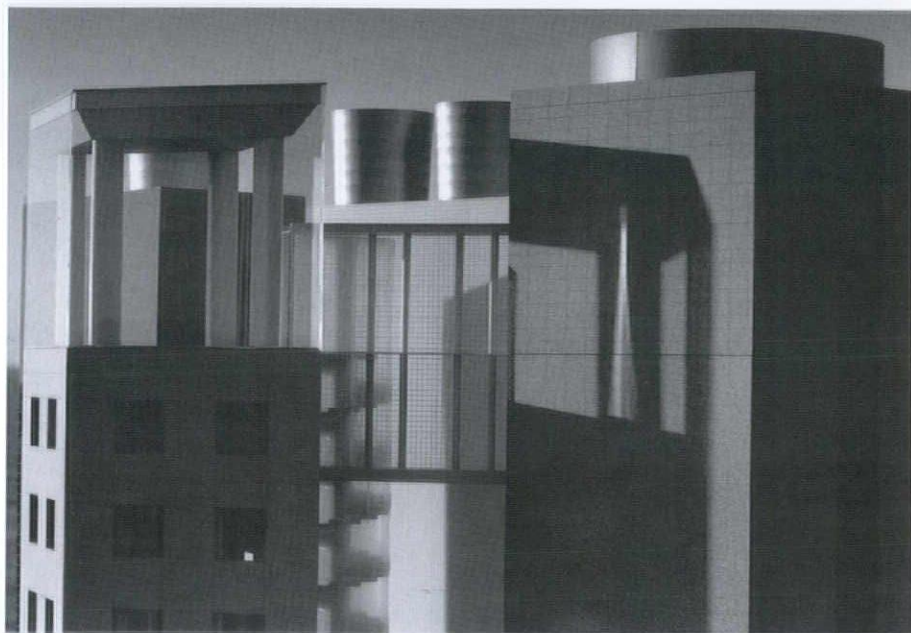
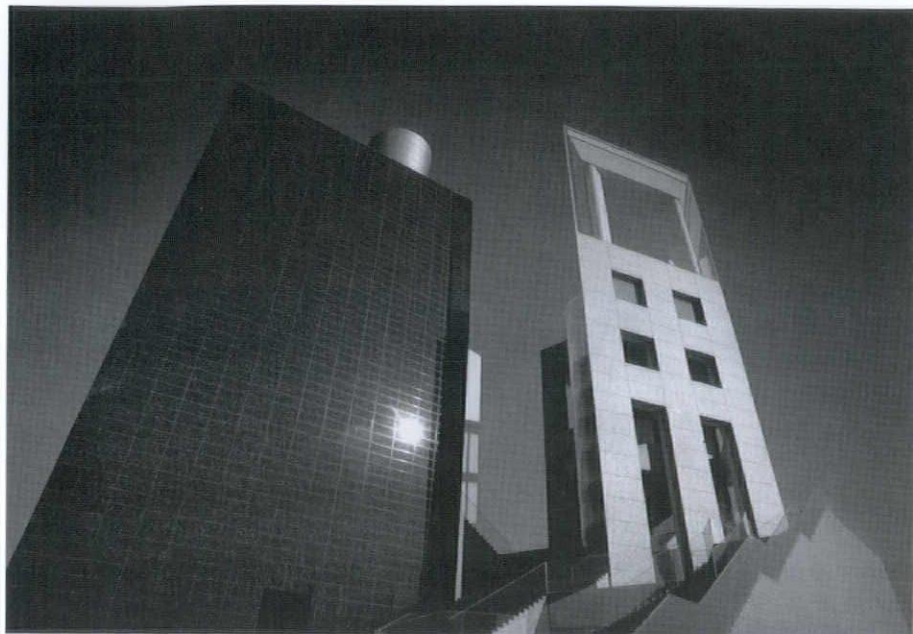


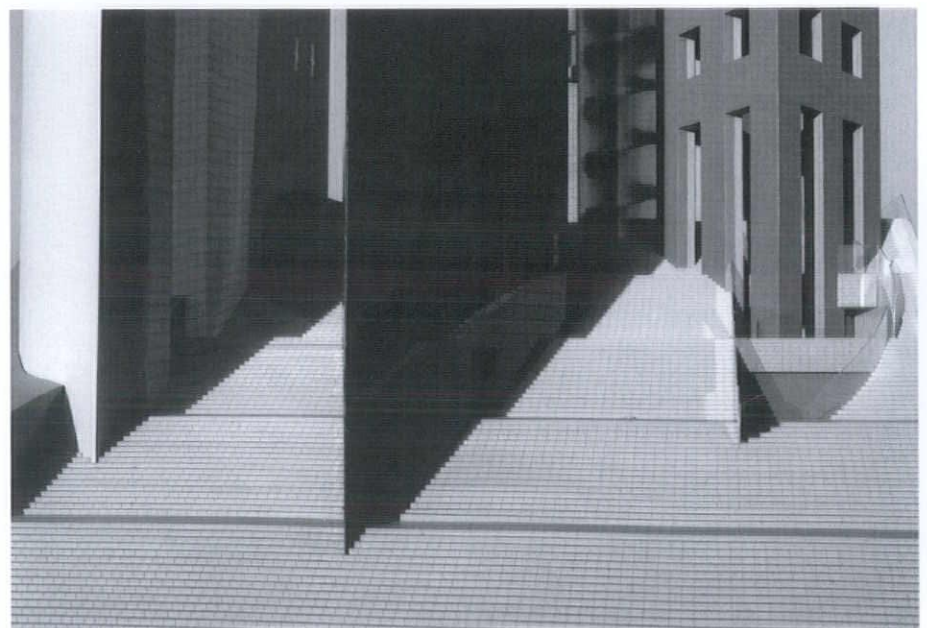
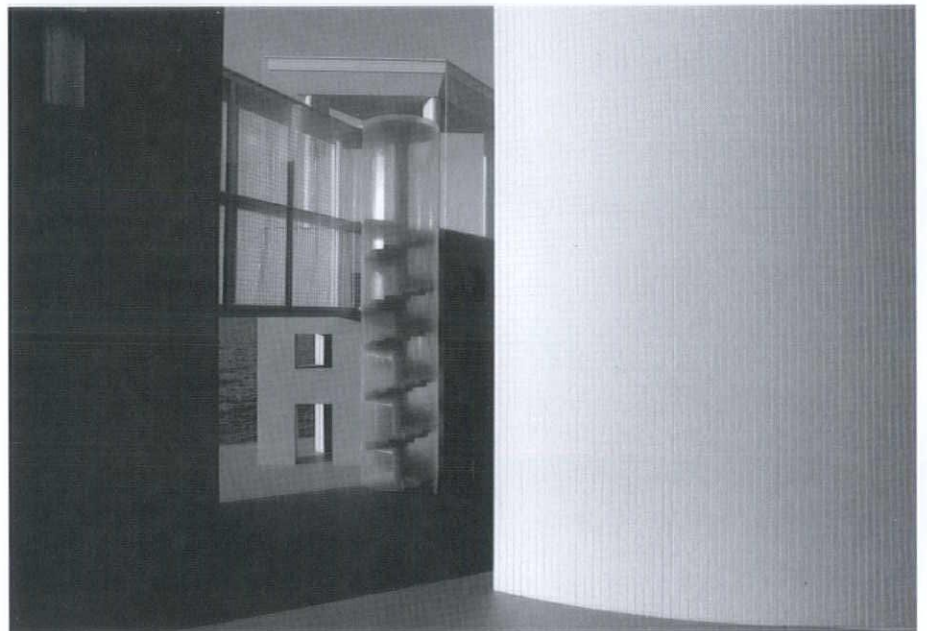
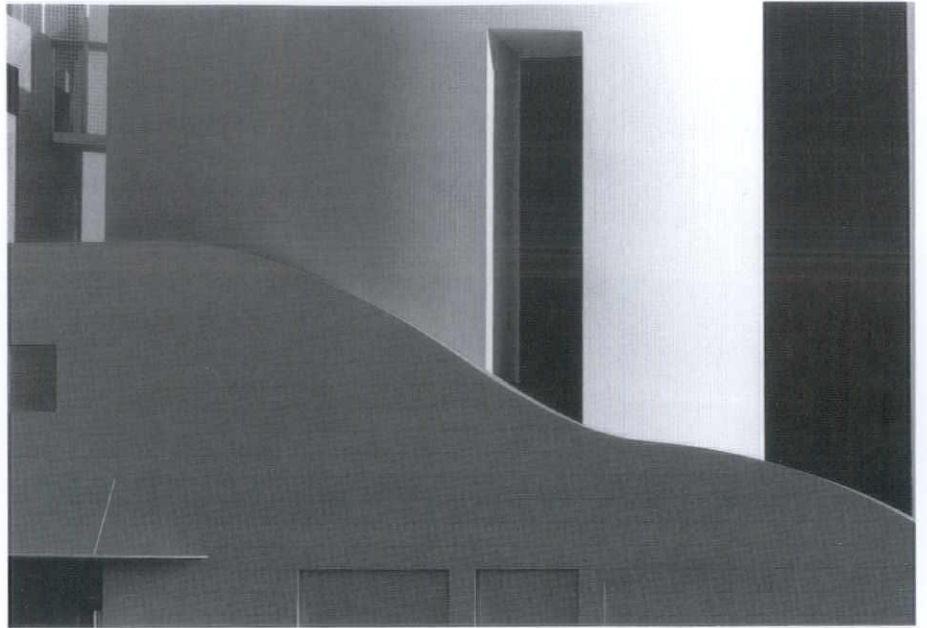


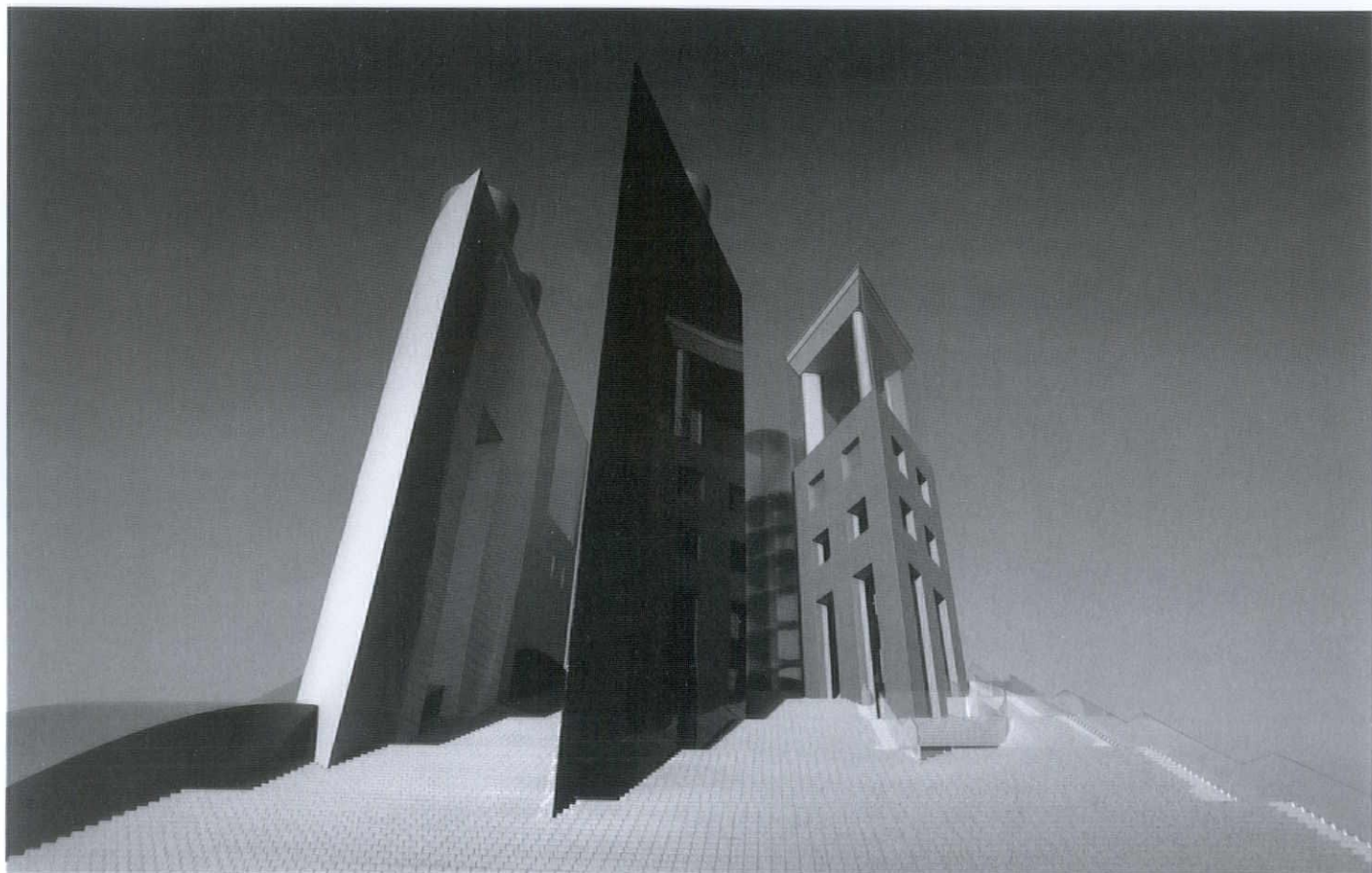












1. 構築の意味

一般に小林克弘は「構築的」な建築家だ、と思われているようだ。とりわけラジカルな作品を次々と発表してゆく彼と同世代の若手建築家たちの一群とを較べると、小林の発表する作品は確かに彼らと違って、堅実で非拡散的な印象を受けるものかもしれない。そうした彼に対する「構築的」とあるという評価は、具体的にはどういう部分でなされるものなのだろう。このことは言い換えれば、「構築的」とは何を指しているのかという問いでもある。いま、「構築的」とは一体何か……。

今日いうところの「構築的」とは、まずある何らかの「規範」を有しているということだと思われる。それも浅く、柔な規範ではない。歴史的な「重み」とでもいうべきものが、そこには継承されているのだ。その歴史的、時間的連続性、重みを大義にしているから、それは人々の前でつねに「構築的」であり得る。構築とはすなわち、ある伝統的時間の流れによって保証され、社会的にも認知されている頑強な体系であり、通念であり、神話であり、ある種の権力なのである。

そうした視点で眺めた時、建築における構築性とは、近代的な日本の建築状況から見て、和風ではなく、西欧より輸入した「大文字の建築」であることが、ほとんど自動的に見えてくるはずである。西欧社会に連綿と継承された「建築」、ギリシア以来の古典主義的な様式の流れを、今日の「構築性」とするのがもっとも自然な観点であるということだ。そしてそのクラシズムをボキャブラリーとして意図的に使用する場合に、「構築」は今日、一つの顕著な権威的な事例として、人々の前にその明確な姿を表わすのである。

ところで小林克弘は、しばしばこの西欧的なイメージを好んで使ってきた。その際に注意しなければならないのは、古典様式の使用もしくは引用に関わる、ポストモダニズムとの差異である。というのも、ポストモダニズムもまたクラシズムを使用しているからである。ただ結論を急げば、ここでいう「構築的」という意味は、いわゆるポストモダニズムとははっきりと別種のありようとしなければ

なるまい。

ポストモダニズムには、基本的には西欧の構築性や普遍主義への不信感が根底にあるスタイルである。それに対し小林の古典に対する構えには、不信どころか大真面目にそれを受け入れ、憧憬する姿勢が見られる。ポストモダニズムが古典に対して「思い」に欠ける、あるいは「思い」を断ち切るところに自分を賭しているのに較べ、小林が「思い」を露呈しているということである。

それでもまだわかりにくければ、さらに具体例をあげてみようか。たとえば彼と同世代の隈研吾も古典を引用する。そして小林克弘も古典を引用する。しかし結果として提示される古典様式を標榜するこの両者の作風の溝と距離は、とても深く、遠いのだ。

確かに、小林の作品には、わざと軸線をずらして見せたりするような、歪みの演出も発見できる。小林もただ単純に、古典と向いつているわけではないからだ。しかしそれだからといって、小林の「建築」に対する信念までが揺らいでいるということにはなるまい。軸の多少の崩しによって、小林を構築的でないとは、誰も考えはしないのである。小林克弘はやはり依然として「構築的」な建築家なのだ。まずこの前提を素直に受けとめてみる。ところから始めてみよう。

小林が構築的な建築家だということは、以上のような理由でとりあえず了解し得ることとなった。ただ当然のように、ここでの論旨はそれをいまさらのように反復し、再生産してみせることにはない。それどころか、この論では逆に、そうした既成事実をいったん認めた上で、その構築性を転倒させることをしてみようと思うのだ。しかもそれを、小林の作品を使ってやってみようのである。

2. 古典への憧憬

小林が構築的な作家と見做されてしまう理由は、いま言ったことから明らかなように、彼が古典的モチーフを好んで使うことに由来する。たとえばその傾向のいくつかは、彼がアモルフにいた時に、竹山聖と協同で行なわ

れた設計競技案に早くも表われていた。たとえば「第二国立劇場」(86年)、「愛知県新文化会館」(86年)、「湘南台文化センター」(86年)などがそれに当たる。

まず「第二国立劇場」だが、このシリンドラ状のモチーフをもった、きわめて求心性の強い作品は、彼らの言によれば「西洋の伝統に基づく舞台芸術のためのもの」であり、そのため幾何学性や求心性や対象性、軸性などの「古典的造形原理」を導入したという。さらにそこに日本的な美意識も加味し、一種のイメージの折衷的な様相を演出するというのがねらいだったようだ。

もちろん彼らが主張しているのは様式の折衷ではなく、自分たちが断言しているように「強い建築形式」を作品に配置している部分にある。これは繰り返になるが、中心のない、ポストモダニズム的な折衷主義、遊戯性と自分たちとははっきりと違う位置にあることを明言していることでもある。実際この後の小林と竹山の個別の活動を眺めていっても、ポストモダニズム的な作品はほとんどつくられていない。

またそうした彼らの頑ななともいえる構築的な態度は、次の「愛知県新文化会館」において、より鮮明なものとなっている。彼らはこの作品を名古屋城をイメージに据えた垂直に機能を積み上げた建築であるとしているのだが、もちろんそのシンボリズムは置くとして、出来上がった作品はとても日本的とは思えない古典様式である。

二つに分断され、敷地の真ん中に道が走るこの計画では、分断された敷地の片方に立方体、その上に切り妻の交錯するペディメント風の屋根が載せられた建物が置かれている。そしてこの「古典的な箱」とでもいうべき建物には、地上レベルでは劇場的な大階段が巻きつき、屋上階には屋上庭園、野外劇場がつくられ、ルーフパヴィリオンが浮び、さらに地上階ではクシ型の壁がその周りを取り囲んで外部との境界を生み出している。一方もう片方の敷地には同じクシ型の壁が全体を囲み、中央に円錐形が配されている。それは結果的に、寡黙で、たとえばアルド・ロッシの作品

を思い出させるような広場となっている。

さらに[湘南台文化センター]に至ると、強い対象性こそ意図的に攪乱させているものの、切り妻屋根によって静的に構成された配置は、やはり古典への彼らの強い意志を感じさせずにいない。しかしここで形式へのより鮮明な表明がなされているのは「市民プラザ」と名づけられた中央の空間であって、そこではメソポタミアの象徴として「バベルの塔」、エジプトの象徴として「ピラミッド」、ギリシアのアクロポリス、ローマの水道橋、ルネッサンスのコロネードが配されている。

何度もいうが、こうした最初期の作品はクラシシズムに強く傾斜しているものの、決してデータとして引き出されたモチーフではないのだ。そこには彼らの古典への、あるいはアルカイックなものへの強い憧憬がある。後に隈研吾が[M2]において、イオニア式の柱をほとんど偶発的に引き合いに出したのに対し、彼らはある痛切ともいえる「思い入れ」と「情熱」とをもってそれらを配していることは繰り返し強調しておこう。

彼らが情熱を抱いて追いつけたた古典の「形式性」は、小林の場合、[会津鬼怒川線・上三依塩原駅設計競技応募案](86年)、[世田谷線宮の坂駅・界隈づくり設計競技応募案](87年)などにおいても繰り返されてゆくが、それが実現するのは[ル・クロワートル](92年)と[大階段の家](93年)という二つの実作においてである。

前者の[ル・クロワートル]は、山中湖をすぐ近くに控えた通り沿いにつくられたもので、全体はコンクリート打ち放しの建物である。コンクリートは決して仕上げる行き届いているとは評価できない仕上がりがだが、皮肉なことにそれがあって、この作品の「重さ」というか、形式性の強さを助けるかたちになっている。

ここにはこれまでのコンペがそうであったように、いくつかの明快な形態が分断されながらも接続している。たとえば切り妻の長い屋根、円筒を半分にわったような形態、方形屋根が円柱によって支えられた箱型の棟などが組み合わさっているといった具合なのだ。

普通、こうした古典的ボキャブラリーの選択は、この建築が立地しているようなりゾート地ではディズニー的なキッチュに類似して見えてしまう危険性をはらんでいるのだが、[ル・クロワートル]はそうしたコマース的な危うさから、洗練された場所へと巧みに逃亡することに成功している。

それを証明するように、ここでは全体が静謐な感覚に満ち、装飾をほとんどはぎ取り、あくまでも禁欲的で、どこか僧院のような感覚さえ漂わせている。つまりこの建築は、基本的な骨格を強く打ち出すことによって、キッチュにまぎれ込む危うい関係性を断ち切っているのだ。

同じように、世田谷区にある[大階段の家]にあっても、小林は切り妻の棟を中心に据え、そこを大階段をシンボリックにしつらえつつ骨格を明確化し、そのあとでそこに円筒形や三角形、ヴォールト屋根の立方体などを貫入させ、空間を複雑なイメージに変容させている。

歴史的モチーフと骨格とを全体に明きらかにする手法による構築性の顕示……。小林の「構築性」とは、とりあえずそのようなもの、ということができる。

3. 横断性

ところで繰り返し用いている「構築的」という言葉は、「男性的」という言葉に置き換えてもいいかもしれない。わたしははっきりとそうした批評に出会ったわけではないが、おそらく小林克弘の建築を「男性的なもの」として眺める視線や評価は、これまでどこかでなされてきたはずである。さらにこの男性的という言葉がどういう意味かといえば、先ほどから繰り返すように、それは「西欧の構築的な欲望」を何よりも意図している。

なぜならば、しばしば言われるように、西欧の理論はとどのつまり天に向かい、天に近づくことに象徴化されるからである。その天に近づくという欲望は、天へと聳える西欧の教会建築などの屹立する塔、そのモニュメン

タルな志向性によく表われている。つまり男根的、ファロスのな塔を打ち建てるといった建築様式が、何よりも「西欧の構築的な男性中心の欲望」を代表しているのだ。

だから小林の建築が男性的であると評価されるとするならば、おそらくその言説の中には、いま述べたような男根的=西欧の構築的な欲望という構図を、彼がどこかで抱いていると言っていることなのである。小林は西欧のアカデミックな理論を踏まえている、小林は「建築」の形式に傾倒している、小林は古典に本気で憧れている、したがって小林は構築的な建築家である……。彼を「男性的」と評価する人は、そのことを言おうとしているにほかあるまい。

しかしそれは、真に小林の建築を捉えて放さない評価なのだろうか。繰り返すが、小林克弘という建築家は、ほんとうに「構築的」なだけであり、「男性的」な建築をつくるだけの作家なのか？

そうではないのではあるまいか。もちろん小林自身も、自分か構築主義一辺倒ではないということにどこかで自覚しているはずである。だからといって、自分がはっきり脱構築的な志向性を持っていることも容易には認めたくない。なぜならばその方向性を推し進めてゆくと、最終的には彼の信じてきた西欧的なもの、男性的なもの、「大文字の建築」といわれるものを、彼自身が裏切るところに行き着いてしまうからである。

しかしわたしは、それでも彼の作風の中には、強く脱構築的なものへの志向性が秘められていると考えたいのだ。具体例をまず挙げよう。たとえば[会津田島駅前モニュメントタワー](92年)。おそらくミース・ファン・デル・ローエの、1922年に計画されたユートピア的な[鉄とガラスのスカイスクレーパー案]を参照したと思われるこの作品は、まぎれもない男性的なモニュメントだ。しかし同時に、それは明確なラインを持つ男根ではなく、むしろいまでも溶けてゆくような、曖昧で、女性的でエロティックですらあるデザインだ。しかも男性と女性の間だとか両性具有的というのではなく、その両者を横断するデザイ

ンとした方がいい。

さらに塔やモニュメントということでこのことを考えてみる絶好の題材が、いま彼が取り組んでいる「新潟港トンネル立坑基本デザイン」(89年—)である。これは高さがほぼ45メートル、信濃川河口に計画中の沈埋トンネルの換気塔の役目を果たすもので、川の右岸と左岸にそれぞれ一つずつ、向かい合うかたちで同じ施設が計画されている。換気塔という露出したくないものを皮膜で隠し、環境的、景観的なイメージを良好にすることがこの計画でもくろまれているのだ。

右岸のデザインは、基壇の上に三角形、菱形、三日月型、直方体などの四つのそれぞれ個性的なデザインを持った塔が彩色された上で載っている。それは男性的なファロスのイメージだが、ここで問題にしたいのはこの右岸のデザインではなく、反対側の左岸に建つ方である。なぜなら左岸のものは、一見すると基壇の上に三角柱のような男根的な塔が屹立した施設に見えるのだが、実はその内側が奇妙なかたちで削り取られているからである。しかもその内包された造形は、先のミース的な柔らかなカーブを持っている。「会津田島駅前モニュメント・タワー」を鋳型として削り貫いたような、女性的な、エロティックなイメージなのだ。

左岸と右岸とで、男性的なものと女性的なものとは対峙しているというのではなく、また左岸のこの建物か両性具有を示しているというのでもない。あくまでも左岸の男女横断的なデザインに注目しなければならない。男であり同時に女でもある、その両者を横断してゆくようなデザインにである。この左岸のデザインには、構築的＝男性的＝ファロスの＝西欧的と思込まれてきた小林とは、まったく別の側面が顔を覗かせているはずなのである。

4. 境界の越境

さらにいま述べた小林の中の横断性、ノマド的様相、脱構築的な流動性は「東京国際フォーラム設計競技応募案」(89年)、「岡山操車場跡地公園公開設計コンペ」(94年)、それに

「ヨコハマ・アーバンリング展」(92年)に出品したプロジェクトなどにもそれぞれのかたちで見ることができる。

たとえば「東京国際フォーラム設計競技応募案」は、丹下健三の旧都庁舎の跡地の巨大な複合施設を求められ、89年に行なわれた国際コンペに応募した案だが、彼らの案の特徴は、黒く、がっちりとしたフレームを提示したことだった。ここではそのがっちりとしたフレームの中に、合計で13の施設が、6つの機能に再編成され、それぞれが基本的に異なる造形に置き換えられ、各々の開口に埋め込まれる仕組みとなっている。

あるものは側面から突き出たり、別のものは上部へと突出したりしているこの案は、小林によれば、ホール機能の4つの施設は金属で仕上げられた曲面、展示の3つは赤い楔型、また会議施設は白い立体、さらに迎賓施設は金色の八角堂だったりするのだという。つまり広い意味で構築的なフレームの中に、自在なイメージの世界が錯綜している世界、コスモスの中にカオスが絡みついているような様態が構想されているわけである。

さまざまな顔がいくつもフレームから顔を覗かせ、しかも曲面などで柔らかなイメージでデザインされている印象を受けるこのプロジェクトには、確かにこれ以上ないほどに構築的なフレーム＝骨格が用意されているのだが、一方でどこか流動的であり、曖昧な感覚の方を強く打ち出していることにも注目したい。

さらにそうしたことは、「岡山操車場跡地公園公開設計コンペ」における庭園のデザインにも別のかたちで表れている。操車場跡地の再開発であるこのプロジェクトでは、サッカースタジアムと公園がデザインされるのだが、とりわけ公園の設計が注目される。というのも、そこにはいくつもの異なったイメージが多様に構成されることになるからである。西欧風な庭園、薔薇とした庭園、芝生の庭などが、脈絡もないままに、多層的に展開してゆく。小林によれば森林、草原、水景、大地、原野といった5つのイメージが、全体として約140も繰り広げられるというのだが、いずれに

してもその分裂的なちぐはぐさは、異なる風景の束を一挙に横断してゆく時のような、目眩にも似た感覚を放つことになるだろう。そしてそれは、西欧的な構築性とは明らかに異なるヴィジョンであろう。

ところでこの多層的な世界の横断は、実は「ヨコハマ・アーバンリング展」の出品作ですでに試みられていたものであった。8人の建築家や芸術家が21世紀の都市を提案するというもくろみのこの展覧会で、小林は新港埠頭地区の敷地を8つの縦長の区域に分割し、それぞれのエリアをまったく異なった、やはり分裂的ともいえる多層的イメージで塗り分けてゆくデザインを提示していたからである。あるエリアには先にも言ったミース的な曲面の女性的造形があるかと思えば、別のエリアには四角い箱が整然と並んでいる。また別のエリアを見ると、円筒形が立ち並んでいる。

こうしたいくつもの異なる風景を一気に横断し、境界を越境してゆく時の気分は、先の目眩に加えていえば、おそらく未編集の映画フィルムの中を疾走してゆくような、とめどない、流体的、変容的、不連続な感覚であるに違いない。境界がなく、それぞれが曖昧で、まるで途切れのない夢の世界を彷徨っているような雰囲気……。世界が破片の束によって構成され、その全体は誰にも見えないといった、構築とはまったく異なる世界……。流動的で脱土地化した構築性の彼方が、ここには見え隠れしているのである。

5. 原始性

小林克弘は「構築的」な建築家であるという視点から、この論は始められた。そして彼のいくつかの作品を通して、そこには必ずしも西欧的な文脈とは符号しきらないものがあること、いや時として、そこから大きく漏れ、逸脱してゆくようなイメージさえあることを嗅ぎ取ることができた。

ただそうは言ってもこれまで見てきた視線は、小林の中に反構築的な匂いがするというだけで、いまだ小林が脱構築的な作家である、

というところまでは届いていない。わたしが小林が構築的でないことを示すためには、もっとはっきりとしたかたちで、彼が古典的なものの「外」に出ようとしていることを指し示さなくてはならないだろう。彼が西欧の論理の外で、建築を考察しはじめているのを明確に提示する必要があるのだ。

その意味で言って、小林が最近発表した二つの作品には、彼が「西欧的」な構築性の「外」に出ようとしていることが予感できる建築である。その二つとは、有明に完成した「東京都臨海副都心清掃工場基本デザイン」(94年)と、「目白の家」(94年)という住宅作品である。

前者は言うまでもなくゴミ処理を行なう施設で、周囲にはレインボーブリッジや有明コロシアムがつくられ、東京でもいまだ開発途上だが、いわゆるトレンドリーな一帯となりつつある地域にある。ここでの小林の仕事は、一言でいえば、機能的には手を加えるべきところがない清掃施設のパッケージ・デザインを考えるとあった。収集されたゴミの焼却設備はほとんど出来上がっている。だから設計者たちがやるべきことは、通りから眺めた時、いかにこれがゴミ清掃工場らしく見えないかという点にしかなかった。その意味でいうとこの清掃工場は、趣旨としては先の換気塔の外装デザイン「新潟港トンネル立坑基本デザイン」にいささか似ている点があるかもしれない。

ともあれ、この「清掃工場」のデザインは軽やかさとファッショナブルな感覚に満ちているものだ。この建物は全体としてはクリーム色の土台の上に、銀色の飛行船が載ったようであり、また劇場のような大階段や円盤状の庇、煙突には見えない塔などがそれに付随しているからである。何の予備知識もないままに、この建築を見せられた人は、よもやこれが清掃工場であるなどとは思ひもしないことだろう。

しかしわたしがここで関心を持つのは、いま述べてきたような、この作品に見られる機能と表層の分裂ではない。それよりもわたしの関心は、小林がここにあって、これまで繰り返し提示し続けてきた、構築的なもの、西

欧的なもの、男性的なものを、いかに拭い去っているかという点にあるのだ。それは具体的にいえば、この建築の全体が、シェルターのようなイメージで仕上げられていることに関わっている。丸く、人を包み込むような皮膜としてのデザイン、それは西欧の文化的な歴史性の「外」を思わせてやまない。

しかしこの「清掃工場」では、それは空間として必ずしも思うままに演出されているわけではない。先にも言ったように、機能はあくまでもゴミ処理に傾いているためであり、シェルターとしての空間性は十全ではなかったからである。それを明確にするのは、後者の「目白の家」の方だ。

おそらくこの「目白の家」は住宅作品としてはたいへん地味なものだが、後々、小林克弘の新しい方向性が予言されていた作品だったと位置づけられるはずである。この小さな住宅は、目白駅のすぐ近く、大通りからわずかに入った、建物が密集した敷地につくられている。作品は幅員の狭い通りにそのファサードのみ面している。敷地は縦長で、その縦長の都市の裂目のような場所に、この「目白の家」は挿入されている。

ここで注意したいのは、通りに面した壁面がそのまま湾曲しながら立ち上がり、切れ目なくいつのまにか屋根となり、どこまでが壁なのか、どこまでが屋根なのかといった境界が攪乱され、曖昧化されている点である。しかも屋根の上部には、鋭利な刃物で切り裂いたかのようなスリットが開けられていて、そこから室内に光がふんだんに射し込んでゆく仕掛けになっている。

この切り取られた裂目からの光は、まず最上階に入り込み、次に吹き抜けを通して下階へとこぼれ落ちてゆくことになるだろう。それはまるで、通りから立ち上がった壁が柔らかな皮膜となって屋根になり、さらに裂目から入り込む光となって室内に浸透してゆくというような物語性を感じさせる。それと同時に、そうした柔らかに全体が一つになる感覚は、きわめてプリミティブなシェルターのありかを思い出させるのである。

原始的なシェルターの段階では、いまだ西

欧の文化は確立されていない。建築概念というフィクションがまだ「構築されていない」のである。そのことでいえば、この原始の家としてのシェルターは、フロイトがキリスト教的文化を越えるものを求めてトーテミズムまで遡って見せたような、西欧的なものの向こう側、構築性の彼方を透視しているのだ。

そしてそれを取り上げて見せることは、フロイトがそうして人間中心主義を越えようと試みたように、そのまま西欧的な「重さ」に対して、「軽さ」を強調し、西欧的な建築体系をそのまま脱構築してしまうことにつながってゆくだろう。西欧の「建築」の規範や因習を乗り越え、その「外」に自らの意志を打ち立てることだ。塔のように男性的でない、川の流れるように曖昧で、柔らかくゆらめいた空間を想像することだ。柱や梁や壁や床といった虚構の体系を越えて、いちばん無垢なものへと眼差しを返してやることだ。

小林克弘がおそらくこの方向へと、つまり構築的でないものへと、これから突き進んでゆくような予感がするといま言い切れるのは、この作品があまりに唐突にわれわれの前に提示されたものでありながら、この論の中で見てきたように、実はずっと以前から、彼がそうした萌芽を、われわれに向けて、曖昧ではっきりとはしていなかったが、しかし絶えることなく示し続けてきたからにはほかならない。

自らの内部に潜む非構築的なものをゆるやかに外在化させる運動……。小林克弘は、そのような運動を、これからより明確にわれわれに見せてくれるはずである。

●いいじま・よういち/建築評論家

※：SD1987年9月号「ノンジャンルなフォルマリズム」における作品の解説文。

東京都臨海副都心清掃工場基本デザイン Tokyo Water Front Incineration Plant

1: 東立面図 S=1:2,500
2: 北立面図 S=1:2,500
3: 断面図 S=1:2,000
4: 4階平面図 S=1:2,000
5: 1階平面図 S=1:2,000
6: 配置図 (1階平面) S=1:2,000

基本デザイン: 長倉康彦、小林克弘 + デザインスタジオ
設計・施工: 竹中工務店
建築用途: 清掃工場
基本デザイン期間: 1989.5-1990.3
設計・施工期間: 1990.5-1994.6
規模: 地上6階、地下2階
敷地面積: 24,192.27㎡
建築面積: 11,607.02㎡
延床面積: 37,774.82㎡
協同: 佐々木龍郎、後藤隆史、加藤敏明、黒谷哲也、中澤 健

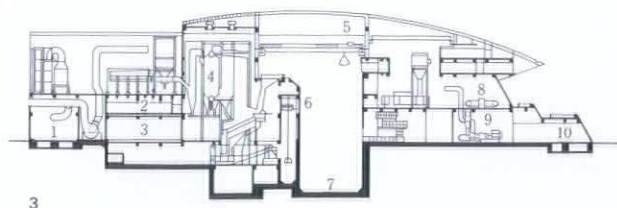
臨海副都心清掃工場のデザイン上の課題は、平面で約80m×103m、高さで約30mという圧倒的な高さを必要とする煙突とを、いかにして臨海部という独特なスケール感とスピード感をもつ場所にふさわしいランドマークに高めていくかということであった。

まず、形態と機能の関係という昔ながらの建築的問題を再考する必要があった。というのは、当初から決して工場には見えないデザインを施すという目標があり、デザイン過程で、工場という施設の性格、つまり「らしさ」は

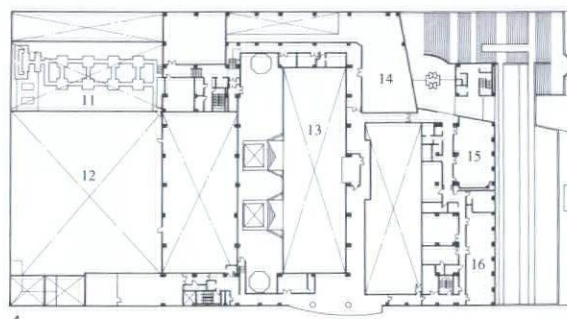
徹底的に排除されたのである。ここでは、形態は機能表現してはいない。

「らしさ」を排除する中で、「建築らしさ」「建築性」のかなりの部分も排除された。大階段や小塔といった一部の要素を除いて、開口部のような、いわゆる通常の建築的要素が消し去られているのである。その結果、施設全体が巨大なアート・オブジェのようなものに、しかも細部を消し去ったミニマル・アートとなっている。

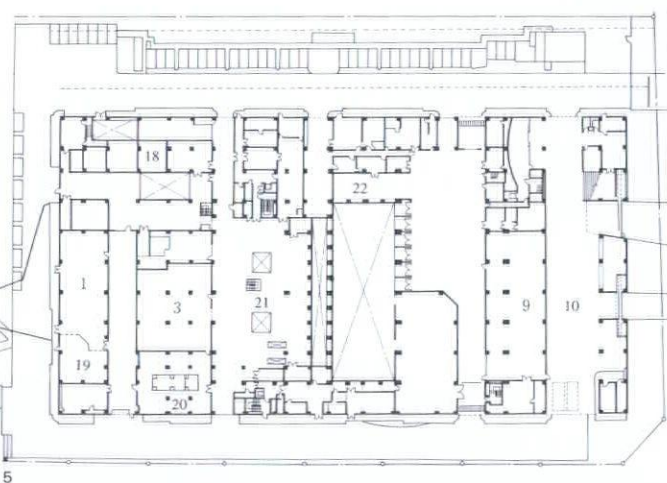
かくして機能から分離した形態群が、臨海部のスピード、スケールに合わせて、力強く、シャープに、躍動感をもって浮遊するという光景が生み出された。巨大であるが故に、否応なくランドマークとなるが、決してじっくりと鑑賞されるランドマークではない。混乱した都市光景の中で垣間見られ、首都高速上の車にとっては一瞬だけ立ち現れる、といったランドマークなのであり、そのイメージは自ずと断片化される。ここでは全体像よりも、断片化したイメージが意味をもつようなランドマークのデザインのあり方が、追求されているのだ。



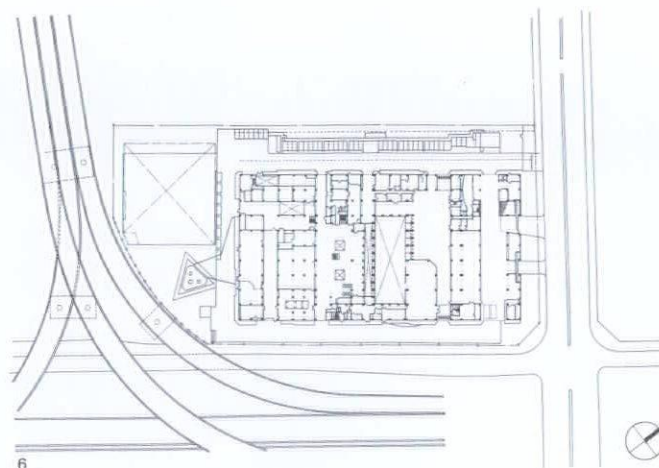
3



4

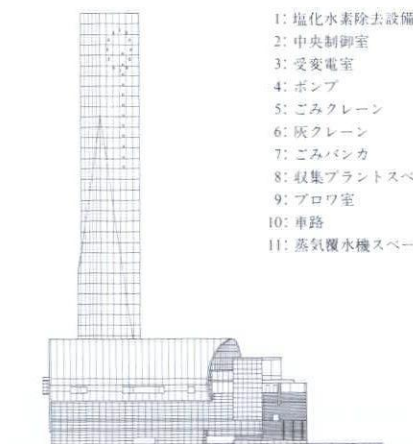


5

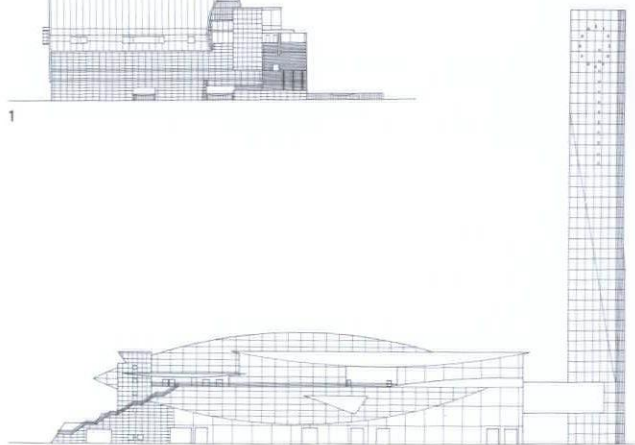


6

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1: 塩化水素除去設備室 | 12: 集じん機スペース |
| 2: 中央制御室 | 13: ホッパーステージ |
| 3: 受変電室 | 14: 機械室 |
| 4: ポンプ | 15: 見学者説明室 |
| 5: ごみクレーン | 16: 事務所 |
| 6: 灰クレーン | 17: 煙突 |
| 7: ごみバンカ | 18: 汚水処理室 |
| 8: 収集プラントスペース | 19: カ性ソーダ貯蔵スペース |
| 9: ブロワ室 | 20: 発電機機械室 |
| 10: 車路 | 21: 炉室 |
| 11: 蒸気覆水機スペース | 22: ごみ積み出し場 |



1



2

新潟港トンネル立坑

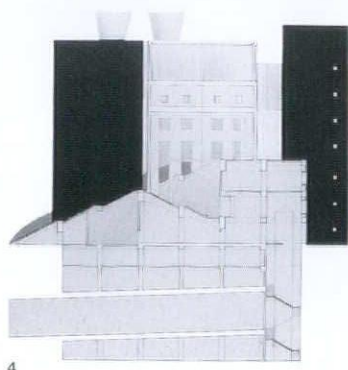
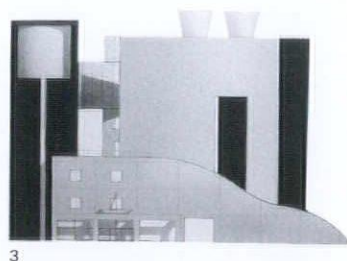
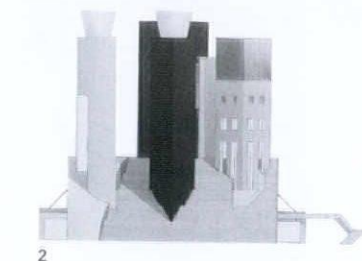
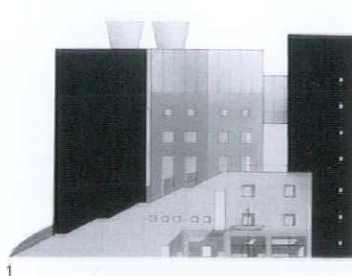
Niigata Port Corridor Towers

建築用途：トンネル換気塔、展望施設
 所在地：新潟県新潟市
 設計期間：1988.11-1996.3（予定）
 施工期間：1993.4-2001（予定）
 規模：地上8階、地下3階（左岸立坑）
 建築面積：1,967.53㎡（左岸立坑）
 延床面積：3,541.62㎡（左岸立坑）
 協同：佐々木龍郎、後藤隆史、前田篤伸、高田雅也、姜 鎬元、清水二郎、中澤 健

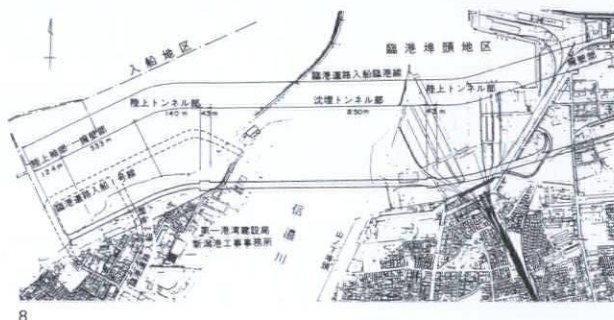
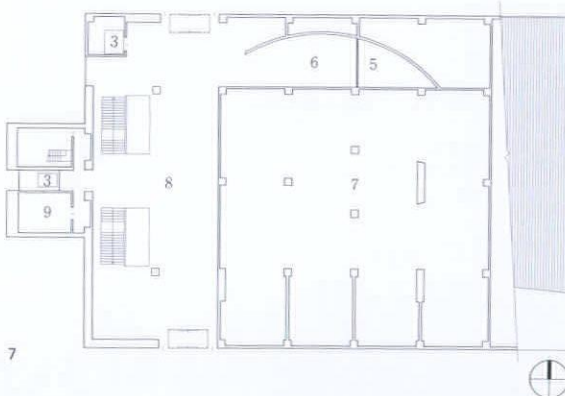
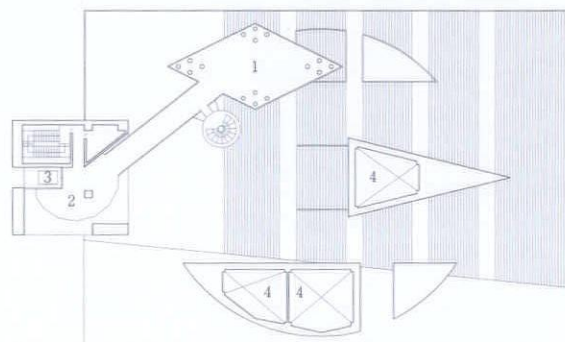
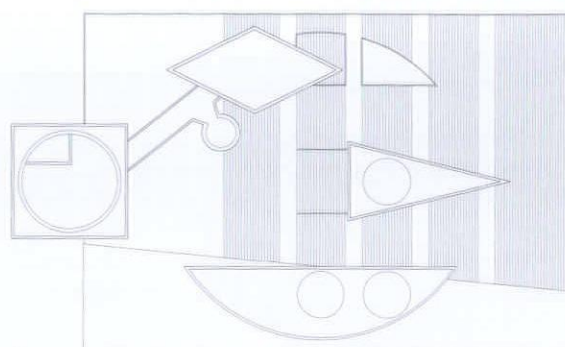
新潟港トンネル立坑は、信濃川河口に建設中のトンネル内の排気ガスを空中に排出するための換気塔であり、河口兩岸に約850m離れて建つ一対の施設として建設される。今後開発が進められる河口地域で、他に先がけて建設される基幹施設であり、地域のランドマークとしての役割を担うことになる。こうした土木分野の施設に、建築家が参画するという自体、画期的なことであった。

左岸を立坑と右岸立坑は、一見すると異なった印象を持つが、実は共通したデザイン原理を基本に構想されている。それは、既成概念の破棄と言い換えることもできる。まず、従来のような巨大な箱形のヴォリュームを破棄し、大階段広場と複数の塔群の組み合わせという構成に置換することである。そして、信濃川へと下降する大階段および頂部の回遊式展望室という公共空間を導入することで、従来この種の施設に対して指摘されがちであった「公共空間なき公共施設」という汚名を破棄する。更に、従来のランドマークあるいはシンボルにつきまとっていた単一の視覚像なるものを破棄し、ここでは、見る方向によって見え方が変化するという、多様な、可変的な視覚像が生み出されている。

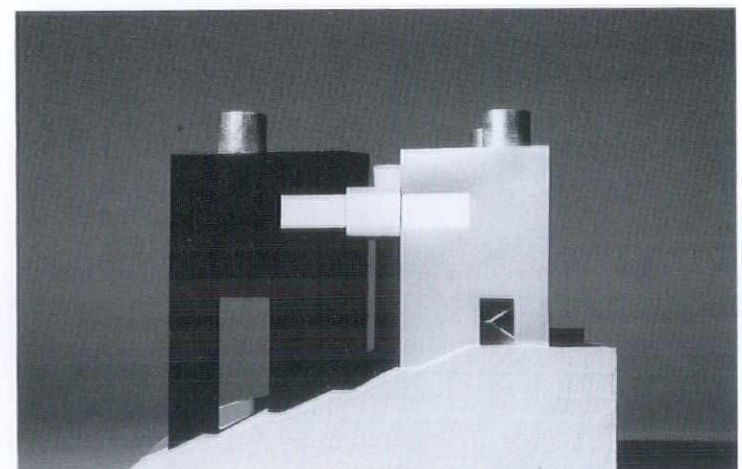
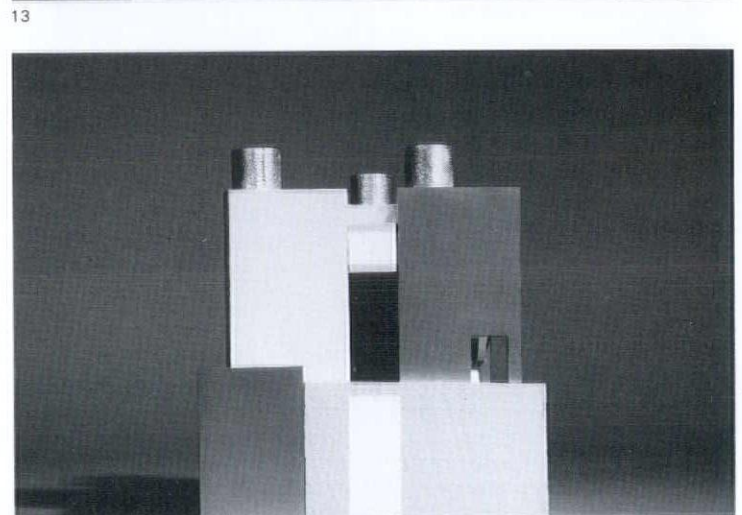
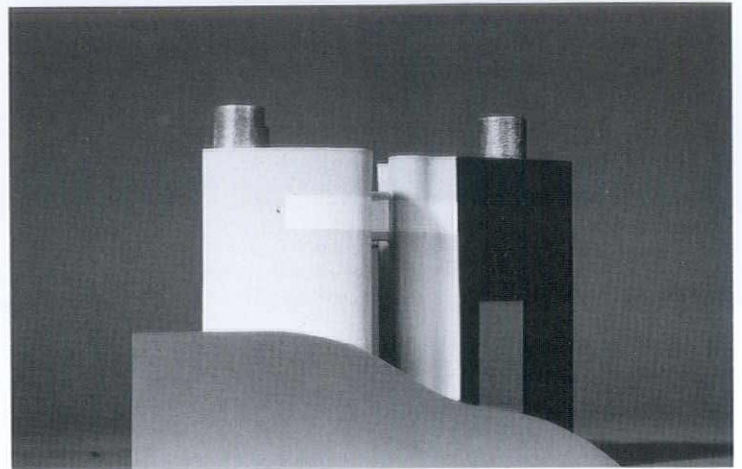
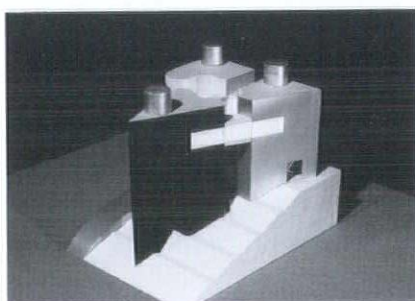
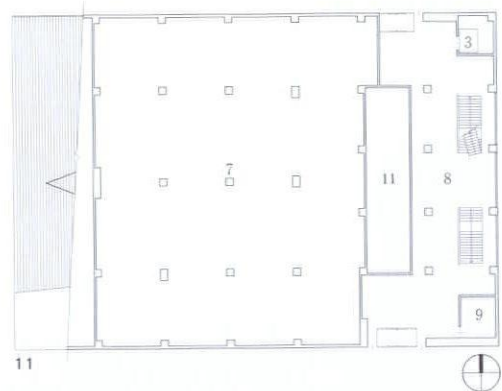
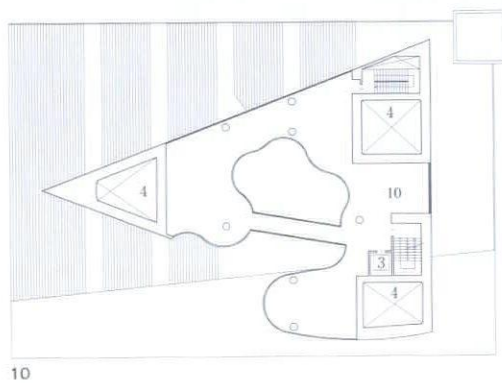
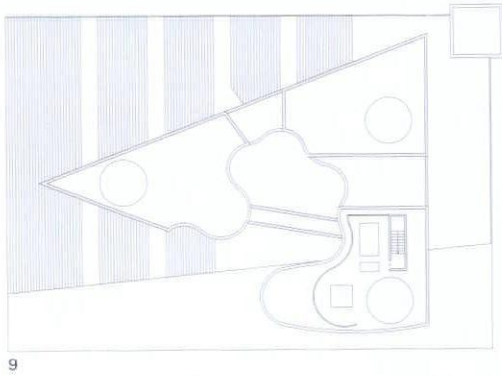
こうした共通性の上で、左岸立坑と右岸立坑は「幾何学形態」v.s.「柔らかな形態」、「塔の林立」v.s.「包み込む空間」、「通り抜け型広場」v.s.「アトリウム型広場」、「男性的力強さ」v.s.「女性的な柔らかさ」といった対比を生み出している。それは、双生児型ツインとカップル型ツイン双方の特性を兼ね備えたツイン性を目指すことである。あるいは、中性化の進行する現代建築に対し、建築のハーマフロダイト性を提示していると言うこともできる。



- 1: 展望室
- 2: EVホール
- 3: EV
- 4: 煙道
- 5: 外部テラス
- 6: 休憩室
- 7: 換気機械室
- 8: エントランスホール
- 9: トイレ
- 10: 展望展示室
- 11: 制水装置巻上動力



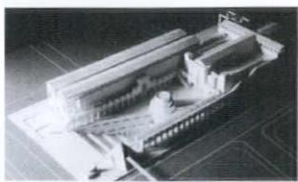
- 1-3: 左岸立坑立面图
 4: 左岸立坑断面图
 5: 左岸立坑屋顶伏图 S=1:800
 6: 左岸立坑7层平面图
 7: 左岸立坑1层平面图
 8: 配置图
 9: 右岸立坑屋顶伏图 S=1:800
 10: 右岸立坑6层平面图
 11: 右岸立坑1层平面图
 12-15: 右岸立坑模型



作品リスト

藤沢市湘南台文化センター設計競技応募案 (入賞)

所在地: 神奈川県藤沢市
設計期間: 1985.12-1986.1
敷地面積: 7,970㎡
延床面積: 12,282㎡
協同: 竹山 聖



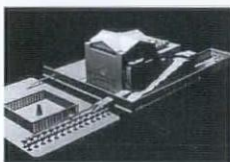
会津鬼怒川線・上川依塩原駅設計競技応募案 (佳作)

所在地: 福島県
設計期間: 1986.7-1986.8
敷地面積: 215㎡
延床面積: 300㎡
協同: 熊倉洋介、佐々木龍郎



愛知県新文化会館設計競技応募案 (佳作)

所在地: 愛知県名古屋市
設計期間: 1986.10-1986.12
敷地面積: 24,000㎡
延床面積: 76,400㎡
協同: 竹山 聖、熊倉洋介、安井雅裕、佐々木龍郎



高島平の集合住宅

所在地: 東京都板橋区
設計期間: 1988.11-1990.3
施工期間: 1990.7-1992.2
規模: 地下2階、地上6階、塔屋1階建
敷地面積: 330㎡
建築面積: 289.8㎡
延床面積: 1,650.32㎡
協同: 中原まり、熊倉洋介



C-WEDGE

所在地: 福岡県福岡市中央区高砂1-24-26
設計期間: 1988.12-1989.12
施工期間: 1990.1-1991.4
規模: 地下1階、地上10階、塔屋1階建
敷地面積: 361.11㎡
建築面積: 219.44㎡
延床面積: 1,718.23㎡
協同: 佐々木龍郎、松岡恭子



東京国際フォーラム設計競技応募案

所在地: 東京都千代田区
設計期間: 1989.8-1989.10
敷地面積: 30,000㎡
延床面積: 140,000㎡
協同: 黒谷哲也、中澤 健、古川伸也、後藤隆史、熊倉洋介、松岡恭子、姜 鍋元、中原まり、志岐祐一、染谷公士、鍛冶代子、上山耕作



ル・クロワートル

所在地: 山梨県南都留郡山中湖村山中
設計期間: 1990.1-1991.3
施工期間: 1991.5-
規模: 地下1階、地上3階建
敷地面積: 2,753.6㎡
建築面積: 538.0㎡
延床面積: 777.5㎡
協同: 姜 鍋元、佐々木龍郎、安藤貴昭、大森祥司、岡本美樹、中原まり



会津田島駅前モニュメントタワー

所在地: 福島県南会津郡田島町
設計期間: 1990.5-1991.5
施工期間: 1991.8-1992.3
主体構造: 鉄筋コンクリート造
建築面積: 7.65㎡
協同: 岡本美樹、佐々木龍郎、加藤敏明



モントリオール・ジャック・キャルティエ広場アーバン・デザイン国際設計競技応募案 (最優秀賞)

所在地: カナダ、モントリオール
設計期間: 1990.6-1990.8
敷地面積: 3,000㎡
延床面積: 12,000㎡
協同: 加藤敏明、大森祥司、岡本美樹、毛 厚徳、中澤 健、佐々木龍郎、後藤隆史、安藤貴昭、田村 啓、姜 鍋元、黒谷哲也、近藤裕幸、中島光博、田中純一



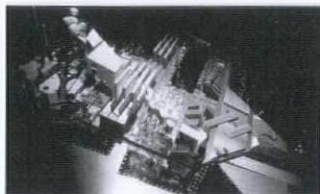
大階段の家

所在地: 東京都世田谷区
設計期間: 1991.4-1992.2
施工期間: 1992.6-1993.1
規模: 地上2階建
敷地面積: 333㎡
建築面積: 167㎡
延床面積: 251.43㎡
協同: 後藤隆史



ヨコハマ・アーバンリング展覧会

所在地: 神奈川県横浜市
設計期間: 1992.1-1992.3
協同: 佐々木龍郎、後藤隆史、荒井浩介、矢野雄一郎、西野みのり



目白の家

所在地: 東京都新宿区
設計期間: 1992.11-1993.12
施工期間: 1994.1-1994.7
規模: 地上3階建
敷地面積: 88.98㎡
建築面積: 59.40㎡
延床面積: 170.98㎡
協同: 後藤隆史、高田雅也



第1回オホーツクまちなみ整備コンペティション: 網走駅周辺地区 (最優秀賞)

所在地: 北海道網走市
設計期間: 1993.8
敷地面積: 約70ha
協同: 平山雅司、阿部順子、小山紀彦、齊藤 要、北野裕紀、久野直美



小町の館

所在地: 京都府大宮町
設計期間: 1994.2-1994.3
規模: 地上1階建
敷地面積: 約2,000㎡
建築面積: 360㎡
延床面積: 360㎡
協同: 後藤隆史、阿部順子、小山光、森山学



カーディフ・ベイ・オペラハウス国際設計競技

所在地: イギリス、カーディフ
設計期間: 1994.3-1994.4
規模: 地上13階
敷地面積: 12,300㎡
延床面積: 23,320㎡
協同: 小山紀彦、齊藤 要、葛西真由、田中幸子、河合朋子、木下 央、廣瀬 隆、藤井伸介



岡山操車場跡地公園公開設計コンペ (佳作)

所在地: 岡山県岡山市
設計期間: 1994.5-1994.8
規模: 地上3階建
敷地面積: 154,306㎡
建築面積: 18,221㎡
延床面積: 32,781㎡
協同: 後藤隆史、高田雅也、葛西真由、田中幸子、前田篤伸、ウォーターデザイン(水景計画)、タドソン (造園)、ドリームデザイン (企画)



略歴

1955 福井市生まれ
1977 東京大学工学部建築学科卒業
1979 東京大学大学院修士課程修了
1982-84 コロンビア大学客員研究員
1985 東京大学大学院博士課程修了
1986 東京都立大学工学部建築学科講師
1988 東京都立大学工学部建築学科助教授
東京都立大学小林研究室およびデザインスタジオと共同で設計活動。これまで東京理科大学、日本女子大学、東京芸術大学、筑波大学、東京電機大学にて、非常勤講師を務める。

受賞

1992 日本建築学会奨励賞

展覧会

1987 住宅模型展/銀座松屋、東京
1988 ARC展/アックスギャラリー、東京
1989 LIGHTING GRAFT展/西武美術館、東京
Neo Forma展/アックスギャラリー、東京
第9回金沢彫刻展/金沢市立図書館付属展示ホール、石川
1990 現代建築家12人展/YKK国際会議場、富山
第10回金沢彫刻展/金沢市立図書館付属展示ホール、石川
1992 ヨコハマ・アーバンリング展/青山スパイラル・ガーデン、東京、パシフィコ横浜会議センター、横浜
現代建築家100人展/熊本県立美術館、熊本、トウインビーホール、名古屋
1994 プロポーサル金沢1994展/東京銀座ポケットパーク、東京
GJリーグ展/GAギャラリー、東京
LIVING DESIGN展/LIVING DESIGN CENTER OZONE、東京

主な著作

ビギニングス: ルイス・カーンの人と建築 (共訳)、1986年、丸善
アメリカ様式建築の華: マッキム・ミード & ホワイト、1988年、丸善
ニューヨーク空中散歩 (訳)、1988年、朝日新聞社
アル・デコの摩天楼、1990年、鹿島出版会
アメリカ建築の巨匠 (共訳)、1992年、鹿島出版会
Contemporary Japanese Architects (共著)、1993年、Taschen Verlag, Köln
Space Design Series 10高層 (共著)、1994年、新日本法規出版

MODAIR



“人間”と“物”のかかわりに……
東熱は、用途に応じた
「生きた環境」づくりを大切にしています。

人間が生活するための環境
働くための環境
または、物が製造されるための環境、
品質を管理するための環境…。
人間と物とのかかわりに空間の中で
生きた環境づくりを
東洋熱工業は常に考えています。

——環境設備を探究する——
東洋熱工業

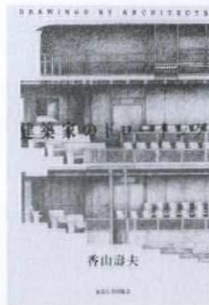
本社／〒104 東京都中央区京橋2-5-12 ☎(03)3562-1351(大代表)
支店／大阪・名古屋・九州・横浜・広島・仙台・関東・札幌・新潟・グアム

『建築家のドローイング』

香山壽夫＝著

A 5 判変型 192頁

東京大学出版会 3605円



評者＝

前田忠直

36枚のドローイングのなかに

「建築」を問う

本書を手にするひとは、いたるところに織り込まれた、「建築」への多層な「問い」を見いだすだろう。著者の洞察力にあふれた知見に導かれ、読者は、著者とともにドローイングのなかに入る。そして、著者の思い描く「建築の世界」を旅することになる。序文で示された「問い」がたえず同伴する。建築家は何を描くか、いかに描くか。著者は自問自答する。ドローイングが示すさまざまなスタイルを越えて、「建築」とは何か、と。本書は、それゆえ、「建築」について思索するひとに捧げられた、建築家・香山壽夫氏の「建築」についてのCredo(信仰告白)とみることができる。

本書は、36枚のドローイングと、それらへの注解、それに、序文「建築家は何によって描くか——ドローイングについての粗描的な論考」からなる。ドローイングは、著者のこれまでの豊富な経験から選び抜かれたものである。それらは成立した年を追って配列される。最初の「9世紀ベネディクト会修道院の理想的計画図」(820-830年頃)から「サー・ジョン・ソーンの作品によるジョセフ・ガンディの幻想の都市」(1818年)までが14枚。「ジョサイア・コンドルの工科大学校南門と門衛室」(1877年)から、最後の「カルロ・スカルパのプリオン夫妻の墓」(1969年)までが22枚。それらは広義の近代建築と捉えることができる。前者14枚のうちに、3枚目の「レオナルド・ダ・ヴィンチの円形教会堂」(1430年頃)から「ジョバンニ・パティスタ・ピラネージの牢獄の幻想」にいたる6枚、さらに「クロード・ニコフ・ルドゥーのブザンソン劇場内部透視図」から「サー・ジョン・ソーンの作品によるジョセフ・ガンディの幻想の都市」(1818年)にいたる4枚、合わせて10枚の古典様式の建築のドローイングが収録されている。著者の思い描く「建築」が、ドローイングの向こうに

見えてくる。ちなみに「カール・フリードリッヒ・シンケルの石版画によるゴシック聖堂」の注解に、著者の目論む建築家の方法的態度が、目立たない仕方で示されている。つまり「全ての偉大な芸術家がそうであるように、シンケルもまた、怒濤のようなロマン主義への憧れを内に持ちつつ、同時に厳格な古典主義の秩序を求め続けたのであった」と。

また、近代の建築家たちのドローイングについていえば、たとえば「チャールズ・R.マッキントッシュの旅行スケッチ」に見る、空間の細やかな特質。あるいは「アルヴァ・アアルトのイマトラの教会堂」に見る風土に根ざした様式。そして、「ビエール・ルイージ・ネルヴィのローマの高架道路橋」の構造のスタディ・スケッチに読む細部の造形的洗練などなど。これらすべては、著者が思い描く「建築」が内包する特性か。

さて、「建築家の描くもの」について、序文のなかでこう解き明かしている。「描かれているのはイメージのかたちであるのか。その長い作業を見渡してみると、それは一つのかたちというよりは、そのかたちの向こうにある、未だ見えないもの、かたちなき存在を求めているかのようである」と。とすれば「建築」は、古典様式や近代様式などのスタイルの向こうにある、ことになる。つまり「建築」は、可能的に、私たちの心のなかに存在する、と著者は教えているのである。

「建築」を問い尋ねるひと必読の書である。

●まえだ・ただなお／京都大学講師、建築論

Metropolitan Library

2月の評者＝

高島直之

美術ジャーナリズム界において、このところ日本現代美術のモダンティを巡る論議が沸き起こっている。ポスト・モダン、ポスト・モダン以後、といったキーワードが出尽くした感のある現在にあって、フシギな現象である。発端は、来年百周年を迎えるヴェネチア・ビエンナーレ展のコミッショナー・コンペに当選した人の趣旨が、ワビ、サビ、スキという基本タムで構成され、それに対しモダン・アートの擁護を唱える者によって批判が加えられたことに始まる。以後、別の論者も加わり、少しの話題になっている。

それを論じる場ではないが、政治・経済を含む世界史的近代主義イデオロギーの「近代」と、モダン・アートの「近代」とが使い分けられておらず、論旨が不明になっている感がある。そこにたとえば「冷戦以後」であるとか「アジア美術との交流」などと

いった概念が組み込まれてしまうと、いっそう論点が拡散してしまうようである。けっきょく、そのような整理がされないまま、美術のモダン論議が今日の今まで来てしまっているのが、〈現在〉というわけである。

ともあれ、今回取り上げる本は2冊。ひとつは『戦後科学技術の社会史』で、もう1冊は先月号で難波和彦が書評を行った『建築ジャーナリズム無頼』である。なぜかといえば、時間スパンがほぼ同じという単純な理由で、前者の編著者のひとり、中山茂が記すように「『冷戦』半世紀」にあたる時代が扱われているからだ。もっとも、前者は「社会史」であり、後者の宮内嘉久の本は「個人史」でスタンスに余りの違いがある。そして科学技術と建築とは重なる部分もあるが、同定しにくい点はたくさんある。

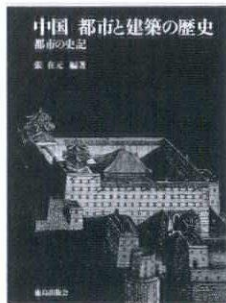
ただ総じて、1940、50年代の論述には知らない事

『中国 都市と建築の歴史——都市の史記』

張在元＝編・著

A5版 296頁

鹿島出版会 3980円



評者＝

藤原恵洋

「無為」と「有為」をつなぐ

悠久中国固有の都市論

史記とは、前漢時代の司馬遷が中国史上初めて紀伝体で記した通史のこと。あるいは、歴史を学ぶ者が、いつかは正史を編んでみたいとめざす究極の歴史書、と言ってもいい。春秋戦国の楚、『三国志』の古戦場、そんな長江（揚子江）中流域に故郷を持つ1950年生まれの編著者は、何故、世界の混沌を体現した東京において、現代の「司馬遷」をめざしたのか。悠久中国の抱えきれないくらいにぶ厚い歴史情報を相手に、主要な都市の形成過程を逞しく解説した本書を一読中、かつて中国大陸を踏査していた頃の、巨大な大陸の地平線の彼方に機中から見た霞立つ西安市街の遠景を思い出してしまった。

長い上海調査以前、私は日本近代を培った建築や都市施設の遺産調査を通し、独自の近代化過程を実証的に跡づける調査研究に魅せられていた。だが、ある時点から、より良く日本近代を知るには、近代アジア全体を、さらには世界全体を照らし合わせながら検討していく必要を強く感じた。当たり前と言えばそれまでだが、ある種のローカリティを追い求めたとき、突如として世界に普遍的な出来事に出くわす。たとえば私の場合、日本近代の都市インフラストラクチャー（基盤施設）の形成過程踏査を通し上海と出会った。それ故、なんら躊躇せずに上海を歩き出したが、それは極めて目的的な作業であり、「近代」を押さえたいという目標は、中国の他都市→東アジア→アジアと対象地域を拡張し、「近代」の「企て」や「計画」の発掘に反映されていった。

ところで80年代半ば、「アジア居住史研究会」を率いた中国建築史の村松伸を軸に、若いアジア建築研究者は、中国を初めアジア全域の近代化をとらえる視点に関心をシフトさせていたが、東アジアを代表する31の都市に関し、調査研究の途上にある成果を持ち寄り『アジ

アの都市と建築』（加藤祐三編、1988年、鹿島出版会）を上梓することで、議論を大きく前進させた。以降、都市と建築を通したアジアの近代化過程が内外の視座から論議されていたが、そこでの大きな成果は、近代アジアを席捲した西洋列強の「企て」や「計画」といった「有為」ぶりが陸続と解明されたことであったろう。

だが、本書の編著者初め、一群の著者たちは「都市と建築は自然の中に溶かされ、自然は都市と建築を包含する」という、都市と建築へ「無為」という視線を強調する。それは、作為されざるがあるがままにある、とでも解釈されるべき道家固有の思想であるが、同時に、大陸特有の自然としなやかに共生しながら都市や建築を生み出してきた中国ならではの思想でもあった。自然や宇宙の原理と結びつきながら墓所や生活環境を見立てる「風水」思想の成立も、このことと同根であろう。そのような近代以前に息づいた「無為」の思想を都市版「史記」を記述する際の立脚点にしたのは、欧米各国や日本における近代主義への編著者の批判が内包されているからであり、編著者の東京滞在の体験が「司馬遷（＝膨大な本調査研究）」への出自だったと思える。

じつを言うと、私は中国を踏査しながら西安や成都を遠くに望むだけで、調査対象からは潔くパスした。だが今は、「風水」への理解を初め、近代の「有為」の彼方に潜む「無為」への関心が湧き立つ。機会があれば、次にはぜひともそうした中国の都市と建築を訪ね、それらを築くものが何であったか、より広範に再考したい。そのとき指南書として本書はおおいに活用されるに違いない。

●ふじわら・けいよう／建築史家、九州芸術工科大学講師

柄が多いことのみならず、戦後草創期の逸話にはつい引き込まれ熱中して読み込んだが、なぜか70年代あたりになると鼻じらんでしまうような気になったのも事実。そこは二著ともに通じるのだが、科学技術は戦前の蓄積と戦後の新研究が微妙に交差しており、宮内の場合、敗戦時の焼野原となった何もない風景が、彼個人の建築との歩み出しのきっかけとなっている。

『戦後科学技術の社会史』は、トップ・ダウン型の産学協同の研究開発を批判的にみながら、国内民間の科学技術の独自性を位置づけ、かつ「科学技術国史観」のサクセス・ストーリーを脱神話化していく、27名による共同執筆本である。一方『建築ジャーナリズム無頼』は、東京から富士山まで透けて見えるカラッポの土地に、いかに空間が仕切られていたか。その建築の特権性に対し、一ジャーナリス

トとしていかなる眼差しを投げかけ、批判し得たかの自問が低い声で底に流れている。その声には断念のような響きも感じられる。

複数の研究者の「社会史」とジャーナリストの「個人史」との対比は、ジャンルは違えど刺激になった。後者、宮内の場合、個人史に限定しているため読者側に多面的な読み方を許さないうらみが残る。そしてまた、西欧型近代合理主義に則った戦後の計画や設計理念に対しての鋭い批判は、けっきょく西欧近代に向き合ったままの二元論になってしまっ、いささかきゅうくつな印象も拭えなかった。難波和彦のいらだったような書評もその辺りに起因しているのではないかな。

いずれにせよ、この「冷戦半世紀」を軸とするモダニティは、もっと議論の対象にされねばならないだろう。

『戦後科学技術の社会史』朝日選書
中山茂・吉岡齊＝編・著 朝日新聞社 1600円
『建築ジャーナリズム無頼』
宮内嘉久＝著 晶文社 2500円

FUJI
ELECTRIC

国内最大級の モルトラ完成



ビル設備、工場設備の電気設備のインテリジェント化、近代化に欠かせないモールド変圧器。この度、富士電機では高信頼性、コンパクト化の国内最大容量のモールド変圧器を完成しました。

富士電機

富士電機株式会社
〒100 東京都千代田区有楽町1-12-1
(新有楽町ビル) ☎(03)3211-7111

新刊紹介

『S.D.S.—8 大空間』

S.D.S.編集委員会=編集 (代表=船越徹)

横文彦、木村俊彦、鈴木博之、松留慎一郎=執筆代表

A4判 224頁

新日本法規出版 11000円

大空間をもつ建築物を作ることは、いつの時代にも人間の夢のひとつであった。現代の大空間をもつ建築物はどのような作品か、それはどのような技術に支えられているか、歴史的にはどのようなパラダイムであったかを紹介する。



『浜野安宏コンセプトインデックス』

浜野安宏=企画構成・著

B5判 392頁

六耀社 4900円

常に時代のアンテナたらしとし、「プロデューサー」なる新専門分野の開拓と確立をめざし、精力的に活動を続ける浜野安宏。本書は、公も私もすべてを投入してきた浜野安宏の53年にわたる発言と行動の軌跡である。志ある次代の担い手たちへ送る熱きメッセージ。



『ARCHI-FORUM IN OSAKA vol.2』

石井修、竹原義二、花田佳明、鈴木毅、東孝光、他=著

B5判 76頁

柳々堂 1000円 (送料込み)

大阪を中心とした関西の建築家が自ら発言の場をつくらうと発刊されたアーキ・フォーラムの第2号。

若手を中心に30名近くの建築家が文章を寄せる。

申し込みは直接柳々堂まで

郵便番号550 大阪市西区京町堀1-12-3

tel.06-443-0167 fax.06-443-1826



明日の環境づくりを 考える……



営業品目

ビル、工場、一般電気設備
防爆電気設備
受変電設備
外線工事及び計装工事
電気機器の販売

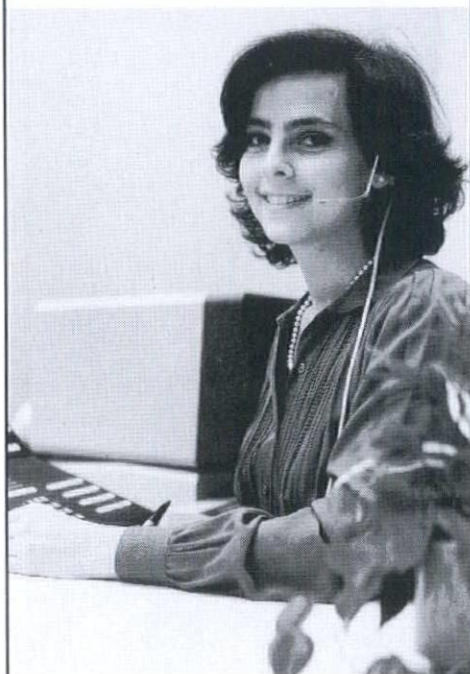
設計・施工



篠原電機工業株式会社

本社 〒210 川崎市川崎区藤崎4丁目4番4号
川崎営業所 電話 川崎 044 (244) 1241 (代表)
横浜営業所 〒231 横浜市中区富士見町1番1号
富士見町ビルディング2階
電話 横浜 045 (252) 8081 (代表)
大和営業所 〒242 大和市下鶴間1614番地89
電話 大和 0462 (76) 3107 (代表)
横須賀営業所 〒237 横須賀市浦郷町3丁目63番25号
電話 横須賀 0468 (66) 4128 (代表)
中原営業所 〒211 川崎市中原区上小田中1256番地3号
電話 川崎 044 (751) 1196 (代表)

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまあるくつづける」。日立電線は、いま、
快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1611

新刊紹介

『ヴェネツィア 大運河』

ウンベルト・フランツォイ=著、マーク・スミス=写真
陣内秀信=日本語版監修、中山悦子=訳
270頁×315mm 320頁
洋泉社 25000円

世界一美しい水の道=大運河から眺望する
ヴェネツィアの宮殿、教会、建築物の全貌を、
400点近いオールカラーの写真で紹介する。
歴史的宮殿の内部などの貴重な映像とあわせて、
ヴェネツィアの昔日の栄光を今日につなぎとめる。



『ヴェネツィアの石 1』

ジョン・ラスキン=著、福田晴彦=訳
B5版 624頁

中央公論美術出版 39140円

19世紀英国の美術・建築評論家ジョン・ラスキンが
遺した名著の完訳。全三巻。
美術と建築は民衆の宗教、道徳、民族的思想、
社会習慣の表現であるとする芸術哲学を確立し、
モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動をはじめ、
20世紀初頭までの建築家たちに多くの影響を与えた。



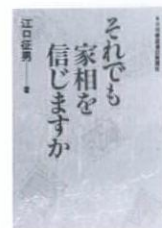
『それでも家相を信じますか』

江口征男=著

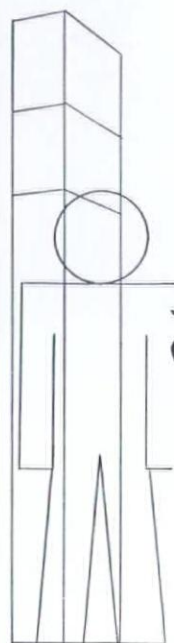
B6版 196頁

日刊建設通信新聞社 1200円

家相の弊害を明らかにするとともに、
その成り立ちや科学的根拠、実例などから、
それが単なる迷信に過ぎないことを具体的に示す。
家相による住宅の設計プランは不合理そのもので、
「ほんの少し正しい部分があるからといって容認する
のは危険だ」と警告する。



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。



神経もあれば、血管もあり、あらゆる
ものが総合的に働いてこそ、一個の生
体としての機能が発揮できるのではな
いでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同
じことで、鉄骨やセメント、石材、の
組合せだけでは、外見上如何に立派で
も、それは単なる物体の集合です。やは
り神経や血管と同じく、電気、水道、
ガス、空気調和などがその機能を充分
発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生
れると思います。

しかし……

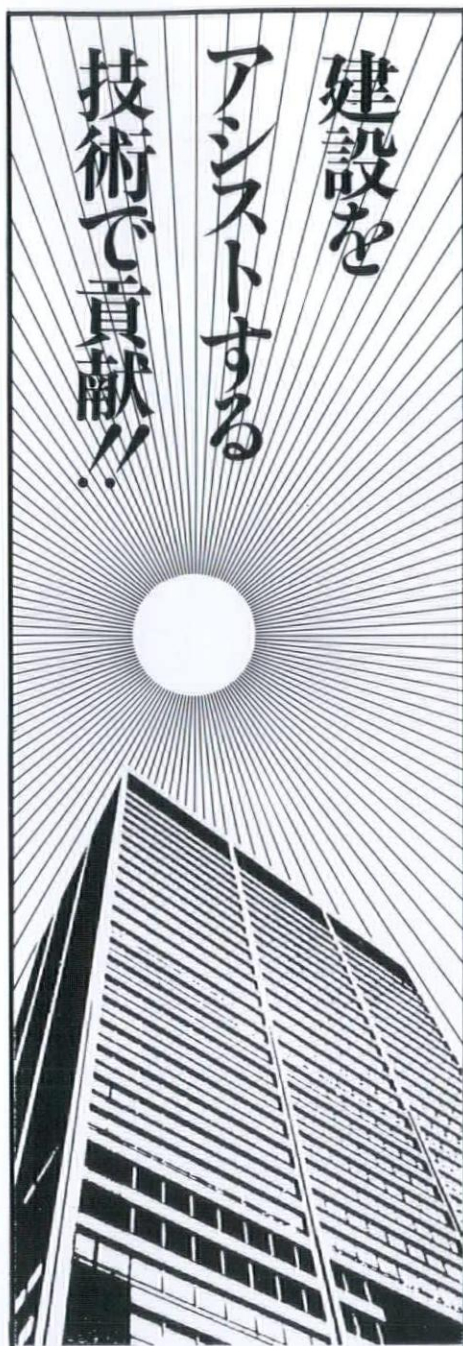
それだけで終わったのでは、まだ多くの
欠かんが残っております。ところがこ
れ等の機能を更に無駄や損失のないよ
う活用できたとしたら、もっと素晴し
いことではありませんか。

集中管理は集中制御によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかる
ことこそ、最も完べきな、からだのし
くみ、つまりビル全体の機能をフルに
発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社

本社 〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部 〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5141大代表



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社
(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) ㊞105
- 支社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

お知らせ

「建築 転送の速度 (Velocity of Transmission)」 隈研吾展

会期：2月10日(金)～3月31日(金) 11:00～19:00
会場：GALLERY・MA
東京都港区南青山1-24-3 Tel：03-3402-1010

鈴木了二作品展/物質試行23、35

会期：2月13日(月)～2月27日(月) 10:00～19:00
13日19:30より物質試行35自作映画上映あり
会場：東京日仏学院ギャラリー
東京都新宿区市ヶ谷船河原町15 Tel：03-5261-3933
問い合わせ：鈴木了二建築計画事務所
Tel：03-3589-4559

エディフィカーレ建築同人展 「都市を抹消し、交通開放系の裸体を 想像せよ」

本展では、建築の契機たるべき〈都市〉の再記述す
なわち既にあった都市なるもの/l'agglomération(ア
グロメーション)の交通論的記述が探求される。
会期：2月6日(月)～2月24日(金) 10:00～18:00
会場：NICOSギャラリー
東京都文京区本郷4-1-11F Tel：03-3812-1432

川島織物講演会「美を語る」

東京会場
講師：竹山聖
テーマ：建築の構想について
日時：2月21日(火) 18:00～
会場：経団連会館14階大ホール
東京都千代田区大手町1-9-4 Tel：03-3279-1411
申し込み・問い合わせ：川島織物講演会事務局
東京都千代田区永田町2-14-25F Tel：03-3506-0803
大阪会場
講師：村上徹
テーマ：場所と建築
日時：3月8日(水) 18:00～
会場：メルパルクホール
大阪市淀川区宮原4-2-1 Tel：06-350-2111
申し込み・問い合わせ：川島織物講演会事務局
大阪市北区堂島1-1-5-5F Tel：06-347-0469

「都市という舞台：ニューヨーク —パブリック・スペースの可能性」展

ニューヨークの戦後の都市形成に焦点を当て、特に
そのパブリック・スペースの創られ方、活用のされ
方を通じ、ニューヨークという都市がどのように創
られ、そこにどのような都市生活へのビジョンが折
り込まれてきたかをテーマとする展覧会。
会期：1月27日(金)～3月4日(土) 11:00～19:30
会場：TNブローブ
東京都港区六本木5-14-35 Tel：03-3505-8800
問い合わせ：TNブローブ 担当／伊藤・栗原



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の 三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸町1丁目35番8号
㊞(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

フランク・ロイド・ライト復刻照明コレクション

フランク・ロイド・ライト照明コレクション発表会
会場：ヤマギワ五番町ビル
期間：1994年11月28日～12月22日

巨匠建築家の復刻家具といえはいくつものポピュラーな作品が思い浮かぶ。ル・コルビュジエ、チャールズ・レニー・マッキントッシュらの特に椅子などは、比較的多くの人がイメージできるのではないだろうか。しかし照明器具は数少ない。ヤマギワ株式会社はフランク・ロイド・ライトの照明器具制作及び独占販売のライセンスを取得し、今年の2月にニューヨークで製品発表、日本では11月に発表と同時に販売を開始した。

フランク・ロイド・ライトのデザインはフランク・ロイド・ライト財団によってその保存、製作等が管理されている。ライトのデザイン制作、教育の現場であったタリアセンを現在も運営するこの財団が、ライトの遺作のほとんどを掌握するのである。復刻品のライセンス生産計画は1982年より始まっている。家具：Cassina、鋳造工芸：Historical Arts and Casting, Inc.、ステンドグラス：Oakbrook Esser Studios、テーブルウェア：Tiffany & Co.、布・壁装：Schumacherが既にライセンスを獲得した。ここに照明器具メーカーが挙がっていないのは、ライトの照明が、木材、メタル、ステンドグラスと多様な素材と技術を使っているのを、これを一社で網羅できるメーカーが見あたらなかったからということだ。

晴れて契約となったヤマギワは、膨大な調査研究をこなすことになる。図面のコピー、フィルム数百点を持ち帰り、資料のないものは実測。それも、取り外し不可のものが多く、苦勞がしのばれる。今回、ライトが設計した5つの建築——デーナ邸、ロビー邸、ミッドウェイ・ガーデンズ、ストラー邸、タリアセンから、12点の照明器具が復刻された。

展示会では、パーツも並べてあったが、そのひとつひとつがアクセサリー商品として販売できるほど、ディテールに力が注がれていた。デーナ邸照明のステンドグラスなどは、真鍮フレームにはめ込み式に作られ、シャープなジョイントが際立つ。総じてデザインの完成度の高さが、古さを払拭してとても新鮮なものに見せている。

ミッドウェイ

- ・高：771 巾：350 奥：749 重：8.7kg
- ・セード：オパールガラス
- 真鍮フレームブラックパティナーナ仕上
- ・本体：銅 アルミ 真鍮 黒色塗装仕上
- ・建築：ミッドウェイ・ガーデンズ

スーマック1

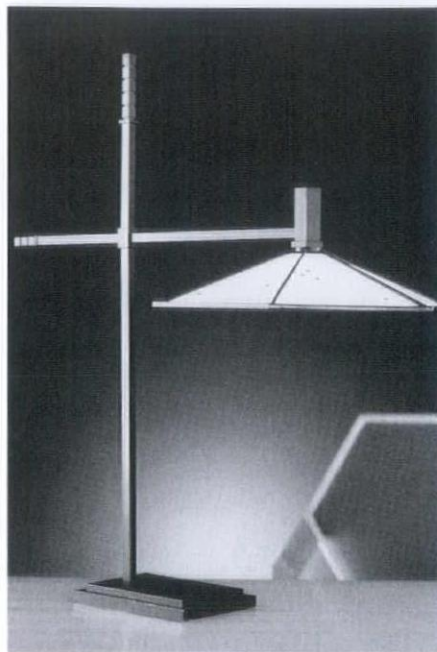
- ・高：558(本体) 巾：602 奥：602 重：45.5kg
- ・セード：ラスター加工ステンドグラス
- 真鍮フレームブラックパティナーナ仕上
- 本体：真鍮黒ブロンズマット仕上
- 一部真鍮磨き仕上
- ・建築：デーナ邸

ストラー1

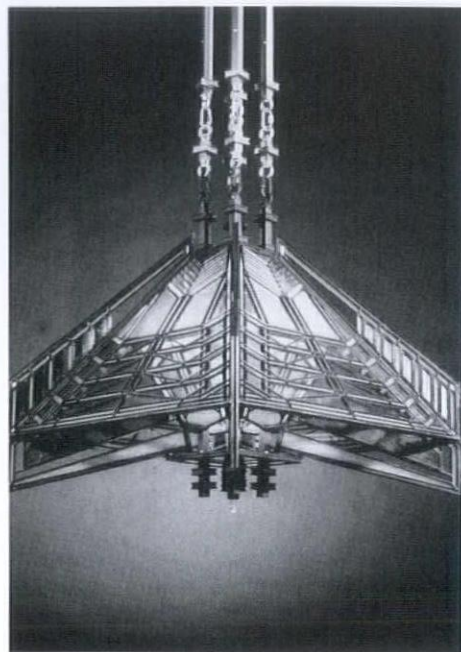
- ・高：1929 巾：260 奥：260 重：13.8kg
- ・セード：クリアガラス内面サンドブラスト仕上
- 本体：銅 アルミ 黒色塗装仕上
- ・建築：ストラー邸

タリアセン2

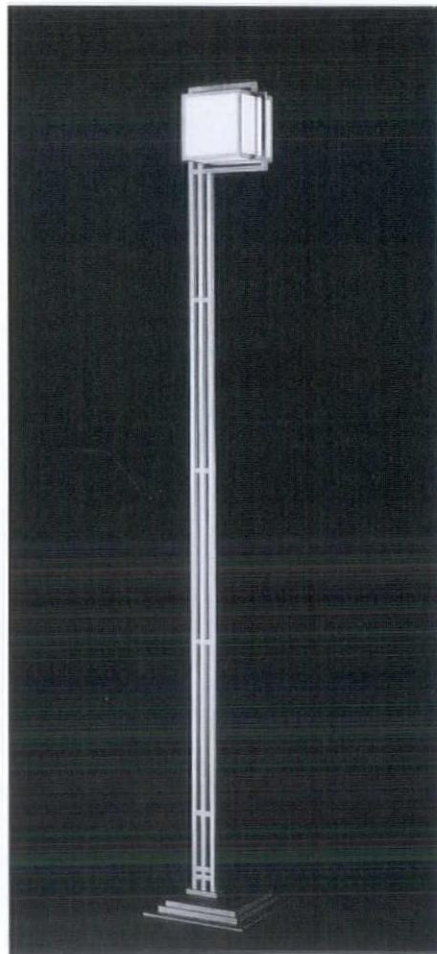
- ・高：2036 巾：410 奥：410 重：20.2kg
- ・セード：サクラ材塗装仕上
- 本体：サクラ材塗装仕上
- ・建築：タリアセン・ウェスト



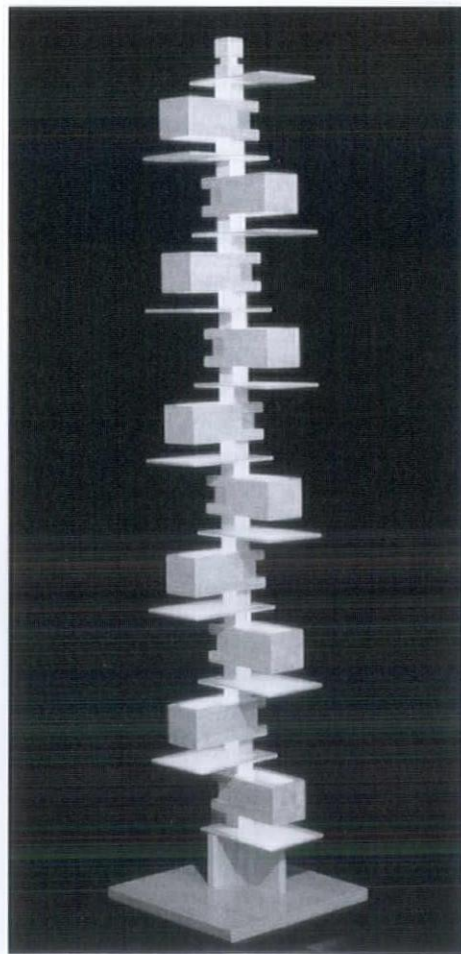
ミッドウェイ



スーマック1



ストラー1



タリアセン2

技術を生かす

1994年12月2日から12月28日まで、秀光ONEギャラリーにおいて「現代家具のつくり手たち——職人+デザイナー展」が開催された。

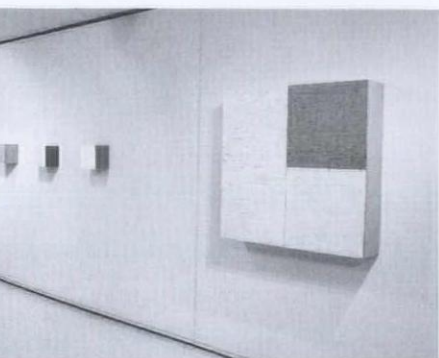
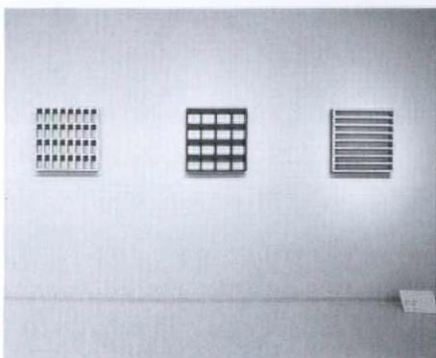
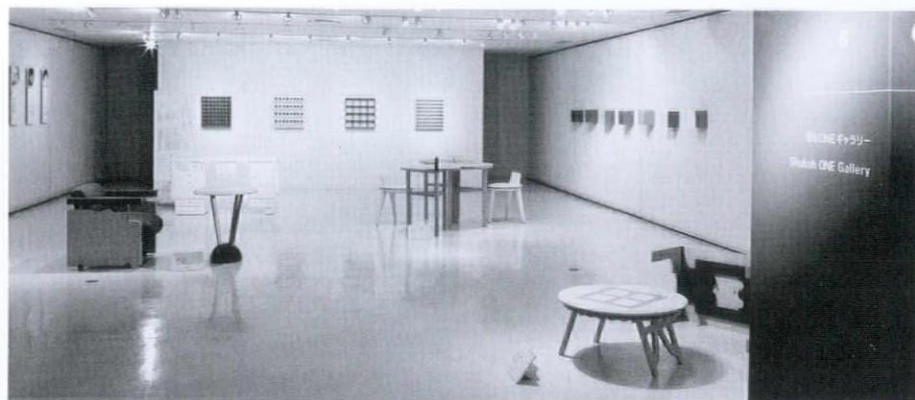
かつて、大量、新奇、手軽といったコンセプトのもとに多くのモノたちが生み出されたが、今やそれらは過去の徒花と化してしまった。そこで、「確かさ」、「質」が問われる現在、家具についても再考の契機となるべく企画されたものがこの展覧会である。ここでの家具は製品化をめざしたものではなく、職人とデザイナーとのコラボレーションがテーマである。参加者は、荒知幾、飯島直樹、清水文夫、久田修司、三橋いく代の5人のデザイナーと、故倉俣史朗を始めとする現在活躍中のデザイナーたちの家具を手掛けてきた、石山辰雄、大村守一、杉本汎、田中英次、中村唯志、浜中育造、山本征利の7人の職人たちである。

企画者である内田繁は展覧会に寄せて「家具製作とは実に不思議なものである。同じ図面を前にしても職人の質・感性によっては、まったく異なったものが生まれる。」と述べている。こうしたことは、家具だけの話ではなく、規模の大小に関わらずすべての製作物に言えることだろう。図面を引く側が製作する側から教えられることは多々あることだ。家具においてはもちろんのこと、あらゆるすべてのモノの製作には、職人たちの気質と技術力が大きなウエイトを占めているのである。

今回の展覧会は、なかなか表舞台へ登場する機会の少ない裏方たちへ視線を向けることの重要性を再認識するよい機会であったと思える。

- 1：デザイン／荒知幾、木地製作／浜中育造、塗装／石山辰雄、椅子張り／田中英次
- 2：デザイン／飯島直樹、テーブル木地下地／山本征利、金物製作／大村守一、塗装／石山辰雄、椅子張り／田中英次
- 3：デザイン／清水文夫、木地製作／中村唯志、金物製作／大村守一、塗装／石山辰雄
- 4：デザイン／久田修司、家具製作／杉本汎、塗装／石山辰雄
- 5：デザイン／三橋いく代、木地製作／山本征利、塗装／石山辰雄

現代家具のつくり手たち——職人+デザイナー展
会期：1994年12月2日—12月28日
会場：秀光ONEギャラリー



「なるほど、ホームエレベーターか。」



**おばあちゃんには
明るいお部屋**

わが家でいちばん明るいのはって考えてみるとやっぱり最上階ですね。上り下りのことなんか考えずに、いいでしょ、ね。



**ラクラク
おフン干し**

さあ晴れた。家族全員のおフンをベランダに干すからみんな手伝って。なんて声かけなくても、ほら、これなら大丈夫。



**右手に赤ちゃん
左手に買い物袋**

あらあら、お買物の途中で赤ちゃんが眠っちゃったんですね。重い荷物もいっしょに2階まで。こんな時、助かるんだ。



**おじいちゃんの
友だちの輪**

おじいちゃんは階段がつかうぞう。ということは、おじいちゃんの友だちだつてつらい。みんなが集まるとあつてよかったって実感。



**3階の鉢植え
まとめてお庭へ**

よく晴れた日曜日。たまにはお部屋のグリーンを外へ出してあげようか。なんて時、上の階からスイーと降ろせるんだ。



わが家のお掃除直行便

あ、1階でおサドウをこぼしちゃった。でも、掃除機は3階。という状況を考えても、毎日のことを考えても、必要だね。



**ディナーの
ワゴンサービス**

多世帯で一軒の家に住む、となるとこんなことも必要になるんですよ。ちょっとオシャレでしょ。くせになりそうね。



**勝手口に届いた
ビールケース**

キッチンで日当たりのいい2階にしよう。でも、ちょっと待ってください。配達される荷物はどうするの。というわけで、ね。



**風呂あがり
リビングに父の客**

あるんですね、こういうこと。お風呂から出たお父さんにお客様の声。こんな時もハチ合わせしないですむからラッキー。

へん、へん、へんの音がする、
三菱ホームエレベーターWELL。

デザイナー新、
3タイプで、
新登場



たくさんの家族を乗せてスイースイーと大活躍の三菱ホームエレベーターWELL。きょうも全国2000世帯でご愛用中です。2階建て、3階建てに住む人、2世帯同居の人々、みなさん声をそろえて「ほんとにラクチン」と大好評のWELL。こんなに喜んでいただけるなら、もっと多くのご家庭に。というわけでこの度デザイナー新。乗りごこちもさらにアップして、フルラインナップをそろえました。



●写真はエクセレントタイプ・カゴ室

●ホームエレベーターの一般大臣認定とともに(財)ベターリビングのBL認定を、日本ではじめて取得 ●カスタム、エクセレント、ワッディの3タイプ・3人乗り用(カスタムタイプには2人乗り用もあります)
●機械室不要の省スペース設計をはじめとする数々の配慮 ●メンテナンスは、全国に広がる三菱ホームエレベーターのサービス網へ、24時間待機体制で安全性をより確かなものにします。
お問合せ、カタログのご請求は…三菱電機株式会社 ビル事業部 〒107東京都港区赤坂5-2-20(赤坂パークビルディング) (03)5573-3747 ●札幌(011)212-3727 ●仙台(022)264-5633 ●大宮(048)653-0255
●横浜(045)201-0951 ●千葉(043)241-8422 ●新潟(025)241-7221 ●金沢(0762)33-5506 ●名古屋(052)565-3160 ●大阪(06)347-2271 ●広島(082)248-5278 ●黒松(0878)25-0006 ●福岡(092)721-2163

三菱電機株式会社

表情多彩



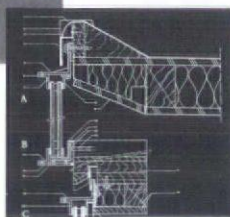
照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。

宮崎フェニックスリゾート
シーガイア/サミットホール

山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12	TEL.03-3253-5161	横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1	TEL.045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町11-11 (ANDOビル)	TEL.022-267-1630	大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23	TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30	TEL.092-282-7635	名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル)	TEL.052-252-5161
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8	TEL.0273-63-1442	千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14	TEL.043-244-2540
高松営業所 〒760 高松市天神前 10-9 (妹尾ビル)	TEL.0878-62-2531	広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 (遠田ビル)	TEL.082-293-6119
秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムラビル)	TEL.0188-65-2550	宇都宮出張所 〒818 宇都宮市海道町 818-2-1002	TEL.0286-60-1381
		札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三条 4-2-3	TEL.011-811-2215
		静岡営業所 〒422 静岡市福川 3-12-4 (山中ビル)	TEL.054-283-9788
		鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (漢方薬ビル)	TEL.0992-58-0031
		長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27	TEL.0262-43-8420

岡本美樹
清水祐二
田中大介
堀井義博
山口賢



現在進めている現場で、大手トップライトメーカーに施工を依頼する事態が発生し、あがってきた施工図に愕然とした。10mmもないトップライトのガラスを支える枠の厚さが115mmもあるのだ。アルミサッシュ枠が70mmでスチールドア厚が40mmと標準化されているように、他に寸法は用意していないという。なぜそんなに厚いのかといえば、バネが原因であった。つまり、トップライトを開閉させるときのある勢いを得るため、開閉バネにある強度が必要でそれと釣り合う枠の重さがないと、一度開いたらそれっきり、閉まらないそうなのである。バネは種類しかなく、昔はもっとあった枠のサイズもそれに対応し、一つに統一された。したがって、開閉式でない我々のトップライトも枠115mm厚で了承してくれというのである。このような間抜けな話も標準化という経済原則の前では極めて正当な理由を持つかのように見える。確かに標準化は、建設の効率と性能を保証し、言語の共有を可能にする。あるいは先練された標準詳細には知恵と経験の積み重ねがあって、一概に悪いとはいえない。しかし、豊富化ではなく排除へと向かう標準化は、陳腐化と同義である。形式的創造力と物質的創造力を図式的に建築の全体構

造の論理を無視することができない。しかし、開発にも段階があって、素材自体の開発から始める場合から、部材の形状の開発、複合建築要素の開発、部材の使用方法的開発(転用)、使用する意味の開発(ずらし)、とあり、徐々に純粋な物質的創造から形式的創造に傾いていく。しかし程度は違っても、最終的には物質に意味が還元される。今回のタイトルである「ディテール研究」とは、あくまで物質性の問題にこだわっていく姿勢の表明である。第二の特性は、インダストリアルデザインやグラフィックデザインが新しいテキストとして、現代的な味付けを与えつつ、物質に還元されていくことである。この特性に関しては、今回は見送り、回を重ねるうちに取り上げたいと考えている。

今回は最もわかりやすい「表面」に着眼して欲しいとした。結果的に選ばれた作品を見ると、Herzog & de Meuronの作品が二題選ばれた。一つはバーゼル駅内に建つシグナルボックス(中に精密な電気機器が入る)で軌道敷内という電気的不安定な場所に、ファラデーの籠という方法でプログラムに解答を与えるもので、「銅」で表面が覆われることで電磁シールドが完成する。したがって開口部の詳細も籠を破らないルーバーという方法が採用されている。またもう一題の銀行は、「金」塊、「鉛」の金庫という金属に意味が還元された例である。完成するまでは建物は不明だ

海外建築情報リミックス

成と部位に分ける方法が、標準ディテールといわれるものの罪悪であって、我々が批判的にならなければならないものなのである。

ところで、新しいものをつくるのが芸術の価値であるとする。すると、必然的にテキストの問題につきあたる。テキストの問題は芸術一般に新しいものをつくらうとするときにはほとんど生死の問題であるといつてよい。そのレベルも素材、道具、方法と多面的である。建築の場合、最初のレベルの問題は以下になる。ブリコラージュとしての設計者の仕事の性格を考慮すれば、あらかじめテキストが与えられないと仕事が始まらない。いまあるもののなかでの選択がデザインである。この極めて現実的な状況の中で、いかに新しいものをつくっていくか。この大問題を打破するような海外建築を探索することをテーマとしよう。海外建築を対象とすることの効用は、テキストそのもののずれを期待できることと、部材の開発環境や経済状況の違いがあることである。

新しいものを成立させる条件は、次の二点かと思われる。第一に、既成のテキストの反復のみをするのではなく、最初に切り出される建築要素(ビルディングエレメント)が新しいと評価し得ること。第二に、現代的なもののあり方が新しいテキストとして表現されていること。一番目は明快だが、二番目は概念的に未整理で、あいまいである。第一の特性をもつ建築を創造し続けることは、常に発見的であることを意味し、単純には開発力が問われることになる。関西国際空港のオープンエアダクトやアラブ世界研究所のシャッターのような例が代表的である。もちろん生産と経

Theme: デイテール研究 その1「表面」

が。(彼らがコンペに弱い原因)。これらの作品は、素材という最も原始的な部分で建築の解答がされたものであり、逆に還元の度合いとしては最も高度で純粋なのである。シグナルボックスには各論著者独自の美的解釈がされており、これが妥当かどうかの検討はしないが、様々な解釈が成立するほど喚起力のある作品であることは、疑う余地なしである。太陽電池を外装材に使用する場合とコンテナが取り付く倉庫の二題は解決は異なるが、共に太陽電池、コンテナという建築外素材が新しいテキストとして使用される。しかし、いずれも意味のレベルでの還元が起きていないとすれば、ただ新発売の素材を表面に貼っただけという事になる。もちろん、ソーラーハウスという意味以外で太陽電池を使用したという点は買えるし、新素材における手法の開発はなされているようだが。コンテナはそれが立体的である点がポイントであるはずで、ジョイント部分の分析がないのか悔やまれる。結局、詩的な空間のイメージは、「表面」においてはトポロジカルな内部と外部の反転の幻想が見え隠れするようである。しかし、今回の結果をみて思うのは、詳細の物質的なレベルでの分析は条件(取材力)が厳しいということである。ただし、明らかにされたのは空間構成による解答より、建築の表面の素材における解答の方が、つまり、形式的還元よりも物質的還元が先に起こり得るということであり、このことは図式論のみに終始する現代の建築論においては極めてラディカルであるということである。

今井公太郎

1月号の「ビルディングタイプの立体化」に引き続き、「ディテール研究」と題して連載することになった。ビルディングタイプの視点とディテールの視点は、形式と物質という両極としてあり、基本的には全く異なるが、その背景には建築のテキストへの問題意識がある。目的は、原理主義的な分析が排除してきたアドホックな情報を拾い上げ、新たなテキストの誕生する瞬間に立ち会うことである。

コア・スタッフ'95
今井公太郎
岩下暢男
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

AMC: Le Moniteur Architecture
ar: The Architectural Review
d: domus
EC: EL CROQUIS

かつて美術の世界でモノ派とコンセプチュアルの対立があった。アートをコンセプチュアルな構図のもとで成立させるのか、または本来的に物質的な刻印を背負っているアートをその物質性を最大限に増殖させて形象化せしめんとする対立である。このことは建築においてもやはりパラレルな状況を思い起こさせる。つまり、ヨーロッパのモダニズムがその実験期に様式主義建築の形態構築アルゴリズムを再構築（しかし極めて脱構築的に）しようとした時に、採用したのが非常にフォルマリストティックな戦略であった。ここで注意していただきたいのは筆者が言及しているのは、あくまでも実験期であって大量生産に裏付けられたアメリカンモダニズムはいうまでもなく、わずかながらも審美観を提出するような「前衛」も除外するものである。（例えば構成主義にしても初期を除いてそのような「前衛」に属するのではない）。そして形態構築アルゴリズムの探求が情性化し馴化したのが、空間のプログラムであり機能論というコンセプチュアルな思考体系であろう。当然それに対する伝統からの、素材からの反動もあった。しかし、それはモダニズム実験期が行おうとした形態アルゴリズムの探求を形式と素材の二項対立にやらしてしまった。この二項対立の閉域から逃走することは可能なのだろうか。

今回のテーマに進む前には準備が必要である。建築を二つの諸関係に分解してみる。本体としての構

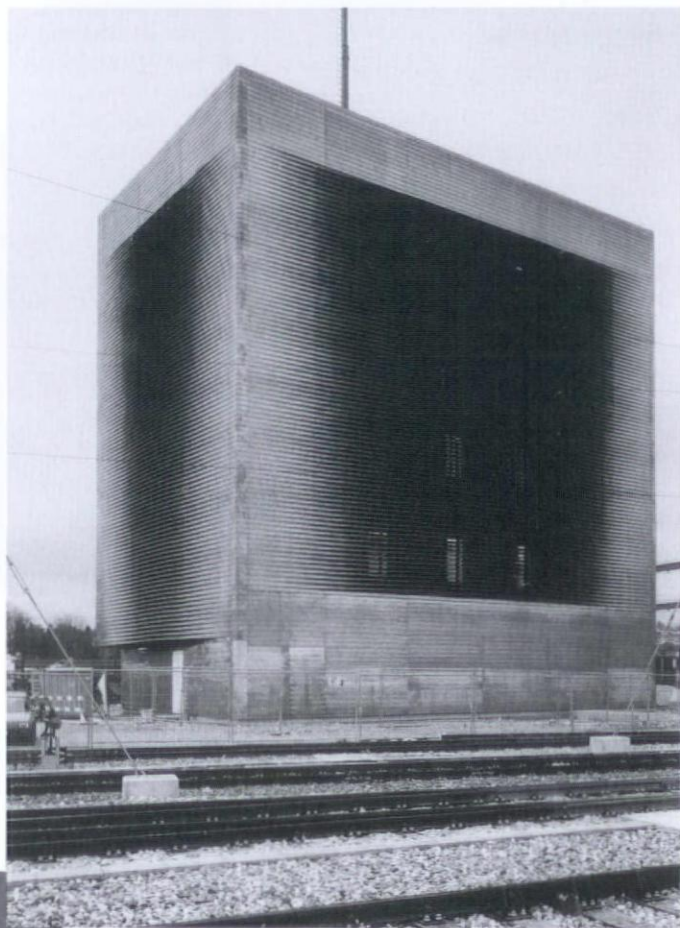
造（ここでは狭義の構造体だけではなく空間の構造も指す）皮膚としての外壁。我々のこの世界は、本体としての構造と皮膚としての外壁に選択的に表象化されるが、前者の場合は外壁が透明になり（ガラスを身に纏い、実際に透明になる場合もある）、構造が表出される。後者の場合はどうか。構造が表出される必要がないので不透明な形で外壁に素材感が溢れながら世界が表象されるのであろうか。いやそうではない。外壁には世界の一次的関係が表象される限りにおいて透明なのである。例えて言うならば、ガラスのボードの上に不透明な絵の具をもって色を塗っていくのではなく、色付きの透明なパントーンを貼っているのである。ところで透明とはいかなるものなのか。絵画においてこのことを考えてみる。ルノワールの絵は画布外の世界を画布上に射影関係で落とし込むという意味で、一次的な関係が表象されている。つまり、透明なスクリーンに透明なパントーンが貼られた透明な複合体であり、その意味において二次元である。しかし、キーファーの場合は三次元である。彼の絵では世界はすでに絵の中にあり、世界は絵の中に閉じこめられている。そして、その閉じこめられた内部が内部の最も外側に近い部分に漏れ出し（人間の体でいうと皮膚の内側部分）、それがトポロジカルな形で外部へと繋がっていると想像してみよう。その様な仮定においては彼のタブローはもはや外部空間が参照体系として構成

された二次元的な絵ではなく参照体系を持たない自己言及が可能にさせる三次元なのである。しかもこの場合、テクスチャはタブローに属するのではなく、構造（この場合内部に閉じこめられた世界そのもの）に属するのである。ここにあげるHerzog & de Meuronのシグナルボックスの外壁は上記のような意味において構造／外壁の図式をずらす可能性を持ったものとして提示できる。もちろん、数学的にトポロジカルな関係を構成しているわけではないので、通常の解釈の方が優先的になされるであろう。例えば、銅の外壁は建築工法上あくまで構造から分離した外壁であり、外の物理条件に一次的に対応しているという意味で透明であると。しかし、アイゼンマンやキブニスに代表されるようないわゆるFolding Architectureと呼ばれる一連の建築はこれをかなり直接的な形で表すが、この銅で出来た外壁は、キーファーの絵が三次元であるという水準において、同じく三次元であり内部と外部がトポロジカルにつながったものであるといえる。ある意味ではHerzog & de Meuronが一部の作品において実践しているのは原モダニズム（モダニズムの実験期）が探求していたようなものとは言えないだろうか。そして、彼らの作品を作り込みのすばらしさからみるのではなく外壁の三次元性から見るということの方がより生産的ではないだろうか。

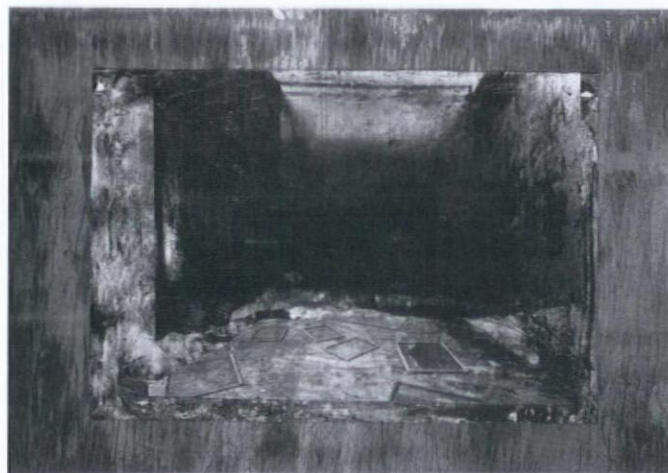
トポロジカル・ウォール

田中大介

Signal Box Auf dem Wolf, Basle—①
architect: Herzog & de Meuron
AMC 9411
Mark Rosenthal, Anselm Kiefer, Prestel—②



①



Fallen Picture, 1986

②

ドムスとオリヴェッティが、コストや効率に支配されない自由な建築的提案を求めて企画したアイデアコンペに、3組の建築家が指名された。そのなかには、David Chipperfield、Herzog & de Meuronといった、もの派と目される建築家たちが名を連ねている。課題はヨーロッパの地方都市に建つ銀行の支店で、これから増加するであろう高度に機械化されたサービスと、そこで働く人間、顧客のための空間をどう作っていくか、といった技術の将来をも見据えた建築像を探ろうとするものである。

Chipperfieldは、オフィスの熱環境から建築の形と素材を決定した。空気対流自体を利用したヴェンチレーションや、むき出しのコンクリート構造を蓄熱槽として使うといったアイデアは目新しいものではないが、Ove Arup等のサポートによるコンピューターシミュレーションによってリアリティを獲得している。これはものの物性を建築の性能のなかで最大限に利用し、それを表現に結びつけようとするもので、機能主義の流れを汲んでいるといえる。こういったアプローチは、もの派としては正統的なものであるが、その作品がある種の現代性を帯びているのは、ものに複数の機能を負担させたり、物性をつきつめてそれを十全に引き出そうとする、彼等のものに対する深い理解と洞察力のためであろうか。熱環境から導き出されるデザインも、コンピューターによるきめ細かい解析が可能になった現在、人工衛星や宇宙ステーションで行われているように、

部材ひとつひとつの熱容量、熱伝導から、建築全体のヒートコーディネーションを考えるような段階まで推し進めれば、素材の新たな構成原理を生む可能性を秘めている。

一方、Herzog & de Meuron のコンビは、誰もが「銀行」とすると即座に認識できるような安定した、堅固なイメージと、異なる敷地に対応できる柔軟性の両方を満たす建築の姿、構造とはどういうものであるかを考え、金と鉛のインゴットを思わせるプレファブ・ユニットの組み合わせで構成された建築を提案している。金のインゴットは金の蒸着ガラスで囲まれており、顧客に開かれ、コンピューターによる機械化されたサービスを提供するスペースで、いわば将来の銀行の顔である。Herzog達はこれを「一種のゲーム室」と表現している。それに対して、鉛のインゴットは外部に対して閉ざされ、管理や顧客相談のスペースとなっている。この直喩的な表現のなかで注目すべきは、プレファブリケーションのユニットによる反復を建築のアイデンティティと結びつけようとしている点である。同じ銀行の支店を同じユニットの組み合わせでつくことで、その銀行の建築的アイデンティティを確立する手法は、菊竹清訓なども用いているが、生産上のメリット以外に表現としての意義をプレファブリケーションに与えるものである。このように、ある企業の支社であるとか、住宅団地、集合住宅、あるいは大規模な建築物単体（香港上海銀行やボンビドーセンターも

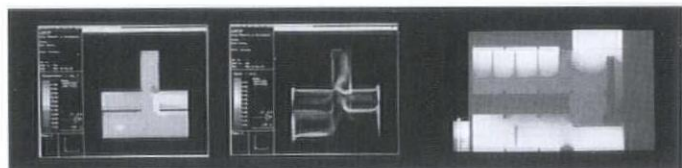
プレファブリケーションである）といった生産単位の規模の設定によって、その建築を際立たせることも、あるいは景観に統一感をもたらすことも可能であろう。こういった、様々なスケールでのプレファブリケーションの導入によって、最先端における建築の可能性の探求と、住宅メーカーのプレファブ住宅や標準ディテールをもったオフィスとを結びつけるのではないかと。建築の可能性を広げ、「新しい」空間とそれにとりまうディテールを継続的に開発することはもちろん必要である。一方、現実問題として標準ディテールをなくすことはできないし、住宅の大部分はメーカーによって供給されている。そして、現実には都市の景観を決定づけているのは（すなわち大きい生産単位をもつ）、これらのプレファブ住宅や標準ディテールによってつくられたオフィスなのである。したがって、陳腐化した建築状況を考えて、最先端のディテールを標準ディテールに回収する回路をつくることで標準ディテールを豊富化し、デザインの自由度を広げるといった方向も十分検討されるべきで、それこそが建築全体の変化につながるのではないだろうか。

将来の建築に対して、もの派の二人が出した解答の中から見てきたのは、機能主義やプレファブリケーションといった近代建築の課題であった。しかし、それらは現代的手触りをもって我々の前に立ち現れるのである。

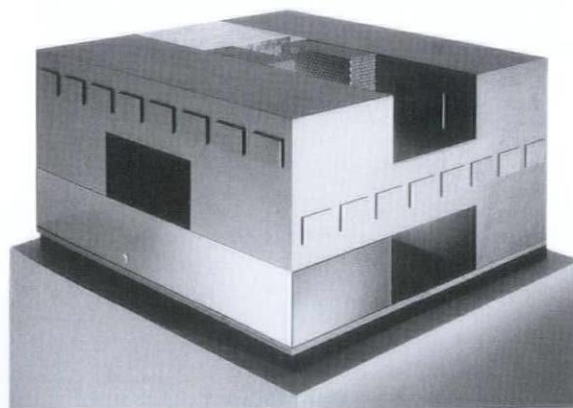
インゴット

清水裕二

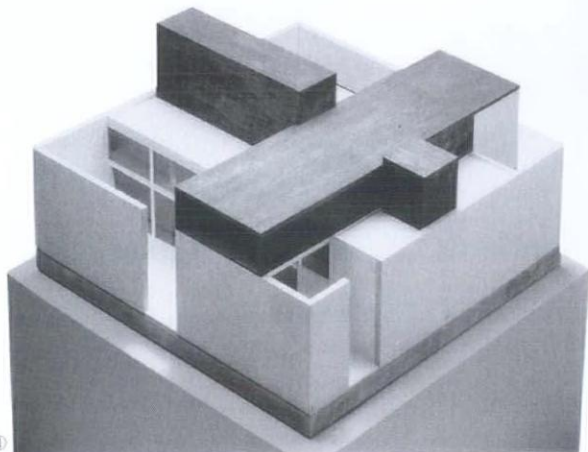
David Chipperfieldによるデザイン——①
Herzog & de Meuronによるデザイン——②
d9410



①



②



①



②

いきなりだが、資本主義社会でありながら社会主義的イデオロギーを実現する(すなわち資本の「所有」を肯定しながら「全体」の統制を優位に置くといった政治/経済的ヴィジョンを実現する)ためには、社会主義的教理はその大衆性を得なければならない。「資源/環境保護」とか「省エネルギー」とかいった、「あなたの損得だけでなく、社会全体の損得を大切にしましょう!」ってな感じの教理は、何ととってもそれが「すごくイカシてる」とか、あるいは(理屈は抜きにして)それをすることがとにかく「楽しい、おもしろい」ってな感じでないと、絶対にうまくは作用しない。デザイナーとかプロデューサーの社会的(=市民社会的)能力は、そういう場面でのみチカラを発揮する。

昨年の秋あたりから、東京では(ショボイ記事とはいえ、全国版の雑誌でローカルなネタを書くのはやや憚られるが)、都民に資源の再利用を促すために、J-WAVE(FM放送)が「Take it back!」なる黒人説りの英語を用いたキャンペーンを始めた(もちろんBGMにはヒップホップ系の音楽が使われている!)。マジメそうなオジサン/オバサンが考えたとはとても思えないようなメッセージだが、とりあ

ずこのキャッチコピーは、何ととっても今の十代の連中の頭に潜在的に入り込むフレーズであることは間違いない。(チーマー系のカギどもが、道端に空き缶を捨ててるオジサンを見ながら「テキキッバックしろよな。超サイター!」などと、ガムを吐き捨てて呟く日もあるかもしれない)

さて、建築において省エネルギーを実行するためには、施工の管理や手続きにおいてもそうだが、何ととっても建物のシステム=デザインにおいて問われることである。1991年のSD Reviewで、日本人の石田敏明がソーラー・ハウスを出していたが、確かにあれはカッコ良かった。しかし、それでも「太陽光/熱利用のための装置」が装置のまま独立していたために、デザイナーにとっては「余計なモノ」という印象が残った。それに対して、ここに挙げたKiss Cathcart Andersの設計による工場では、省エネルギーのための装置は、もはや装置としては独立しておらず、建築外装材として使われている。もちろん「太陽がいっぱい」のカリフォルニアと、「ひまわり」みたいに太陽を追いかければ、十分な効果を得られない日本とを比較するのは、それこそ「環境」からいって無理があるが、しかし、石田が自

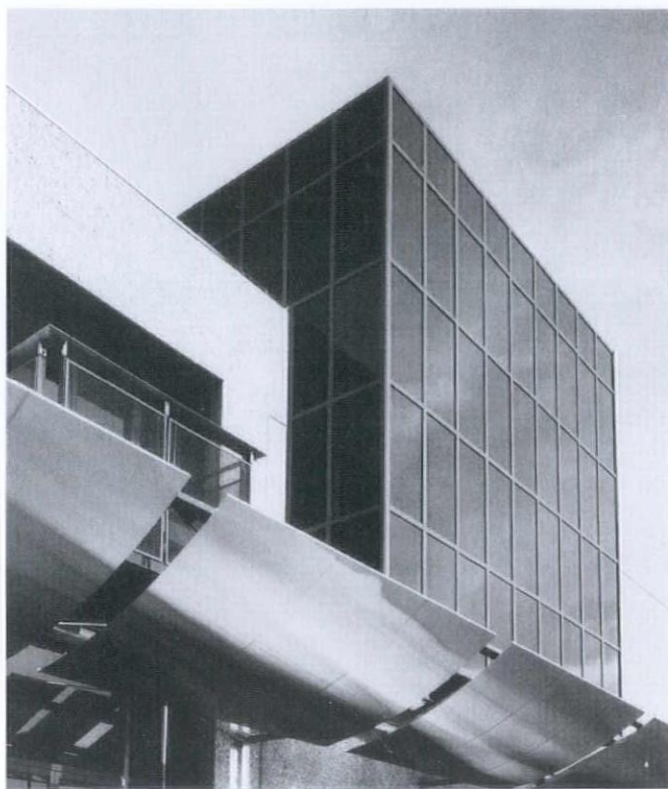
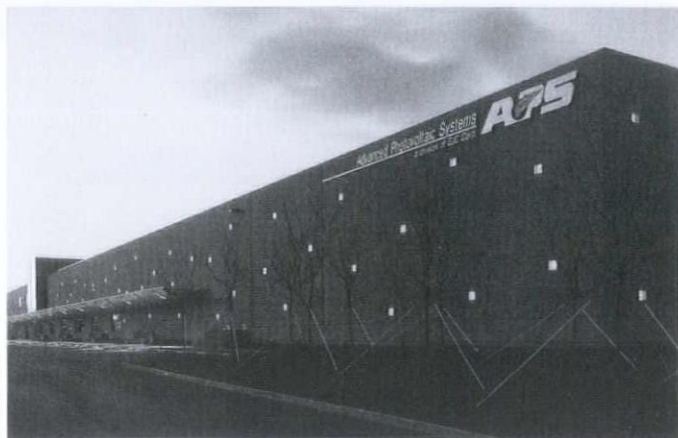
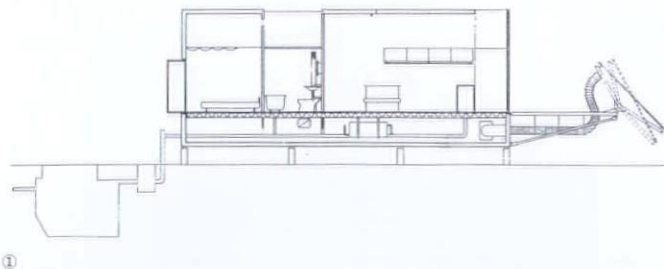
分の住宅案を「世界中のどこに置いても役立つ、住むための機械」として提示したプレゼンテーション(彼は世界のあちこちにそれをインボーズした絵やなんかも見せた)から考えても、技術をデザインの中に取り込む際の姿勢の違いがはっきり見て取れる。ここに挙げた案では、技術それ自体が建築そのものになっている。むしろ「太陽電池パネル」を外装材として用いることを決定した時点で、大きくデザイン上の制約は受けているだろう。——しかし、だ。「太陽電池パネル」仕上げの壁面の中にランダムな開口部をとったり、あるいは建物全部をそれでベタ塗りするのではなく、ほどほどに分節して別の素材で仕上げる部分との対比を見せたりと、「太陽電池パネル」を、完全に普通の建築外装材として使ってしまうところがとてもイカシてる。地味だし、物静かだけれど、この建物は「まだまだ地球は使えるよーん」とつぶやいているような気がする。

ところで話はまったく関係ないけれど、建築家の(Gregory) Kissという名前もメチャクチャにイカしていると思いませんか?——苗字がKISSだって!(つづく)

普通の建築外装材

堀井義博

Aプロジェクト、石田敏明設計——①
Factory, Fairfield——②
architect: Kiss Cathcart Anders
ar9407



建築の外皮のデザインにおいて、開口部は重要な位置を占める。その大きさや形状、配置は外皮の構成要素としてファサードのデザインに参加している。では、その決定要因は何かというと、建築の内部と外部の交流関係である。この交流関係には様々なものが考えられ、それが開口部の大きさや形状、配置を決定しているのである。住宅を例にとると、光や風を内部に取り込むために窓やトップライト、ドライエリアなどが作られ、また景色を取り込むためにピクチャ・ウィンドウが設けられ、そして人の出入りのためにドアが取り付けられる。また、それらの流入、流出の度合いをコントロールするという意味で、ガラスや障子、簾といった異なる素材がその開口部に適用されるのである。

今回取り上げる作品は、ピーター・ウィルソンによるミュンスターの Yellow Möbel 社のための倉庫である。一般的に倉庫は製品をストックし、市場の流通をコントロールするための拠点である。よって流通のシステムが建築のデザインにも反映されている。(ここでは外皮のデザインに限りて説明をして

いくが)。まず事務室や休憩室といった、人のための部屋以外には窓らしい窓はない。またドアも緊急用のものを除いては、日常使用するためのものは用意されていない。これは内部にストックされる製品の環境を一定に保つための措置であり、空調機などの使用によって内部環境の管理を行うためである。そして唯一、開けられた開口部は、製品の搬入・搬出を行うためのローディング・デッキの部分である。しかし、その開口部は搬入・搬出のためと説明するよりは、コンテナのために用意されたという方がより適切かもしれない。写真を見てもわかるように、その開口部はコンテナがちょうど入る大きさや形状をもち、トラックの搬入路と倉庫の導入部が重なる位置に配置されている。

コンテナはドイツ国内はもとより、世界の統一規格である。これによって製品を詰める段ボール箱のサイズも決定され、コンテナにぴったり入るようになっている。そして、この倉庫の開口部のデザインもこのような工業規格によって決定されている。製品をストックし、必要な時に放出するという、倉庫

における流通のシステムが、建築のデザインをコントロールしている例と言えよう。

流通のシステムによる建築デザイン、いかにも現代的な方法ではあるが、このような方法によって構成された倉庫で起こっている出来事にはもっと注目すべきである。それは製品を搬入・搬出するためにトラックが運んでくるコンテナが建築の一部になっているという点である。これにより、コンテナの容器としての意味は建築にまで拡大されているのである。

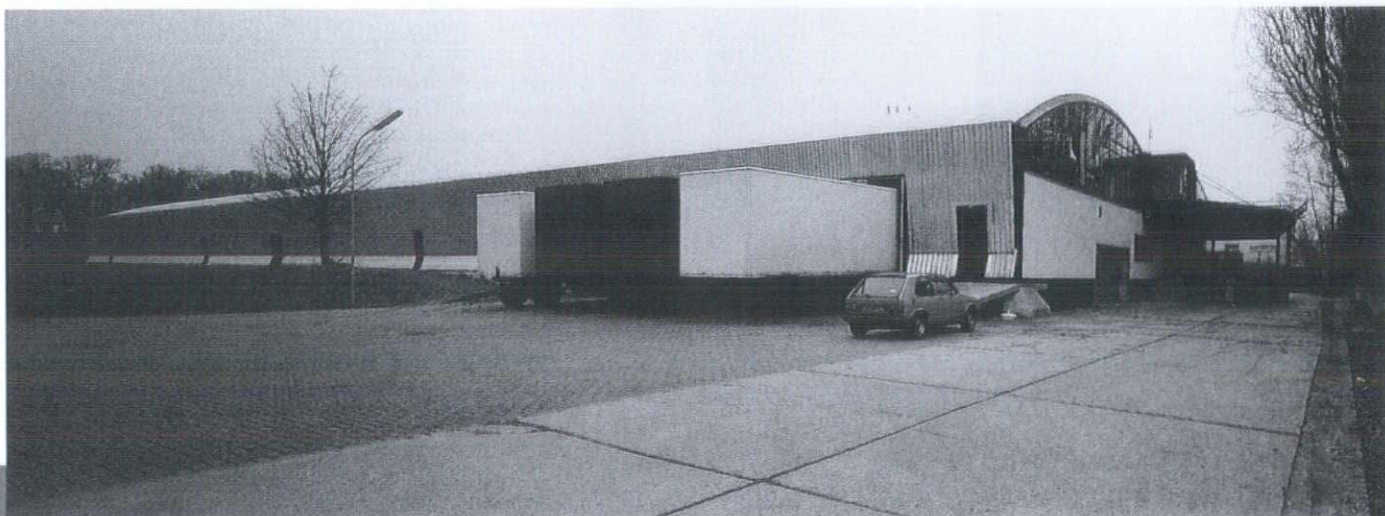
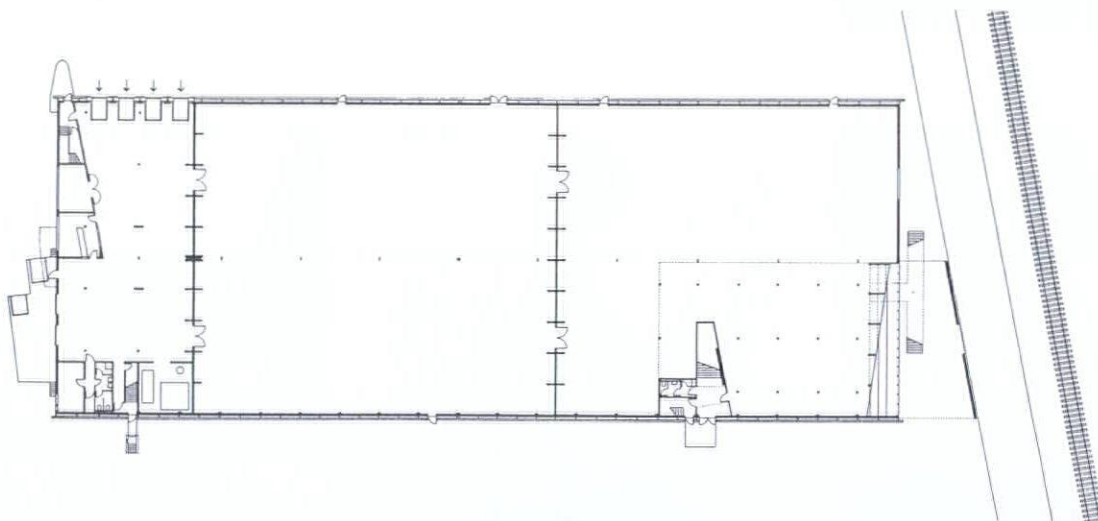
流通のシステムと建築は工業規格という寸法体系によって結び付けられデザインに反映された。そしてその関係は、外皮の構成要素の一部としてコンテナが組込まれることにより視覚化され、建築化された。

ピーター・ウィルソンのこの倉庫は、一見建築のコードでは読み解くことが難しいシステムや関係性を、いとも簡単に建築の表現のなかに見せてくれるのである。

コンテナ

山口 賢

Warehouse for yellow-möbel
architect: bolles/wilson
EC67



フランク・O.ゲリーは、「建築の外皮」に対して多くの示唆を与えてくれた建築家である。あるときは巨大な魚の骨組みを提示しオブジェとしたり、中をくぐらせるインスタレーションとしたり、また既成の住居に衣を着せて自邸を作った。今春、彼の自邸を訪れたときは、エントランスもファサードも隠れてしまうくらいに植物が生い茂り、さらに外套を着ているような景色になっていた。

建築は、人間の外皮（シェルター）を形成するためのアクション——働き掛けである。動物は毛皮に身を包み、外界から守られて生きている。果物は、皮を剥いて実を食べるし、皮があるから風雨に晒されても身は守られる。人間は生きてゆくために、人々と接し、夢を見、宗教を持ち、衣類を着、家の中に住んでおり、常に周囲との関わり合いの中で生活している。人間にとっては、世界全体が「外皮」であり、物理的な外皮として、衣服や建築を纏っている。

外皮のみでは、オブジェは作れても、建築は作れない。そこに囲いとする空間があり（たとえば壁、開口部、屋根などの形をとらなくても）、外界との間に何らかの境界が存在し、内と外が形成されている現象を、我々は建築と呼んでいるのだらう。

先日、韓国でフランスの服飾メーカーの協力によるファッションショーが開催された。モデル達の着

衣はほとんど小さな布切れのようなもので、生身のボディにカラフルなペインティングを施していた。服飾のファッションショーでありながら、衣服をデザインする前に肉体をデザインしてしまうところが凄いの。というのも、衣服を着ているよりも、着ていない方が、服飾デザインを「見せられた」ような気がしたからである。作った服を宣伝するためのオートクチュール・カタログ・ショーだったら、わざわざ現地へ行かなくても雑誌の写真を見れば充分と思っていたが、建築を雑誌の写真で見るのと実際に見るのとで印象が全然違うように、服飾も近くで見ると写真とは全然違うのではないだろうか。服飾にもディテールの拘りみたいなものがあると思ったのだった。皮肉なことに服飾と建築は商業形態とか、デザイン方法（デザイン面、テクスチュアを選択など）、制作系統（個人ブランドと大手メーカーの制作ルートの存在など）や、「人間の外皮」に深く関わりを持っている点がよく似ている。

「人間の外皮としての建築」としてヒントを与えてくれる建築作品の一つに、オーストラリアのプリズペーン・リバー沿いのカンガルーポイントにある、ドノファン・ヒル・アーキテクツの手によって作られた住宅作品が挙げられる。この作品は、壁と屋根が隙間を持ったデッキ状のフレームで構成されてお

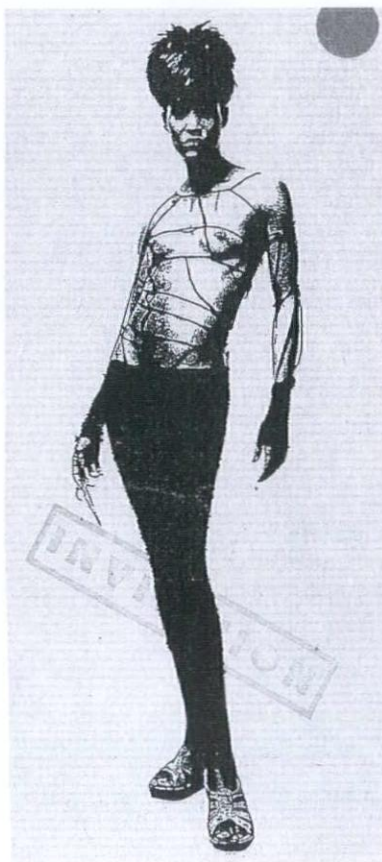
り、床は隙間のない同材のデッキで作られている。全体的には居住空間がデッキに取り囲まれているような形になっている。床のデッキは、外部へ伸び、さらにプリズペーン・リバーへと達して川の水を吸い上げて住居を潤す。わずかに沿っている屋根と垂直に立つ壁面は、柔らかに日光を取り入れて、内部に光と影の縞模様を織り込んでいる。スマートな外壁面に柱は現れないが、リビング・ルームにどっしりした手彫りのエンタシス柱が現れる。また、屋根・壁面のデッキとエンタシス列柱は、同様にステイン仕上げで素地の感触を残しているのに対し、間仕切りや扉は執拗に白く塗られ、ひときわ眩しく映る。

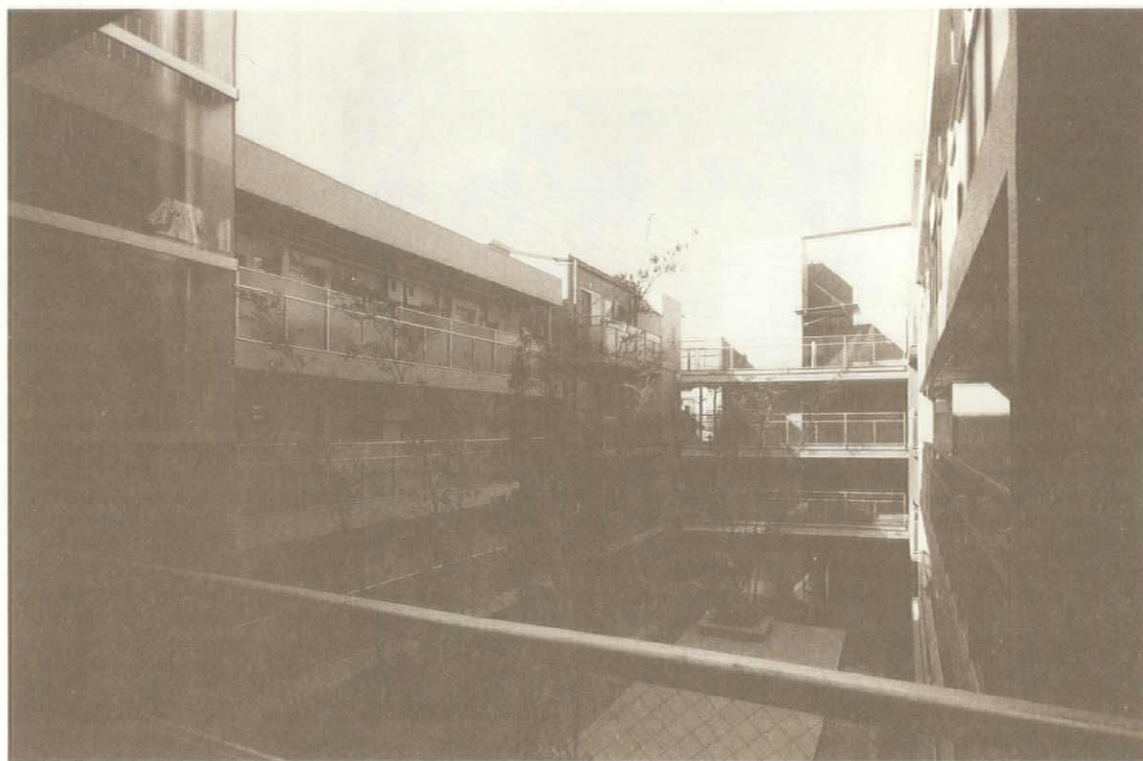
彼ら（設計者）は、自然のランドスケープと人工物、光と影、新・細（デッキの規則的なフレーム）と古・太（エンタシス柱）、粗（ステイン仕上げ）と滑（白塗り）、光と影の様々な対比が引き起こす現象によって、自然と人工物の融合と、内部空間と外部空間の融合を試みたのであった。これはアルド・ファン・アイクが提唱した「相対する現象によって誘発されるイメージ」を想起させる。彼らはデッキ（アクション）によって、自然と居住空間を分割しつつ融合させる「外皮」を作ったのだった。

アクションとしての外套

岡本美樹

Gehry Residence, California——①
The House of Kangaroo Point——②
architect: Donovan Hill Architect
Architecture Australia 9407-08





静宏荘/スタジオ建築計画 写真=堀内広治

9503

特集

集合住宅の現風景

集合住宅が近年になって新たな展開を見せつつある。公営・民間による意匠の違い、あるいは周辺景観との関わりを、設計者がどのように考えるのか。集合住宅が建築的に成立・評価される可能性はどこにあるのか。本特集では、ここ数年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。また座談会では、歴史的・時代的な視点から、これまでの集合住宅をふりかえる。

[作品]

茨城県営長町アパート、大成プレハブ社宅第⑩期、静宏荘3、熊本市営新地団地C、ヒルハウス国分寺、YKK滑川寮・市川寮、他。

[文]

松永安光、遠藤剛生、富永譲、元倉真琴、荒木正彦、大野秀敏、他。

[座談会]

植田実十室伏次郎十松隈洋

連載：建築における美学の応用 3

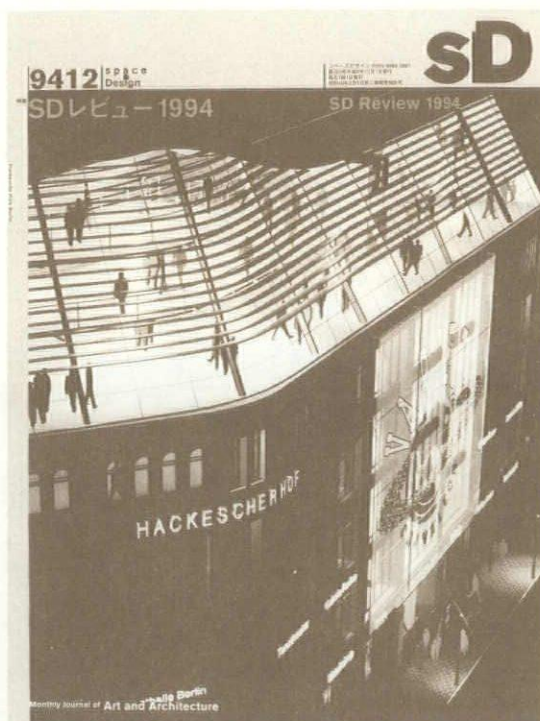
文＝エメリッヒ・シモンチッチ

連載：時分の花・ディテール写真館 7.

文＋写真＝下村純一

SD

バックナンバー



9412

特集

SDレビュー1994

SDレビュー1994入選展の結果を審査員コメントとともに発表。

[入選者] 荒木正彦／荒木正彦設計事務所、有泉秀明＋グリニス・M. ベリー／Studio a/b、石黒由紀＋田堀 繁、遠藤秀平／遠藤秀平建築設計事務所、荻津郁夫／荻津郁夫建築設計事務所、城戸崎和佐／城戸崎和佐建築設計事務所、加茂紀和子＋マニエール・タルディッツ／Celavi associates、鈴木敏彦、中村勇大／中村勇大アトリエ、花田勝敏＋大西直子／ウイング建築事務所、ユストス・ビザル＋ペーター・ルーゲ／Pysall Ruge Architekten、前田紀貞アトリエ、細田みぎわ／細田みぎわArchi-Studio、三栖邦博＋浜田明彦＋安田幸一＋持田英明／日建設計、堀池秀人＋堀池秀人＋益田滋子／堀池秀人都市・建築研究所、丸谷勝也／ARC UNIT STUDIO、吉松秀樹／アーキプロ。

[審査員] 高橋航一、坂本一成、栗生 明、隈 研吾。 静 悦
[撮影] 堀内広治

国際競作プロジェクト

オシヴィエンチム孤児院

ポーランドのクラクフ近郊(旧アウシュヴィッツ)に計画された、建築家13人による孤児院のための住宅とコミュニティ施設。

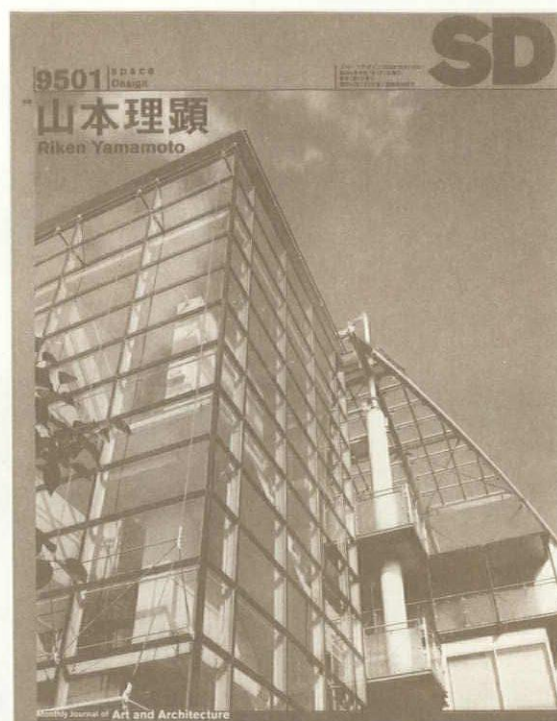
[参加建築家] トーマス・マンコフスキ、ゲルハルト・デュルシュケ、横 文彦、マリオ・ボッタ、他。

田窪恭治 サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト 2
ノルマンディ地方の一村落に建てられた、ロマネスク様式の小さな礼拝堂を修復、作品化して永久保存するプロジェクトのレポート第2弾。

新連載：建築における美学の応用 1.—— 絵画

連載：時分の花・ディテール写真館 4.

定価＝1,950円／本体1,893円



9501

特集

山本理顕

山本理顕の近年の仕事には、住宅、集合住宅に見られる新たな居住空間の模索と提案、さらには建築空間の変容を予見しつつ都市を見つめる眼差しがある。その主要作品となる「緑園都市」を中心に、通念的な空間論に刺激を与え続ける山本理顕の過去5年間の作品を紹介する。

[作品]

緑園都市、岩出山町立統合中学校、横浜博覧会：高島町ゲート周辺施設、痴呆性老人デイケアセンター、日仏文化会館設計競技応募案、加茂町文化ホール設計競技応募案、熊谷市第二文化センター設計競技応募案、埼玉県立近代文学館・桶川市民ホール設計競技応募案、鎌倉の住宅、岡山の住宅、葛飾の住宅、若槻邸、HAMLET、熊本県営保田窪第一団地、他

[写真] 北嶋俊治、大野 繁、他

[文] 山本理顕、宇野求、トム・ヘネガン

[鼎談] 横 文彦＋植田 実＋山本理顕

連載：時分の花——ディテール写真館 6.

石工の技

文＋写真＝下村純一

連載：建築における美学の応用 2

音楽と建築 (1)

エメリッヒ・シモンチッチ

特別定価＝3,000円／本体2,913円



SD

目次

地球環境の危機とNEXT21

日本の住宅問題とNEXT21

大阪の都市環境とNEXT21

市街地型の集合住宅とNEXT21

立体インフラ・インフィルとNEXT21

多様化するライフスタイルとNEXT21

部品のシステム化とNEXT21

素材の幅広い選択とNEXT21

設備の先進的試みとNEXT21

SD別冊25 近未来型集合住宅NEXT21

【環境共生をめざした実験のすべて】

大阪市内に建設された集合住宅
エネルギー、リサイクル、環境共生、
都市居住、建設システムなど、
あらゆる面から検討が重ねられ、実行に移され
た、希有壮大な計画
集合住宅の近未来像が確実に見える

A4判変形 176頁 定価4,500円
好評発売中

〈現代の建築家〉シリーズ

アルヴァ・アアルト

SD編集部編 A4変・216頁 ¥4,120

安藤忠雄①

SD編集部編 A4変・166頁 ¥3,500

安藤忠雄②

1981-1989

SD編集部編 A4変・196頁 ¥4,800

安藤忠雄③

アンビルト・プロジェクト

SD編集部編 A4変・148頁 ¥3,800

石井和紘

SD編集部編 A4変・170頁 ¥4,300

磯崎 新①

SD編集部編 A4変・194頁 ¥4,120

磯崎 新②

1976-1984

SD編集部編 A4変・196頁 ¥4,944

磯崎 新③

1985-1991 PART1

SD編集部編 A4変・170頁 ¥4,800

磯崎 新④

1985-1991 PART2

SD編集部編 A4変・138頁 ¥4,500

伊東豊雄

SD編集部編 A4変・160頁 ¥3,914

岡田新一

SD編集部編 A4変・178頁 ¥3,090

カルロ・スカルパ①

SD編集部編 A4変・214頁 ¥3,090

カルロ・スカルパ②

カルロ・スカルパ図面集

SD編集部編 A4変・134頁 ¥3,500

菊竹清訓

SD編集部編 A4変・178頁 ¥3,090

金壽根

SD編集部編 A4変・160頁 ¥3,090

黒川紀章①

SD編集部編 A4変・180頁 ¥3,090

黒川紀章②

1978-1989

SD編集部編 A4変・178頁 ¥4,300

齋藤 裕

SD編集部編 A4変・188頁 ¥4,200

ジオ・ポンティ

SD編集部編 A4変・88頁 ¥2,369

〈現代の建築家〉シリーズは、常に建築界に大きな影響力を持ち、その時代の先端を走り続ける建築家たちの珠玉の作品集である。各建築家にとって記念碑的作品の完成を機に、SD編集部独自の視点により継続的に編まれる、他に類をみない画期的総特集である。豊富なカラー写真、図面、ドローイングと論文を盛り込み、斬新なレイアウトによる美しい誌面で構成されている。著名建築家たちの活動を時間軸で知る格好の書。

白井晟一

SD編集部編 A4変・160頁 ¥3,605

象設計集団

SD編集部編 A4変・180頁 ¥4,000

高松 伸

SD編集部編 A4変・210頁 ¥3,800

丹下健三①

SD編集部編 A4変・108頁 ¥4,635

丹下健三②

1977-1983

SD編集部編 A4変・220頁 ¥4,120

丹下健三③

1987

SD編集部編 A4変・212頁 ¥4,600

丹下健三④

1991

SD編集部編 A4変・202頁 ¥4,200

早川邦彦

SD編集部編 A4変・168頁 ¥4,300

林 雅子

SD編集部編 A4変・168頁 ¥4,429

堀口捨巳

SD編集部編 A4変・176頁 ¥3,300

槇 文彦①

SD編集部編 A4変・180頁 ¥3,914

槇 文彦②

1979-1986

SD編集部編 A4変・198頁 ¥4,326

槇 文彦③

1987-1992

SD編集部編 A4変・216頁 ¥4,500



安藤忠雄論

古山 正雄著 B5変型 160頁 ¥3,000

安藤の建築にあって壁は特別の存在である。その壁を様々な角度から解説することを通して、安藤の建築を解釈し、批評しようとする試み。それは永続性を見失いがちな現代の建築一般に対する鋭い批判となっている。

《現代の建築家》シリーズ

《現代の建築家》シリーズは、常に建築界に大きな影響力を持ち、その時代の先端を走り続ける建築家たちの珠玉の作品集である。各建築家にとって記念碑的作品の完成を機に、SD編集部独自の視点により継続的に編まれる、他に類をみない画期的総特集である。豊富なカラー写真、図面、ドローイングと論文を盛り込み斬新なレイアウトによる美しい誌面で構成されている。本書は、著名建築家たちの活動を時間軸で知る格好の書といえる。(SD特集部分の上製・保存本)

安藤忠雄(1)

SD編集部編
A4変・178頁 ¥3,500

80年代初期までの総特集。詩+ドローイング：安藤忠雄、時代の透き間から：二川幸夫、対談：西沢文隆+横文彦、ドローイング：小篠邸、石原邸、他、作品：ガラスブロックウォール、帝塚山の家、住吉の長屋、他

安藤忠雄(2)

SD編集部編
A4変・196頁 ¥4,800

場所・幾何学・自然をテーマに増々劇的な空間が展開される安藤忠雄の世界・精緻でそして圧迫的な迫力でせまるドローイングと共に1980年代の主要作品を網羅した特集第2弾。往復書簡=P.アイゼンマン×安藤忠雄、他。

安藤忠雄(3)

SD編集部編
A4変・148頁 ¥3,800

アンビルト・プロジェクト
安藤忠雄の足跡の中で実体として実を結ばない数々のプロジェクトは、実現に至らないがために、より明確に彼の思考プロセスを我々に示してくれる。それらの膨大な図面、模型、ドローイングから安藤の建築哲学に迫る。

桂離宮

ブルーノ・タウトは証言する

宮本健次 四六判・184頁 定価 2,369円

桂離宮のタウトの「発見」に的を絞り、彼自身の残した膨大な著述をもとに詳細に再現する。

西欧人の視点から見た桂離宮を分析することにより、日本建築のシンボルといわれる桂離宮の意味を改めて問い直す。

ランドスケープデザイン

野生のコスモロジーと共生する風景の創造

吉村元男 A5判・176頁 定価 2,884円

著者の25の作品群を通して緑の景観形成について解説する、内容：①街に緑を創生する、②ニュータウン、③水辺、④緑の肺、⑤パノラミックランドスケープ、⑥風景建築、⑦庭園。前著「水辺の計画と設計」に次ぐ好著。

SD選書

95 建築とは何か

ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳/長谷川 堯解説 四六判・260頁 定価 1,854円

141 続 建築とは何か

ブルーノ・タウト著 篠田英雄訳 四六判・240頁 定価 1,009円

現代の建築家シリーズ

ブルーノ・タウト

SD編集部編 A4変判・84頁 定価 2,575円

都市計画・水辺/都市環境/ランドスケープ

移ろいの風景論

五感・ことば・天気

小林亨著 A5判・240頁 定価 3,914円

水辺の計画と設計

吉村元男、芝原幸夫共著 A5判・240頁 定価 2,987円

アメリカン・ランドスケープの思想

ランドスケープ・デザインを志す若人へのメッセージ

都田 徹、中瀬 勲共著 加藤義夫訳 四六判・220頁 定価 2,369円

人気急上昇

予約申込殺到!!

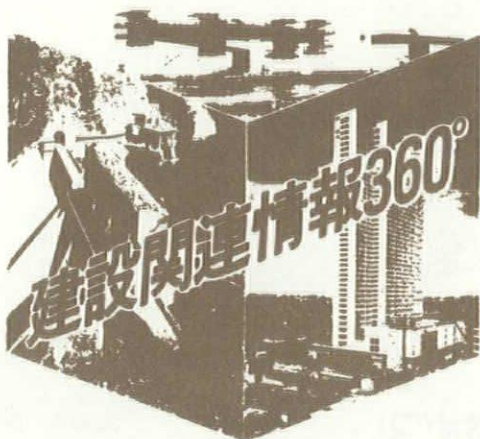
年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT



9501号 目次

●特集●1995年 内外経済見通し

- わいどあんどる ●食中毒多発一毒キノコを食べた人、急増/経歴重視?一魚は「履歴書」で選ぶ時代/新発見一脳の中に第三の目?
 - 霞が関ホットライン ●文化を担う道づくり探る/建機施工安全技術指針を策定/新首都ビジョンまとまる/不況は1年も前に終わっていた!?
 - 列島を拓く ●兵庫県でビオトーププラン/国営明石海峡公園・淡路地区基本計画まとまる
 - 学会・協会・業界 ●建設業経理事務士受験者数、前年の5.5倍/建築系高校生、現場に高い関心
 - こんな方法考えました ●ビル解体後の杭再利用に新方式/2枚で退場—安全行動守らない作業者に「イエローカード」
 - こんなモノつくりました ●カビ発生を予測/地盤調査車を開発
 - ハウジング ●低コストで高断熱・高機密住宅
- ▶ 今月の「拾出し」 ◀ 資材調達とコスト削減
- 用語・語録 ●GDP

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに!
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申し込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先
〒107 東京都港区赤坂6-5-13
㈱鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

□新規購読申込

SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先
(職種)

該当の
ものに
○印を

ご専門
ご担当

建築 土木 機械 電気 事務 ほか
設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください)

☐ 1年

☐ 3年



9310 Ricardo Bofill; Taller de Arquitectura: Introduces Taller's new style of architectural space merging advanced technology with classicism in recent works built in Spain, Paris: Barcelona Airport, Madrid Congress Palace, Gan Office Building, Kleber Hotel, Christian Dior Perfumes Headquarters, 77 West Wacker Drive, National Theater of Catalonia, etc. ¥ 3,000



9406 Art in the Workplace: Observes and verifies "Space and Art for Workplace" with 29 examples worldwide. Following the former issues of "Space for Contemporary Art" SD9103 and "Art and public Space" SD9211, this is the third in the series investigating relationships between art and space. Text: Fumio Nanjo, Dana Friis-Hansen. Interview: Marjory Jacobson. ¥ 2,500



9311 Recent Works of Anthony Lumsden/DMJM: Introduce the recent works of DMJM, a major design office in the United States. **Recent Works of Isao Hosoe:** His new furniture. **Rediscovery of Bruno Taut. Haus Wittgenstein [Stonborough], Vienna:** photos by Yutaka Suzuki. **Projet pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux par Takubo — 1.** ¥ 1,950



9407 The Works of Peter Walker: Minimalism and Landscape Architecture; Introduces Peter Walker William Johnson and Partners' main works and future projects: Tokio Marin Oyama Training Center, Center for the Advanced Science and Technology, Marugame Station Plaza, IBM Japan Makuhari, Solana, Hotel Kempinsky, Europa-Haus, Longacres Park, etc. ¥ 2,200



9312 SD Review 1993: Introduces winning works by Klein Dytham Architects; Katsuaki Wada; Planning and Design Laboratory; Atsushi Katagi and Tatsuro Arima; Tsuyoshi Yoshimoto, Tsuyoshi Yoshimoto Architect Associates, etc. **Design and Construction of Kansai International Airport Passenger Terminal Building.** ¥ 2,400



9408 Massimiliano Fuksas: His recent works; Shcool Saint-Exupery, Graffiti's Museum of Niaux's Cave, Brest City Center University, Sports Complex, Housing, Parking, etc. Text: Dorian O. Madrelli, Otto Steidle, Hideto Horiike. **Rumanian Orthodox Churches in Mordovia:** Four churches built 16th century. Photos; Takeshi Taira. Text; Yoshi Yamazaki, Riichi Miyake. ¥ 1,950



9401 Hiroshi Hara: Introduces his main works: Extra-Terrestrial Architecture, Mid-air City, Umeda Sky Building, JR Kyoto Station, Hara House, The Stage of Dreams, Graz/Minneapolis model, The Tasaki Museum of Art, Yamato International, Iida City Museum, etc. Text by Hiroshi Hara, Botond Bogner, Riichi Miyake, others. Photos by Ryuji Miyamoto, Shigeru Ohno. ¥ 3,500



9409 Ideas and Approaches to Architecture and the City; A New U.S. East Coast Movement: Introduces 11 architects. B. Shirdel/J. Kipnis, Michael Sorkin Studio, S. de Martino, A. Wall, RAAUm, W. Jones, A. Zago, Pollari X Somol, G. Rynn, D. Garofalo, M. Rakatansky. Texts; Tsuyoshi Matsuhata. **Recent Work by TAO ARCHITECTS/Shuntaro Noda:** Photos; Kouji Horuchi, Text; Youichi Iijima. ¥ 1950



9402 Contemporary Design in Taiwan: Centering on the urban landscape and architecture. Taiwanese architects: C. Y. Lee, Wu Tseng-Jung, Jushua Jin Pan, Ray Chen, etc. Graphic Design: Liu Kai, Alone Chan. Photograph: Chen Chun-Lu. Text: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima. photos by Satoshi Asakawa. ¥ 1,950



9410 Torroja's Legacy of Structure and Space: The contemporary meaning of Eduardo Torroja. Works; Madrid Racecourse at Zarzuela, Market at Algeciras, Pont de Suert Church, etc. Discussion; Norihide Imagawa, Kiichi Irie. **Rebirth As a City of the Arts: Gibellina Nuova, Italy;** Urban development and urban architecture in Italy. Photos, Texts and Interviews; Masaru Miyawaki ¥ 1950



9403 Bioclimatic Skyscrapers: Recent Works of T.R. Hamzah & Yeang: Presents architects experimenting with high-rise architecture that addresses the need for adaptation to the natural environment. **The Cell-City: The Terrestrial Standard of the 21st Century:** New Ideas on ways to subdivide metropolises into multiple "cells." ¥ 1,950



9411 Airport Architecture as the Nexus of the City; Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. and 21 Airport terminal Buildings in the World; Stansted, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts; Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥ 3500



9404 All Works of Yasufumi Kijima: Introduces post-humous works: Kamimuta Matsuo Shrine, Villa 'Coffin' Aso, YAS House, The Cue Saint Domes, Togyo High School, Nishizato Primary School, Nagatoro Youth Center 'Jeunesse,' Toyoson Stonemason Museum, Competition Design, etc. ¥ 3,000



9412 SD Review 1994: Featuring SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** architect: Mario Botta, Fumihiko Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux par Takubo 2.** ¥ 1950



9405 Modern Architecture of Eastern Germany: Focus on Expressionist architecture: H. Poelzig; Talsperre, E. Mendelsohn; Hutkabrik, Einsteinurm, B. Taut; Wohnhaus B. Taut, Gartenstadt Reform, M. Taut; Grabmal Wissinger, Schulkomplex am Nordnerplatz, W. Gropius; Bauhaus, J. Gesing; August-Bebel Realshule, etc. ¥ 1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Tkashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, Tom Heneghan, Motomu Uno. ¥ 3000



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

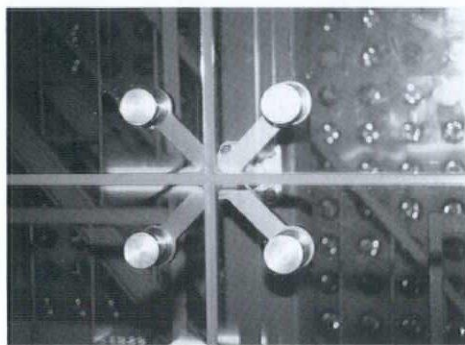
Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● CW構法

トステムDPG構法

● トステム株式会社



トステム㈱では、ビルの新構法である、トステムDPG（ドット・ポイント・グレーディング）構法を開発した。同構法とは、地震による変形を吸収する独自のスエー・アンド・ロッキング方式と、台風時のガラスの変形を吸収する回転式特殊ボルトを同社が開発し、それらをガラス点支持（DPG）カーテンウォールに取入れた新構法である。主にビルの1・2階エントランスの吹き抜け部やアトリウムなどの大規模建築から店舗などの小規模建築のファサードなど、開放感を強調したい部位への使用に適している。具体的には、約2m角の強化ガラスの四隅に孔を開け、ステンレスの特殊ボルトを用いてガラスを固定していくシステムで、その後ガラスとガラスの継ぎ目をシーリングによって埋めていくものである。ガラスの四方とも方立や無目、巾木は使用せず、外観をあたかもガラスだけで構成しているように見せることができる。工事には特殊な機器は必要なく、通常のカーテンウォールと同様に取付けができる。

設計価格

250,000円～350,000円/㎡

トステム株式会社 広報部
東京都江東区大島2丁目1番1号
〒136 Tel 03-3638-8115

● 塗料

Vクローゼマイルド ラバータイト#100

● 大日本塗料株式会社



大日本塗料㈱では、弱溶剤型アクリルNAD樹脂塗料、Vクローゼマイルドと塩化ゴム系塗料、ラバータイト#100（ニュータイプ）を新発売した。海浜や工業地帯など、塩害や厳しい腐食環境での塗装に過去数十年間にわたりつちかわれてきた塩化ゴム系塗料は、樹脂の製造過程で四塩化炭素を溶媒として使用しているが、この四塩化炭素は地球のオゾン層を破壊する物質として規制対象となる。これに対応するため同社では、弱溶剤型でしかも塩化ゴム系塗料と同等以上の塗膜性能をもった特殊アクリルNAD塗料を開発した。Vクローゼマイルドは、塗料用シンナーで溶解するので、塗装時の臭気が少なく作業や環境に優しい塗料であり、過去数年間にわたる屋外暴露のテスト施工で耐塩害性、耐薬品性、乾燥性等についても塩化ゴム系塗料に遜色のない良好な結果が実証されている。また同塗料は紫外線に強いアクリル樹脂を使っていることから、特に優れた耐候性や美観性が求められる石油タンク、ガスタンク、各種プラント類などに適している。さらに乾燥が早く耐水性の良い塩化ゴム系塗料の特長を備えた四塩化炭素フリー、ラバータイト#100（ニュータイプ）は、塗膜が低温で硬化が遅い寒冷地の鋼構造物塗装に適している。

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

● 塗料

SKハードクリーン

● エスケー化研株式会社



エスケー化研㈱では、道路の側壁やトンネルの壁などに塗っておけばどんな落書きでも簡単にふき取れるようになる保護仕上げ特殊塗料、SKハードクリーンを新発売した。原料の特殊ケイ素が空気中の酸素と固く結びついて塗膜を作るため、フェルトペンやペンキが染み込まなくなる。一番手強い油性のフェルトペンでもシンナーと布で数回拭けばきれいに消せる。

特長

- ①塵埃・煤煙などが付着しにくく、水洗などによる汚染回復性に優れている。
- ②硬化塗膜は表面高度が高く、撥水・撥油性であるため、簡単な掃除でこれらを容易に除去することができ、更にふっ素系の材料により汚染除去性に優れている。
- ③結合エネルギーの高いシロキサン結合が内部にあるため、熱や紫外線に対して高い抵抗性、非黄変性、光沢保持性を示し、格段に優れた耐久性・耐候性を示す。
- ④耐酸性、耐アルカリ性、耐溶剤性に優れる。
- ⑤中性化防止、塩害防止、酸性雨による劣化防止に優れ、環境保全、景観性向上に役立つ。

施工費

5,000円～7,000円/㎡

エスケー化研株式会社
大阪府茨木市中穂積3丁目5番25号
〒567 Tel 0726-21-7733

●
エクステリア

エクジスシリーズ

●
新日軽株式会社



新日軽では、エクステリアの主力商品、エクジスシリーズのより一層の充実化を図るため、車庫用門扉の品揃えとして、引戸を5デザイン、カーゲートの高さ1000ミリタイプを4デザイン、および、はね上げ式のウィングゲートの抽扉付きを6デザイン新発売した。

特長 (エクジス引戸)

- ①エクジス門扉・フェンスと同じデザインで、エクステリアをトータルデザインでコーディネートできる。
- ②A型：たて格子、H型：よこ格子、J型：ルーバータイプ、K型：よこ張り目隠し、N型：たて張り目隠しタイプの充実のトータルラインナップ。
- ③錠など金具類にいたるまで、デザインを統一。
- ④操作性および施工性を向上させた錠・おとし錠。
- ⑤ドライブ1本で、扉の調整が可能な調整機能付きヒンジを採用しスムーズな施工が可能。
- ⑥高級感のあるセピアブラック、こはく色とホワイト(H型のみ)の3色のカラーバリエーション。

価格 (写真タイプ)

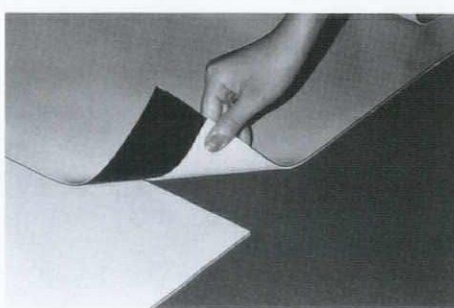
168,000円

新日軽株式会社 エクステリア商品部
東京都江東区本場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2552

●
防水シート

ベストブルーフ^{アルファ}α

●
ロンシール工業株式会社



ロンシール工業では、塩ビ系防水シート、ベストブルーフと絶縁部シート(発泡ポリエチレン)の一体化により、数々のメリットをもつ絶縁シート一体型塩ビ系防水シート、ベストブルーフ^{アルファ}α(アルファ)を新発売した。従来の工法では、下地処理の清掃からラジアルシートNの敷き込み、仮留め、ベストブルーフの敷き込み、墨出し、容着といった工程をとっていたが、同製品の場合、ラジアルシートNの敷き込み、仮留め、墨出しを省き、下地処理の清掃からすぐに同製品の敷き込みを可能とした。ラジアルシートNの敷き込みが、仮留めがいらないので、強風などで従来作業ができなかった条件でも敷き込みが可能である。また、容着の場合、容着しろが45m/mとあるので、容着しろの墨出しが不要で、工期短縮・小人数作業を実現し、経済的な工法である。また、ベストブルーフと絶縁シートの一体型なので、敷き込み時のシワの心配もなくきれいで美しい仕上がりである。色数は、ホワイト・ブラウン・グリーン・グレーの4色。

材工価格

6,450円/㎡ (厚さ1.3m/m)

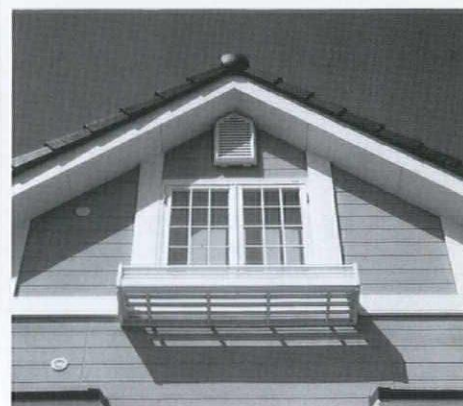
6,900円/㎡ (厚さ1.5m/m)

ロンシール工業株式会社 営業推進部
東京都墨田区緑4丁目15番3号
〒130 Tel 03-5600-1821

●
塗料

S.S.工法 F.F.工法

●
関西ペイント株式会社



関西ペイント(株)では、発売以来好評を得ている、粒子間架橋タイプの水性反応硬化形アクリル樹脂塗料、アレス アグロスに外壁用3工法A.A.工法に続いて、S.S.工法(サイディングボード セフティ工法)と内外部ツヤ調整工法F.F.(ファイン フラット工法)を開発した。S.S.工法は、アレス アクアグロスを使用する初めての完全、確実なサイディングボード専用の高品位塗装工法である。新築・塗替え、それぞれの場合に応じて高品位工法仕様がセットされ、塗装工法パックとして提案できる。アレス アクアグロスの出現は、従来のアクリル仕上げの流れを変えただけでなく、ツヤ消し仕上げの世界も大きく変えることとなった。F.F.工法は、耐候性のよい、キメ細やかな完全水系の高品位なツヤ消し仕上げが可能。水性反応硬化樹脂の強さをツヤ消し仕上げに生かすことにより、従来までは不可能と言われていた水性の外壁用ツヤ消し仕上げが可能になり、デザイン的に塗料が果たす役割である、色・テクスチャー・ツヤ調整が完全に可能となり、和風仕上げやサイディングボード塗装の実用性も向上した。また、水性反応硬化樹脂を使用したホルダー材、アレス ホルダーGにチューブ入りタイプができ、クラック処理をスピーディーにした。

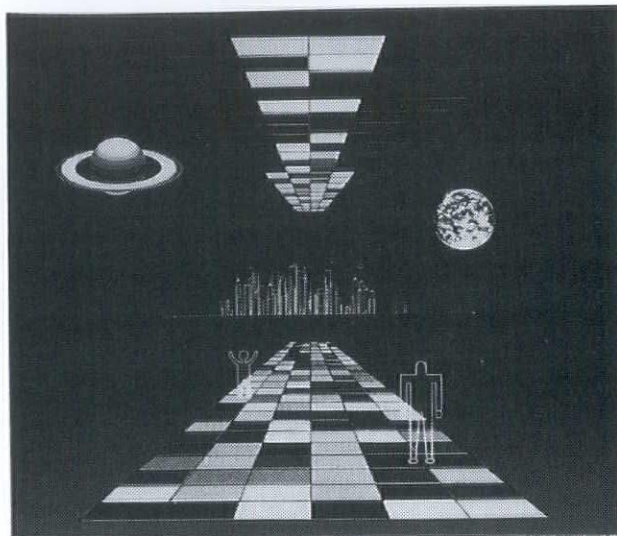
関西ペイント株式会社
大阪市中央区伏見町4丁目3番6号
〒541 Tel 06-203-5012

快適な環境を
つくります。

人と都市の

営業種目 設計・施工・監理

- 電気設備
 - 受変電、幹線
 - 動力、制御装置
 - 電話、放送、インターホン
 - 防犯、防災
 - 中央監視制御
 - システム計装



- 空調・給排水・衛生設備
 - 空気調和
 - 工場配管
 - 水処理
 - コージェネレーション
 - クリーンルーム
- プラント
 - プラント計装
 - システムエンジニアリング
- 情報通信設備
 - 情報通信ネットワーク
 - 情報処理
 - 通信システム
 - 放送システム
- 電力流通設備
 - 受変電
 - 架空送配電
 - 地中送配電

活力と魅力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。

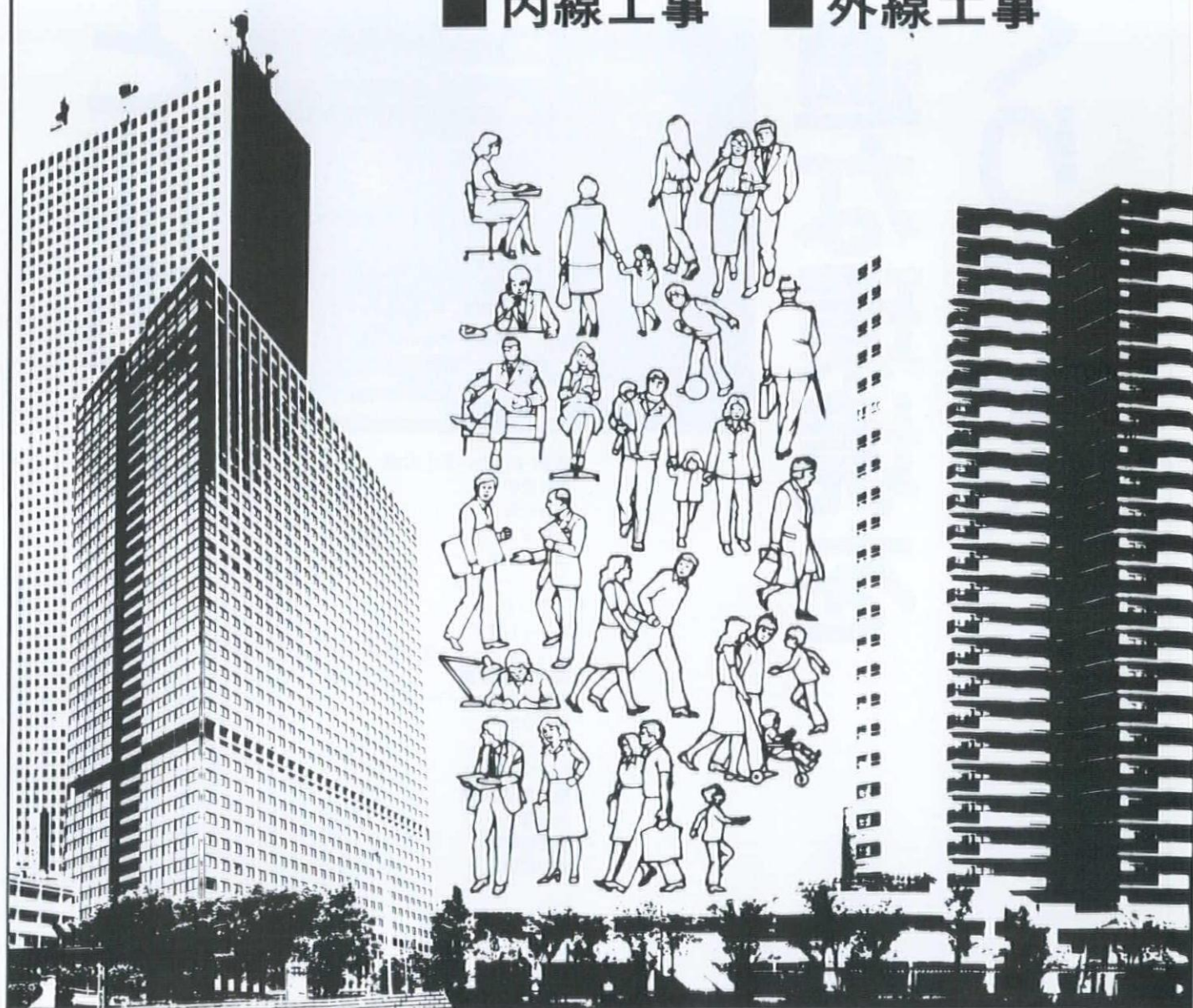


住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03) 3454-7311

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



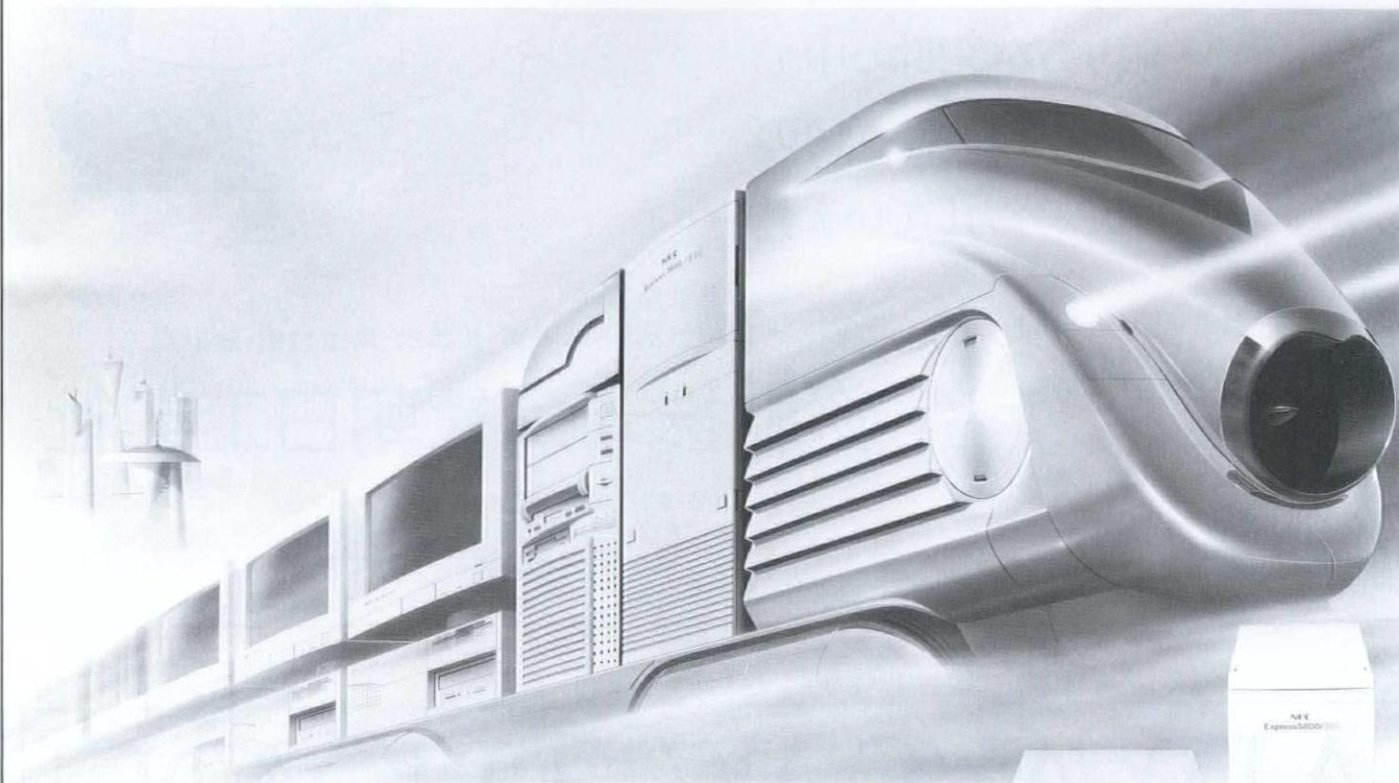
東光電気工事株式会社

取締役社長 紅田 和典

東京都千代田区西神田1-4-5 〒101 電話/東京 3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡
営業所、出張所所在地／旭川・帯広・函館・釧路・盛岡・青森・秋田・山形・福島・白河・水戸・大宮・
川崎・宇都宮・前橋・静岡・富山・福井・神戸・和歌山・広島・高松・京都・大津・天理・岡山・山口・
熊本・北九州・長崎・大分・鹿児島・那覇

Windows NT™ 3.5にいち早く対応した新次元サーバ。 Express5800シリーズ誕生。



- Windows NT™ 3.5にいち早く対応。オフィスのパソコンをネットワークし、先進の情報システムを実現する強力なサーバの登場です。

優れたネットワーク機能を備えた最新のMicrosoft® Windows NT™ Server Network Operating System Version 3.5にいち早く対応しました。また、Pentium™ プロセッサ搭載モデルは、Windows NT™ 3.5に加え、ノベル社のNetWare® 3.12Jをサポート。先進のネットワーク環境を利用した最適な情報システムを構築することができます。

- クライアント・サーバ型基幹システムの実現に最適なシステム構築環境の提供。

販売・財務・給与などの基幹業務アプリケーションパッケージやCOBOL85などの開発環境の提供、およびサーバ管理ツールやメインフレーム連携機能の充実により、パソコンをクライアントとした信頼性、運用性の高い基幹システムが構築できます。

- 業界標準ハードウェアアーキテクチャを採用。

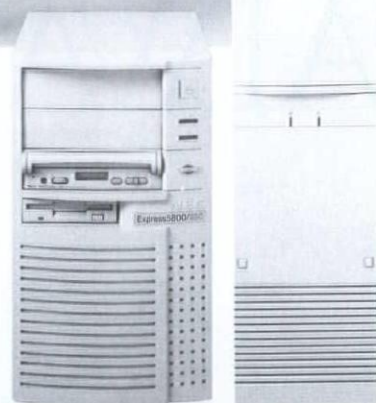
市販のアプリケーションソフトウェアや各種ボードをそのまま利用できます。

I/Oバスに業界標準の高性能PCIバスなどを採用しました。市販のアプリケーションソフトウェアや各種ボード、周辺装置をそのまま利用することができます。

- ハイパフォーマンスを追及し、基幹システムに適したRISCプロセッサR4400MC搭載モデル、分散ネットワークサーバや中大規模のパソコンサーバに適したPentium™ プロセッサ搭載モデルの2つの製品ラインを提供。

企業の情報システム構築におけるあらゆるニーズに対応するため、高速64ビットRISCプロセッサ R4400MC (150/200MHz) 搭載モデルとPentium™ プロセッサ (100MHz) 搭載モデルの2つの製品ラインを用意しました。さらに、それぞれプロセッサを最大2～4個まで拡張することが可能。卓越したパフォーマンスを発揮します。

※Windows NT™は米国マイクロソフト社の商標です。※Microsoft®は米国マイクロソフト社の登録商標です。※Pentium™は米国インテル社の商標です。
※Intelは米国インテル社の商標です。※NetWare®は米国Novell, Inc.の登録商標です。



NEC Expressサーバ

Express5800シリーズ

Express5800/230 CPU: R4400MC (150MHz) (最大2個)
Express5800/240 CPU: R4400MC (200MHz) (最大2個)

Express5800/250 CPU: R4400MC (200MHz) (最大2個)

Express5800/140 CPU: Pentium™ プロセッサ (100MHz) (最大2個)
Express5800/150 CPU: Pentium™ プロセッサ (100MHz) (最大2個)

あらゆるパソコンをパワフルにネットワークする。

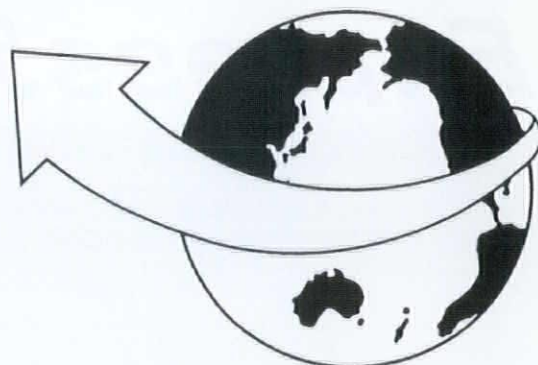
Express サーバ

お問い合わせは、NECワークステーション・サーバ販売推進本部へ。TEL.03(3798)6281

製品に関する技術的なお問い合わせは、58インフォメーションセンターへ。TEL.03(5232)5800 受付時間:月～金(祝日を除く)10:00～17:00

未来に向って…

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

ALWAYS WITH YOU



よ
か
つ
た
。

きみが、空気をかんじることも光や水をいしきすることもなく
ただ、ただ、いいきもちでいるとしたら、私たちはとてもうれしい。

そのこちよきに、ゆっくり抱かれていらっしやい。
快適な空間は、私たちがつくりつづけますから。
環境のトータルなインテグレーションで、あなたの近くに。もっと近くに。
私たちはダイダンです。

ダイダン
—光と空気と水を生かす—



奥山化工業株式會社

本社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL 03(3571)2703 代 FAX 03(3571)0264
大阪事務所 TEL 06(391)1081~2 FAX 06(395)2109 名古屋出張所 TEL 052(811)3660
横浜営業所 TEL 045(320)4832 FAX 045(320)4765 厚木出張所 TEL 0462(21)1761 FAX 0462(23)1341
埼玉営業所 TEL 048(774)2845~6 茨城出張所 TEL 0292(28)0878 FAX 0292(28)2614

テトカッパー防水層

カッパー防水帯
コーパータイト・オクロン防水帯

人とエネルギーの間に私たちの技術があります。

TOE/NEC

21世紀をリードする総合設備企業

私たちトーエネックは、先進の総合設備企業として、
電気工事・情報通信・冷暖房空調事業の分野を
通じて豊かな環境づくりの提案をしております。

株式会社 トーエネック

(旧東海電気工事株式会社)

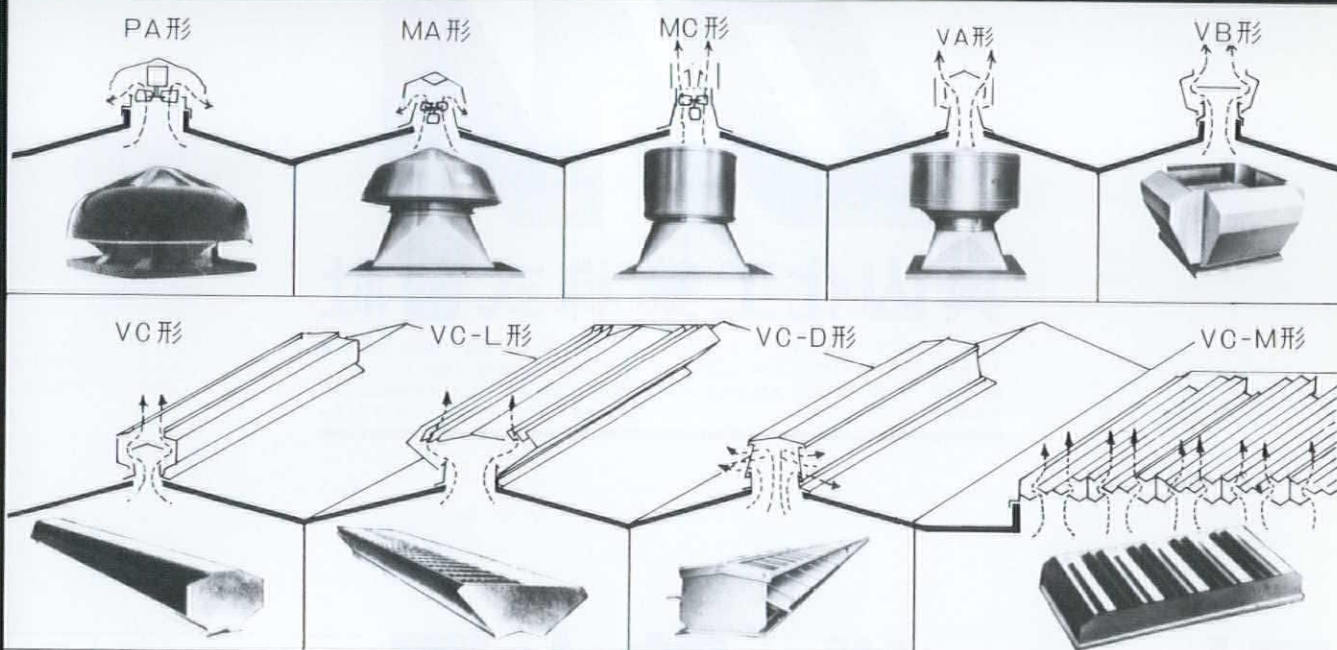
本店／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎052>221-1111

支店／東京・大阪・名古屋・岡崎・静岡・三重・岐阜・長野・飯田

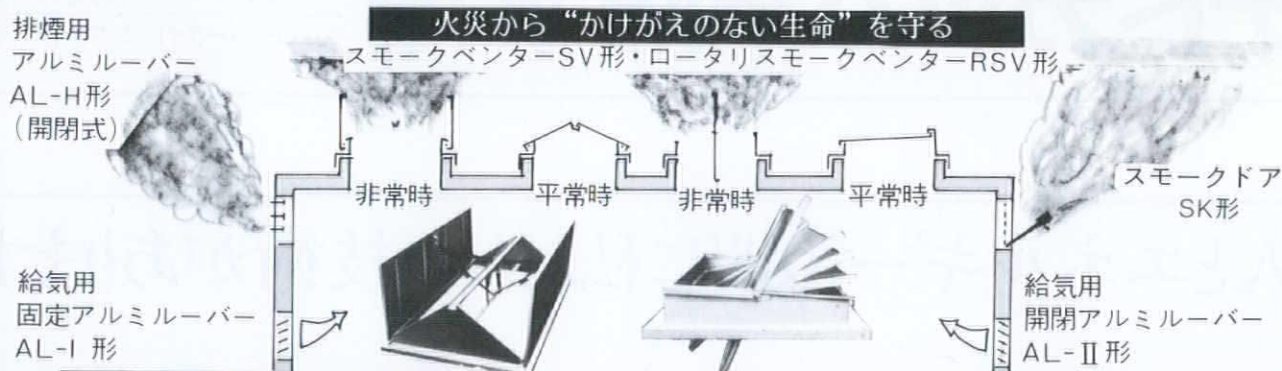
坂本商会は創業80年 **換気・排煙・採光の専門メーカー** です

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

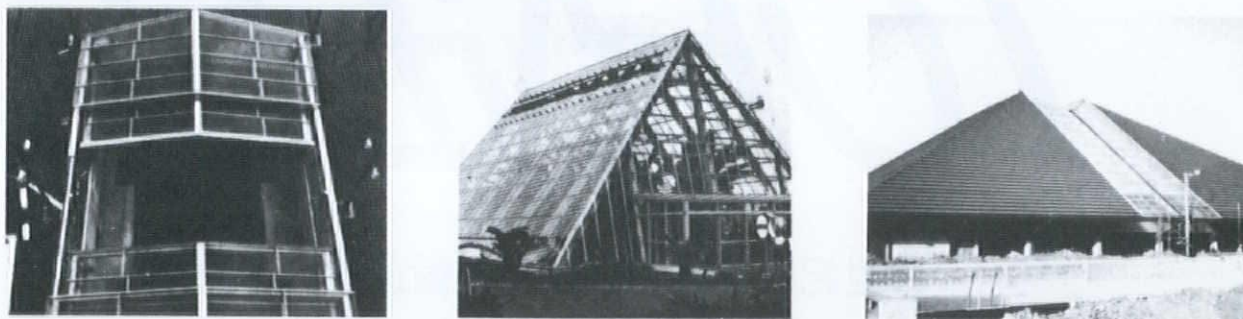


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社 東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル) 〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
 松戸工場 千葉県松戸市松飛台420番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
 技術研究所 千葉県松戸市松飛台217番地 〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
 施工部 東京都墨田区東向島2丁目15番11号 〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル (3572) 3381
FAX (3572) 3590
大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06 (362) 6515
FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8
(3818) 1961
FAX 03 (3818) 1968
大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06 (231) 4548
FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル (3552) 8247代
FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06 (379) 1791
東京——東京都千代田区岩本町2-5-12
神田ポンピアンビル (3863) 6011代
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052 (221) 7641代

ア	(株)朝日工業社	A 18
エ	エドラス(株)	表 4
オ	大崎電気工業(株)	A 1
	奥山化工業(株)	A 19
カ	(株)関電工	A 3
	鹿島	A 4・A 5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A 6
	川崎電気(株)	121
サ	三機工業(株)	89
	三建設備工業(株)	122
	(株)坂本商会	A 20
シ	篠原電機工業(株)	120
	昭和アステック(株)	122
ス	住友電設(株)	A 15
タ	高砂熱学工業(株)	表 3
	大興物産(株)	A 7
	ダイダン(株)	A 18
チ	(株)中電工	A 11
ト	東洋熱工業(株)	117
	東光電気工事(株)	A 16
	(株)トーエネック	A 19
	(株)東芝	A 22
ニ	日新工業(株)	A 9
	(株)西原衛生工業所	A 10
	日本バルカー工業(株)	A 11
	日本電気(株)	A 17
ヒ	日立電線(株)	121
フ	富士電機(株)	120
ホ	ホテルイースト21	A 8
マ	松下電器産業(株)	A 2
ミ	美和ロック(株)	90・91
	三菱電機(株)	125
ヤ	矢崎総業(株)	A 12
	(株)ヤナセ	92
	山田照明(株)	126
ロ	ロンシール工業(株)	表 2

TOSHIBA

エレベーター・エレクトロニクス
E&Eの東芝

優しくされて、人は輝やく
人と環境のあたたかなふれあい。
ルミナスの美学が、ここにある。

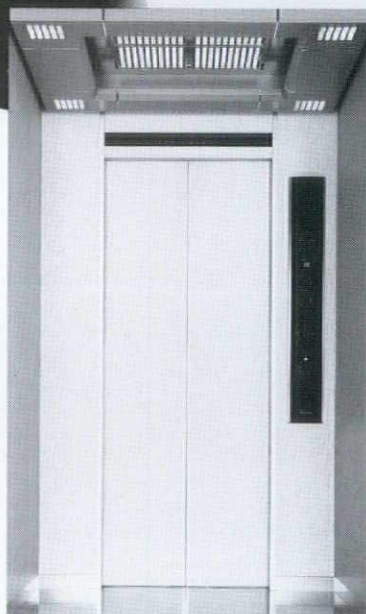
ルミナス・アメニティ。

- 人と環境の美しい調和をモチーフに設計された、ゆとり感覚あふれるニューデザイン。
- 快適な移動のために情報システムで制御された数々のインテリジェント機能を搭載。
- ヘリカルギヤを新採用し、大幅な省エネルギー化とランニングコストの低減化を実現。
- IGBTの採用と制御回路のデジタル化により、より静粛で滑らかな走行性能を発揮。

人と環境のあたたかなふれあい

東芝ニューコンセプト標準形エレベーター

エレメイト ルミナス◆
Luminous



●お問い合わせは… 株式会社 **東芝** 昇降機事業部 本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) ☎(03)3457-4613

北海道支社(011)214-2451 東北支社(022)264-7640~1 東関東支社(043)299-1017 神奈川支社(045)664-8611 北陸支社(0762)24-2815 中部支社(052)564-8510~4
関西支社(06)440-2261~3 中国支社(082)246-3090~1 四国支社(0878)25-2440~2 九州支社(092)735-3056